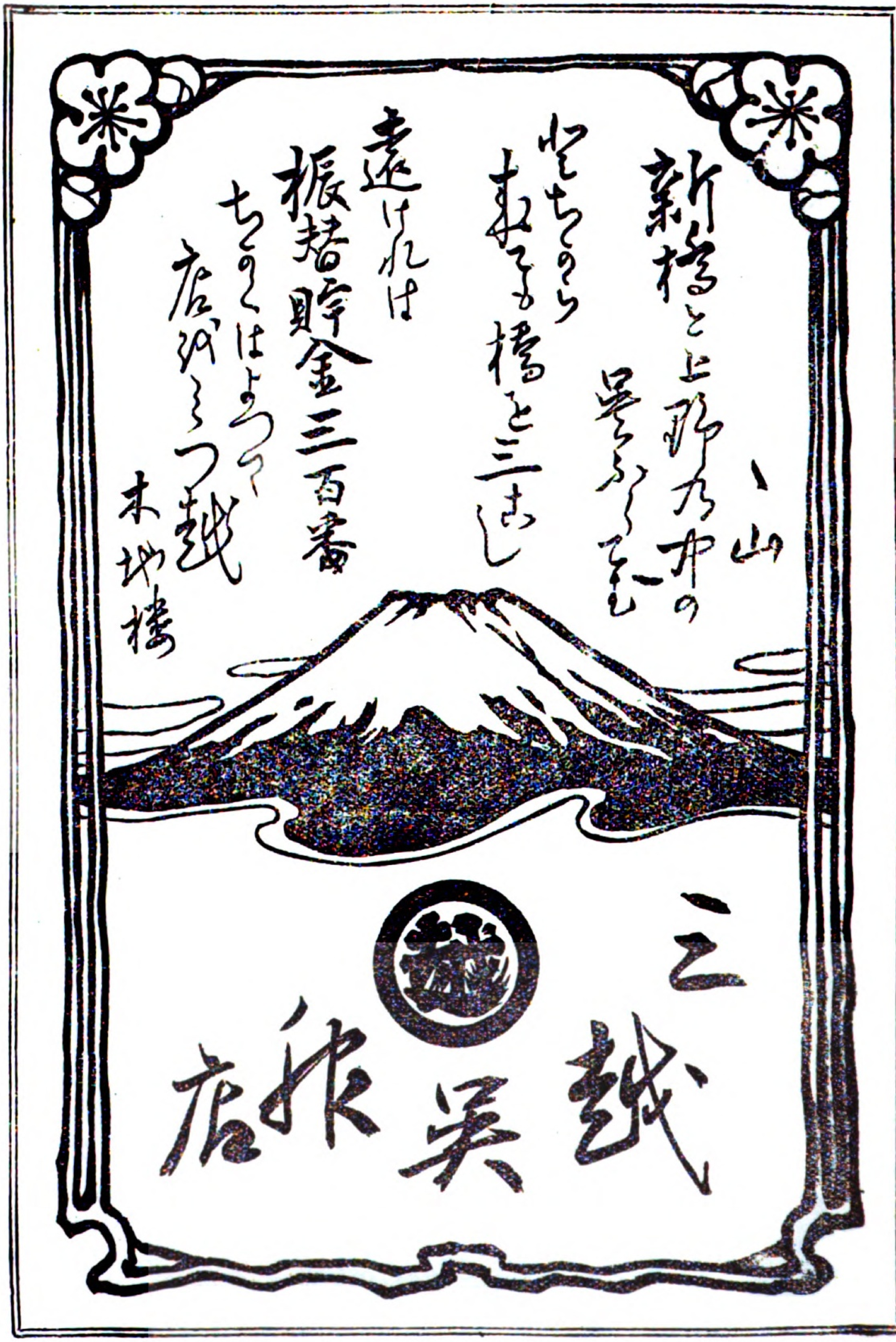
女學世界



第八巻
第三號

博文館發行


新橋と上野乃中の
遠ければ
振替貯金三百番
三越呉服店

女學世界 第八巻第参號 目次

女(いの一)

四十一年度は益々東髪の大流行を來たす可し

上品なる東髪を望まば必ず前髪じんとして此

ヘヤロールを用ひらるゝ事を諸孃方に勸告す

米國製

東髪前髪じん



ヘヤロール

●ヘヤロールは今や歐米に最も流行しつゝあり。從來の毛髪製品は彼の忌む可き病患者の遺髪等の混りある憂ひありて衛生上恐るべきは勿論常に頭部にかゆみを起し果ては禿げる心配等の事あれど此ヘヤロールは細微なる金線にて製し優美なる絲網にて覆ひあれば毛を損じスベリ出す事なく且つ輕量なれば空氣の流通宜し故に「フケ」を生ぜず伸縮自在なれば大小の前髪になづみ殊に腦病又頭痛持ちの方には最も有益の新輸入品なり



●特に大形（十二インチ十五インチ）御望みの方はハガキにて御照會を乞ふ

●ヘヤタイは束髪用の元結なり◉本品は從來の元結の如く髪の根元を一々結ぶ要なく隨て髪を解く時にも一々切り取る手數もなし且一度使用する毎に不要にならず一本のヘヤタイは毎日用ふるも數十日間の使用に耐ゆる輕便にして徳用のものなり束髪には必ず御試用を希ふ▲定價半打十八錢一打卅五錢

定價一個（普通十インチ）卅八錢送料八錢

輸入元　東京京橋鎗屋町一　日加商店　振替貯金八六六九

特約店　東京日本橋區橘町四御園おしろい本舗　丸見屋商店

大阪東區南久寶寺町婦人小間物問屋　小栗小三郎

販賣店　各地和洋小間物化粧品店

女（いの二）

衣服洗浄

一名シヤボンイラズ



●●婦人科
小兒科
專門

午前宅診 午後往診

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

電話番町乙七八四番

女醫 鷲山彌生

近代の大發明獨逸國プォイフォル大醫學博士製

血色素 ヘモグロビン

登錄商標

此「ヘモグロビン」が補血滋養劑として偉大の効を奏することは全世界に於て認むる所なり弊店は率先此神劑なる「ヘモグロビン」を一手販賣契約を以て本邦に輸入發賣仕候處我有名なる大醫學博士諸先生及び各病院に於ては直ちに之を歡迎せられ貧血者、衰弱者、虚弱の小兒腦貧血者病後の人等に飲用せしめられたるに着々効を奏し「ヘモグロビン」の名稱滿天下に赫々たり然る所近來僞物並に僞物の輸入品現はるに付弊店は上部登錄商標を此の「ヘモグロビン」に貼付せり此商標なき者は僞物なれば需用者諸彦御注意の上御買求あらんことを乞ふ

◉効能書は御申込次第進呈

東京醫科大學模範藥局御用

大日本赤十字社病院御用

各國食料品問屋
海外直輸入商

東京市京橋區新橋竹川町

電話新橋七百卅六番

三組屋 大塚琢造

女(いの三)

造花原料

ハ東京市九段坂
吉住商店ニ限ル

営業種目
造花器具
造花材料
造花及半製品
造花用花軸
造花装飾用達
摘細工材料

弊店の特色
陳列完備
品質善良
價格低廉
出荷迅速

営業用御入用の方ハ東京市九段坂
吉住商店宛申込まるべし

醸造元
千葉縣野田町
茂木佐平治

天下一品
最上醬油

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

女(いの四)

女學世界大懸賞

●無類の珍趣向は發表せられたり

いよ〳〵本號本誌の誌上に於て

誰にも出來るやさしい方法

當つた人は　大景品を　得る

かねて御約束の通りいよ〳〵本號に於て『寶』さがしを擧行し、別表目錄通り　一千圓の大景品　を愛讀諸君に呈上仕らん

さて無類の珍趣向とは如何なるものぞ、まづ見よ卷中さし畫の寶づくし福神づくしの如何に奇想的迷宮的にして、且つ如何に神秘的標章的なるかを。然り而してこの寶さがしなるものゝ本來の性質如何となれば……………………

▲多言は無用次の頁を御覽候へ!!

賞品價格金千圓

女學世界大懸賞

寶さがしに就ての約束

一、寶探しの方法――この寶さがしは本誌挿畫の中にいくつかの「字」が隱してあります、それを探して組立てると意味の明瞭な一ツの格言になります。

一、解答の心得――字を探して組立が出來たらば、その言葉を本誌の解答用葉書（卷頭に附けてある繪葉書）に認め、切手を貼りてお出しなさい。

（答案の〆切は二月二十九日まで）

▲答案用紙は本號卷頭の繪葉書に限る、他の葉書に認めたるものは無効です

▲文字は楷書にて明瞭に記す事、書損じあるもの又は鉛筆にて記したるものは採用しません

▲住所姓名は必ず明記すべき事

一、懸賞品は抽籤の法により一等より八等まで別表の通り金千圓に價する景品を六百二十八名を限りさし出す事

一、若し正解者少數なりし時は比較的正格なるものより順次に採用して、規定の賞品を贈呈する事

いよいよ本號に於て發表

女學世界大懸賞

懸賞 寶さがし 景品目録

第一等（一名）三越呉服店切符（價格金百圓）

第二等（二名）玉寶堂製女持金時計（價格各金五拾圓宛）

第三等（五名）玉寶堂製金指環（價格各金貳拾圓宛）

第四等（十名）三越呉服店切符（價格各金拾圓宛）

第五等（二十名）内｛十名懐中化粧道具 十名婦人用肩掛｝（價格各金五圓宛）

第六等（百名）内｛二十名衛生寢卷 二十名束髪用三枚櫛 二十名婦人用駒下駄 二十名千代田草履 二十名縮緬帶上げ｝（價格各金貳圓宛）

第七等（二百名）内｛五十名婦人用ハンカチーフ 五十名上等香水 五十名銀貨入 五十名婦人用羽織紐｝（價格各金壹圓宛）

第八等（三百名）｛リボン、ハンカチーフ、西洋手拭、エビス袋、襟留、石鹸、煉白粉、其他｝（價格各金參拾錢宛）

品數總計 六百三十八點――價格金壹千圓

賞品の贈呈は三月下旬より開始

一人で出來る美顔術

本年一月一日發行の女學世界一五〇頁に於けるマスター、オブ、アート尾關數犬先生の美容法の項中「姿を整へるには按摩（マッサージ）が必要」の記事御參照あれ

家庭用美顔術の御料アクム、フレンチ、マッサージ、クリーム（大壜金貳圓六十五錢小壜金壹圓卅五錢）は米國デトロキト市アクム、ケミカル、コンパニー（優等化學製品製造會社）が佛國の製法を買收して精製したる天下一品の美顔料であります弊店は此れを本社より直接に輸入販賣致して居ります

本品の効用及び美顔術施術法は尾關先生の御説明に少しも異なる點はありません併し猶ほ右に記する注意條項を御用ゐあれば幸福であります

本品の器の内に決して水を入れぬこと〇御顔丈けに御用ゐになる分量は大豆三粒位がよろしく水一二滴（これより餘分はいけません）を混ぜてお塗りになる事〇塗りてより直ぐに拭き去りて後にマッサージするもよけれど、塗ったまゝ、指先で力を込めてマッサージする方がよい樣であります〇マッサージが終ったらタオルで拭き去り上等の化粧水を塗り置く事〇指先きでマッサージする代りに美顔ルーラー或は吸出しカップを御使ひになるとならぬは御隨意ではありますが御用ゐになれば一段の効があります〇マッサージした後に付ける化粧水には佛國巴里市ピベール會社製フキリリン、オド、トワレット（金貳圓參拾錢）が一番適合するとの評判であります本品を御用ゐつけの御方の内で此の化粧水を「めでたや」の水クリームと名をつけた方があるので大層此の品が評判になりました、その譯は本品が皮膚を軟化する藥液と白粉下クリームとを巧妙に合劑したる透明の化粧水であつて心持ちの惡いテバリを持たすにサラリとしてゐて白粉の乘りを能くする事が實に妙だと云ふ處からでしようと想ひます

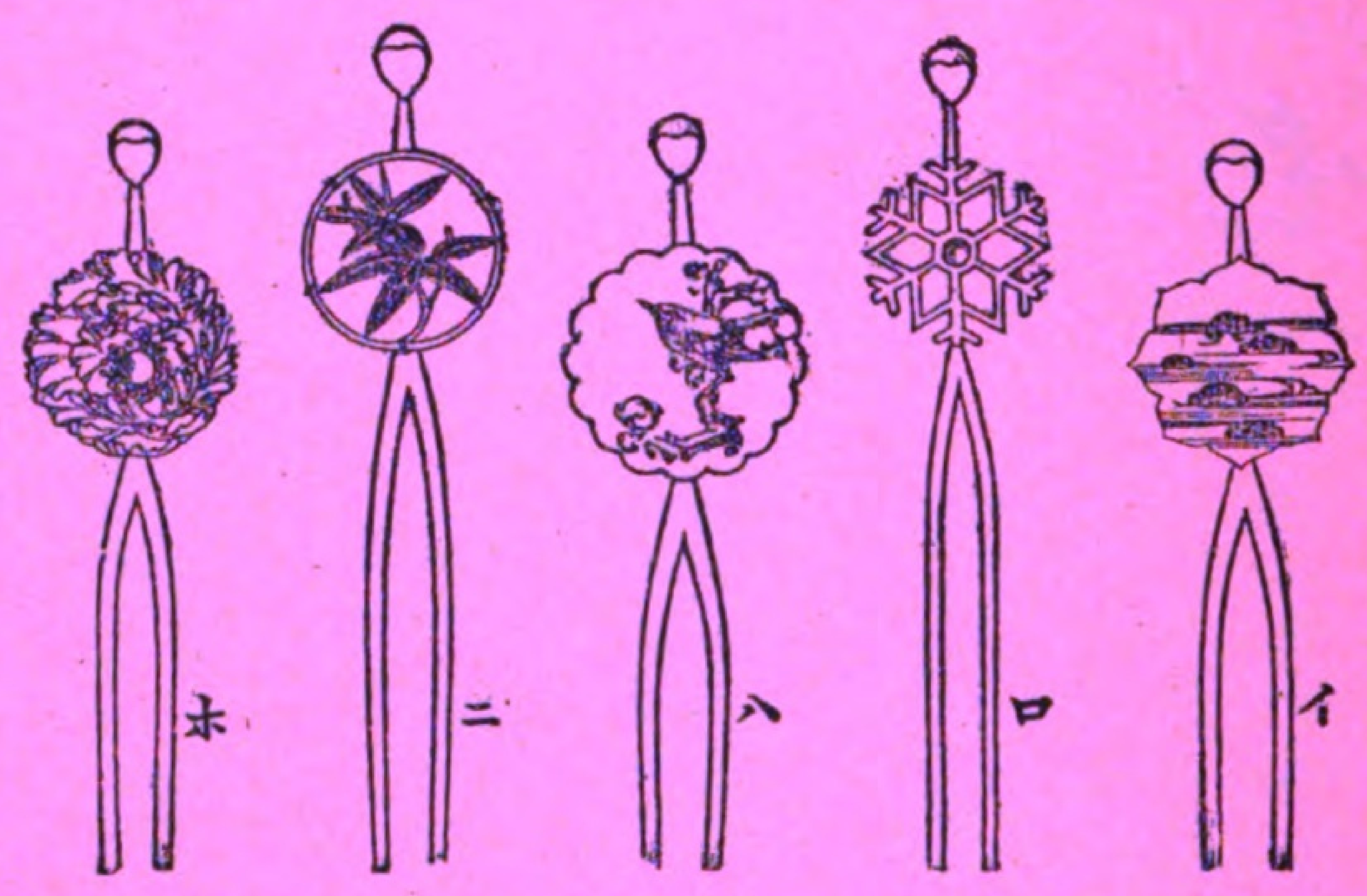
右二品共日本人の好に適する誠に品の高い良い香氣を以て居ります

右二品の外弊店は歐米各國諸大會社と直接連絡を通し最も優等にして確實なる化粧品香料一切を輸入販賣致して居りますから何卒多少に不係御注文を願ます輸入部では卸賣を致します

東京市銀座尾張町
二丁目二十五番地

輸入部 萬治貿易商會
販賣部 めでたや
電話新橋四三三五番

輸入部では各商店の御便利を計り篤實に歐米各國の製品を何でも原價の二分の手數料で代理輸入致します



金製彫刻簪

（大西白牡丹戊申流行案内其の二）

丸髷と銀杏返し用のかんざしは珊瑚ヒスイの玉付を除きては先づ金製の彫刻又は寶玉入りに候べし爰に掲げ候はみな實物大にて何れも彫刻の妙技をこらし出來居り候得ば何卒御好評を願上候

島田ざしには此圖と違ひ大きさ六分以上の丸さに相成り金製の精巧なる物種々有之候も銀製白上り彫刻にて七八分位の平打は誠に上品なる物に御座候

（イ）十八金鏡形赤銅墨書象嵌松の圖　價金貳拾圓

（ロ）二十金むつの花すかし彫眞珠入　價金拾五圓

（ハ）二十金及青金彫刻梅に鶯の圖　價金貳拾參圓

（ニ）二十金すかし彫七寶入竹の圖　價金拾五圓

（ホ）二十金彫刻眞珠又はルビー入牡丹　價金貳拾四圓

○銀製彫刻島田ざし　金貳圓より五圓迄各種

○銀製彫刻丸髷ざし　金壹圓半より四圓迄各種

長電話本局三十番
電話本局三千番
振替口座九二九三

東京市京橋區南傳馬町
大西白牡丹
店主　大西榮輔

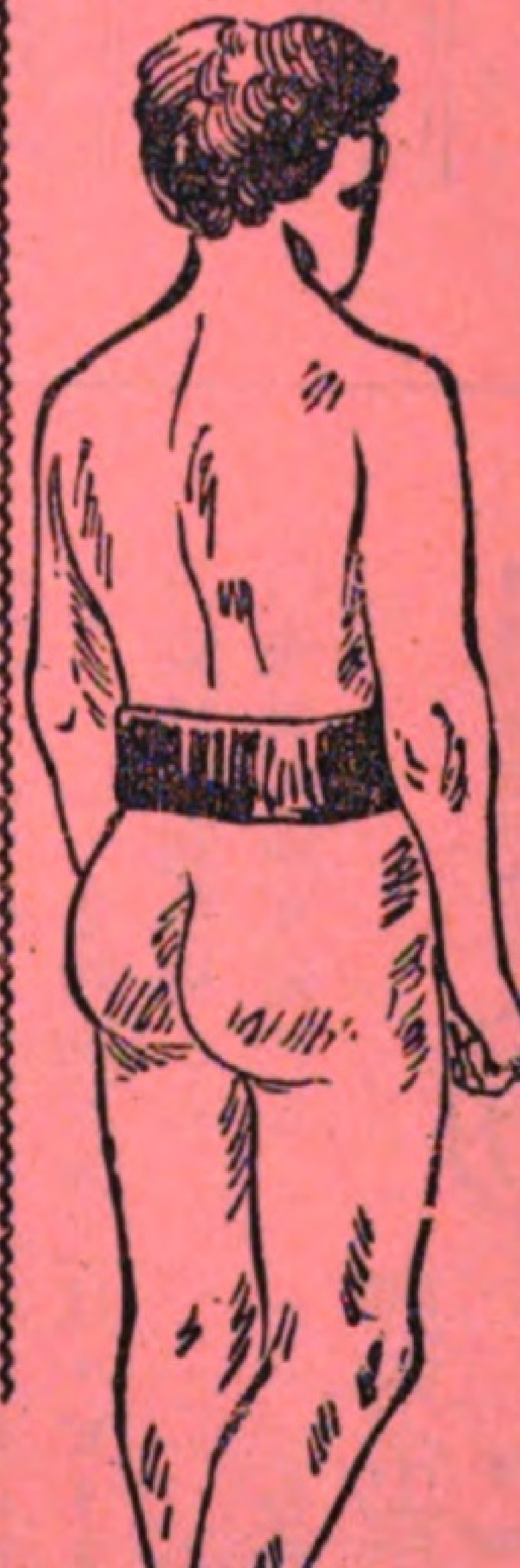
女（ろの一）

登錄商標



効能

神經衰弱、生殖器虚弱及遺精、夢精、諸臓器衰弱、胃擴張、消化不良、便秘、脚氣、腰痛、神經痛、不眠、ヒステリー、リウマチ、子宮より起る婦人病、中風、脊髓病、病後衰弱其他



サンデン博士發明電氣帶

説明書及證明書無代送呈す

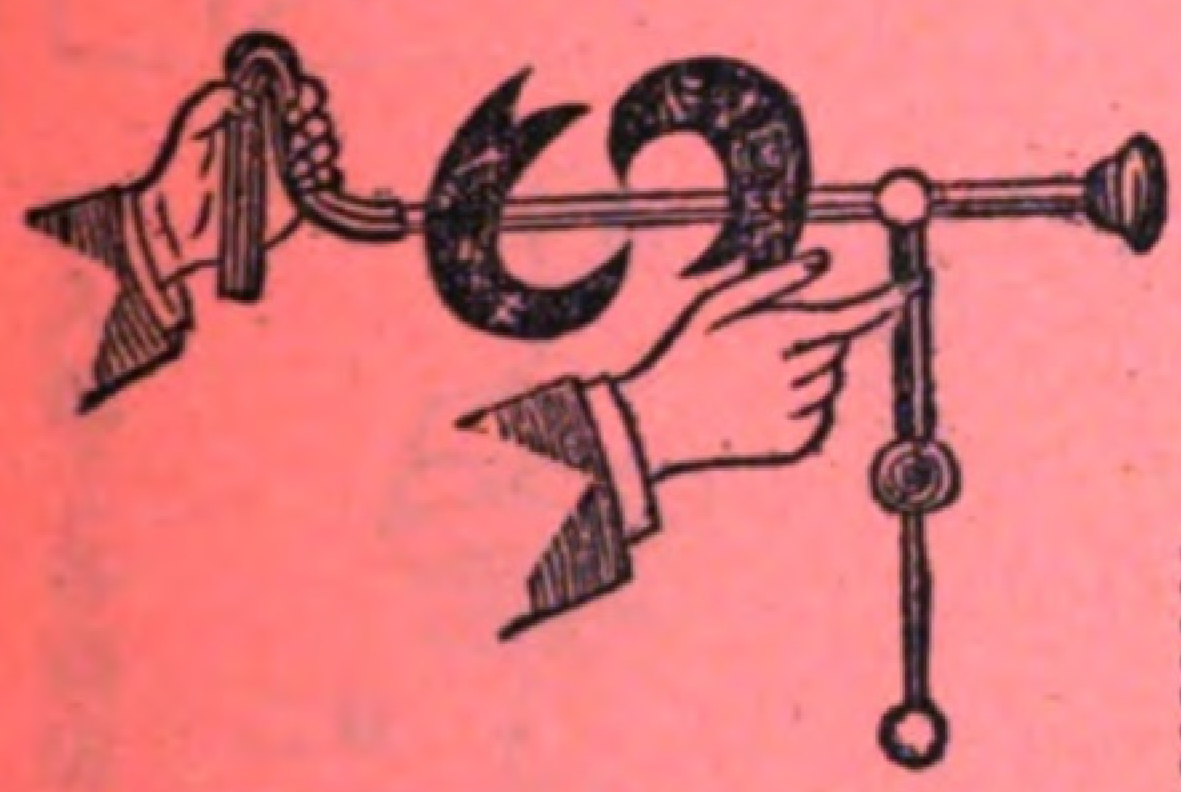
登錄商標



アクチナ

「アクチナ」は家寶中の家寶なり━醫藥に見放されたる眼耳鼻咽喉の慢性諸病及衰弱を自ら治療し無病幸福の身となるを得●既に偉大の奏効者を出せり就中トラホームに確實の効あり●使用法簡便無類●常に懐中携帶何時でも使用し得又多人數兼用の便あり●家毎に是非必要の療具也●奏効來狀及詳細の説明書は雑誌名記載申込あれ無代進呈

登錄商標



「自働マッサージ」

一名ひとりあんま器

不思議なる新發明にして、血液の循環を能くし、筋肉の勞れを休め、痛み所、又はかたのこりを治す、完全無缺の自療具にして使用簡易なり

電氣ブラシ

●●腦病早滅　美顔術用

金剛石も磨かざれば光なし眞の美顔を望む人は電氣ブラシを用よ

女(ろの二)

サンデン電氣商會

本店　横濱市山下町八十一

總支配人　ダブリユー.エチ.ワツトソン

(支店)東京市銀座尾張町二丁目
(支店)大阪市心齋橋南一丁目
(支店)小樽區港町十一

作文速成に一等よい

懸賞募集課題
○お伽噺○新派和歌○短篇小說○日記文○新體詩○實用文○俳句○論文○舊派和歌○美文○短文○繪畫○新歌謠○滑稽談○餘興
(賞外)○學校通信○文學顧問○誌友思ひ〳〵の事柄

選評 巖谷小波、小栗風葉、横瀨夜雨、與謝野晶子、谷江風、中村文學士、佐々木信綱、内藤鳴雪、山中古洞、編輯局

▲詳細の事は見本(價拾錢 送壹錢)に就て御覽下さい

●本誌は三十八年一月創刊

低廉無比好評

日本唯一女學雜誌

女子文壇

(じょしぶんだん)

發行 毎月一日 増刊四回

口繪 名畫光澤紙原色刷 寫眞肖像風景數葉

定價 壹册(百卅頁)金拾錢送料壹錢○半年分(八册)送共金八拾四錢○壹年分(十六册)同金壹圓六拾錢○郵券代用壹割増

●四年第二號 ●二月一日發兌

●新年號 一月元旦發行 増刷出來

小說 ▲死後迄も……小栗風葉 ▲女裝……徳田秋聲

附錄 ▲角……岡田八千代 ▲非牧者……佐野天聲 ▲乘合馬車……窪田空穗

本號は附錄とも紙數百六十頁 定價金拾貳錢 郵税不要 名畫寫眞共頗美觀

定期増刊第一第三號 春日影 二月十五日發兌

▲▲注意=最寄書店になき時は至極輕便且安全の振替貯金拂込法により直接發行所へ御申込を乞ふ▼▼

東京京橋區大鋸町十、十一番地【振替貯金口座第壹七貳九番】

女子文壇社發行

電話番號 本局六百七番

特約發賣所 ●神田東京堂、上田屋●日本橋北隆館、至誠堂●京橋東海堂、良明堂 其他取次店は全國各雜誌書店

(ろの三)


カメリヤ
洗粉
艶麗花の如く純潔雪の如き
美貌は本品の愛用によりて顯る
カメリヤ洗粉は最新の化粧法に基き學理的に配劑なせる高等美身術に適したる最良の化粧料なれば皮膚の營養を助け、きめを細かに光澤を增し肌膚を艶麗美白ならしむる特効を有し其香氣の優秀なる永く身邊に薫りて自ら快感を起さしむ
殊に寒冷に遇ふて肌を荒害する憂なきは全く本品の純良なるが故なり
定價
大瓶 壹個 廿五錢
小瓶 同 十五錢
大袋 同 五錢
小袋 同 三錢
罐入 同 十三錢
本舖
ライオン齒磨
發賣元
東京神田
小林富次郎

(ろの四)

初音



上村松園筆


東京上野廣小路
松みどり香油
◉高等美髪油◉
定價
大壜四十五錢
中壜二十錢
小壜十二錢
一合卅五錢
山崎油店


千九百七年式巴里流行
乳状薄化粧
フェースクリーム
最も日本婦人に適應して而も皮膚の營養滑澤に實効ある佛蘭西新式
煉白粉代用品
注意(普通のおしろいの如く多量に用ゆべからず)
顔面美的の價値は
FACE
CREAM
使用後一回毎に
實現す
(定價一瓶金三十五錢)
東京市日本橋區本町二丁目
高等香油チエリーオイル本舗
發賣元 高橋初次郎
(全國至る處の化粧品店小間物店に在ります)

★(はの一)

女(はの二)

●俳句新題歳時記。（孫水著、最近發見好題二百許を集む、定價拾錢送料二錢發行所大阪東區梅辻兼子）

簡易複寫インキ

器械不要

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに文書畫版數十百枚を印刷し得べし本品ではすでに諸官衙及び郡區町村役場等の採用品たり

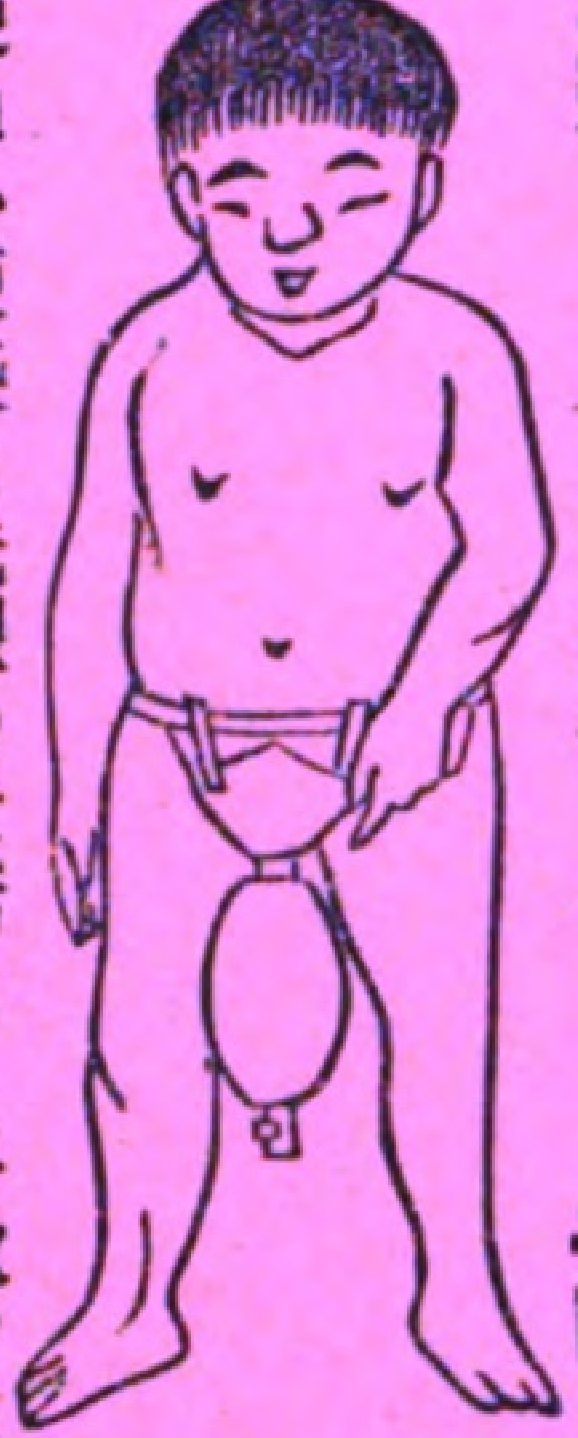
●定價二オンス入壜 金參拾錢　郵券代用壹割增

神田區松富町二十二番地

中村屋商店

●子を持てる親 病人のある家人は必ず讀め

ね小便袋



衛生最良德用輕便ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に淸潔なれば老人小兒病人の最も必要にして、ね、をき、たち、すわり等は毫も差支なきは本品の特長なり（男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ）

定價小人用八拾錢 中人用壹圓 大人用壹圓八拾錢 小包料拾錢切手代用一割增

●振替口座八一九八 大阪市南區順慶町 **常盤號雜貨部**

婦人藥王 流經散（りうけいさん）

●月やく止まるを憂ふる方は毎月一の日此藥を用ゆれば止るとなし四ケ月以上の閉止も特別製の方を連服すれば及び十よく下ると妙なり產後の古血又は血塊七八歳くになりやくなき事請ち下るの道にてりて月人にても忽ち折々目まひ立くら頭痛又物事を氣分あしき等みのぼせ苦にして氣に用ひて實によくきく藥にして世間ありふれの月ざらひ等と天地の違ひ是をのめば醫者を要せず

定價 特製（四廻り）分金壹圓 同半月分六十錢 ●七日分卅錢 ●三日分十五錢 送料各二錢宛

わきが藥

本症は頗る惡臭を放ち他人に接近するをきらわれ有爲の美男子も交際を欠き又妙齡の美婦女も不幸に陷れる人澤山あり之れを救ふが如きはんが爲數年苦心して得たる良緣を失新發見藥を世に紹介す多少に係はらず本症のある人は早く用へて幸福の人となられよ

（天下一方腋臭劑）小包卅錢 ▲中包五十錢 ▲大包壹圓 特製大包貳圓 送料各貳錢宛

經驗保證 毛生劑

本劑は多年經驗したる化學的作用のけはいぐすりにして特許を受けたる保證劑なり。

定價 試み金卅錢 ●小瓶金五十錢 ●大瓶壹圓 送料四錢 特製貳圓

女（はの三）

◉婦人秘密の養生寶典は郵券三錢封送あれ◉

專賣 東京神田區五軒町大通り 電話下谷壹參貳壹番 **寶順堂** 振替口座三六七壹番

女(はの四)

鴛鴦



加藤南山筆

女(にの一)

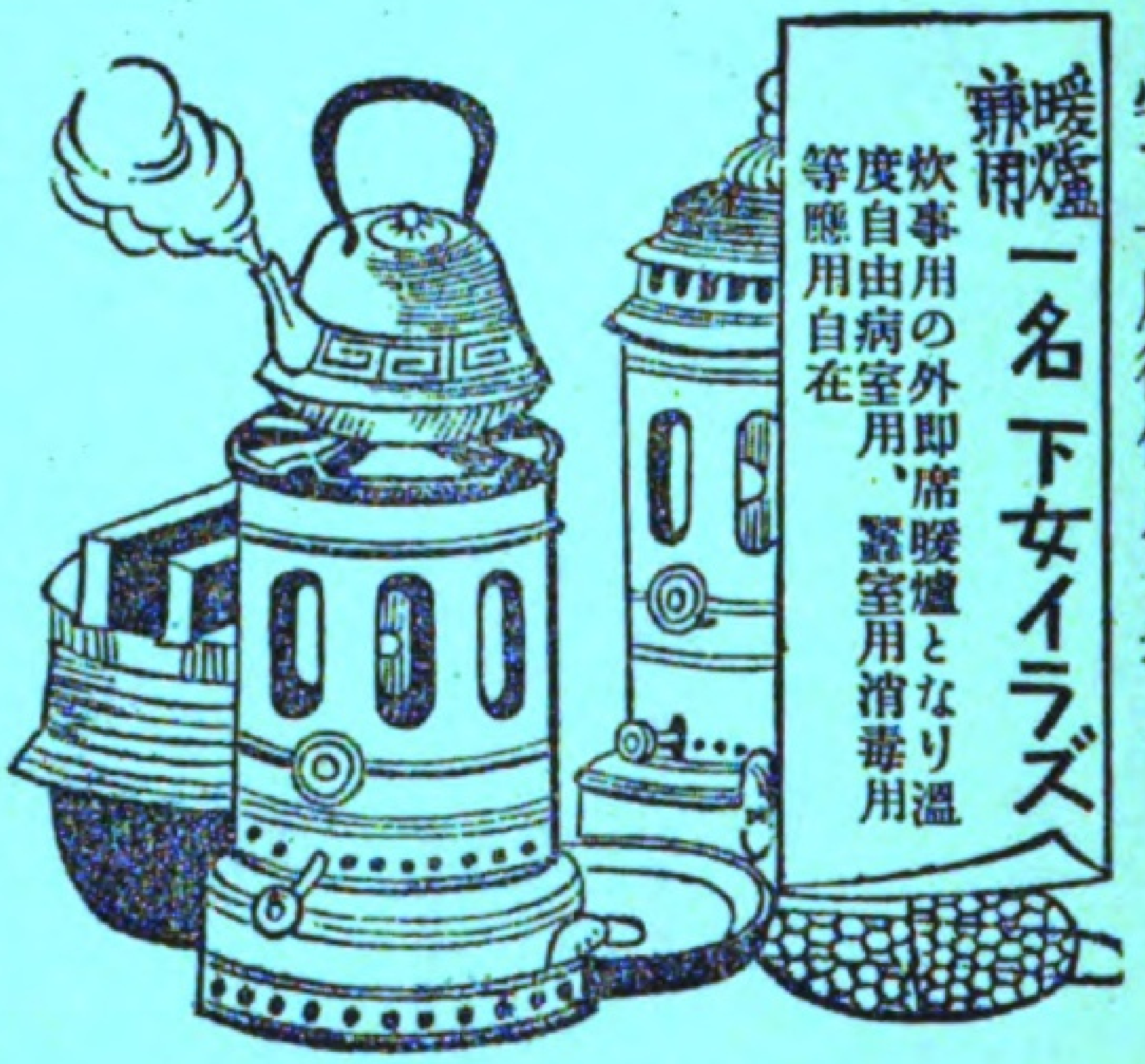
石油使用 文明厨爐 無烟無臭

下女拂底して雇ひ難し薪炭騰貴して不便多し

手間少なき人自炊者に最適

便利重寶の一例

不意の來客或は病人ありたるとき又至急を要する際手間少き時少しもよだつことなく飯を炊き湯をわかし魚肉を煮牛乳を温むるなど即座に辨ず誠に文明の利器賞讃の外なし必ず一度御使用を希ふ



暖爐兼用 一名下女イラズへ

炊事用の外即席暖爐となり溫度自由病室用、醫室用消毒用等應用自在

●詳細書御申越次第進呈●

製造元 大阪本町通渡邊筋角 島田支店（電話東一三三六番）（振替口座一〇三九五番）

關東發賣元 東京淺草區藏前森田町 三和屋商店

特約店
横濱市吉田町都橋角 永瀬商店
名古屋市鐵砲町 岡谷南店
京都四條通高倉東入 一井硝子店
神戸元町通一丁目 齊木商店

其他各地特約店アリ御最寄ニテ御求メチ乞フ

當今一番よくきく月ざらへは何か

理想的最良藥

改良月ざらへ 女月丸



●諸孃姉方に急告す●

月經閉止月やく滯りの如何に恐るべきかは今更言ふまでもなし然るに從來の月ざらへは其原理を極ず各々大同小異にて殊効ある良藥なし本劑は其病理病症を各專門大家に習得し實地經驗と最新學理とにより普く**特効藥**を蒐集し直接**大醫**に係ると同一の効力を有す即ち効能は婦人月經不順月やく閉止月經滯りを子宮も痛めず快よく下す妙藥也二三ヶ月以上の閉止も一二週分三四月以上又は血塊にても特製分服用せば必ず流下す十七八歳に至り月經なき人は二週分毎月月經困難は三日分服用せられよ

●本劑は其奏効極めて峻烈なれ共身體には少しもさわる事なし眞に有効無害の奇藥也

藥價				
一週分六十錢	二週分一圓十錢	特製	四週分二圓廿錢	六週分三圓卅錢

送料各四錢宛

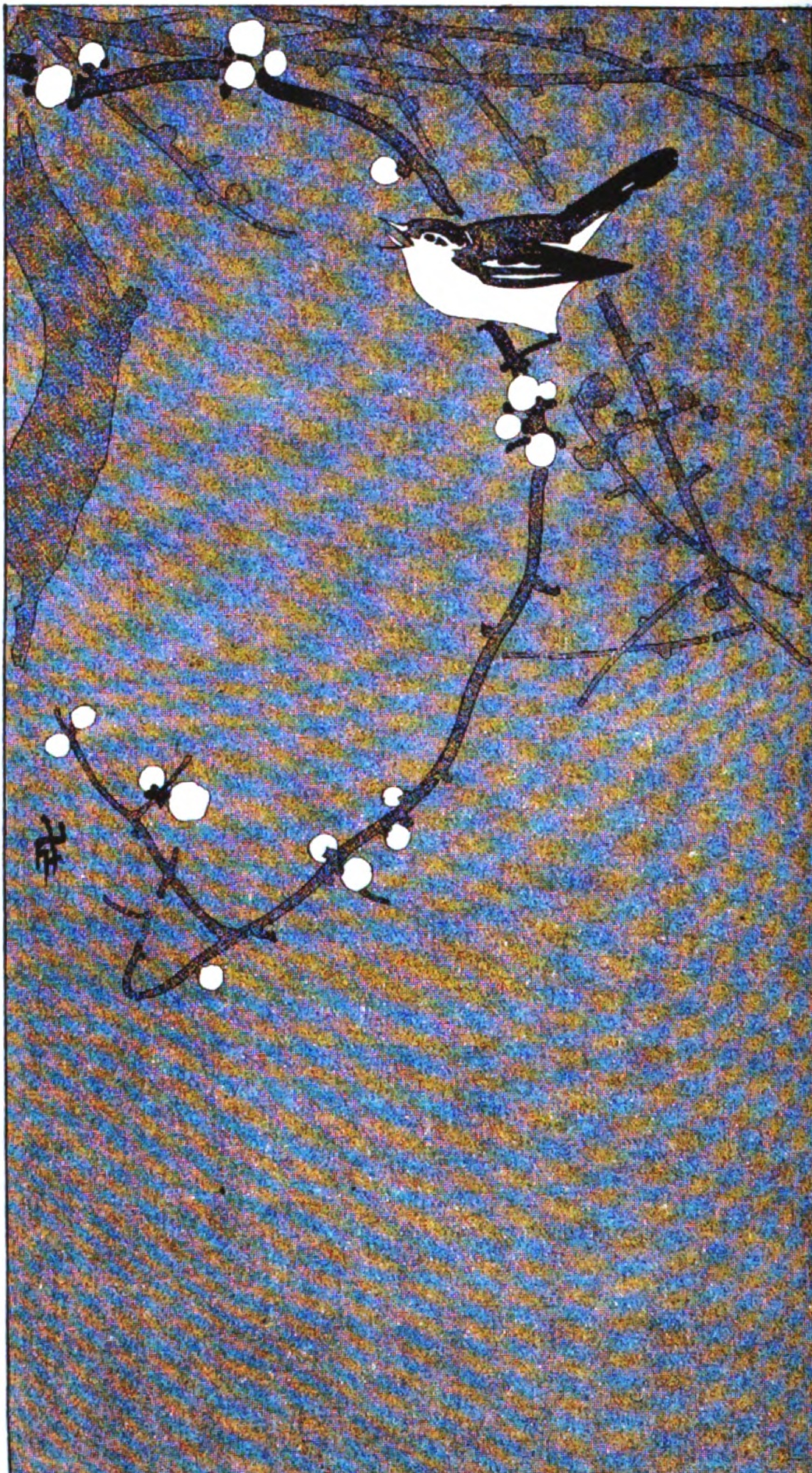
調劑本舖 東京々橋區東仲通中橋和泉町一番地 **小宮愛生堂**

女(にの三)


御料
畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
製造元 東京芝 胡蝶園
發賣元 東京日本橋區橘町四丁目 丸見屋商店
ねり製 御園白粉
水製 御園白粉
こな製 御園白粉
洋風化粧クレーム 御園の蕾
高等化粧水 御園とき水
御園なでしこ
濃厚化粧水 御園四季の花
御園香油
御園香水
高等はみがき 御園歯磨

女(にの四)

立春

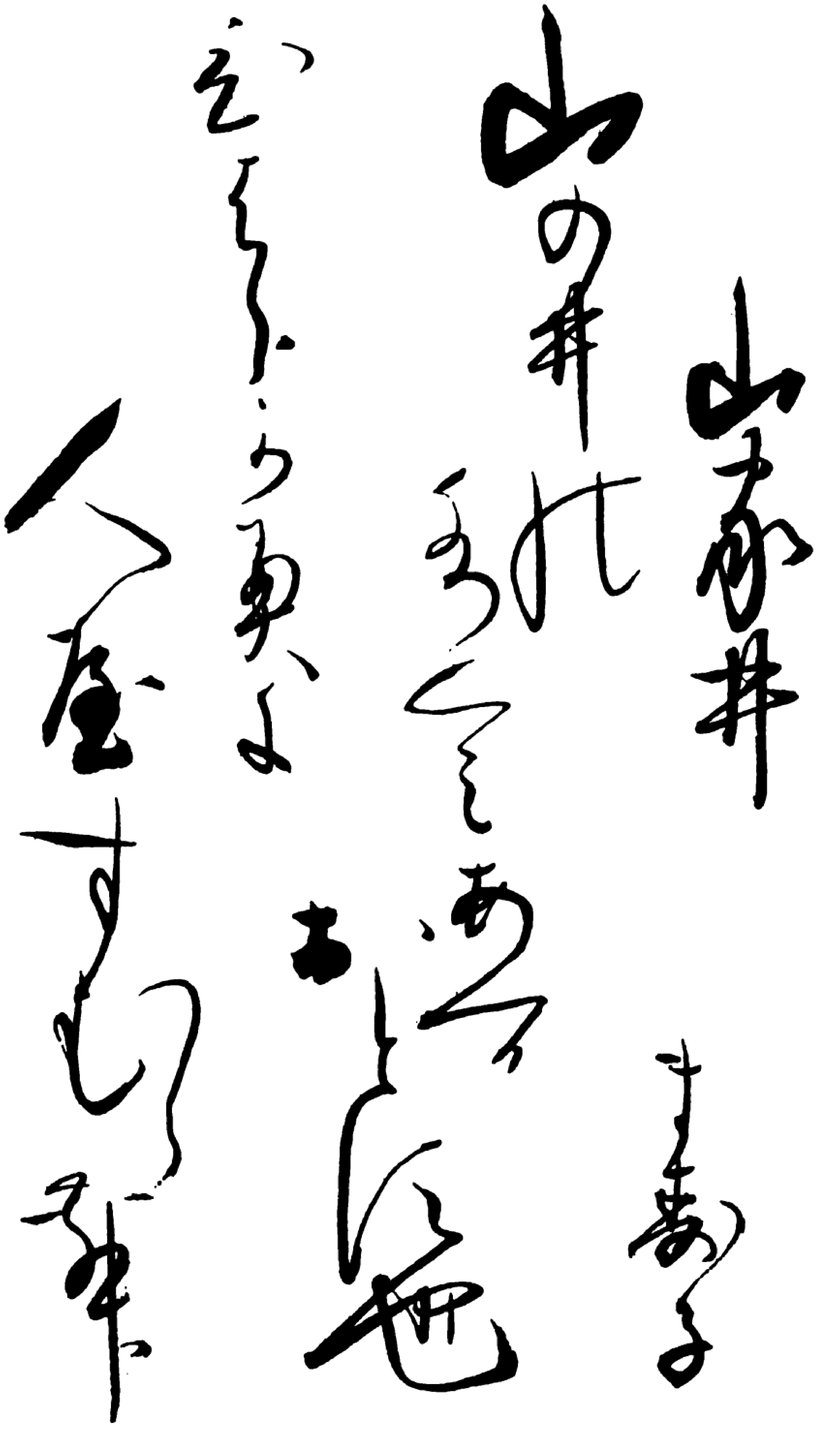


一條成美筆





狩野常信筆



子爵夫人芝山益子筆


美術
造花材料
發賣御案内
造花用電燈
盛籠用、花輪用、花簪用、枝花用等各種
營業概目。造花半製品、造花用染料、造花用器具、摘ミ細工材料、金銀モール、摸寶石、電氣用眞線、
東京市日本橋區横山町壹丁目十六番地
美術造花材料商
天野卯兵衛商店
特長電話浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番
造花用カタログ及營業案内御入用ナレバ此切取相添へ御申越被下度候
切取線
縣
郡
町村
女學世界

(ほの一)

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖も皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑム子スカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全に壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ輕症は一劑重症は二劑慢性症は三劑にて根治確證す

(藥價)一劑四十二錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵券代用貳割增し

新輸入 肉體美容料

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製二劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の白色藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上二藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

血塊流下

通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するとを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効な**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんとを乞ふ



腋臭

わきが

根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢 頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**(電話下谷五四六番)

女(ほの二)


東京樂器製造所製
オルガン（金拾八圓以上）
山葉製オルガン（金拾八圓以上）ピアノ（金參百卅圓以上）
鈴木製ヴアイオリン（金貳圓以上）
獨逸國直輸入ピアノ（金五百圓以上）オルガン（金參百五拾圓以上）ヴアイオリン（金八圓以上）同上附屬品吹奏樂器絃樂器各種
舶來樂譜
獨乙國製樂器
新荷着
目錄御入用の節は御申越次第直に御送可致候
東京市本郷區湯島切通坂町二十七番地
南江堂樂器部
電話下谷一三三〇番 振替貯金口座一四九番

女（はの三）

小兒科專門醫學博士

瀬川昌耆先生方劑



●童丸は健童強兒の源泉なり

●童丸は二十世紀の育兒法に適す

●童丸は幼兒の生命也第二の慈母也

効能

●五疳驚風●小兒失氣●吐乳病
●腸加答兒●小兒食欲不進又は飲過
●小兒吐氣●腹痛中毒●ちゑねつ
●小兒虫氣一切又は熱さましによし

定價

拾粒入	金五錢
廿二粒入	金拾錢
五拾粒入	金二拾錢
八拾粒入	金參拾錢
百四十粒入	金五拾錢
三百粒入	金壹圓

●童丸は有名藥店にあり若無くば發賣元へ御注文あれ

發賣元

東京市日本橋區通四丁目七
振替貯金口座第一六八〇番
津村順天堂

大阪市堺筋大寶寺町南入
振替貯金口座第三一六二番
津村順天堂

女(ほの四)

清香



宮崎與平筆

胃活

右は明治二十七八年戰役後我國民の體格に付て余等大に感ずる所あり即ち日本人の普通病なる胃病患者を救濟するの目的を以て學理と實驗とにより共同研究の結果發見したる胃病新薬にして效能確著誠に驚くべし之を廣く天下に弘布し世の胃病患者を救はゞ實に大日本國民の幸福なり

陸軍軍醫監正五位 長瀬時衡 印
陸軍藥劑監從六位 石塚左玄 印
海軍軍醫少監從六位 日向次作 印
海軍大軍醫正七位 横井太郎 印
陸軍大軍醫正七位 門倉梅三郎 印

●●●●●◉醫藥用胃活錠 は有名なる五大軍醫の合議製劑胃活を加減し更に二三の新特効藥を加へた新式の錠劑であつて、完全なる健胃劑として現今の世界に知られたる藥品中其類が無い重に醫藥用として作られしが、今回廣く世上に發賣することとなりぬ

◉胃活錠は携帶に便に飲むに湯水を要せず、飲めば直に溶解し他出の際隨時服用の便益さ

◉歐米の民間療法とは、胃活錠にて胃弱症を治するの類なり

理想的

健胃劑



(注意)◉胃活は女の如し、胃活錠は男の如く、胃活よりは其力強し

併し胃活の廢する事の出來ぬのは女の廢する事の出來ぬと同じ道理である

胃活と胃活錠効能

◎溜飲◎胃弱◎慢性胃弱◎胃加答兒◎消化不良◎胃痛◎食慾不進◎宿醉◎食傷◎腸滿◎胸痞◎胃痙等一般の胃病に著大の効能ある靈藥なり論より證據二三週間分を試めし玉へ

▲定價▼

胃活	胃活錠
壹圓	壹圓
六拾五錢	五拾錢
四拾五錢	貳拾錢
二拾五錢	

●全國ニ郵送料●

發賣本舖 東京銀座一丁目廿三番地 大阪南久寶寺町堺筋東 山田安民藥房

薬學得業士 薬劑士 鏑木靜夫發明

最新式 薬化學應用

美顔術

消毒經濟を兼ねたる一種秘法藥劑にて極て容易に實施せられ得る化粧美顔法なり、眞の化粧法を望まるゝ御方は御遠慮なく郵劵二錢封入御照會ありたし

東京芝區櫻田伏見町三番地

東洋堂藥局

電話新橋二九四二番

肺病

東京府下大森入新井

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵劵二錢封入にて御照會あれ

川名助次郎

通信教授

產婆學講義錄

目下會員募集中

初號二一號發行

毎月一回

六ケ月修業

規則見本要郵劵二錢

東京四谷區内藤町一番地

東京產婆講習會

本廣告切取り申込者に束修を半減す

●東久世通禧伯題字●海舟勝安房伯跋

浪華數學館長池田駒太郎君著作

新編速算教授書

送料共定價金貳拾錢

●抑も數學は處世の羅針盤とも云ふべき重大の術なり本法は輕便簡易習行共に速なること遠く舊法の及ざる所世間此術を得て活用する者既に多し務めて少年圖解を附し初學者として獨習せしむるに悉く速習速成す世人此法を解し此術を應用せば其利益に廣大無究なり今回實擴めの爲景品として

商業家十傑

政治家十傑

近世成功者八十餘名逸話

禍福吉凶夢判斷

新式食パン製法

無病健全長壽の寶

一家重寶虎の卷

以上七册進呈 合計八册 價貳拾錢

●專賣元 大阪市松屋町通平野町 文玉堂書店

懐姙避姙自由自在

全壹冊 拾五錢 送料貳錢

子なき人は本書を讀みて懐姙の法を知るべく又子が出來て困る人は避姙の法を知るべく實に本書は懐姙避姙を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵劵代用必一割增

大阪市東區和泉町二丁

泉陽堂

毛のはへる薬

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇薬

一圓●一圓半●濃厚二圓半●三圓半送料十錢

養散 やせる薬

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ひて害なく身體美容となる保證薬なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓五週三圓廿錢送費十錢



皮膚病專門薬

なまず いんきん たむし

あか鼻 ざくろ鼻 あざ

ぜにがさ ひぜん わきが

本劑は獨逸國皮膚病研究所專用法劑にして特製一瓶にて全治保證又おいこむの憂なし

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢

專賣本舖 東京本郷區本郷三丁目 新宮薬館

三大博士發明 神經衰弱 貧血頭痛 依卜昆的里(ヒステリー) 陰痿

等通俗的症候解說療法攝生法根治薬詳說の雜誌をハガキで申込次第無代進呈す

肺病救濟

アドロフ博士新發見肺結核治療薬は醫界新紀元也我國に傳へ公私病院長廿七名の醫家實驗不思議の効果を確認せる全治報告根治療法詳說の雜誌を救濟の爲無代進呈ハガキで申込……

東京京橋越前堀 樂天堂薬房

●圖書目錄御入用の方は往復葉書にて御申越次第直に送呈す

東京日本橋區本町 博文館

男 女 ちゞれ毛 くせ毛 赤毛は何程の難毛も直に根治黒變し良き艶の出る奇術を郵劵封入申込の方に無料教授誓て美髪にして差上げます

東京 麻布區材木町 岩阪澄子

女(への三)

たつた

三都百萬の美人と
たつた白粉！

東京 雲井に近き貴婦人淑女の方々に比ひ稀なる高貴清新の芳香を有するたつたの品位を愛でらる

京都 常に名門の深窓に召されて色香床しく又佳人美妓に其つや、のびの優れたる美しさを唄はる

大阪 富豪の令嬢○五大遊廓の歌妓は元より上下通じて此上なき化粧の仕曠ある艶やかさを慕はる

故に 未だたつたを御召しなき方々は早く求めて世の流行に後れ給ふ勿れ（本品にはねり製粉製あり）

本舗　大阪博勞町二　仁壽堂分店

◉賣捌所は全國到る處にあり最寄御求を乞

白粉

女〻（への四）

有栖川宮姫君實枝女王殿下



梨本宮妃殿下と王女殿下

方子女王殿下　規子女王殿下



金製羽織紐



弊店新案の金製羽織紐は金製なれば申迄もなく優美にして形ちは嶄新の品のみなれば貴婦人社會一般の流行と成り好評を蒙り居候

東京市日本橋區若松町

丸嘉

電話浪花七六八番
振替口座九〇一四番

定價

1 十八金製 金十圓以上十三圓
2 十八金製 金九圓以上十二圓
3 十八金プラチナ眞珠入 金拾八圓以上廿五圓
外 ダイヤモンド入飾り緒〆付各種

（その一）

太陽 臨時增刊

第十四卷 第三號

黃白人之衝突

◎世界の問題は要するに黃色白色兩人種の競爭也
◎人種競爭の問題を解決するに非ずんば今の有ゆる重大事件と其將來とを解決することを能はざる也
◎本誌は過去に於て黃白二人種が如何に衝突したるか復た其結果の如何なりしかを詳述す

全一册

洋裝四六二倍判
紙數二百六十頁
正價金三十錢
郵稅（本號に限り）八錢

◎現代に於て軍事上政治上經濟上東西の二人種は如何に衝突しつゝありや事實を知らむと欲せば本誌を繙け
◎人種競爭の將來は如何、黃禍に關する世界の論壇と實況とは如何、本誌は數年間苦心して蒐集せる材料に依り黃白兩波の衝突せる諸方面を趣味津々たる筆を以て詳述す

▲附錄明治四拾年史……記事遺漏無し 論評不偏犀利▼

二月十五日發行

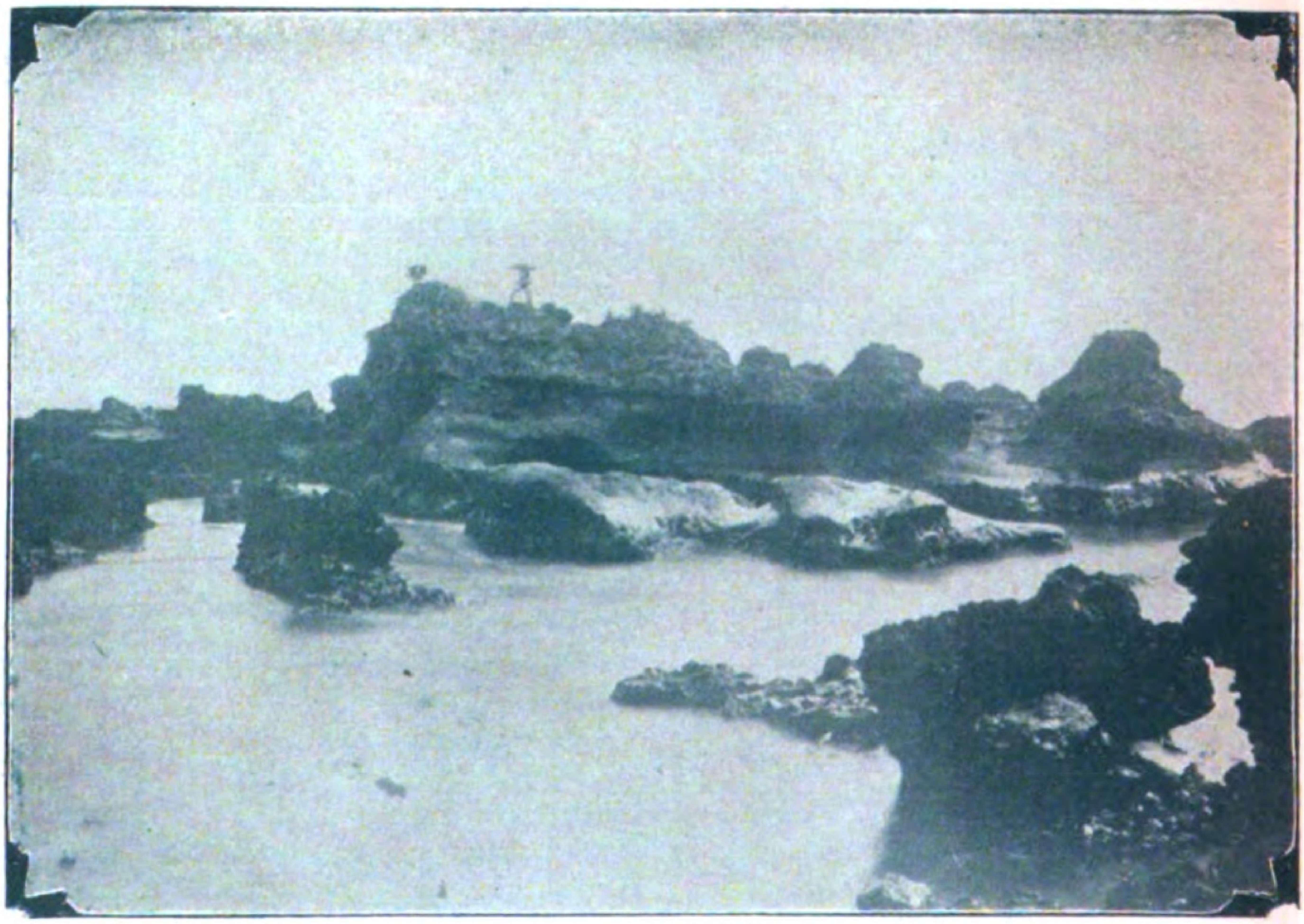
發兌元 東京本町 博文館

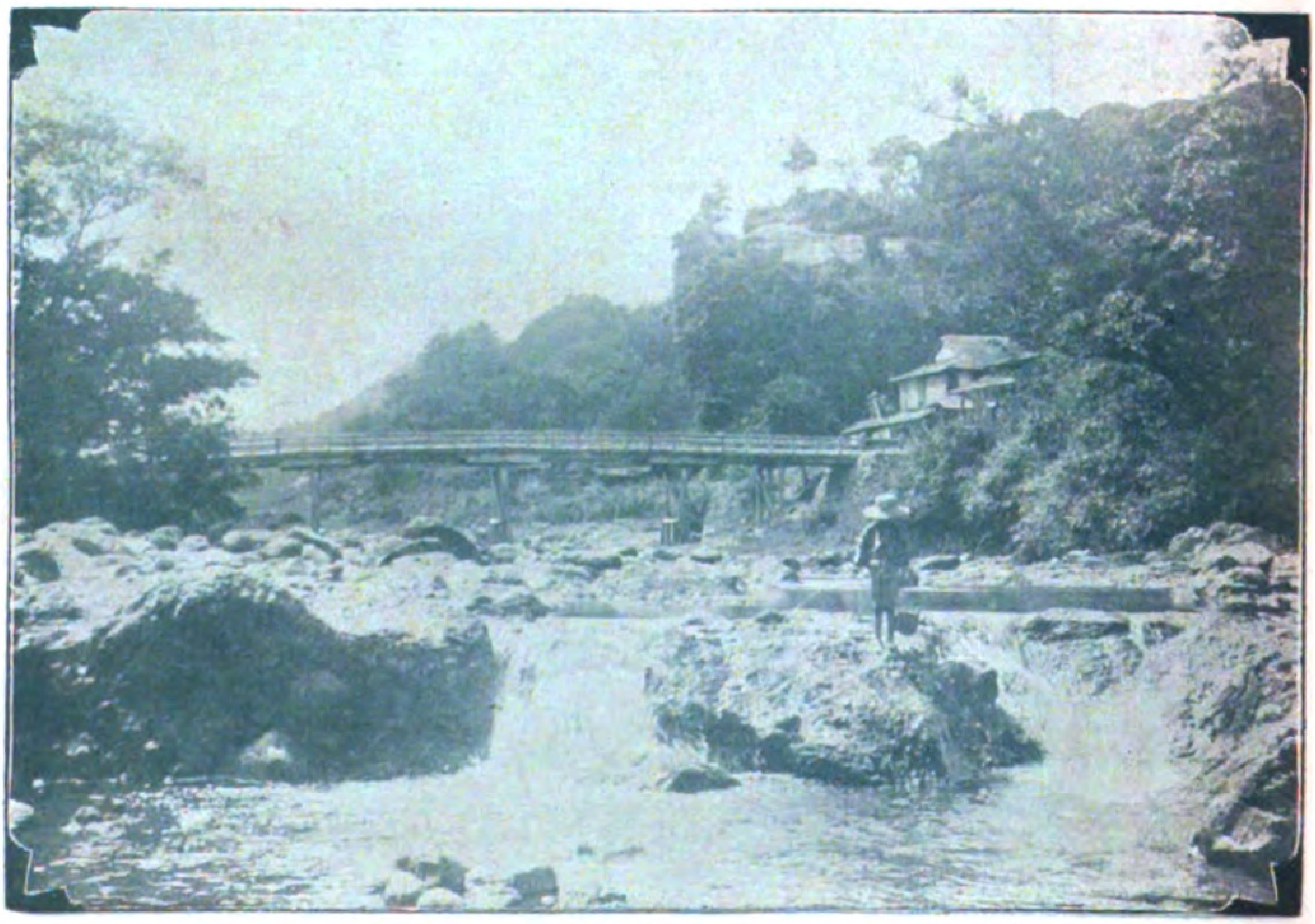
（その二）

女(その三)


Made Beautiful by Beautiful Hair.
Try Keiba Oil.
ケーバ香油
本品は日本特有の椿の油を搾りたるまゝ佛國へ輸出し之れを以て日本人に適する様精製せしめ加ふるに芳香馥郁たるローズの香料を以て種々研究したる結果再び輸入せし品なれば和洋香油數十種中最も進歩したる日本人向唯一の香油なり
本品の特色
縮毛を延ばし赤毛も漆の如き艶を出し皮膚を滑らかならしめ毛髪を延びよくす
●ケーバ香油を使用すれば「フケトリ」香水の必用なし
東京日本橋區橘町二
化粧品直輸入商 竹間商店
電、浪、一六一四
眞（との四）

常陸五浦の奇礁





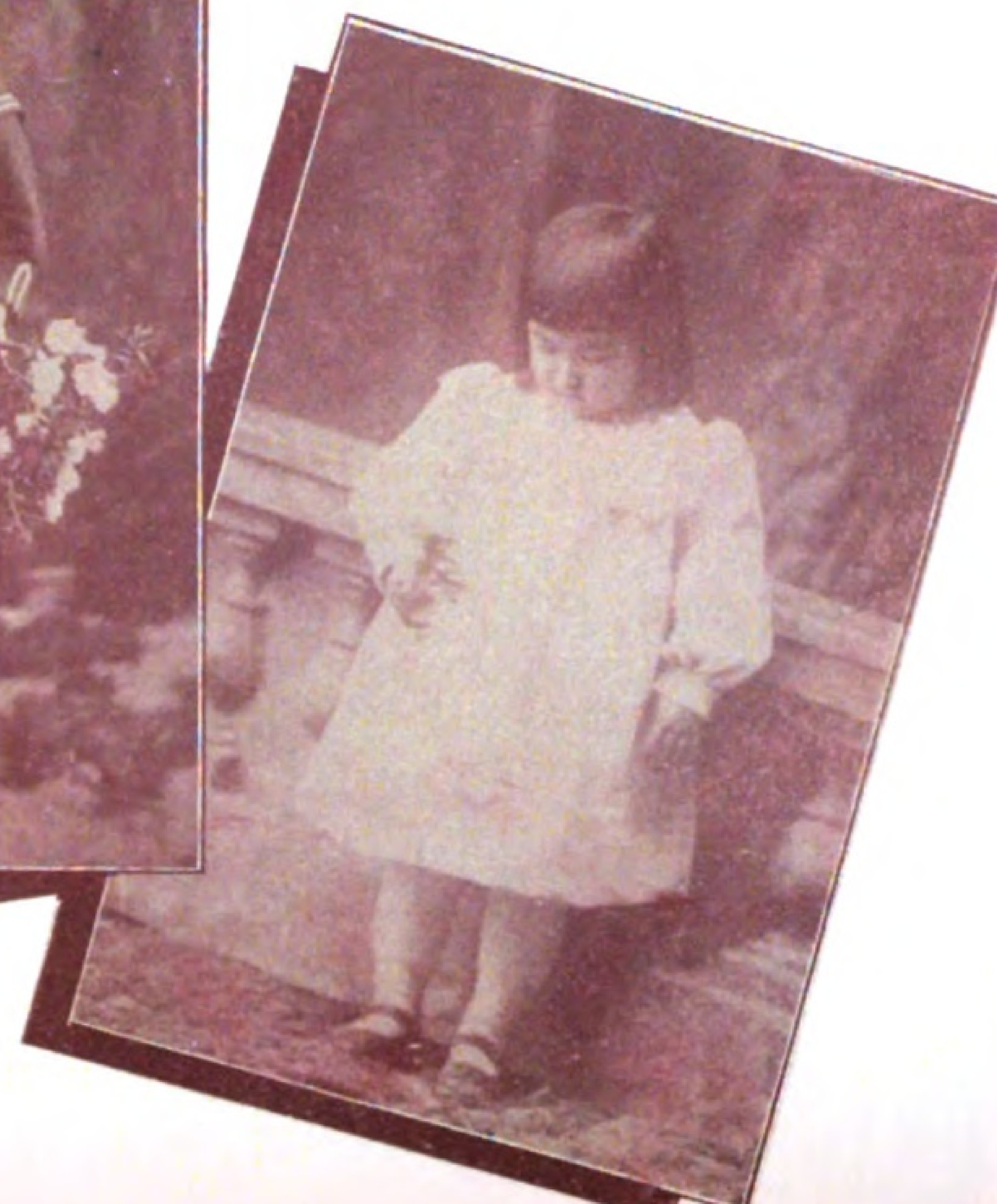
耶馬溪猿飛びの奇勝

理想の小供理想の服



女子共立會洋服部案（本郷彌生町三番地）





TAKA-DIASTASE



タカヂアスターゼ

世界最大の製藥工場

パークデビス社は完全なる設備を有する世界最大の製藥會社にして、上圖は其デトロイトに於ける本社工場の全景なり。此他同社は加奈陀及英國に同一規模の分工場を有し、世界の醫家が要求せらるゝ總ての醫藥品を製造す。

高峯氏發見消化新劑

タカヂアスターゼはパークデビス社の製品なり。完備せる裝置の下に熟練なる技術者に依り、製出せらるゝ本劑は品質純良、毎瓶强度均一にして、又其効力永久不變なり。

醫師及藥舖諸彥！模造品製造者の誇大なる虚僞的廣告に誤らるゝ勿れ、世上本劑以上の實品なきは歐米及吾多數醫學大家の實驗報告に徵し確認せらるべし、需用者は必らず高峯氏タカヂアスターゼと指定せられよ、本劑は粉末錠劑水劑の三種として發賣せり各地藥舖にて販賣す

代理店 東京南茅場町 三共藥品合資會社

女(ちの一)

每卷醫學專門大家講述

家庭衛生講話

每卷洋裝菊判美本——紙數各約百六十頁

口繪寫眞版數多挿入

（第一編）

一般救急法

醫學博士 三輪德寛君述

正價三拾五錢
郵稅金六錢

（第二編）

衛生學大意

醫學博士 森林太郎君述

緒論＝衛生學の意義○衛生學の沿革
（一）土地の事＝地中の空氣○地中の水○外三項
（二）下水の事＝眞の下水○下水の排泄場所
（三）埋葬の事＝風葬○水葬○埋葬○屍骸の木乃伊化○外九項
（四）上水＝水道○水の消費量○水の善惡○外五項
（五）都會の事＝建築物と人口と○東京の建築物と人口と○外六項
（六）家屋の事＝燈火○窓○燈火の變遷○外十八項
（七）空氣の事＝空氣の成分○窒素○酸素○酸化○外六項
（八）氣象の事＝地球の溫○地上の溫の差○外十八項
（九）衣服の事＝溫の調節○體溫の放散○衣服の效用○外九項
（十）營養の事＝所謂滋養品○食の作用○食素の區別○外廿五項

正價三拾五錢
郵稅六錢

（第三編）

藥物の大要

醫學博士 林春雄君述

◎總論●健康と病氣と●藥物の定義●治療の意義●藥物の作用●藥物の分量●投藥の反覆●製劑の製粗並に藥劑の理學上の性質●藥物を用ふる場所●藥劑の個人に對する關係●身體に用ひたる藥劑の發落●藥劑の類別法◎各論●第一類 神經筋肉毒（「クロロフォルム」「アルコホル」の類外十六項●第二類局所の營養を障碍する有機化合體（粘漿劑外十一項）●第三類無機化合體（水外八項）●第四類 消化醱酵素並に滋養品（脂肪及消化醱酵素の類、含水炭素類、蛋白質類

正價三十五錢
郵稅六錢

（第四編）

姙產婦之心得

醫學博士 緒方正清君述

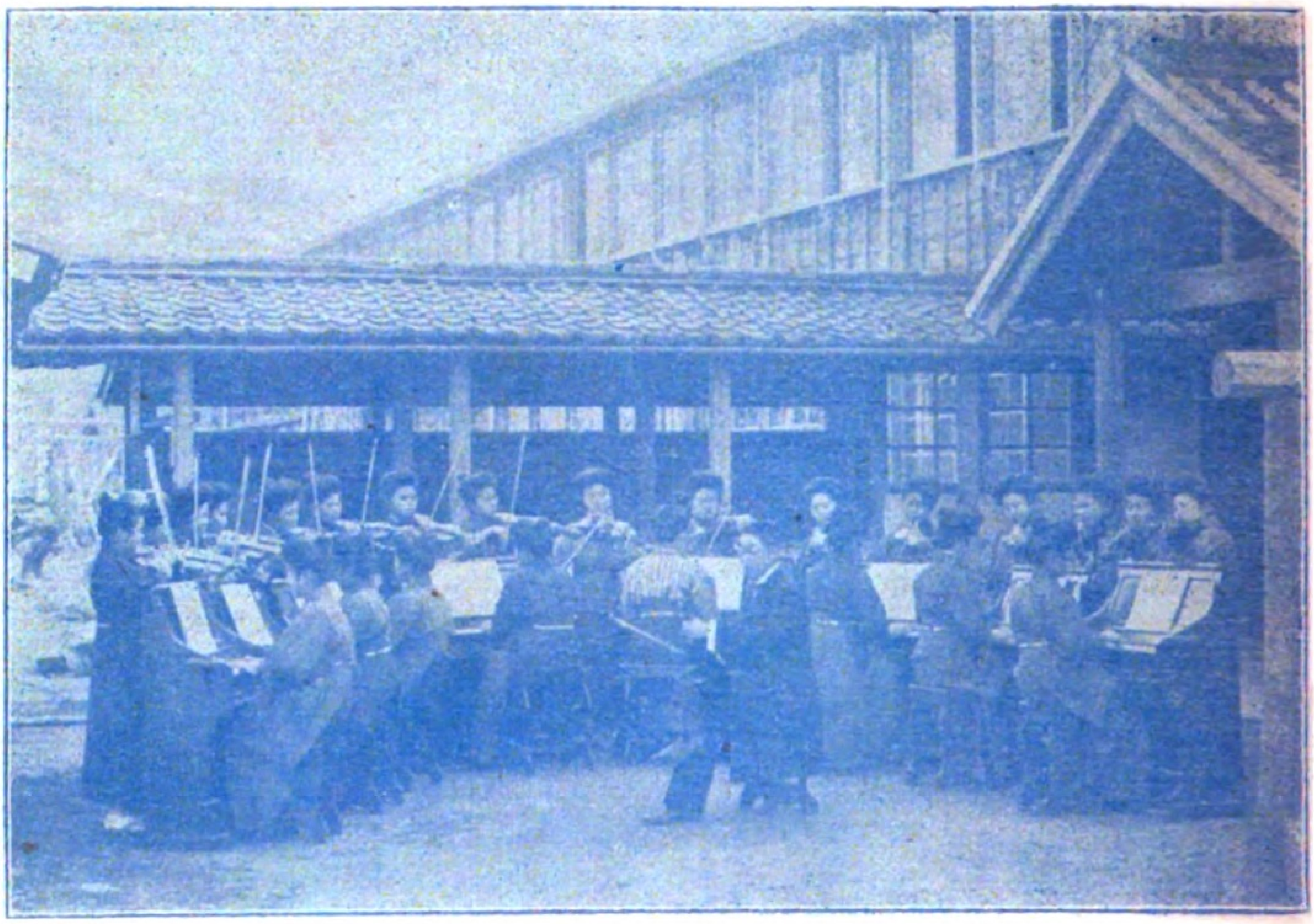
○緒論●婦人の生殖器●月經●姙孕●受胎したる卵の變化●胎兒の子宮内に於ける狀態●姙婦の身體に現はるゝ變化●姙娠の徴候幷に姙娠各月の徴候●分娩期日を算定する法●數胎姙娠●胎兒の死亡●分娩の種類●正規分娩の經過●胎兒の位置幷に分娩の狀態●正規の產褥●姙娠中の生殖器以外の異常●姙娠中の膣分泌物の異常●姙娠子宮の位置の異常●胎兒幷に其附屬物の異常●滯產及早產●子宮外姙娠●姙娠と共に起る病氣●陣痛幷に腹壓の異常●產道の異常●胎兒の異常●胎兒の附屬物の異常●產道の損傷●胎兒分娩後の無力性出血●分娩時に起る病氣●產褥中の異常

正價三十五錢
郵稅六錢

★ 發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館 ★

女（ちの二）

合奏



（和歌山縣師範學校女子部生徒）



（音樂同好會の演奏）

ミシン裁縫は

奥様の
令嬢の
オチビさんの

為に非常困つた時に一本立ちが出来る
為めに氣のキイタ嫁入道具となり
為に盛に家庭經濟を助け

家庭用素人向

シンガーミシン

特廉 月賦大販賣

ミシン使用法、裁ち方、縫ひ方

無報酬出張教授 十回以上

(東京及び横濱市内)

明細書 御申越次第無代送呈す

●従來の普通賃貸法も亦其儘繼續

シンガー裁縫機械會社 東京支店

銀座三丁目

臨時入學生徒募集

シンガーミシン裁縫女學院

東京市麴町區有樂町壹丁目　同　院

百餘名收容附屬寄宿舍新築に付入舍を許す

橫濱市常磐町壹丁目　同　院

橫須賀市深田十三番地　同　院

其他全國樞要の都市に設立準備中………

女(りの一)

醫學博士 吾妻勝剛先生序

醫學士佐藤得齋君 伊藤尚賢君共編

學生健康法

衞生の書汗牛充棟、衞生の學愈々進みて吾人の健康益々劣り來る、斯くの如きは理に合せざる處なるも、之れ今日の現況なるを如何せん、聞く健全なる精神は健全なる身體に宿ると假令不健全なる身體に健全なる精神宿るも、其希望目的を達するには病軀の克する處に非ず、諸君は男學生なりや、さらば普通人に比して更に一層の健康を要す、貴女は女學生なりや、さらば一般婦人病以外に尚學生病に襲はるべし、之れ國民として亦學生として由々敷大事ならずや、諸君幷に貴女は嘗て衞生書を讀みて其健康を増す處ありしや、著者は滿腔の同情を表し、敢て此書を座右に捧ぐ、思ふに熟讀以て履行せば啻に學生の健康に資するのみならず、家庭に於ても亦有要なる健康辭典となるべし、偉大なる希望を有する學生は固より、健康を欲する人、幷に子女の美艶と健康とを樂まんとする父兄は、速に一本を備へられよ、健康は美麗と成功と快樂とを意味す、病に惱みて巨萬の富何するものぞ

全一册

洋裝三六判
總クロース頗美本
紙數三百八十頁
正價金四十五錢
郵稅八錢

少年書談 日本武將傳

武田櫻桃君
木村小舟君 共編



日本古來の武將の中で、特に南北朝時代の重なる忠臣の事蹟を述べたのが本書であります、著者は多年此種の著述に經驗あるの人、其平易にして趣味ある筆は、多數の木版畫と相依つて、少年諸君の好伴侶たるべき至極可愛らしき好册子となつて出ました、されば諸君は、此書に依つて古英傑の人となりを知り、併せて忠君愛國の志を養ふことが出來やうと思ひます、幸に御購讀あらんことをお勸め申します、

全一册

洋裝菊判美本
紙數約百六十頁
正價貳拾八錢
郵稅四錢

發兌元 東京本町 博文館

（振替貯金口座第二百四十番）

（りの二）

樂界に於ける最高評の樂器

山葉風琴

金拾八圓以上
金參百五拾圓迄各種

◉樂譜用紙、樂譜帖各種◉

音樂書

東京音樂學校御藏版 中學唱歌 定價金參拾五錢郵税四錢

共益商社編 唱歌教科書 教師用 定價金參拾錢宛 一、二、三、四 郵税四錢宛

同 同生徒用 一、二 定價金拾五錢宛 三、四 定價金拾八錢宛 同

小山作之助先生編 重音唱歌集 一、定價金五拾錢 郵税不要 二、定價金七拾錢

山葉洋琴

金參百參拾圓以上
金四千參百圓迄各種

音樂書

山田源一郞先生編 女學唱歌 一、定價金五拾錢 二、定價金六拾五錢 郵税不要

楠美恩三郞先生編 デュエット トリオ 唱歌集 定價金六拾五錢 郵税八錢

島崎赤太郞先生編 オルガン教則本 一、定價金參拾五錢 郵税六錢 二、定價金五拾錢 郵税八錢
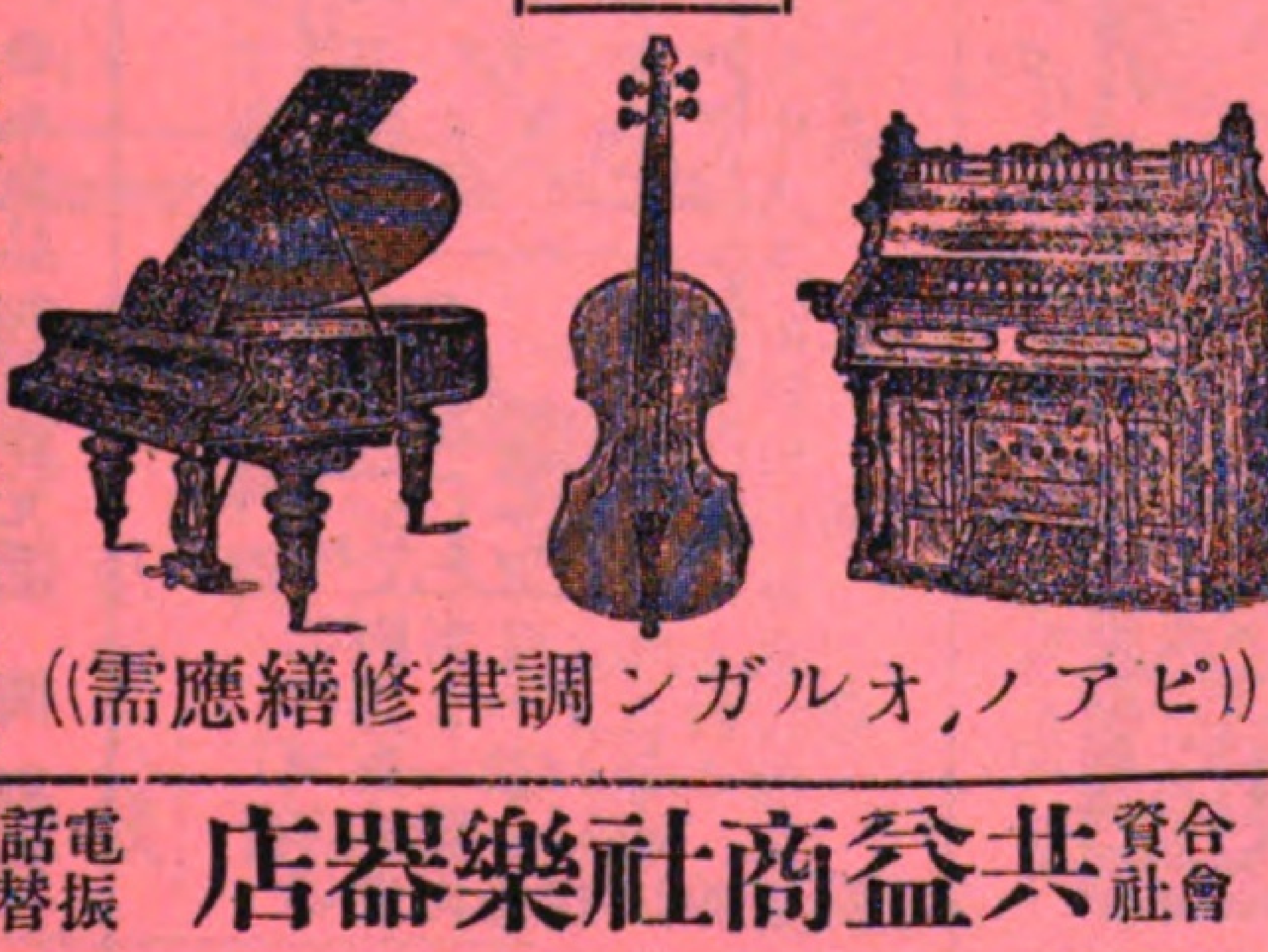
ノエルペリー先生編 オルガンの友 一、定價金五拾錢 二、定價金五拾錢 郵税八錢

鈴木ヴァイオリン

金貳圓以上金百廿圓迄
弓金七拾錢以上各種
箱金壹圓五拾錢以上各種

◉音樂原書輸入品各種◉

弊店は以上の外舶來洋琴風琴、ヴァイオリン樂隊用吹奏樂器、手風琴、ハーモニカ及其他西洋樂器各種並に和洋の音樂書を販賣し階上、階下には各種の樂器を陳列し最も叮嚀懇切に各位の御需めに應じ候に付陸續御來店御購入の程希上候猶ほ郵税貳錢御送付あれば詳細なる目錄進呈仕候



（ピアノ、オルガン調律修繕應需）

東京市京橋區竹川町十三 合資會社 **共益商社樂器店** 電話新橋五二九番 振替口座壹五八〇

女（リの四）

嫁ぐ人



今尾掬翠氏寄贈



第壹號は空前の好評●第二號內容下の如し●期を違へず出すべし

每月一回五日發行

冒險世界

大判（四六判三倍大）紙數百廿八頁

◉千變萬化の壯快事を知らんとする人は讀め奮闘的活動的勇者は必ず本誌を見逃す勿れ！

第一卷第貳號　二月五日發行
正價一冊金拾五錢　郵稅一冊金貳錢

口繪

◉油繪三色版 危機一髮 小杉未醒 ◉寫眞銅版 身の毛も竦立つ！

◉空中大悲劇 ◉幽靈と旅人 ◉世界一大奇觀

壯快奇拔なる讀物

◉冒險探檢小說
▲怪人鐵塔（空中美人の卷） 押川春浪
▲妖魔女王の墓 鳴海濤陰

◉冒險探檢實譚
▲馬賊遭難實記 小池撫劍
▲南米の怪猩 絕島漂客

◉氣焰萬丈
▲浦鹽要塞牢獄怪事 閃影子
▲宇宙平呑的快談 大隈伯談

◉震天動地
▲豪俠奇人談 斷水劍客
▲空中大悲劇 西村渚山

◉冒險的成功談
▲天界の風來物 ユーエヌ生
▲商界の怪傑 奮闘生

◉壯俠世界
▲冒險的大富豪 古劍耶
▲亂暴書生時代 押川春浪

▲北米書生的百姓生活 橘戶信

◉尙武世界
▲遼東の懷古 平塚斷水
▲新兵の閉口頓首 シンペイ生

◉珍談奇談
▲僕は一等水兵だ 激浪庵
▲如何にして强盜を捕縛するか 老探偵談 木村小舟
▲海の秘密 松旭齋天一談

◉幽靈怪談
▲奇術師冒險旅行
▲幽靈の指環 磯萍水

◉武勇講談
▲劍神柳生但馬守 眞龍齋貞水

◉運動競技界
▲大相撲評判記 好角子
▲野球界名物男 河岡潮風
▲柔道界漫評 柔道大家談

◉其他讀者氣燄欄及び逸話奇聞欄を設く

◉本號には更に奇拔なる金牌銀牌大懸賞問題あり

（その二）

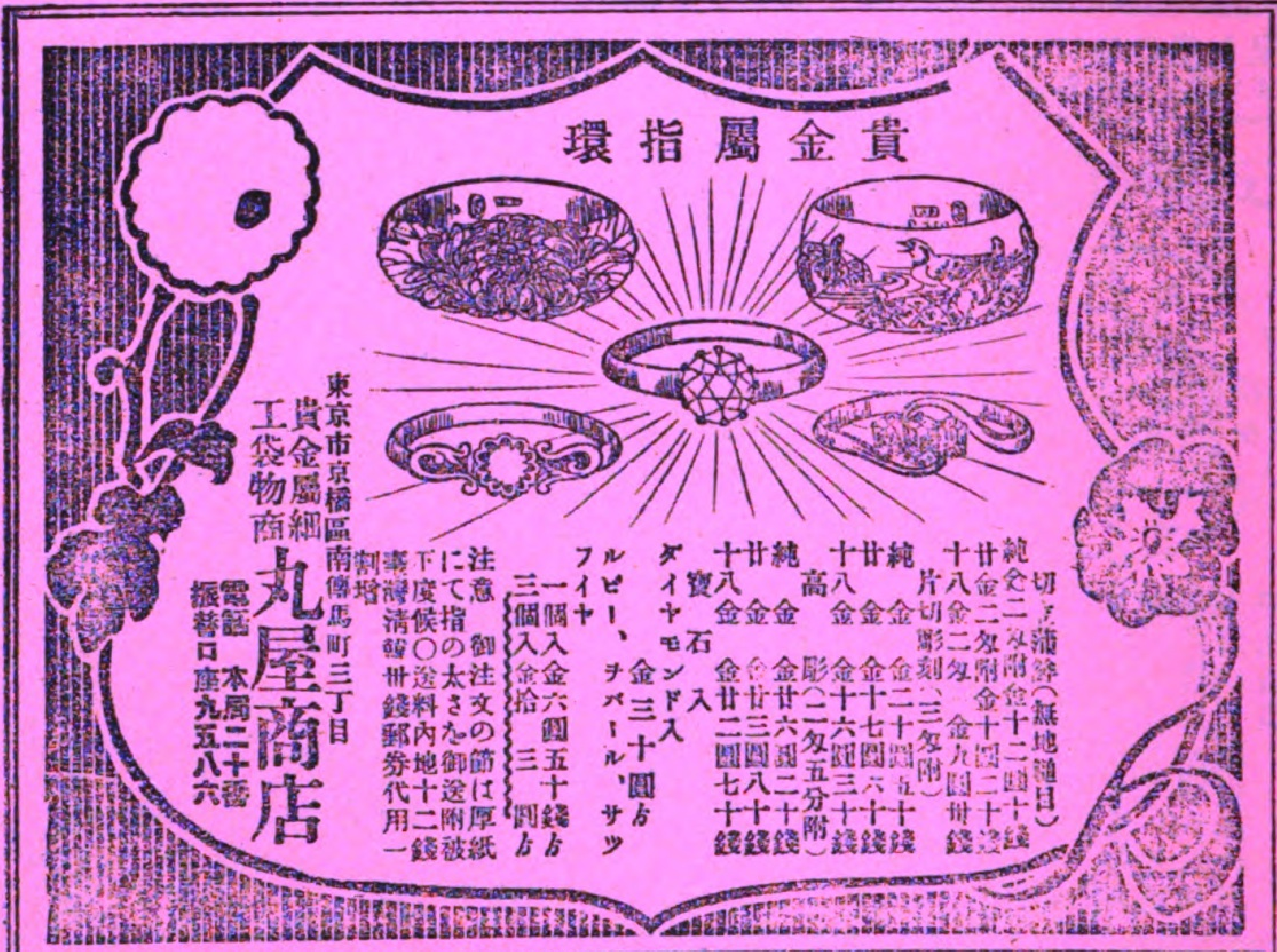
發兌元 東京日本橋區本町三丁目 振替貯金口座第二百四十番 博文館

女（ぬの四）

理想の小供服



女子共立會洋服部案


貴金屬指環
切子蒲鉾（無地通目）
純金二匁附 金十二圓十錢
廿金二匁附 金十圓二十錢
十八金二匁 金九圓卅錢
片切彫刻（三匁附）
純金 金二十圓五十錢
廿金 金十七圓六十錢
十八金 金十六圓三十錢
高彫（二匁五分附）
純金 金廿六圓二十錢
廿金 金廿三圓八十錢
十八金 金廿二圓七十錢
寶石入
ダイヤモンド入 金三十圓方
ルビー、チバール、サッフイヤ
一個入金六圓五十錢方
三個入金拾三圓方
注意 御注文の節は厚紙にて指の太さを御送附被下度候○送料内地十二錢臺灣清韓卅錢郵劵代用一割増
東京市京橋區南傳馬町三丁目
貴金屬細工袋物商
丸屋商店
電話本局二十番
振替口座九五八六


内務省御検査済完全無鉛
バイオレツト白入
新花王
ねりおしろい
定價（一個）參拾錢
同（一個）貳拾錢
東京横山町二丁目
脇田製

女（その一）

女(その二)

世界唯一

麻病消渇の根治新薬

麻滅

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力顯著なる一新藥を主劑とし是を内服して麻病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥に付總て輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず對て根底根治するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効より有害の結果藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者諒め之を諒せよ藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割増しの事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓叁拾錢

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣馥郁たる佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

世界無比 最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまづ いぼは拾日 目に必らず美麗に除去

保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし、實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各壹劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割増し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす)着金即刻小包郵送す

梅毒根治新劑

本劑(藥名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の ばい毒根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症(即ちばいどく。ひゑかさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。痳毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓って根治するを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ 藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分叁圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割増しの事

◎以上貳藥 專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

眞正極秘 粹珍書案内

望の人郵券四錢送れ直に送呈すべし披閲忽ち愉絶快絶眞に粹士必讀の珍書案内

申込所 東京市下谷區西黑門町廿番地 東雲堂書店

(その三)

惡筆家の福音

どんな美しい方でも文字の拙き程耻かしきことはありますまい、それで惡筆の方は本會の特許速成法にて特許草紙に特許墨で練習なされば、僅かの間にて誰でも驚く程上達することは調度機械的であります。



特許習字の練習程面白い事はあるまい

圖の如く初めに白抜き手本文字の上を辿りて、白色の特許墨を付けて並らんで居る特許草紙の白抜き文字を見競らべて書くと直に赤色に現はれて、手本の文字と少しも違はざるは、手本と草紙とが相並びて兩者共に一覗眼の中に入るが故である、尚赤色文字は忽ちに消失して元の白紙となる、それで如何なる習字嫌ひの者でも夢中で數回の練習をするので、何時上手になつたのか自分ながらも不思議の樣である。

變體四十八音和歌、假名變り作文、楷行草三體細字共六ヶ月

卒業毎月貳部發行 入會金拾錢 會費壹ヶ月參拾五錢 全期分金貳圓

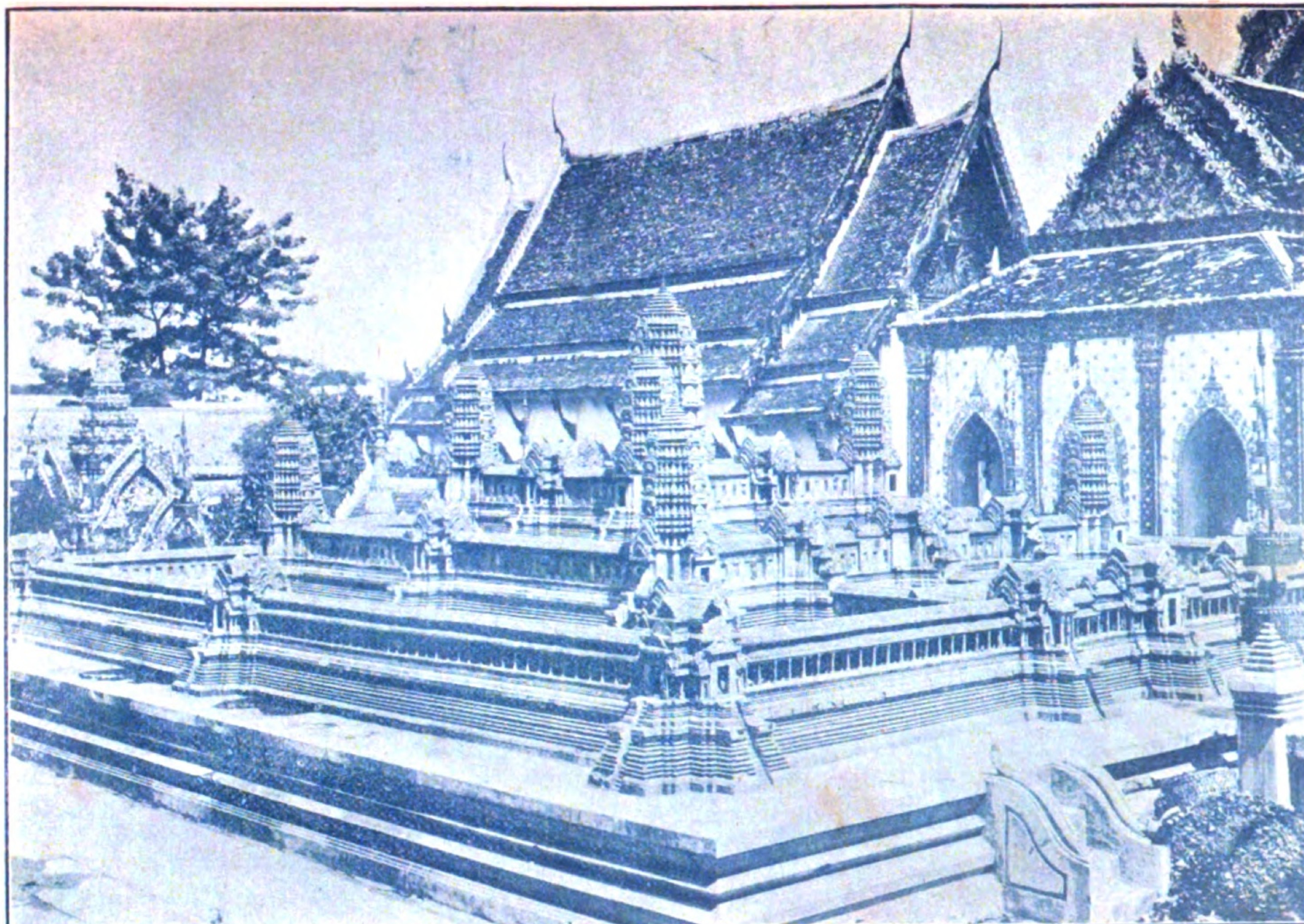
見本 詳細會則進呈 ○男子部 楷行草三體書簡文細字共六ヶ月卒業 ○月謝女子部と同じ別に小學部もあり

東京本郷森川町壹 振替口座第六八三二一

帝國習字速成學會

女(ろの四)

暹羅王宮



美人とみやけ油

▲感謝狀　富山縣婦負郡八尾町　清水久子樣より

庭の桐の葉殘り少なう愈うつ風も身にしみ秋はや深きを知り申し候此頃店員皆々樣には御すこやかにお過し遊ばさるゝこと〻存じ申候さて私ども過ぐる夏の頃より御堂御販賣の三宅油を使用致し居候處まことに毛の爲めに宜しく我等殊によろこび居り申候御堂の御陰と深く御禮申上候それまではチェリオイル等を用ゐ居りしも香ひのみ強くさしたる效もなきに失望致し居りしに一たび村井先生の御話を承はり三宅油の效を知りて今まで斯くの如き油の我が國製に有るとも知らずしていたづらに舶來品にのみ效を求めしを耻ぢ申候手許の三宅油も今は殘りなく使い申候まゝ只今小爲替にて六拾錢御送り申候間御手數ながら何卒二合入御送り下され度御願申上候



發賣　間宮三宅堂　本舗

電話浪花六二〇　東京日本橋區人形町通蠣殼町二ノ十五　振替口座八七五一

皮膚の營養上容貌の美のため特に推薦する良劑

衛生美顏『シモン、クリスリン、クリーム』

Crème Simon

『シモン、クリーム』は近頃の製造品では有ません久しき以前より御使用と御評判を受けて居ので有り升

『シモン、クリーム』は一種の强壯劑と皮膚を柔くする藥劑とを配合して製造したる無比の良品で有ます



『シモン、クリーム』は皮膚を白くし且つ滑かにして表面がすべ〳〵となり又天鵞絨の如く艶麗ならしめ又快よき香氣を發しります毎日お化粧の時に御使用になれば何時もつや〳〵しき容貌を保れます

『シモン、クリーム』はヒゞアレ、日にヤケ、汗もの、ニキビ唇のわれ、霜やけ、赤ら顏、又は毒虫に刺された時に御塗りになれば僅に少時間で其効能が分ります又髯剃の後やお小供衆に塗抹しますとすべすべとして大變氣持がよく又美くしくもなります

本品は販路が益々擴張されるに從ひまして僞物が多く市場に出で居りますから御求めの際は「シモン、クリーム」「粉おしろい」石鹼共特に登錄商標を御確めの上御購求を願ひ升東京及大阪三越呉服店を始め各地洋品店化粧品店にて販賣致して居ります

登錄商標



日本代理店　横濱七十番　エー、ハイム商會

女（その一）

女(その三)

大日本淑女學會

會員募集

講義錄は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義錄の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雜誌を每號無料で進呈いたします

本會の講義錄

▲大判三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲每號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期每に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

◉詳しいは**規則書**は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）　大日本淑女學會

行事――四日節分、五日立春、初午、十一日紀元節、十五日釋迦涅槃會、二十五日頃より雛人形の市立あり。

家事――季節は一月と同じく冬籠の時季なれば家の仕事は割合に閑散なり、親戚、知友の訪問、書簡の整理反古しらべ、讀書等專ら此の閑散月を利用するをよしとす。

食品――野菜にありては、春菊、つくし、蕗の薹、鶯菜、又魚介類にては鱒、干鰈、いか、さけ、ゑび、たこ、白魚等。

日曜――二日、九日、十六日、二十三日。



婦人娛樂新論

文學士　三輪田元道

△娛樂の弊害はどうして起るか

娛樂といふものが人間に取つて必要なることは固より申すまでもありません。然るに歷史を見ますと或は極端に娛樂を禁止する考の學者もありました。これは人間の總ての病根は耳目鼻口の慾望より來るものが多いといふ考から、總ての慾望を禍の基と見たのであります。佛教では「六根を清淨にする」といふ事を申しますが、これも今日の所謂五感を災の本と見て之を清淨にするといふ教を立てたものであります。成程人類の禍は耳目鼻口等の慾より來る事は明かなる事實である。これを或度まで抑へて適當に制限するといふが人間の眞正の道であります。さりながら又極端に慾望を抑へることの不自然な事も明かであつて、要するに眞正の道は中道にあること疑ひない事であります。

娛樂問題も亦その通りで、要するに中道を得ればよいのである。娛樂その物は必要であつて、それは恰も飲食衣服の必要なる如く必要であります。ですから弊を受けぬやうにそれを玩べば宜し、その弊は娛樂その物

には無い。唯その物に附隨する情實から種々の弊が起つて來るのである。

△歌留多は果して惡媒介を爲すか

右の理由から幾何か問題になつてくるのは第一に歌留多であります。これは女學生のみならず一般の娯樂とされてをるが、新聞──殊に日本新聞などで見ると、これが大層惡い事の媒介をするといふので、頻りに其事實を摘發してあります。果して言ふ程であるか何うか。もし然りとすれば無論打棄てゝおく事の出來ない事柄でありますが、然し斷然此際皆止めて了ふ、否、國民から總て此遊びを忘却させて了ふといふは餘りなる極端論でその當を得て居らない。何人でも歌留多の遊戲自身が決して惡いとは言ふまい。唯それを實地に玩ぶ其の狀態がいけないといふのであります。然るを其の爲に歌留多の遊戲其物を禁ずるのは、所謂角を矯めて牛を殺すの譬の如く、目的以外のつまらない結果になるのである。されば歌留多は一家族のみ團欒する時とか、親戚の者のみを招く時とかは勿論の事、或は他人が交る塲合にしましても、父母その他相當の監督者が付き、適當な規律の下に行はれるならば決して惡くはない──否、優美で極く良い遊戲の一つであると信じます。

△歌留多遊びと心理

これについては先夜も或會合の席で話した事でありますが、歌留多は一つには注意力の養成を助け、又日本語學の修養の一端にもなり、のみならず多少文學趣味の養成にもなります。旁良い遊戲の一つに違ひありません。最も世間から非難されるは其の中に戀歌を含む事で、これは確かにさうでありますが、然しながら歌留多を取る人其者の上を觀れば、決して歌の內容を分解して考へては居りませんから、心理狀態からは惡い結果

は無いと思ひます。之を反對の側から申しますと、あの中の後鳥羽院や崇德上皇の御歌の如きは、我々臣民が之を讀むと誠にお氣の毒に堪へない歌である。「百敷や古き軒端のしのぶにも猶餘りある昔なりけり」「心にもあらで憂き世にながらへば戀しかるべき夜半の月かな」心にもあらで憂はしき世に存生へると云樣な事を一天萬乘の君がお歎きになり、又は古き軒端と悲しき心を御詠みになつて居るのを拜誦しては、我々は感涙に堪へぬ次第であります。けれども歌留多を取つてゐる人は然ういふ感じを起しはせぬ。と同時に又「物やおもふと人の問ふまで」があつても、これに對しても又何等の感じを起しはせぬのであります。要するに小倉百人一首は單に歌自身の解剖より批評せずに、玩ぶ人の精神狀態にどれだけの影響があるかを考へて見て判斷すべきであります。故に戀歌の多いといふ事が甚しき故障にはなりますまい。けれども愈々この遊戲を良いとするならば、さういふ歌は止めて適當な歌に代へるがよいでありませう。昔の歌ならば明倫和歌集にあるやうなのを用ひさへすれば異論はない。さすれば是は良い遊戲である。唯その遣り方如何といふ方法は、年長者たるものが十分に用意して、十分の監督を加へれば宜しいのであります。

△羽子板はいかに

又昔からある遊戲としては羽子板。これは運動の點から、婦人の皮膚を强健にし、筋肉をよく作用せるといふ利益があります。又これも注意力の養成を助け、又優美でもあり、良い遊戲の一つと言つてよい。けれどもこれにも近來非難が無いでもありません。つまり知合の令孃同士が突いてゐるなどはよいのであるが、町方の敎育なき者などになると、勝敗によつて顏に墨を付けるとか、羽子板で背を打つとか、見るに忍びぬ醜態を演じて居る。恁ういふ事からその遊戲其物が俗化されて了つて、比較的敎育ある社會の歡迎を受けぬやうになつて居ります。が、これも當事者の遣り方一つで品格が高まつて來るものでありますから、遊び其

物は矢張り良いものゝ一つであります。

△音樂は何が最もよきか

さて第三には音樂の趣味であります。これは殆ど婦人方の娛樂として異論のないものでありませう。音樂其物の人生に於ける價値は今更申すまでもありますまい。けれども是れも實際問題としては考ふべき事が無いではありません。まづ如何なる樂器が一番良いでありませうか。通俗には家庭的樂器として琴を用ひて居ります。けれども悲しい事には琴の譜はまだ善く造られて無いので、全くこれは指頭の熟練を中心にせねばならず、從つて悉く記憶に訴へねばなりません。人の前で琴を彈ずるだけになるには三年五年の稽古を積まねばならぬ。一朝病氣になつて中止するとか、家庭が忙しくなつて兩三年休むとかいふ事があると、もう全然忘れて了ふ。よし忘れずとも手が動かなくなつて了ふ。されば琴は嫁に行く迄の一時の樂しみに過ぎないといふ缺點がある。これも西洋樂器の如く譜を作つて早く覺えられるやうに敎授法の改良をしたら良いでありませう。

私の考で申すとピヤノが一番宜しい。月影の冴えし夜に琴の音の對照が面白い如くに、麗らかなる日の射し添ふ軒端にピヤノの音の漏るゝは面白き對照であります。否、琴よりもピヤノの音の方が、音樂としては理論上より申しても進步したものと言はれて居ります。音の佳し否しはそれの振動數に關係するといふ其の理論より割り出せば、ピヤノは最も進步したる樂器の一つであります。唯惜しい哉これは價が廉でない。二三百圓より千圓以上にも及びますから、今日の日本の經濟狀態からは、戶每にこれを据ゑ付けるは困難と申さねばなりますまい。さりながら國民經濟の膨脹して行くにつれて、追々それも困難を感じないやうになつて、將來ピヤノの音を廣く世間で耳にする事の出來るのは有望の事、頼もしい事と申してよいでありませう。

外にも樂器は勿論いろ／＼あります。まづ數ふべき

はヴァイオリン。これは彼の形が高尚でありますし、又携帯にも便で、之を彈ずる姿も佳いものでありますから、婦人方は其の詩的感情の上から多く之を迎へて居ります。けれども彼れは練習がなか〳〵困難である。のみならず彼の音が――言はゞ悲歌慷慨的の處が隨分あつて、幾分亡國的（と申しては些と極言に過ぎるかも知れませんが、どうも然ういふ趣）の處があります。琵琶なども然うで、どうも悲歌慷慨的、亡國的で、どうしても太平の音ではありません。次に三味線はと言ふと、あれは三味線其物はあれを彈く態様の上から最も衛生的のもの。姿勢を正しくする、といふよりも寧ろ胸をよく張つて、腕に力を入れて彈く點から、最も衛生的のものであります。唯醜業婦との因縁を斷ち難い處から、教育ある社會には廢れて居りますが、それは三味線を見れば直ぐ醜業婦を思ひ浮べるといふ聯想から價値を墜してゐるので、强ち三味線其物を排斥すべきものでもありますまい。けれども將來多く勢力を持ち得べきものでない事は言ふにも及ばぬでありませう。

△運動的の娯樂

次に婦人自身の爲に起すべきものは運動的の娯樂であります。これは奬勵する必要があると思ひます。その中の重なるものはテニスである。これは運動でもあり、同時に又興味ある娯樂であります。唯幾何か運動上に廣き空間を要するので、戸毎の遊戯としては一寸出來難いのであります。けれども後來公園の設備が漸漸出來て參るに從れて、國民一般にテニスを盛に玩ばしめ得る機會が來るに相違ありません。尤も今日の男子は公德を解しませんから、公園に婦人がテニスをして居るといふと、周圍に人山を築くでありませう。けれども將來は日本では婦人專用のテニス、コートを公園に設備する必要がある。これは市の當局者が考へねばならぬ問題であります。固より一朝一夕には出來ますまいが、然しテニス遊戯は婦人の良い娯樂の一つとして盛にするがよいと思ひます。

△天然の美

私が平生から持論として考へて居ることは、婦人が天然と交り天然と結び付いて、婦人自からの心を幾何か天然化し、言ひ換へれば美化することを力めねばならぬといふ事であります。人工の美よりも天然の美の方が高尚である。基督は野に咲く百合の花の一莖はソロモンの榮華の極みよりも猶美はしいと申してをります。誠に天然美は人工美の及ばざる所である。然るに今日の婦人を見ますと、人工美が非常に發展されて、殆ど總てこれに押領されて居る形勢であります。衣服から室内裝飾に至るまで成程非常の進歩でありますが、同時に又奢侈でもあります。衣服の模樣、肩掛の模樣から、下駄草履の末に至るまで人工美に意を凝すやうになつて居る。文明の上からは惡い事では無からうが、かくて天然美に、益遠ざかるは殘念な事であります。例へば昔の女學生の作文には、月見誘引の文とか花見誘引の文とかいふのが多くあつた。今日でも有ることは有りますが、實際月の澄み渡つたのに我を忘れて憧憬れて居る婦人が、果してあるでありませうか。妙なる花の香に恍惚として醉ふ女學生が果してあるでありませうか。月見花見の文には然ういふ美文名句を陳ねましても、實際は何の感じも起さぬ者の方が多い。これ天然に遠ざかり來れる一大事實でありませう。そこで私は婦人の娛樂として、前栽に菊を作るといふやうな、所謂園藝に心を用ひることが必要であると思ひます。又鉢栽をも愛玩することが必要であります。尤も鉢栽も此頃のやうに道樂になつて、一鉢に千金を投ずるといふ樣な奢侈的玩弄を致してはなりませんが、唯天然美を愛する上から、野にある草花の小さなのでも、これを手づから鉢に植ゑて机の上に飾る。かくして天然自然の鉢栽を愛するは甚だ宜しい事で必要と思ひます。

△生花は大に改善せざるべからず

右と同じ意味に於ける生花といふものは、昔からあつて今日も非常に行はれて居ります。これも娯樂の一として奬勵すべきものであります。さりながら是には改良すべき處がある。即ちいろ〳〵の流派――遠州とか池の坊とかいふ流派があつて、その流派の爲にお互に門戸を張るといふ風がある。それが爲に生花それ自身の德を身に受ける事が却つて出來ないやうな有樣であります。私はこの總ての流派から脱却して、何流を問はぬ一つの流儀があつて、生花の趣味を一般に普及させることを望むのであります。又生花について一つの惡い事は、之を敎へる人が妙で、團體敎授といふものが出來ない、否、爲ないことである。學校で一敎室へ五十人なりを集めて敎へるといふ事が出來ない、否、爲ない。何時までも秘傳的で、允可を與へるとか名前を付けるとか言つて、その度に幾何かの金錢を徴收する。これ生花の普及せぬ一因であります。これも改良させねばなりませんが、又生花それ自身も社會と共に進歩させねばなりません。從來のは多く床に飾る習はしでありましたから、正面から見れば宜しいが裏面から見れば形を成して居らぬ。處が今日の應接室は座敷の眞中に机を置きます。此上に置く生花は四方から見て美はしくなくてはなりません。これ社會と共に生花が進歩せねばならぬ運命に迫られてをるのであります。甚しきは最う西洋風の握み挿しも可なりと言はれてをります。從つて昔流の生花に滿足しては居られぬ勢に迫られるのである。

△社交上の娯樂

次に申したき事は、これは娯樂と言へぬかも知れませんが、人々が會合して過ぎ來し方を語り、或は行末の事をも相圖るといふ習慣の間に一つの娯樂が無ければならぬと思ひます。然るに婦人は、同窓會とか其他の婦人會とかに關係ある者は、一年に數度は此の機會に逢ひますが、一般の婦人は殆ど社會と隔絶して、アイソレートして、社會から受ける感情を味ふ機會が無い。これは不幸な事で、これが見聞智識も進ます、又

兎角悲しき運命に陷る所以であります。言ひ換へれば交際をする機會の無いのが缺點でありますから、更に之を多くする樣にせねばなりません。然しその交際の意味――私がいふ意味は家庭を中心にした交際であります。晩餐會に親戚の者を招いて四水八山の話をし合ふ。その時婦人が斡旋の勞を取つて來客に不快の感を起させぬやうにする。又その時に豫て習ひし料理の技術を應用し、或は室內の裝飾を思ひのまゝにやつて見る。かういふ內に娛樂といつてもよい樣な快感を發見することが出來るのであります。これは婦人の永久の娛樂の本を造るもの故、これも婦人に取つて一つの重要なものでありませう。

△郊外の趣味

これは男子でも然うでありますが、圍碁とか將棊とかいふ樣な、室內の、或意味の個人的の娛樂よりも、野外を散歩するやうな慣習を作り、野外の浩然の氣を吸ふ機會を作らねばならぬと思ひます。雲井遙かに啼く雲雀の聲を聽き、或は花間に飜る蝴蝶の舞を觀るは誠に無上の快樂であります。これは近來大分發達しては參りましたが、未だ婦人自身を樂しませる一の習慣にはなつて居りません。この趣味は最とも婦人方が廣く味はつて戴きたいと思ひます。唯茲に一つ注意すべきは、妙齡の婦人が人里離れた野外を逍遙するといふのは危險であつて、今日の社會狀態では何うしても保護を要するのであります。されば一家の父たり母たる者が、最愛の孃を連れて、日曜その他の閑日月に、その機會を利用して天然の樂みを孃達に得させるが最も愉快といふやうになつてゆく事が必要であります。一つの實例を申しませうならば、アメリカの大統領ルーズベルトは、所謂忙中の閑を得て山野を跋涉し狩をするのが樂みで、これが生命の爲の最大の慰藉を與へると聞いて居ります。さてその際に同令孃が、時として父の供をして此の狩の樂みを共にする。これが娛樂の一つであると申します。果して然らば日本人の孃も、父と共に野外を散歩する可なり、父と共に鞭を揚げて

駒を走らする可なりであると思ひます。然して新鮮なる空氣を吸ひ、天地間の美に沐浴する習慣が、非常に娯樂として面白く且つ益ある事と信じます。

△讀書の樂

最後に申すべきは書を讀んで古人に親むの樂みであります。日本婦人には從來讀書の習慣が付いて居りません。言ひ換へれば讀書力が日本婦人には非常に弱いのであります。今後は婦人でも宗敎の本も讀み、哲學の本も讀み、坐ながら古賢人に親しむといふ風になりましたならば、婦人の品位も高まり、婦人の生活に一種特別な新らしき生命を加ふる事が出來ると信じます。娯樂と言へるかどうか知りませんが、婦人として人生を味ひ、人生についての快感を惹き起すといふ上から、切に讀書趣味の普及を希望するのであります。（芙蓉生記）





新聞の新聞

大町桂月

昨年の暮、新聞紙は、僅に數日を隔てゝ、二人の女學生に關する、悲酸なる出來事を報道せり。その一は、一女學生が世を厭うて、入水して死せること也。他の一は、一女學生が戀の爲めに非命に死したること也。この二つの出來事とも、女子にありては、對岸の火災視する能はざる所なるべく、女子敎育に注意する人も、普通の三面種として輕々に看過する能はざる所なるべし。茲に、余の思ふ所をのべて、世に問ふ所あらむとす。

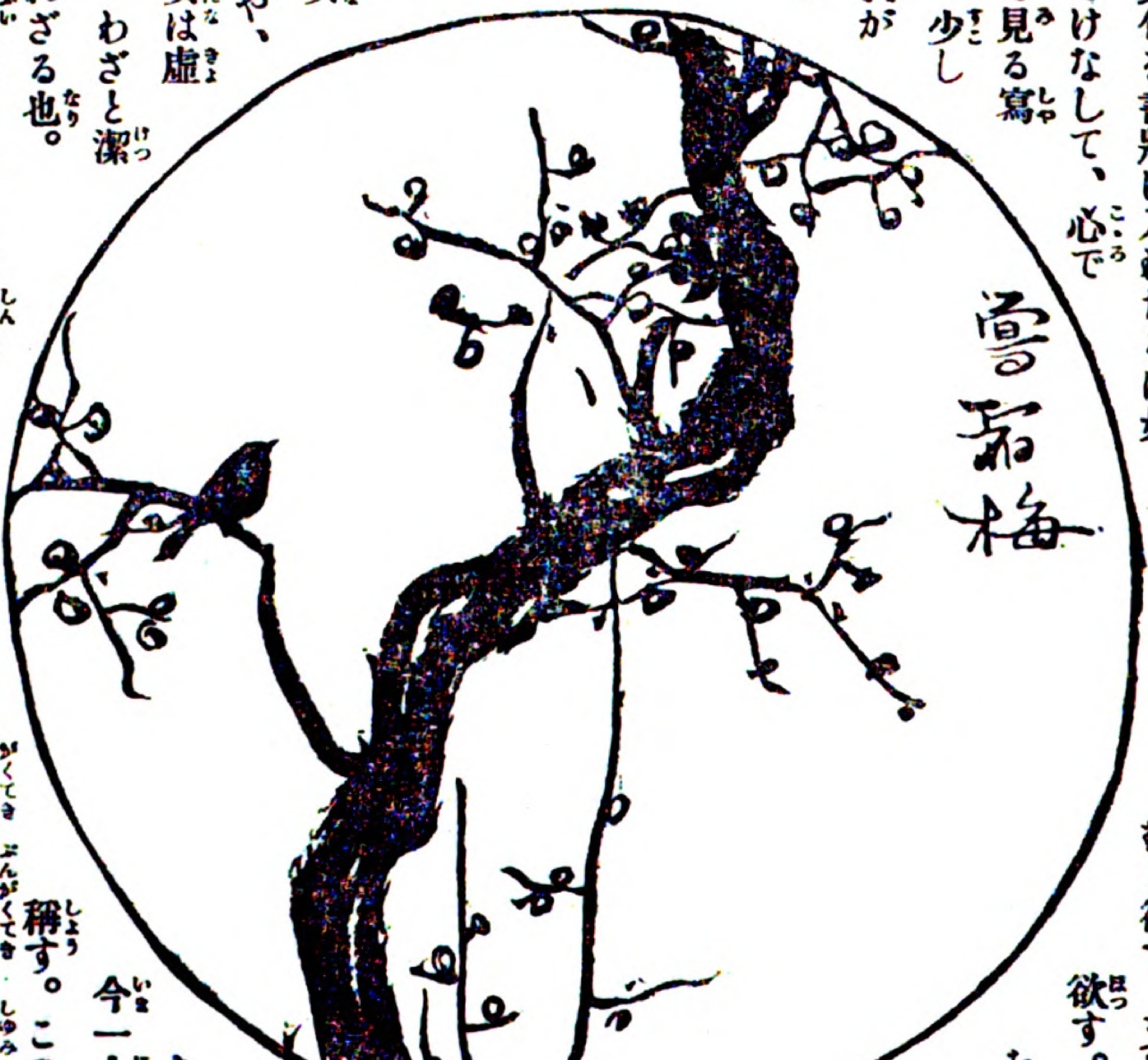
元來、新聞は出來事を出來事として報道す。出來事の內面の事情をきはむることは、疎也。或は之を誤つて傳ふること多し。又うはさを噂として報道す、事實は然らざることも少なからず。古人も、書を讀で悉く信ずれば、書なきに如かずと云へり。新聞を讀んで悉く信ずれば、恐らくは、新聞に誤らるべし。余は茲に新聞の報ずる所に據りて、內面の事情を想像す。その想像の當れるや否や、これ余が世に問ひて、讀者の敎を仰がむと欲する所也。

二人の女學生とも、醫者の家に生れたることが、不思議にも相一致す。わざと其姓名を記せず。本意もと覆れる前車を弔うて及ばず、せめて後車が其轍を履まざらむことを思ふにあれば也。まづ戀に死したる女の方より言はむに、便宜上、假りに甲女と稱す。名古屋あたりの產也。上京して醫學校に入る。學問はよく出來たり。はじめ寄宿舍にありしが、出でゝ知人の家に寓す。更に去りて、あかの他人の家に寓す。その家の親戚に一人の靑年あり。甲女に戀慕す。甲女從はず。しふねく言ひよる。再び寄宿舍に入らむとす。靑年來りて、其女を銃殺し、自らも同時に死す。書置あり。二人の名を署すれど、甲女のは自筆にあらず。甲女が

親戚の女に宛てたる書簡には、青年に言ひよられて、いやでたまらぬ由を記せり。これだけの事實にて判斷すれば、青年は失戀のあまりに、女を殺して自からも死ぬる氣になり、女は思ひがけずも、無理情死の災難にあひたるやう也。賤妓には、往々無理情死あり。普通の女學生にして、なほかゝる災難あるかと思へば、世上の女子は、さぞや心細かるべし。然れども安心せよ、人は鬼にはあらざる也。非命に死するは、非命に死するだけの缺點を有し居る也。この甲女が、寄宿舍を出でゝ知人の家に寓し、更に他人家に移るといふ事實によりて判ずるも、この女は、理性が勝ちて、溫情がなかるべし。うはべは、おとなしきかも知れざるが、腹は冷かにして、毫も物のあはれといふ事を知らず、主我的にして、氣隨我儘なるべし。嫁とならば、姑と衝突すべし。舅とならば、嫁をいじめるべし。男の申込を拒むにしても、女の一存では決せられず、貴家より相當の媒人を以て父母に申込まれたしと、おとなしく出掛くるれば、如何なる惡人とても、猥りに無理情死を思ひ立つものにあらず。如何なる善人とても、餘りに強く辱めらるれば、むかッと腹立ちて、常識を逸することなしとせず。可愛さ餘つて、にくさが百倍といふことあり。この女の拒み方が、同情なき氣質より出でゝ、餘りに男を侮辱したるなるべし。この女に同情をよせて、善き方に解釋するも、この女は、非命に死するだけの缺點を有し居る也。

翻つて、青年の方に、同情をよせて見むか。この女の名古屋の生れといふことが、既に世上一般の耳には、快くは、ひゞかざる也。名古屋女とても、十中三四は、然らざるべし。されど、十中六七は、名古屋女と云へば、浮薄にして、女の操の正しからぬものと、世人に思はれ居る也。一二度、情交ありたるかも分からず。情交なきも、口の上にて、何かうれしがらせる文句を言ひたるかも知れず。然るに、急に男がいやになりて、之を避けむとしたるより、この薄情女めと怒りしものなるかも知れず。普通、男が女を殺す塲合は、百中九十八九までは、これ也。

されば、男を嫌ふ文句を書狀に入れたるは如何にといふに、『かげでけなして、心でほめて、人目しのんで見る寫眞』といふ俗謠あり。少し考のある女なら、我がほれて居る人を、却つて人前でけなすもの也。男にいやになりたらば、なほ更の事也。我身の潔白をよそほふ爲めに、かく男をけなしたるかも知れざる也。書置に女の自署せざるは、よしや、合意の上なりとも、女は虚榮心のつよきもの故、わざと潔白をよそほふかも知れざる也。



余は、この情死の合意にあらざるを信せむと欲す。又情交なかりしことを信せむと欲す。口の上にて、何か殺し文句を言ひたるや、否やは、なほ疑問也。それも無かりしとするも、この女は、誠實貞婉なる女性とは思はざる也。無理情死は、氣の毒千萬也。されど、無理情死を招くだけの缺點は、この女が先天的に有し居りし也。世上の女子よろしく、これに鑑みて、誠實貞婉ならむことを期すきべき也。

今一人の女學生は、假りに乙女と稱す。この女も、學問は出來たり。哲學的、文學的の趣味を少し解し居りしと思はる。

甲女のやうには冷かならず。されど、女の常として、餘りに自愛の念がつよすぎたり。すべて、男でも、女でも、厭世の念を起すものは、自愛の念のつよすぐるもの也。よく〳〵修養せざれば、獻身犠牲の精神は得られざるもの也。高等女學校を卒業して後、學友は嫁したり。その結果は、よからず。我も亦斯る運命に逢ふかと、心ぼそくなり、嫁入することがいやになりたり、世の中がいやになりたり、父母婚をすゝむれども、肯んせず。これ、さも有りさうな事也。この女のみならず、學問ありて、物質以上の趣を解する女は、多くは、かゝる考を起すべし。なまじッかの學問すれば、女子の身を誤るとは、即ちこゝの事也。學問をやりぬけば、かゝる憂なし。學問せずとも、苦勞して、世の中の酸いも、甘いも、わかつてくれば、かゝる憂なし。乙女は、苦勞といふことはせざる人也。甲女も同じ。甲女は腹が冷かなるだけに元氣也。才智學問藝能、ひと通りは出來て、間に合ふ女也。されど、尊げは無き女也。乙女は、腹に温みがあるだけに、氣弱し。この女の方が、中等以上の婦人となつても、尊げがあるべし。唯僅に二三の學友の例を見て、人の妻たるを厭ふは、その人にとりては、さもあるべけれど、苦勞知らぬ身のあまりにせまき了簡也。かゝる人は、よしや一生獨身で通しても、心は絶えず寂しかるべし。

乙女は、世の無常をさとりて、學問を以て身を立てむとす。無理に上京して、さる官立學校に入らむとせしが、落第せり。其奮發心は、よみすべし。落第して、さぞや、失望せしならむと思ひやらる。然るに、茲に一道の光明、この女の身に照らしかゝれり。即ちもと父の藥局にありし男、今は相當の醫師になり、良媒ありて、婚禮の儀とゝなふ。『澁かろか知らねど柿の初ちぎり』この女の胸は、定めて躍りしなるべし。然るに、好事魔多し。その男には、許嫁ありて、男の方の親より故障出でゝ、事破れたり。この時の女の失望落膽は、恐らくは、生來始めてうけたる所なるべし。實に氣の毒千萬也。かく失望に失望をかさね。終に自殺して、女の藤村操といはるゝこそ憐れなれ。

乙女の事も、新聞の報ずる所によりて、想像するのみにて、くはしきことは分らず。思ふに、温みのある女也。力ある男ありて、之を愛すれば、心中に光明を生じて、夫をなつかしがり、誠實的、貞婉的の女性として、世に立つを得べかりし也。この女を誤りたるは、讀書也。讀書などせずに、早く宗教などに安心を得るやうに力むべかりし也。さすれば、厭世の念もうすらぎ、落膽すべき事に出逢ひても、さまで落膽せざるべき也。

斯く云へば、乙女にのみ同情を寄せて、甲女に同情を寄せざるやうに聞ゆれど、われ青年の頃より、自家の主義、趣味などは、別にかたく持し居りて、妄りに之を人に推さず。人に對しては、妄りに好き嫌ひをせず。年をとるにつれ、世故を閲するにつれて、わが趣味は、ます〳〵堅し。一方の人に對する方は、凡夫の身、一視同仁とまでは行かずとも、心ひそかに之を期す。乙女を愛して、甲女を憎むとまでに狭隘ならざる也。心學者などのよく言ふ事なれど、花は紅に、柳は緑り也。乙女は乙女でよく、甲女は甲女でよし。如何なる人とても、同情の眼を以て見れば、必ず長所あり。その長所は、一方に於て、必ず短所となる。甲女は働く人也、必ず一家がうまく切りまはさるべし。乙女は德の人也、品もよき婦人となるべし。世上乙女式の女も少なからず、願くは、早く宗教などに安心を得よ。甲女式の女は頗る多し。願くは、少しく物のあはれといふことを解せよ。われ茲に二女を論ずるは、二女を論ずるに非ず。世上同型の女を戒めむとする也。われ豈に區々婦女子の死屍を鞭つものならむや。

⊙冷たい辨當　寒中冷たくなつた辨當を食つたとて、左まで衞生上害になることはないが、世間の人が今少し辨當に就て心を用ゐ、辨當なるものは單に腹を滿たすばかりでない事、其滋養の多少に依つて身體の發育に多大の影響を及ぼす事を考へて貰ひ度い。


畫

本品ハ宮内省御買上ノ光榮ヲ辱ス

美顔料

日ノ出クリーム

本品の優秀なる既に愛用各位の御賞賛により明かにす殊に寒氣に際しヒビ、シモヤケ等に特効ある等一度御使用の上其功の顯著なるを知られよ

小廿五錢　大一圓　試用十五錢

化粧下　日ノ出水　十五錢　三十五錢

日ノ出クリーム毛髪用　小廿五錢　大壹圓　試用十五錢

色白ク美身剤　ケーバ洗粉　袋と瓶の貮種あり

舶來化粧品輸入商　日ノ出商會

東京日本橋區村松町

電話浪花三八二一番
振替貯金七〇五七番

信用有名なる化粧品藥店ニ必ス販賣ス（僞品注意）

此券切取（切取線）御注文の方は
一割引
女學世界

最上醬油元祖

内外國金銀賞牌ヲ有ス

宮内省御用達

開業二百六十四年

釀造元

千葉縣銚子町

濱口合名會社

女（その一）

婦人の讀むべき新聞

報道迅速

二六新聞

趣味豊富

家庭で見る可き新聞



●二六新聞は今二月一日を以て空前の大發展を試み、東洋唯一の大新聞たる新面目を備へて讀者に見ゆると同時に、婦人諸姉の爲には特に家庭のページを設けて婦人及家庭に清新の讀物を供す。

●二六新聞家庭のページは婦人社會の耳目を以て任ずるものなれば婦人界の時事を報道し、家政と處世とに必要なる新智識を供給し、兼て家庭の趣味を發揮することに努む、故に婦人、家庭の新聞紙として絶好のものなり

●二六新聞家庭のページは日々に新事物を讀者の眼前に齎すが故月刊又は週刊の婦人雜誌よりも報道機敏にして記事新鮮なり

家庭部と讀者

●二六新聞社の家庭部は讀者の便利を圖りて「婦人の顧問」「女子職業案内」「求婚案内」「買物案内」「學界案内」等を開設せり。

▲日本一の大福引 女小兒にも誰にも出來る『繪搜し』と『字搜し』

（賞品）○一等金五百圓其外二百圓、百圓、五十圓等あり

東京神田 《大割引一ヶ月金貳拾五錢》 二六新聞社

女（わの二）

●圖書目錄

御入用の方は往復葉書にて御申越次第直ちに送呈仕候

東京日本橋區本町 博文館

私立中等夜學校

●本校は晝間業務ある子弟に夜間正則的中等教育を施すのが目的です●卒業生は中學檢定に應ずる實力あり現に商船學校通信官吏養成所に入學した者がある

●本校は文部大臣無認定但それ以上の理想と抱負とあり校則は郵劵三錢にて月刊雜誌『夜』と特に併せ贈呈す

校長江原素六 副校長主監水津謙介 教頭高橋龍雄

東京神田永富町六龍閑橋通私立認可 中等夜學校

同 錦町一丁目九番地 同校事務所

エハガキ

出版製造 東京小石川 日本葉書會

發賣 東京本町 博文館

私立共立齒科醫學校

○本校は齒科醫師たらむとする子弟を養成す ▲授業は晝夜に分ち晝間は正則的に夜間は文部省開業受試驗者のため速成教授をなす ▲生徒の實習研究のためには附屬醫院ありて一般患者を診療す ▲規則書入用者郵劵二錢を要す ▲入學資格中學二年終了又は同等の學力ある者

東京神田雉子町三十四番地 私立認可 共立齒科醫學校

同 附屬醫院

笹野豊美氏著

子供のしつけ方

装釘頗美 全一冊 定價金八十錢 郵税金八

本書は家庭に於ける子供の躾方に就て、**母樣**の惡口と祖父母樣やお父樣の惡口を遠慮會釋もなく書き立て何の氣も付かずに子供を育てゝ居た讀者の顏から火を出させる樣な事柄を實驗から割出し實際的に書き下し子供が生れてから七八歲迄の間に起る**惡習惡癖**は細大漏さず拾ひ出し各惡習の起る順序や直す方法を輕妙の筆で面白可笑く最も平易に丁寧に**家庭**小說的に書き述べ何人に向ても一讀卷を措く事を得せしめぬ特に本書の骨髓たる育兒憲法十五ヶ條は現在子供の躾方に苦心せらるゝお母樣や近き將來のお母樣たる御孃樣の良師友となるや疑ない學校幼稚園は勿論家庭に於ける絕好の讀物である。

發兌 東京銀座二丁目九 服部書店

賣捌 東京日本橋區通一 大倉書店

東京神田 東京堂

女(わの三)

理學士 山崎直方君校閲

東京府立第三中學校教諭

石渡延世君著

地理統計要覽

抑も邦人は數の觀念に乏しくして之を歐人に比すれば統計に對する興味を缺くこと多く從て思想甚だ綿密ならざるの憾あり是れ國運益發展して事物愈紛糾を極むべき戰後の國民教育上閑却すべからざる問題なり是を以て普通教育の地理科に於ては宜しく巧に生徒をして統計に對する興味を喚起せしめ綿密着實なる志想を涵養せざるべからず本書は此要求に應じて出でたるものにして小中學の教師の教授上の參考たるのみならず生徒各自も一本を供へ地理統計の智識を收得せられんことを望む

全一冊洋裝三六判
總クロース金文字入
紙數二百四十六頁
定價金五十八錢
郵稅六錢

東京本町 博文館

●圖書陳列所

●電車ならば本町にて下車
●午前八時より午後五時迄

東京本町 博文館

●小兒五かん驚風●蟲おさへ

登錄商標 八

本方 小兒蟲一切妙藥 奇應丸

定價 金五錢 金拾錢 金廿錢 (遠國送料金貳錢)

東京市京橋區銀座三丁目
發賣本舖 八 松澤商店
賣捌は全國諸々藥舖賣藥店に特約あり(電新五三四)

日本全國有名 當世百美人 寫眞

寫眞版壹百枚壹組箱入 定價五拾錢 送料四錢

本品は日本全國の有名なる美婦人にして令孃と云はず藝妓と云はず有とあらゆる美人中より選拔きの美々麗々たる當世婦人の寫眞なり何人も某地には如何なる美人あるか如何なる風俗なるか且其流行の如何は座ながら顏姿を見るも趣味あり

●專賣元 大阪松屋町通平野町
振替口座壹壹五八壹 文玉堂書店

女(わの四)

紀元節儀式給與品に好適

◉生徒への給與品は飲食品の如き一時的のものより永く愛讀し得べき書籍を可とす

都會生活

全一冊

洋裝菊判紙數二百八頁
石版畫●寫眞版十三頁挿入
正價廿錢郵税六錢

目次概要

▲都鄙生活上の分限
▲都市の膨脹力（人口家屋の膨脹並に物價の騰貴）
▲歐米諸國の都會生活
▲月給生活の眞意義
▲都會生活の多難なる事情
▲當世紳士の生活の裏面
▲男女學生裏面觀察
▲地方の女學生と東京の學生（兩者の生活並に理想）
▲雜貨店の繁昌と東京の男女學生
▲東京市中の新部落
▲月給生活の富の程度
▲學生墮落の徑路
▲男子の保護を受る婦人の費用
▲都鄙婦人會の發達
▲都會生活の安心法

少女と立志

全一冊洋裝菊判紙數百廿頁
石版畫●寫眞版九頁挿入
正價拾錢郵税四錢

◉小女お伽芝居

これは、巖谷小波山人得意の新案になッたもので、少女の讀みものとしても、また學校のお遊びとしても、新春第一の面白いものです。

主なる記事

▲勉學の方法
▲少女の職業
▲入學試驗
▲英語の學校
▲女醫と看護婦
▲諸學校入學手續
▲少女と技藝
▲都の女學校
▲花子の入學
▲女子判任官
▲商家の少女
▲少女の世界
▲道子の立志
▲學校顧問
▲少女と音樂
▲少女獨學の栞

◉敬慕すべき婦人

昔の婦人二名、今の婦人二名懸賞法を以て募集した結果を發表してあります尚詳しき傳記が載せてあります

◉取纏め御注文の向は相當割引可仕候

（わの五）

發兌元 東京日本橋本町三丁目 振替貯金第二百四十番 博文館

九（わの八）

村井弦齋著

大增補大訂正の爲め久しく品切の處新版出來

増補訂正 台所重寶記

定價金壹圓

郵税 内地金拾錢 臺灣清韓金卅錢

二月十五日限り特價金八十錢

村井弦齋著

増補注釋 食道樂

春の巻
夏の巻
秋の巻
冬の巻

合本 定價金貳圓
郵税 内地十錢 臺灣清韓卅五錢

増補注釋 食道樂續編

春の巻
夏の巻
秋の巻
冬の巻

四冊完成 各冊定價金八十錢
郵税 内地十錢 臺灣清韓卅錢

發行所 東京市麹町區有樂町 報知社出版部 振替口座七三九番

發賣所 東京市銀座通新橋際 新橋堂書店 振替口座二百番



娘の美點は舊式にあり

男爵夫人　佐野喜勢子

將校婦人會は總裁に有栖川妃殿下を戴き役員には大山元帥伊東元帥寺内大將東郷大將の各夫人を始め、歷々たる將校の夫人が連名されて居られます、陸軍中將佐野男爵夫人も又會の一人で厶いまして和洋折衷の家庭を作られつゝある方で厶います、夫人は島地獸醫師の開かれた女子文藝學會の出身で却々確かりしたお方で厶いますお宅は駒込曙町交際の廣いお方ですから、客來も繁多いやうでしたが、如才なく日本風の質素な應接室に通されまして、軈て次のお談が厶いました。(婦人記者)

△娘の學問の程度

私共の考へますには婦人の學問は、そんなに深くなくても宜からうと存じます、先づ一通りの普通學が濟みましたら、努めて家事の實際を見習ひ、家庭に於ける父母の教訓を聽いて、嫁して後、如何な境遇に臨んでも、毫も心を動さぬやう、品格を損はぬやう、そして夫に對し、舅姑に對し、子供に對し、召使に對し、賓客に對し、何れも、それ相應に親切を盡し、家庭をして何時も和氣靄々たらしむるやう、平素より心掛けなくてはなるまいと存じます、家を修めて行くことは小事に似て却々の大事でございます。婦人にとつてこれが一番の大任だらうと存じます。私共も心だけはさうありたいと存じますものゝ理想は容易に實行されませんので毫も滿足な心持にならないので困ります。

殿方でも同樣でせうが、婦人に於きましては殊に學校教育よりは家庭教育が大事でございます。學校では幾程教師の方が心を籠めて教へましても、若し家庭

で之を冷かすやうでは何の役にも立ちませぬ。御存じの通り、學校は大勢のことですから、個人の細かい處ろまで逐一指導することは出來ませぬ。まして婦人の大事な家庭の雜事、夫に仕へる道、舅姑に仕へる道などを敎へ込むことはむづかしいだらうと思ひます。成ほど學校丈で、讀み書きは出來ませう。頭は高尙になりませう。理想は高くなるでせう、技藝は備はるでせうが、さて婦人としての價値はどうでせうか、私はこれが疑はしくおもひます。

△娘に家の實際を敎へよ

實際の家事を敎ふるには、母親が自ら手足を動かして、萬事を取扱ひ、自然と娘達の見傚ふやうにするのが第一でございますが、啻に之のみでは十分とは申されますまい。是非とも、娘に對し手厚く敎訓を施さなくてはなりませぬ。即ち婦人としての道で厶います。これは、模範となる古人の言葉や行狀を談し聞かせまして娘の心に動かすことの出來ぬ痕跡を與ふるのであります。

△娘の讀物は何

娘の讀物と申しますれば、私は傳記類が一番よいと存じます。近頃の小說類は種類にもよりますが、戀愛などを細かく描いたものは、害が多くして利益は全くなからうと存じます。新聞なども、その續き物や、三面記事には如何はしいものがございますから、餘程注意しなくてはなりませぬ雜誌も一時惡い事がはやりましたが只今いづれもよろしくなりました。女學世界などは實に趣味あり利益ある記事が澤山載つて居る婦人の讀物としては實に立派なものです、又雜誌は娛樂的の性質を有つて居るものでせうが、幼年の者や、少年の者の見る雜誌は、是非共敎育的分子が含まれて居らねばならぬと考へます。

△私の希望するお嫁

どうも女學校卒業丈のお嫁さんは、良妻賢母の資格

がないやうに思はれます。讀み書きは出來ても、家事の實際が暗いからであります。ですから少し氣の利いた男子は、御本人でも親御でも女學校の教育だけ受けた婦人は嫌はれるやうです。どうしても婦人は、その家庭の教育の如何によつて、お嫁の口も定るのが多いやうでございます。私共にしても、息子にお嫁が欲しいと申しましても、學問だけ出來る。技藝だけ出來るといふだけの者は貰ひたくない。その家庭の清く美しくして、家事の實際に明い、婦人の道を盡す者を欲しいと思ひます。世には私共のやうな考へを持つてゐる方が多からうと存じます。



△西洋風と日本風

只今の風潮では結婚の仕方も西洋風が好い、交際の仕方も西洋風が好いといふ風ですが、國が違ひますから、竹に木を接ぐやうな致し方では、害こそあれ益はございません。西洋は數百年の習慣であゝいふ風な風俗があるでせうけれども、日本人はさうは參りませぬ。どうして日本固有の美を破つてよい事がありませう。西洋は親子が別居だから、

日本でも、それが良からうとはどうも聞えませぬ。西洋はなべて經濟が豊かですから自然さういふ風になつたでせう。日本では却々さうは參りませぬ。又西洋では獨身生活がはやる、これはかの國の女子が徒に男子と競爭せんとして種々なる學術技藝を習ふて、さて卒業の曉に至り、理想の夫を求むるのですから、却々見當らないのです。その中に婚期を逸するといふ不始末になるのであります。だから晩婚も獨身も、萬已むを得ないより生じたもので、決して希望などすべきものではございますん。これ正しく前車の覆るを見て後車の戒めとせねばならぬ事でせう。

△西洋の良い所

は道德的の點でなくして、經濟的の點に在らうと存じます。西洋では、上流社會の夫人方も、毎日手籠を提げて、買物に出掛けるさうであります。是等は中流以上の日本人より見れば實に驚くべき風習です。日本では、少し地位が好くなると、手籠どころではない一人歩きも致しませぬ。只賣りに來る者だけ買ひますから、到底思ふやうな品物は買へません。この樣な所は是非西洋に習ひたいものであります。つまり日本固有の美風を固持しつゝ、西洋の良風を加味したら、良からうと存じます。

△家庭の苦心

家庭のことを十分にしやうと思ひますれば、却々苦心で厶います。夫にも舅姑にも、子供にも、召使にも賓客にも、其他經濟上からも、衞生上からも、拔目なく仕やうと思ふには、容易な事ではございません。況して家道が逆境に居りましては、一通りのことではございません。いつぞや黒木大將夫人の苦心談が出ましたが、家庭の苦心は、黒木樣に限らず、その良人たる方が生死の間に出入して、初めてその地位を得られたやうに、妻たる人も、目立たぬ所に、大なる苦心を致して來たので厶います。今の女學生諸君は、舅姑のない、さうして財産のある、名譽ある夫に嫁ぎたいと希

望されるのでありませうけれども、何處に行つてもそんな樂な所はありません。希望の多き程、苦心も多いのでせう。私共も今日では、やゝ安樂に暮してゐます者の幾度となく、苦心慘憺の境を經て來たのでございます。

慧敏なる子供は遂に育たず

鶴原誠子

韓國統監府總務長官鶴原定吉氏の夫人を麻布區廣尾の邸に訪問して左の家庭談を伺ひました。（婦人記者）

△嫁したる當時

私が鶴原家へ嫁いだ始め五六年の間は、家政上やら子供の世話やらで隨分骨も折れましたが、別に內助談など名聞がましいことをお話するのはいやですから、其代り子女の躾方に就ての經驗談をおはなし致ませう



明治十六年に鶴原が大學を卒業してから私共夫婦は東京へ參り、暫く栗野（大使）さんのお宅に居り、其後赤阪の八百勘の長屋を借りて始めて世帶を持ちました。當時良人は書生上り、私は世間見ずの田舍者といふわけで、世帶の事は一向知りませんでしたが、それでも

まア何うやら恁うやら遣繰つて、格別他樣の厄介にもなりませんでした。何分にも主人は當時腰辨當の身分で、月給二十圓と云ふ暮しでしたが、其處へ長男が出來ました。其後夫が佛蘭西へ留學を命せられたので、歸朝するまでの間は隨分苦しい思ひを致しました。

＊　＊　＊　＊　＊

私は六人の子供の中、長男か亡くなつて、今では女子が四人、男兒が一人あります。長女は十八歳で大阪梅花女學校の出身、次が十六歳、これは只今青山女學院教師さんのお宅へ預けて實習させて居ります。本來なら主人と一緒に一家引纏めてとも思ふのですが、彼方では子供の教育機關がどうも不充分ですから、止むを得ず當分此方に居ることに定めました。で子供のしつけにはあまり干渉致しません。と申すのは亡くなつた長男の養育に大失敗致したのに、未だ充分發育しないのに幼兒の中はあまり智育の必要は無いと感じたからであります。

△お世辭が嬉しさに

其失敗と申すのは、明治二十一年に主人が佛國から歸つて間もなく天津の領事になりましたので、親子三人任地に參つたのですが、當時四歳の長男を何でも怜悧に育てねばならぬと思ひまして、まだ乳も離さぬ中から片假名や數字などを教へますと子供は悧發な質と見えて物覺えがよく、人樣からは珍らしい怜悧な子だとお世辭にも言はれましたのがつい嬉しさに、教えずともの事迄言つて聞かせるといふ風でしたから、天津に駐在中支那語もやれば英語もやる、それがまた面白さに主人も私もいゝ氣になつて種々六ケ敷いことを教えたので厶います。

子供の記憶に就て、一例を申上げると、ある夜廣いお庭の向ふの大木の葉を取つて來いと主人が命じますと、頑是ない身の足元も媥よ〳〵と氣丈にも暗を辿つて一人で其葉を取つて來ました。誠に氣質のしつかりした子で、我慢も强ければ物覺えもようございました昔の諺に逃がした魚は大きいと申しますが、私共は決して逃した魚に比較して居りません。然かも初て幼

兒を育てるに恁んな理想を持つのは大きなあやまりだらうと存じます。つまり私共の心得違ひであつたと云ふ事が解りました。

△生きた玩弄物

親馬鹿とはよくいふたもので、今から考へますと小供を育てるといふよりも何だか生きた玩弄物でも扱ふやうな工合で、庭先に小馬を放つてそれに乘せて走らせて見る、落ちる、又乘せる、といふ樣なもので、唯もう可愛いと計り、其上ませた智識を注入んだものですから、自然氣位が高うなつて、他樣から領事の坊ちやん〳〵と囃し立てられると、ついいい氣になつて威張り出す、是れでは天賦の才子も仕舞には馬鹿になるかも知らぬと案じてゐる矢先、主人が上海の領事に轉任することゝなつたので、それを好い機會に、小供を國元で育てやうと、六歳になつ



た伜を連れて歸國致しました。
　當時主人は毎朝冷水浴を致して居りましたので、長男にもそれを行らせてゐました。天津は寒い處で、朝夕は大人でさへ堪え難いのに、まだ骨身の固まらぬ子供に餘りきつからうと、最初止めても見ましたが、イヤ人間はどうしても身體を鍛へなければならぬと主人の言葉に從ひまして、自分から進んで着物を脱ぐといふ有樣で、萬事大人と同じやうな無理を致しましたが五つや六つの子供に冷水浴はちと大業でしたかと思ひます。

△一切放任主義

　冷水浴の結果かどうかは知れませんが、歸國してから間も無くヂブテリアに罹つて、當今なら左程困難な病氣でもありますまいのに、まだ醫術の十分進まない其頃ですから、到頭手當が屆かないで亡くなりましたどうもいまだに私共の手落かとおもつて殘念でたまりません。

　長男の養育に斯樣な失敗を致した私共夫婦は其後全く方針を變へまして、身體が相當に發育する迄は成るべく干渉を仕ないで、どんな惡戲をしやうが暴れやうが、又智慧が遲からうが、そんな事は一切放任かして置きます。どうも其方が却て結果が良いやうに思はれます。其代り子女には贅澤な癖をつけさせないやうに又依賴心を起させないやうに獨立の精神を注込のと、體育を怠らぬのとの此の三ツだけは嚴重に守つて居ります。そこで世間の方から、貴女の宅には四人の孃さんがおありだから嘸ぞ着物や何かに澤山の費用がかゝるだらうと申されますが、なるほど立派なものを拵えたら隨分かゝりませうが、私共ではそんなのは一切用ゐさせぬから被服費はそんなにかゝりません。
　晴着は別として、娘共は何れも木綿一式の筒袖と限り、それに帶は細長い巻帶にして、家に居る時でもゑび茶の袴をはかせて居ります。と申すのは第一幅廣の大きな帶を結ぶのは發達しやうとする小娘の身體に害があらうと存じますし、又袴は風儀上から考へたので

ムいます。

女子供の學校の送迎へは幼稚園の時代から、最初の二三回は女中をつけて行りましたが、道筋を覺えてからは一度もそれを致しません。ところが多少身分のある家の娘達になると、大抵學校の往復に車夫をやるとか女中を煩はすとかなさるのですが、こは身分を衒ふ上に子女の獨立心を失くする事と考へます。



△姑小姑に應ずる準備

毎日學校から歸つてまいりますと、娘共には襷がけで煮炊もさせ、拭掃除から針仕事等家庭に關する一切の雑務は何でも行らせるのです。私共の考へでは娘達が嫁入をしたところでよしや其夫は學問もあり社會の事情にも通じて居も其義母となる人は矢張女大學的の臭味を脱しないでは家庭の調和が圓滿に參りません。もし今の娘達が母となつた他日ならばイザ知らず、今日にあつては學問の教養もまづ姑小姑に應ずるだけの準備をさせねばならぬと思ひます。而して自分

で家庭一切の雜務を行つて見ると自然餘計な失費を省いて人を使ふにも思遣りが深いわけです。

△丸髷を結ぶわけ

私は偶々頭髪を夜會結びにしたり佛蘭西巻にしたりする事もありますが、平生は大抵丸髷と定めて居るのです、或時御懇意の奥様が仰有るには、貴女の丸髷は甚だ面白くないから思切つて束髪になさい、第一それは舊式の風習で衛生にも宜しくないと申されました。そこで私は頭ばかり文明にしても其他の權衡がとれないでは滑稽ですから……と申上げると、それもさうですがでは先づ頭からボツ〳〵改良したが宜いでせうと果は大笑ひをしたことがムいます。

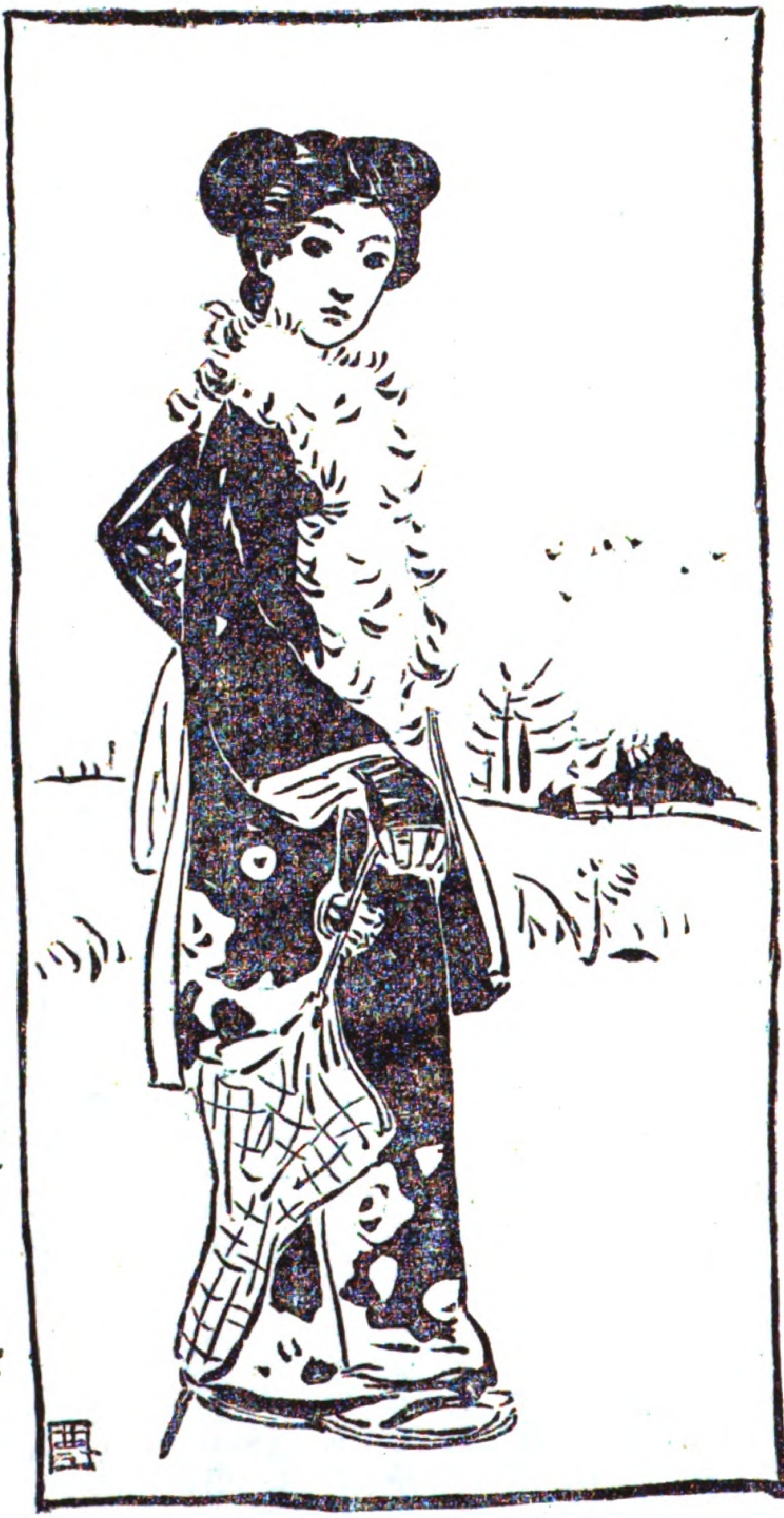
束髪位のことは今日實行するにも格別困難は感じませんが、其他は却々理想通りに行かない樣に思はれます、一體家庭の組織から生活の順序が規律正しく整頓して居ない今日の日本では自分ばかり完全にしても側がさうでないと結局何にもなりません。

△乳母は決して雇はず

世間では身體が壯健で好い乳でありながら乳母を雇ふておく方もあるやうですが、私は最初から自分の乳ばかりで小供を育てました、乳母に來るほどの女は大抵不仕合な者ですから乳兒の爲にも宜しくあるまいと考へます、御覽の通り私は痩せてゐる方で、一寸見ては病身のやうに見えますが、是でも却々達者で滅多に患つたことはムいません。尤も乳を呑まさなければ幾分肥へると醫者から云はれた事もありますが、自分が肥へる肥へないよりも小兒の方が大切ですから、五人共皆な私の乳で育てたのです、幼兒は親しく接するものに感化されて性質や容貌までも似ると申しますからヨク〳〵乳の足らぬ人なら格別、さうでない以上は成べく乳母の手にかけぬ方が良からうと存じます。

樺山伯夫人の獅子兒の教育法

私は一人の男の子を生んだきりで、經驗を積む時もなく、過ぎましたから、御話する程の事もありませんが、しかし只今の方の樣に敎育學や、育兒法などは存じませんが、子供を育てるにつきまして、隨分世話もやきました。家ばかりに置くよりも、兎に角早くより學校敎育を受けさする方がよからうと思ひまして丁度、鹿兒島の今の造士館が聖堂といふてをつた頃、夫れに五ツの時から出しました。子供を女中相手にまかして置く事は、どうも危險であると思ひまして、時々私が連れて學校にもまゐりました。樺山が申します



には、獅子は生まるゝと其の子を千仭の谷へ落して試むるといふことがある、子供の時から、何でも獨でする習慣を養へとの事でしたから、餘程嚴格な育て方をしました、けれども私は子供を叱つた事は一度もありません、叱らない方が却つて從順な性質を養ふやうです。子供は一寸した事でも、眞似したがりますし惡い癖が附き易うございますから、決して人の陰言や、變な眞似事などは其の前では氣をつけませんと、いぢくれて、温順でないやうになりますから、私はこれによほど注意して居ります、それで孫杯は誰れの前にでも悦んで出てまゐります、愛輔(伯爵世嗣)が小さい時は温順で、逆つた事などは決してなかつたやうです、樺山もそれには感心して居りました。其の頃は今の樣に學校教育が行き屆いて居ませんから、家庭で書物を教へてやつたり復習してやつたりしまして、夜は九時、十時頃まで教ゆる事がありました、また時として祖先の事や、歷史の事や、歷史の上の御話をしますと、大きに悦んで聞て居ました、これは誠に好い教訓になる樣です又私はいつもはたの者にも申まして、子供にあゝしてはならん、斯してはならんと、口でいふ事は止めにしてくれ、子供のしていけないと思ふことは、先づ自分でせぬ樣にしてくれと、いつも頼んで居ました。

藩の一般の家庭教育の有樣は、所謂武士道といふのでしやう、嚴格で順序立つて居まして、若し家庭に惡い風聞のある者は、親類でも擯斥するやうになつて居ましたから、自然と、一家の風波を立つる事なく、家内團欒の樂みを受くる樣になつて居ました、そんな處は、英國の家庭に似て居る樣に思はれます。

此間或人がまゐりまして、鹿兒島といへば、何だか女も極く御轉婆な教育を受けた樣に思はれますがと申しますから、イヽエ夫れは大間違ですよ學問こそ進みませんでしたが、女には優美な教育をした所で、六ッ七ッから琴や、茶、生花、細工物及刺繍など習はせ、九ッ位になれば裁縫習ひに遣つて、婦巧の一通は十二三歳か、十四五歳で已に終る樣になつて居ますと申し

ておきました。

薩州藩は他に比して非常に婦人を壓制した處でありますが、從順と氣節とを女の美德として、奬勵したことは、或は他にまさつてをつたらうとの事です、學問ある女子を擯斥しました結果は、遂に藩中二三の文學者を出したる外、學才ある女は殆んど皆無といふて好い位で夫人は斯る藩の教育を受け己れの嗜む學問の道を究むる事の出來ないのを遺憾に思はれて、せめて自から學びに從ふことは出來ず共他人には奬勵せんものをとて、近隣の青年を集め、良師を家に雇ひ來て教育をなされた事もあり、又他日東京に御住ひになるやうになつてからは、一時に三十人位も書生を世話せられて夫人自ら衣食の事から平素の薫陶にいたるまで粗略なくせられたといふ事で、其の感化を受けて、今日有望の地位にある人多くあるとのことであります、嘗て夫人の御話に、宅に居た書生で、横道に



身を持ちくづした者のないのは、仕合ですとの事でした。

むかしの人の食膳（二）

考古博士

▲料理の進歩

鎌倉時代と平安朝とは衣食住の上に格段の懸隔もありませんでしたが、此時分から一日二食（朝と夕）の制が廢れて午時に中食をする習慣が出來ました、尤も僧徒の一門は一日只一食でしたが、これ等も又非時と名づけて日中に食事する樣になりました。

室町時代は王朝や鎌倉時代に比較して食物の材料に格別の進歩でもありませんが、只其の調理法に於て大いに異つたのであります、たとへば前時代では鮨をつくるのには魚を鹽水に浸けて置いて自然に酸味を生ぜしめたものであつたが、此の時代に至つて特別に酢といふものを造る樣になりました、又鹹味を附けるのに味噌、醬油を使ひ、魚鳥の肉を製して蒲鉾をこしらへ、豆腐、油揚、納豆、心太、素麵など樣々食品を製する樣になり、菓子も今日用ふ處ろの羊羹、饅頭、きんとん、水飩、小倉餅のやうなもの其種類も却々潤澤でありました。

▲饗宴の流行

室町將軍家の時代に於ては人を饗應する風習が頗る盛んで、其の盛饌には隨分奢侈を極めたものでムいました、當時魚類には鯛、鮑、鯉、鮒、海月、熨斗鮑、鰹魚を專ら賞味し、蟹味噌、海鼠膓などは珍味として盛饌の献立に用ひられました。

乍併室町の代を歷て足利の末世から戰國へかけては、郡國爭亂打つゞきまして、自然衣食住の進步を沮害した傾きもありましたが、其反動は忽ち德川時代に入つて古今未曾有の盛況を呈したのであります。

▲庶民生活の進步

寛永以前德川の上世時代は戰國殺伐の風習が猶社會一般に殘つて居て衣食住も極めて質素簡朴な有樣でしたが、元祿の頃より百物繁盛して庶民の生活は俄然と

して進歩しました、まづこの時代に於て蔬菜の類は外國から輸入したものが却々多く、日常の食用に供する品物も頗る多種多樣で、食事の度數も足利時代の二食であつたのが三食となり、農民などは猶其外に午前と午後一度づゝ加へ、一日に五度も食する樣になりました。そして米は戰國の頃まで玄米でありましたのが既に此の頃から一般に精げて食する習慣となり一般に精米を食べる樣になつたのであります、そして一般の庶民に至るまで、食膳に汁をこしらへ、煮物をこしらへ、浸物あり、和物あり、炙物あり、生酢あり漬物ありといふ風で、萬事、今日の食膳と大差なきまでの大進歩を來したのであります。

元祿以後に於ける料理術の進歩は非常なものでありまして、從來儀式の盛饌に用ひられました、雉子、雁、鴨、鳩などの禽鳥、鯛、鯉、鮒、鮑などの魚肴も此の時代から專ら市人の賞翫となつて、鮑の酢貝、鰻の蒲燒、榮螺の壺燒、松茸、松露、筍、百合、蓮根など樣樣に調理されて市人の口に入る樣になりました。

殊に高貴の人々に至つては膳部に二の膳、三の膳以上ありまして、日常の食事にも珍肴を陳ね調味の鹹酸は元より、辛味の芥子、胡椒、蓼、生姜より、甘味の砂糖、糖蜜に至るまで五味八珍の贅澤を極むるに至り魚鳥料理に對して精進料理が出來、京都風の淡泊料理あれば、江戸風の濃厚料理あり、長崎には卓袱料理流行し、其の反對に又普化料理といふものさへも出來るやうになつたのであります。要するに德川時代は食膳調味に非常な發展を致した時代であります。

◎ランプ部屋

ランプや石油などを入れ置く場所は、火焚場より少し隔てゝ、相當の棚を釣り、板棚にランプの形に合せて穴を穿ち下の方を穴へはめ置く時は、物に觸つて倒るゝ樣な事のないばかりでなく、整頓のよいものです棚の下には油の罎、其他掃除の道具を置き、又板敷の上にブリキを敷くか、又は石を敷いて置けばよろしい、若し板敷其儘であれば多年の油が板に染みて、火の落ちた時など危險です、又掃除に用ひた紙などは相當の箱に入れて置いて取亂れぬ樣注意せねばなりません。

名婦人の老後の榮譽

倫敦ハトド、パークの片邊りにさまで人目に立たぬ閑雅な一搆あり主人は一人の品位高き老婦人にて、數名の僕婢と共に質素にして而かも趣味ある生活をなし居れり、此老婦人こそは彼のクリミヤ戰爭の砌、看護婦として戰地に赴き、幾多の辛酸と鬪ひて、傷病者を勞り、丈夫の武勳と共に其功績を世に歌はれたるフロレンス、ナイチンゲール女史其人にして、今し八十八歲の老の身を此家に心靜かに養い居るなり、英國々會は曩に女史の功勞に對して五十萬圓を贈與したるが、女史は此金額を悉く看護婦養成の事業に投じて『ナイチンゲール、ホーム、オブ、トレーンド、ナーセス』と稱する一の看護婦養成所を建てゝ、目下大に榮え居れり、女史は老軀を提げて時々此處に行く由なるが、昨今は微恙ありて病褥に在り、僅かに極めて親しき人々のみを病室に請じて快く平日の閑談に耽ることもあり、されど平生は眼が少しく衰へたる計りにて其外は毫も常人と異なる所なしとの事なり、英國皇帝陛下は女史が病褥にあることを聞召され、去る十一月廿九日附を以てオーダー、オブ、メリット勳章を授けられしが、メリット勳章と云ふは去る明治三十五年現國王陛下の戴冠式と同時に制定されしものにして、此時同勳章を授與せられたるは武官、學者、文人、美術家〆て十二名なりき、今日にては女史と共に二十名にして其中には過般逝去したるケルヴィン卿始め、日本の大山元帥、山縣元帥、東鄕大將をも含み居れり、巾幗の身を以て嚆矢とすべく女史の榮譽又一しほと言はざる可からず。

私の實驗せる商賣上の呼吸



黒光女史

△取掛つた最初の經驗

私共夫婦が商賣に取り掛つた最初の經驗は如何であつたと、仰有るのですか。左樣ですね、何しろ學校生活から、ぽつと世間に出た初生の儘でしたから、ヘマな事が多う御座いましたよ。取り分け最初の一二ヶ月といふものは、店頭に坐つてゐるのも、斯う何んだか氣耻かしくて〳〵、商賣してゐながら、購客の入らツしやるのが、おツくうに思ひました。士族の腹から出た私ばかりでなく、何時も口癖のやうに實業〳〵と言つてゐる主人も、矢張私と相違なく、店へ立つて何を被下いな、と可愛らしい聲でお呼びに爲る十二三のお娘であれば好いですが、旋風のやうに、突掛草履で、横樣に入つてゐらッしやる職人衆でゞもあると、愕然として、商物を手渡しする間の苦勞といふものは大抵ぢや有りませんでした。私は學校に居りました時分から、風變りだといはれてゐた者で御座いましたが、店頭に坐つて見ると、から駄目で、風變りも何も那處へやら、矢張お孃樣上りの女學生、オイお神さんなどゝいはれると、何だか輕蔑でもされたかのやうで、地の底へ落ちたやうに思ひました。今から思ふと、如何してあゝ初生であつたらうと、自分ながら吹き出したいやうに思ふので御座います。

△商賣はおもしろいもの

ですが、斯んな思をしたのも、ほんの暫時。店は思ふ存分に繁昌して參りますと、その中にすつかり商人氣質になつて了ひました。商賣はおもしろいもんで御

座いますよ。別段損得に關係なく、商賣それ自身が、無性矢鱈に面白いのです。特に家外から歸つて、他の店には客が見えませんのに、自店に三人四人の購客が込み合つてゐるのを見ると、心持の好いことといつたら、學校で百點を取つて、先生に襃められた位のもんではありません。ですから、以前商賣を遣つたお方で、今下女を使つて暢氣に暮らしてゐらッしやるお方も二三人知つて居ますが、皆な商賣の味が忘れられないと言つて居らッしやいます。左樣ですね、日々の變化が面白いので御座いましやう。絶へ間なく氣を配ばつて居ないと、直ぐと廢物が出るのですから、油斷も間隙もあつたもんでありません。

△商賣繁昌と容貌

美人を店番に仕て置くのが、店商賣の秘訣かと被仰るのですか。世間には齢若い、小綺麗なのを突き出してゐる店も見えますが、藝者屋や待合ならば知らぬ事、綺麗なのを置くばかりが良いとは定められません。購客の間に競爭が出て、店を畳んだ家も有つたやうに聞いて居ます。ですから、普通の店に綺麗なのを置くのも善惡相半かと思ひます。けれど、容貌と商賣とは、關係が無いではありません。經驗を申せば、救世軍の軍曹であつた男が、私共の店に居りました。別に美男子といふでもありませんが、福々夷樣のやうな男で、顔一面に莞爾として、如何にも好人物のやうに見へるので御座いました。で、私共初め、此男の顔を見ますと、ちよと言葉を掛けて見たいやうに思ふのです、此男が私共の福の神で、此の男が行商に出ると、朝持つて出た商品は、屹度その日に賣つて仕舞ひました。新宿邊は、夜の八九時頃に爲ると、大抵お休みに爲りますが、それでも此男が參ると、奥樣方はわざ／＼お起きに爲つて、お買ひ爲すつたさうで、得な男で御座いました。トいつて、別段愛想言ふ男でもありませんが、如何にも福々として、夷樣のやうであるのが、お客樣の氣に入つた者と見えます。

△一寸人の目に立つ男

今度は反對の例ですが、一二年前に容貌のくつきりとした、一寸人の目に立つ男を使つたヿが御座いました。商賣の道も一ト通り心得てゐるといふので、主人も賴母しがり、一部の仕事を受持たせたので御座います。でお客も附くヿだらうと樂んでゐると、案に相違して、成績が擧りません。成績が擧らない計でなく、段々客が減るのです。如何したヿだらうと調べて見ると、此の男の容貌が原因であつたヿが判りました。一寸人の目に立つ男に相違ありませんが、貧相で、厭味が有つて、なんだか人好の仕ない容貌なんです。それにグヅリ〳〵として、言葉が明断しないのです。私共でさへ斯うなんですから、お客樣は一層不愉快で居らッしやるだらうと考へて、別の者に變へましたが、あの男などは、商人には不向な顏付なんでしやう。今は如何してゐるか知りませんが、何を遣りましても、あれでは出世の妨害に爲りは仕まいかと、內々氣の毒に思つてをります。ですから、容貌が良いといふばかりではイケません。福々とした、愛嬌のある、冗談の一つも言つて見たいやうな容貌が、店商賣にはいゝやうで御座います。

△最も骨折なもの

私共は商賣を創めて、既う六年に爲りますが、一番の骨折は番頭小僧を使ふヿで御座いましやう。小僧も色々で、十人寄れば十色の癖あり。使ひの途中で、油を賣るのが普通ですが、お客樣の顏を見ると、無暗に商品を與れるのもあれば、お客樣に調戲はれると直ぐ怒つて仕舞ふやうなのもあり、仰山に言ひたがる癖のも居れば、理屈を申すのもあり。斯んな小さい店でも、色々の小僧が集つてゐるので御座います。が、全體から申せば、中學などに居つて、多少の教育を受けたものは、事理は早い代りに、生意氣で困ります。それぞれ性質が違ふもんですから、能く性質を嚥み込んで、使はないと、何時も店の中が混雜します。ガミ〳〵叱

るのも善し惡しで、トいつて餘り寛大にして置くと、我儘に流れますから、放ッたらかしにも出來ず、その手加減はよほどむづかしう御座います。

△場所と看板が肝腎

私共はお蔭樣で店は繁昌して居りますが、一ッは場所が良かつたのか知らと思ふので御座います。なんでも商賣は場所と看板が肝腎で、場所を撰び損ると浮ぶ瀬がありません。先頃も私共の知合で、大久保邊で、同じ商賣を初めたお方が御座いまして、客がないので、如何したもんだらうといふ御相談があつたから、主人が往つて見ますと、アノ商賣屋で嫌ふ片側町であつたさうで厶います、あれでは駄目だと主人が申してゐました。いくら商品を吟味しても、勉强しても、場所が惡いと、初手から駄目と極まつてゐます。……それに附近の情況を胸中に入れるのが肝腎で御座います。私共が初めて店を開いた本郷の森川町は、書生さんが重でしたから、飾付萬端書生さんの嗜好に入るやうに仕ました、それが大きに良かつたので御座いませうが、此の新宿であると、其樣は參りません。進つと森川町と行り方を變へないと遣り切れまいと思ひます。

△良い物賣るに限る

田舍は廉い物を賣ると良いとか聞きましたが、東京は如何しても良い物賣るに限ります。で、本郷の店で御座いますと、あの○○堂(私共の競爭店)を標準として、何時も○○堂より良い物を〱と心掛けてゐたので御座いました。無論○○堂は、私共の店など眼中に在りますまいが、私共の方では、何時も偵察を放つて○○堂の品物を研究してゐたので御座います。で、一昨年のクリスマスにも、○○堂では商品が遺つたさうですが、私共ではすつかり賣り切つたので、昨年の正月は非常に心持が良う御座いました。勉强してゐるのが、直ぐ購客に判るかと仰しやるの。左樣ですね、なかには緣の下の獨相撲で、皆樣に知られず仕舞ふ事もありますが、大抵は自然と、判つてゆくやうに思はれ

ます。

△商賣人のケチな遺物

商賣してゐると、世間の味合が判つて參るので、學問にも爲ります。盃暮には取引してゐる問屋仲買等から遺物が參るのが、商賣人の慣例ですが、日頃不勉强の店に限つて、盃暮には金目を掛けた遺物を持つて參るので御座います。それは不思議で、那處の店でも其様だと申します。或ボール屋が御座いまして、私共は取引も仕ませんのに、何時も年の暮には、立派な遺物を寄こしました。その都度に歸しましたが、それでも矢張持つて參るので御座います。で、私共もお仕舞には根負けして、試驗かた〲一度其店の製品を取り寄せて見ました。すると、不親切で、弱くて、仕様がないもんですから、一度切りでぴッたり、辭りました。また開業以來取引してゐる餡屋は頑固な爺で、一徹な事ばかり申して、迚も話說に爲らない爺さんで御座いました。けれど、此の爺の寄越す餡は、普通の餡屋のやうに、白餡に芋などを使はず、純粋の白豌豆を用ゐて居ますから、値の高いのを我慢して、今に取引してゐます。此の爺は長年の取引で御座いますが、盃暮には未だ一度も遺物を寄こしません。「お前さんの製品は高い、もつと廉く仕たら如何だ」と冗談半分にでも申すと、それは〲恐ろしい見幕に成つて、プリ〲怒るのです。ですから、私共では、遺物の良い商賣人の製品は、駄目だと極めて居るのでございます。

△學生上りの商賣人

利いた風な事を駢べて、一ト廉の商人に成り澄ましてゐますが、學校で生意氣な事を敎はつた私共で御座いますから、いくら修業を積んでも、矢張女學生氣質が離れず、斯う店頭に坐つてゐながら、商賣人として、落度が多う御座います。如何かすると、商賣人といふ自分を忘れて、餘所様の事を考へる、たとへば慈善とか社會とかいつたやうなヿが、腦裡に浮ぶのです。それが良いんだと世辭を言つて被下る方もありますが、

商人としては如何で御座いましやう。商人は矢張商人臍に處れて、小供の折から、臍一杯に慾を溜めて、算盤をはぢいたもんでないと、しつくりと商人に嵌りません。

△計算後の最大怡樂

月末の計算は私の擔當と極めてありますから、月の二十五日頃から、一週間といふものは、帳場に坐つた儘、帳簿と算盤を控へて、一ヶ月の賣上や、お得意先の掛金等を調べるので御座いますが、如何かすると、夜分は一二時頃まで起きてゐることもあります。ですから、六日目頃に爲ると、肩が張る、頭が痛む、身體が綿のやうに爲ッてしまひます。けれど、私は學校に居た時分から、小說が好物だもんですから、それを怡樂にして、セッセと役目だけを遣つて退けるので御座います。はい、小說の外は、油繪が好ですから、展覽會があると、屹度出掛けます。此處等が矢張眞實の商人でない證據で御座いませう。まア隨分喋舌りましたをね。（記者筆記）

黒光女史とは世を忍ぶ假りの名、實は明治女學校出身の秀才にして本鄉森川町にて有名な香生パン屋家號は中村屋の女主人なり、家業日增に繁昌して此の度又新宿方面にも同店を開業しいよ〳〵以て二十世紀式食料品商店の新機軸を出して大勉强をなすといふ、新宿の店は電車の終點を下りたる處ろなり。

紹介

◎水彩繪手引　中村不折筆

筆力勇健、意匠の豐富を以て當代の丹青界に傑出せる不折氏が水彩畫の手本として書きたるものなり、圖は花卉、山水、人物の三種にして併せて六葉を收む、色彩の塗きところ、筆の枯れたる處ろ一家の手法にいふべからざる味あり、別に小冊子として色の使ひ方と筆の配り方につき詳細の說明をなせり、定價五十五錢。

◎立志小說 觀音堂　堀内新泉著

立志小說「人の兄たる者」はして南都の放蕩書生を警醒し讀書社會に一新旗幟を出したる堀内新泉氏の作なり、山間僻地の一少年、發奮の動機を齎らして都門に出で、百難を排して艱難苦學し成業して故鄉に錦を飾るまでの徑路を例の同情多き筆もて描かれたり、定價五十五錢成功社發行。



お姫樣の平民生活

梅香女塾　木村貞子

小石川原町に梅香女塾と云ふを開いて漢學と家政學を敎授されつゝある木村貞子女史は、高師第三回の卒業生で明治十九年より昨年まで華族女學校の敎鞭を取り、傍ら貴族の家庭敎師に聘せられ漢學の素養深く武藝のたしなみも少なからず、加之家政の細事にも行届いた謹直な御方であります。而して江戸ッ子肌のサラリとした中に限りなき愛が籠つて居るので生徒に親の如く慕はれて居られます。當時前田家の姫君を始め二三の華族より姫君を托されて師となり母となつて其薫陶に日を暮されて居る方です。

▲大名の姫君と富豪の令孃

上流の女子は一般にマア素直で御座いますネ。其中にも舊大名の令孃方は、新華族や豪商の令孃方に比べると能く敎師の命を守り温順で、鷹揚かと思はれます。而して舊大名の令孃は衣服等も奢侈に流れぬやう御家則で定められてあり、御家着より粗末な物を學校着に爲て來られます。年のゆかれぬ方が浮華〳〵して居るのは貴賤共普通の事でありますが、私はどうも是が氣になる性質で、兎角八釜しい事を申しては生徒方に厭がられました、其癖私は子供好で子供に揶揄だすと何も彼も忘れて了ふ程ですから學校へ出ますと小さい孃さん方は私の身邊へ取付て親みますが、大きい生徒方には目の上の瘤のやうに思はれたのです。

▲姫君の寄宿生活

家庭敎師と申す程の事でもありませんが、以前舊主德川家や細川家へ出まして御姫樣方の復習を少々御世話いたしたので御座います。華族の家庭では母君獨りで令孃の監督をされる次第にも參らず、附添の女中は其人々の性質に依てどうも良くない感化を及ぼす事が

あるから、華族の家庭に付いて經驗ある婦人が華族の女子を預つては如何だと御勸になつた某華族の御言葉に依り此塾を開いたわけで御座います。尤も其以前より前田家の令孃を御預り致して居りました處、此夏より秋田家から令孃を、御一方御預けになりました。秋田家の令孃は御十八で、前田家のは御十二で御座いますが何れも極柔順な御方でして特に前田家の令孃は私を親のやうに思はれる所爲ですか日曜でも夏休でも一切御邸へ歸られません。少し活潑過た動作があられた際私が御叱り申しますと、『私は一生御嫁になんか參りませんから御轉婆いたしても宜しふ御座います。私は算術の教師になつて何時までも先生の御側に居て先生が御病氣になつたら私が一人で看病いたします』なぞと御可愛らしい事を仰るので、時々大笑い致します。毎月の御小遣は私が御預り申して學具其他の必要品を買つて差上げるのですが、時々買物の御經驗のために近邊の緣日へ下婢を添へて御出し申します。是が何よりの御樂しみで、私が御渡し致す僅かの御小遣の內から南金玉や酸漿、瓶入の金米糖なぞを買はれ一々私に御見せなさいますが、直段は整然と帳面へ記して月末に私の手元へ出されるのです。

▲世帶の御稽古

多勢の家族では魚類野菜を市場へ買出に參る事が是非必要で御座います。先頃まで居つた下女は買出が上手で毎日日本橋へ出掛ましたが、此邊で一尾八錢位の小鯛が三四錢位、足一本二拾錢位の章魚も川岸では四拾錢で大きいのが一杯買へると云ふ勘定ですから電車代を遣つても大家內の總菜なら餘程經濟に付きます。野菜物は自分で本鄉の市場へ買に參りますが、先達秋田家の令孃も御一緒に御出掛で大風呂敷に一ぱいの野菜を私と相持にして歸られましたが餘程閉口なされたと見え、もうこり〳〵したと仰つて大笑ひ致しました私は華族女學校で家政科を受持て居りました際、餘り始末を八釜しく申して生徒方に嫌はれましたが、何に致せ御味噌の擂り樣も御存じない方に大根葉まで捨て

ぬやうな始末方を御指圖致しましたから隨分八釜しく思はれたのでせう。唯今宅に寄宿さるゝ令孃方にも臺所の御手傳を爲て頂きながら細い經濟法を御注意申して居ります。宅に居る姪なぞも是まで母親無で育つた爲に取始末と云ふ事を辨へず、古切や古綿を其儘に突込で在りましたのを、私の手元へ參つてから私が古綿をつばなかして結構な蒲團を拵へて見せました處、姪も感心いたし秋田の令孃も『先生が小さな古綿を何になさるのかと存じて居ましたら誠に良い蒲團になりました事』と驚かれましたが經驗のない令孃方には御尤の次第で御座います、上り物で御座いますか、多少好嫌ひは御在りですが、人間の食べる物に召上られぬ品は御座いませんと申して何んでも差上ますから段々慣れて上るやうになりました。



△師弟の情誼

男女の學校を通じ一番困難なのは精神教育の根抵であらうと存じます。畢竟倫理を受持教員各自の主義信仰に依つて根抵に多少の相違があり如何しても各自の奉ずる處へ引付る氣味がありますから、生徒の方も種々惑ひが起り、爲にふわ／＼とした傾になるのかと思はれます。而して多勢の教師が各科を分擔する處から生徒の方でも師弟の情誼は唯教場だけで、教師の人格に感化されると云ふ鹽梅に參ら

ぬのは勢ひ致方もない次第でせう。併しどうか一の宗教に依るなり何なり致して倫理の基礎を生徒の頭腦に確乎と沁み込ませふわり〳〵とふら付ぬやうな方法に致したいもの特に上流の女子には此ふわり〳〵に付て餘程注意致さなければならぬと存じます。

▲體育は薙刀に柔術

日本在來の武術は唯今の女子に必要だと存じます。武術は一寸荒々しいやうに思はれますが却々禮儀の厳重なもので道場に坐る席順、仕合に掛る互の禮式等は先輩後輩の差別を整然と正し毫も亂れさせない處が誠に行儀よく奥床しいもので御座います。而して女子に武術を仕込ますと健康のために良い計りでなく自然志操か堅固になり沈着も出來て參りますから、是非薙刀や柔術位は教育したいものと存じます。武術は體操に比べると勝負と云ふ意氣張がありますから學ぶのに大層興味があるもので、私も學校ではさんざ體操をやらせられましたけれども本のモウ形式的で戯談のやうな氣が致し武術を學ぶ半分も身が入りませんでした。而して體操は學校に居る時だけの事ですが、武術のたしなみは女子終身の守りとなりませう。舞踏で御座いますか、私は彼も感心致しませんナ。自分が好だからと御笑ひでせうが、能樂の仕舞の方が餘程優雅で女子には適當であらうと存じます。音樂も洋樂は樂器が高價で中から下には家に備へられず、上流でも家に依ては一寸琴より臆劫ですから先づ琴の方が實際の役に立ませう。

▲嫁入の衣裳

華族方の御嫁入は衣裳の澤山なのに驚く計りで御座います、私が出入つた某華族の令孃なぞは結構な帶ばかり何十本揃へられたか知れません。其御入費の程も推計られます。嘗て細川さん（潤治郎氏）が嫁入の衣裳を成るだけ節約して其金で公債でも買て持參され不時の不幸に備へられたいものと我々に御話なすつた事があります、上流では家柄の體面上節約一方にも出來ますま

いか、成るべく此處は一工風ありたいものと存じます。一體唯今の奢侈は上下推なべて年一年と其度が強くなる事は三越の繁昌を見ても知れますが、是も生活進歩の現象と賀し得られますか如何ですか、私は此奢侈の費用を何か有益の事業に使つたらばなぞと考へて居ります。

▲多難に遭遇

私は明治十三年に女子師範學校を卒業致しまして、一年ばかり栃木縣下足利學校及び栃木女子中學校に勤め、夫れから麹町



の麹街女子小學校に五年程出て校長を勤て居ました。ハイ華族女學校へは明治十九年から昨年まで勤て居たので御座います。

私は幼い時から餘ツ程御轉の方で、琴や三味線の稽古が大嫌ひ、其刻限になると兄の稽古に參る劍術の道場へ逃げ出して參り擊劍を習つた位でしたから、年頃になつても却々御嫁に往く考は起りませんでした。親達は色々心配して嫁入口も目付て呉れましたけれども御亭主に叱り付けられてヘイ／＼するのが馬鹿々々しいと云ふ考で遂に獨

身生活と定めて了つたのです。夫れで今日までは自分の思つた通りの道を歩いて、勤の暇には學びたいと思ふ事も學び、誠に氣樂で友達にも羨まれ自分も嫁して不幸な友達を見る度に自分の幸福を怡んで居た位でしたが、五十歳の坂に差しかゝつてから初めて大打擊に遇つて大閉口いたしました。一昨年は能勢榮に嫁した妹が養子と實子を抱へて寡婦となつて居りました其子供の世話致しつゝあつた處、昨年は私が掛り子と思つて居た大切の弟が一女子を殘して死去いたしたので其實子二人の後見を私がいたす事となり、本年は豫て加賀へ參つて居た長兄が八人の子供を殘して病死いたしたので、未だ年若の後妻は本人の望によりて實家へ歸し、男女八人の子供を不殘私方へ引取りました時は恰で孤兒院の創立のやうな有樣でした。丁度昨年は御承知の通り華族女學校の廢しと共に私も廢官となり、自分の扶持にさへ離れた折からで一時途方に暮れましたが、乳呑兒は里子に遣り、十六歳の次女は伊澤(修二氏)さんに御世話願ふ事となりました、是は伊澤の奧樣は嫂(脇屋貞子)と同窓同室の好もあり、私の境遇を御推察なされて御引取下すつたのです。夫れから十五歳の次女も御友達の世話で横濱へ參り、唯今造花の修業を爲て居りますし、十一歳の四男は小西家で御世話下さる事となり夫々方が付きました。其中長男は當人の望みで苦學生となつて米國へ參り、十歳になる五男は寺へ遣はせました。此五男は不思議な子供で學校から歸りますと敎科書は擲り出して御經の本ばかり讀みたがつて居り「何卒私を坊さんに爲て下さい」と頻りにせがんで居ました。私も近頃禪の方に入つた爲に僧侶方に御懇意がありましたから、幸ひ八幡(山城)の圓福寺の住職が谷中の全生庵へ講座に來られた際此子供の話を致しますと夫は氣の毒だ差支なくば拙僧が貰つて往う」との事で私も己の師とたのむ老師の御言葉を有がたく思ひ早速子供を御目にかけました處老師には至極適當な兒だと怡ばれて早速師弟の約を結ばれました。如何に本人の望でもつい此間まで懷子であつたものが遠方の山寺へ獨り參るとなると嘸心細か

らうと案じました處、本人は大喜び新橋で汽車に乘込んだ時萬歲――と手を擧げて往て了ひました。多勢の子供も先づ何樣か斯樣か片が付き、只今は十八歲の姪と七歲の甥とが殘つて居るだけで少しは安心致しましたが一時は實に當惑いたし今迄餘り氣樂に世を渡つた罰だと存じ、斯樣時は瘠ても枯ても良人を持つて居たなら大に力になつたものをなぞと思はぬ後悔も出ましたが、併し少しでも禪の道に入つて居た爲に大に煩悶を癒す事が出來ました。私は一昨年まで御殿町に私塾を開いて居ましたが、妹の死後巳を得ず此能勢の遺家を借受けて引移つたので、御座います。





令孃の日記

春の新橋婦人待合室

妹、治子

除夜の鐘と共に四十年は去つて、新らしい四十一年が來る。何だか嬉しい。樂しい、私達に取つては幸福な年らしく、私は悅んで此四十一年を迎へた。一昨年邊り迄は御自分から先に立つて歌留多だトランプだと騷いで被居つた、兄樣が、今年は炬燵に入つて唯新聞を見て被居る。兄樣羽根でも突きませうか、と云つても、唯笑つて被居る許り、どれ之から年始廻りにでも行かうかなア、と云つて被居つて、些少も私のお願ひする事は取り合つて下さらぬ。暮から來年は歌留多會をしませうねえ、今年は到頭しなかつたんですもの、と幾程云つても、歌留多なんか馬鹿らしいぢやア無いかと、仰在る許り一生懸命で云ふ私の張合の無さつたら無い、幾程居たつて無効だから、私は妹や従兄の邦雄さん、時夫さん達と門の中で二人宛仇討をする。私は大自慢で、白い羽根の先を前齒で切つて、櫻の花のやうにして、カチンと音高く、青い空に向つて打つ。麗かな空に奴凧や繪凧が唸を付けて、プン〳〵鳴つて居る。渡した羽根が又青い空に、此方に向つて歸つて來る。落しては、とソレコソ一生の恥のやうに思つて、懸命にやる。何だか額が汗でシツトリとなる。私達の羽根の間を潜つて、年嗣の客が砂利を踏んで來る。大抵洋服が多い。漸く草臥れたから此度は私が皆んなが狡黠をしないやうにと、一段高い處に乘つて、白粉の壜と、筆とを持つて、審判官をやる、皆んな一生懸命に落すまいと堅くなるので、餘計落すやうだ。羽根が

木に止つて了ふ。澤山羽根を門松に一寸乘せて置く、妹の紅のリボンや華派な袂が、門松の綠に、見え隱れして美しいと思ふ、一寸目を放すと直ぐに落しても誤魔化すから、此方も却々骨が折れる。門の前に、往き來の人も立止つて、遣り羽子を見て居る、皆んな笑ふ、白粉で額や頰の白い、髯の生へた邦雄さんや時夫さんを見て皆んな笑つて過ぎる。向ふの方で太鼓の音がしたので、オヤと思つて居ると、少さい弟が、姉さん姉さんお獅子〳〵と大きな聲で云ふ。皆んな行くので、私も子供らしく驅け出して行く、羽織はもうとつくの昔に脱いで了つた。玄關に行くと、舞つて居る汐吹の面や於假面の面を被つて、種々な眞似をしてゐる。後から從いて來た澤山の子供も笑ふ、何となく春と云ふ感じが染々する、從兄がトランプをしやうと云ふので、歸る。餘り熱心にするので寒さも何も忘れて了つて居たが、御飯の時には何だか寒くなつたので、大急ぎで羽織を着る。夜は歌留多をしやうからと云つて、お隣から迎いが來たから行くカヲツ下手作ら、下手の横好きで、半分交せ返すのだ、讀み役もする。大に讀み振りの佳い心算で、聲を張り上げてやると、餘り旨くも無いとの事に、憤然として、讀むのは止して、又二足三文のお仲間入りをする。組を幾度でも分けかへてする。何處からか、お煎餅の片砕が袂に飛ぶ、誰かしらと振り返ると、誰ともなしに、クス〳〵と笑ふ、此方からも對手關はずに投げ返す。餘り遲くなつてもと、思つて、暇を告げたのが十時——。月は無いが、向ふの高い枯木の中から、上から、星が冴え返つて、見るから寒さうだ。下駄がカラ〳〵と霜に冴える。高い榎に引懸つた、奴凧が、朔風に折々ガサ〳〵と音立てゝ鳴る、幼い、男の兒の夢を驚ろかして居るのだらうと思ふ。門の潜を閉めた時、お寶屋の聲が幽かに聞えた、宅の時計が高く打つ。

◎婦人待合室

春の新橋停車場の婦人待合室は、薔薇や菫の香に滿つ。折々衣擦の音サヤ〳〵と床しい、暖爐の前には

謹ましげに立つ婦人が二三人、西洋婦人が三人、二人は椅子に身を埋めて、一人は卓子に身を倚せ懸けて、年頃二十五六の婦人と話して居る。大きな丸髷に背の低い、顏の細面な、ボーアを左の手に、手袋と一緒に持つて、古代紫の五ッ紋に、菊の華派な裾模樣、帶も繻珍を大きくお太鼓に背負つて、折々母堂とも見える人や、此の西洋婦人の、話には唯折々頷いて微笑む許り。十六七人の客は皆此婦人を中心として話す。小紋、紋織の重ね着に羽織無しの、帶は高々と結んで居るのが多い。髮は此婦人を措て、他は皆束髮に結ぶ。ツカツカと入つて來て、一寸白の切符を此の婦人に渡して、二言三言呟く、背が倍も有りそうに思はれる。フロックコートにシルクハットを被つて、夫れは〳〵ハイカラとでも云はうか、髯は立派なカイゼル式で、襟も高い、天晴れな殿御振り、但し此の婦人にしては、餘りに夫人の少さきを如何せんと、其紳士は引返して暖爐の前に立つ、二十八九の束髮に、金縁目鏡の婦人に向つて、一禮する。「御姉樣、わざ〳〵此のお寒いのに御見送り下さいまして恐れ入りました。」と丁寧に云ふ、但し頗る私達の目には、先生却々氣取つて、御座るなと思はれる。「否、奈何致しまして。」と婦人も笑つて頭を下げる、七ッ許りの男の子の手を曳いて居た。大方嫂とでも云ふのかと想像される、サア横濱行きは出るそうですよ。」と之は山高帽の老紳士が入口の處で云はれる、一同はゾロ〳〵と出て行く。後に殘つたのは、私達の連れ四人ともう一人十五六の女の子許り、私は其時何だか自分乍ら可怪しい程妙に肩身が狹いやうな女に有り勝ちな、婦人室へ一寸入るにも入り難い思ひをした。大方華族にしても、子爵以上だらうと思はれる。其時私は何だか形容の一寸爲難い感じが、簇々とした。何も其樣人達に氣を奪られなくとも好さそうなものに、目を放たずに一から十迄見逃すまいとする。而して心の奥では、此人達は恰で人形も同樣ぢやないか、何一つ活動するでもなく、朝から晩迄一つ部屋に籠つて、何をするにも先づ侍女と來るのだらう、馬鹿馬鹿敷ぢやア無いかと。此人達に對する輕蔑の念や反

抗心が起らないでもないが、直ぐ目の前の人を見れば、矢張り奇麗な着物は着たい、佳い帯は〆たいものだ。時計だつて首から下げても見たい、指環もあゝやつて幾個か金剛石、眞珠と光らして見たい、と思ふ心の方が盛んになる。而して我身を見ると、生中糸織の古ぼけたのを重ねて居る丈に猶更ら物欲しさうだ、と何だか身窶しいやうに思はれる。此人達が行つた後は、何だか氣強いやうな心地がした。世の上流の人達をよくも知らない私には、唯小説を讀んで、此樣人も有るかしらと思つて居たのが、今目の前に夫れを見ると、恰で小説中の人物が動いて居るやうな氣がした、あの、御姉樣と云つて御低頭をした時杯は、頗る付の可笑しさだと今になつて、急に笑つて冷評してやり度い程な、意地の悪い氣がした。何だが世の中にあゝ御大層にして居る人も有るかしらと？思ふと馬鹿馬鹿しいやうな感じもする。大方負惜しみなのだらう……が。



後から入つて來た人は皆吾妻コートに、銀杏返しや島田や、肩掛も羽衣や何かで飾り振つて居ない、まア私達と同樣だ。今迄沈んで居た私も急に笑つて見たいやうな感じがする。貌を見合せると直ぐに莞爾とする。煖爐の石炭は盛んに燃える。有繋に正月だから、何だか凡ての物が

新らしい、陽氣だ、何處かで太鼓の音がするやうにも思はれる。春らしい感じが燃える石炭にまでも、春の氣が籠つて居るやうに思はれる。凡ての人の身なりも小齋張りして、心地が佳い。私迄も何だか春らしい心地に返る。

汽車は横須賀行きの發車に間も無いので、待合室を出る。行き逢ふ人、皆新らしい服を飾る。乘る人も新らしく見える。汽車は麗らかな日光を浴びて、徐ろに動き出す。（一月十五日記す）

令孃の日記

お正月の追想

姉、峰子

一年々々お正月は不滿らなくなるものだと、云ふけれども、私なんかは全く一足飛びだつた、是れでも去年迄は新年と云ふとまんざら樂しみでないでも無かつた、お歲暮に來る人がいよ〳〵押し詰りましたの、遂何んの彼のと云ひながら數へ日になりましたのと云はれると、何んだか既う心の奧の底から込み上げるやうに嬉しくなつて來て、遂ひ可笑しくも無い事に笑つたりするので、何んだねえ怎麽に多忙しがつて居るのに笑つてばつかし居て眞正に氣樂な人だ、と母様に云はれても、平常ならあんまりよ母様はつて云ふ處だけれども、一向に口惜しくもならず、反つて又夫れが笑ひの種になつて可笑しくなる位なものだ。

○

私だつてお飾り位は手傳うから然う〳〵遊んでも居られない、況して門松なんかは少しでも大きい方が景氣がよくつて何んだか肩身が廣いやうに思はれるからお向ふやお隣に負けないやうにと一生懸命爺やの傍を離れずに只管に賴む、眞青な竹をすつきり斜にそいだのが私は何よりも何よりも氣持が好くつて大好だ、晝は那麽事で何となくザワ〳〵しながら日を送つて夜になる、十時頃床に就いて一眠りしてふッと眼が覺めると何處かでお餅をついてる音が聞える、耳を澄まして

聞く、あア最う直きにお正月になるんだと思ふと又新らしく嬉しくなつて來る。

○

暮の買物と云つて私の家では各自々分の欲しいものを半紙に書き付けて置いて母樣の處へ持つて行つてお願ひする、而して許された物だけは買物に出掛ける、母樣の後について行つて買つて歸るのが例年の習慣のやうになつてゐる、勿論何も最初からそんな都合よく習慣がついてた譯ぢやア無いけれども、云はゞまア私の方で勝手に然う定めて仕舞つたやうなものだ、でいよ〳〵既う春着の仕度も出來てしまうと——尤も私の家なんかでは春着と云つても何もお振袖を拵らへるぢやアなし、模樣を染める譯でもないが、まア立派な物でなくとも初めて手を通すから夫れで全く私は不足ながら仕方が無しに春着と云つて居る——夫れから此度は細い物是れが却々少なくない、肩掛、手袋、リボン、簪と一々書いては甚麼なのにしやうかしらと考へる、半分は心配だと云つても好い位、夫れは夫れは迷つて其揚句漸つと買つて仕舞ふとさア早く駈けて出度くつて堪らない、一番さきに誰樣のお宅へ行かうかしら、あら若しか雨が降つたら何うしやう、と自分の部屋へ買ひ物をすつかり並べて此樣事を苦にして居るものだ。

○

私なんかのお正月の樂しみと云へばまア新らしい物を買つて貰へるからだと云はれても仕方が無い、夫れが追々年を經つてお正月でもさう〳〵出歩かれなくなるし、御年始のお客にも接しなければならぬ、それに子供の時と違つて少しは家の事情なんかも分つて來ると此暮は配當が少なかつた樣子だからまア母樣にねだるのも手袋だけは去年ので間に合はして置いて抔といふ考へも出て來る、何んでも彼でも買つて頂戴よう母樣なんて事は云へなくなる、母樣大抵の物は好いんですけどもねえ何うしても無けりやア困るんですからと遠慮して云ふやうになる、こんな事から段々お正月だつて詰らなくなるんぢやア無いかしらと思ふ、但し夫れは私獨りが思ふので他の方はどうだか知らない。

今思つても去年と今年と違つた一つしか年を加へないのに其相異つたらない、去年は面白かつた、朝早く起きてお風呂に入つて白粉をつけて髮も結つて仕舞うと、チヤンと前夜に揃へて置いた元日に着る着物を持つて來る、帶だけはしめて貰らつて帶止をパチンと止めて仕舞ふと夫れからは歩くにも斯う妙に裾なんかさばいたり、立居にも自然と氣を付けて靜かになる、早く云へば、私なんかは着物に氣兼して自分が着たんぢやあ無し、着物に着られた樣なものだ、其時ばかりは笑ふんでもホーと一寸半帕を口に當てゝ小聲で笑ふ平常キヤツ〳〵笑つて叱れるなんて事は夢さらないやうな顏をして坐るにもちよいとふきを潰さないやうに氣を付ける。

○

夫れから今度は羽根をつく夜は歌留多、私は家族合せや双六はまだるつこくつて大嫌ひだつたから大抵歌留多ばかりした私の家は家庭が嚴しくつて決して他家の歌留多會へ行く事は許され無かつたので宅でばかりして居た、だから何時迄經つても根つから上達はしない、兎に角新らしい物づくめで居るのが嬉しいんだから唯だもうゝか〳〵と日を送つて七日になると何んだか急にお正月が逃げて行つたやうに心寂しい悲しいやうな氣がする、那麼時は何有女のお正月は三月迄よとか何とか勝手な事を云つて遊んでゐる。

○

夫れに引換へ今年のお正月たら眞個に自分で思つてもイヤになつて仕舞ふ、霜解けで羽根をつくのも厭だつたけれども皆に無理に引張り出されて羽子板を持つたは好いが餘り落すので拾ふばかりで、草臥れて仕舞つたから少時門の前に立つて往來の人を眺めてゐると面白い程種々な人が通る。

○

猿廻しが來たと云ふから見に出ると玄關で頻りと何だか踊つてゐる私は何だか猿が面白くつて好きだから夢中になつて見て居ると突然ヒヨイと飛び付かれたので吃驚して逃げ出すと妹や弟は面白がつてキヤツ〳〵

笑つてゐる、蜜柑やお菓子を與ると猿廻しのお爺さんは大喜びで今度は萬望甚麽な古いのでもよろしう御座いますから猿に着物をやつて下さいと云ふ、是れ／＼丁寧に御低頭するんだよと縄をぐい／＼引張ると猿は私達の方をむいて、御低頭の安賣りをして見せる。

○



私はお座敷へ歸ると其處に散らばつて居る新聞を讀む、一番面白かつたのは藝者の晴着だつた、定めし私が藝者の晴着を喜んで讀んだと云つたら心有る方はまア品性の下劣な人だ、私貴女の爲めに悲しむワ抔と思はれるかも知れないが愛想がつきても仕方がない、全く何んだか面白かつた、奇麗な人が奇麗な着物をきて

すいと立つた姿なんかゝ目の前にチラ〳〵するやうであゝ嘸ぞ美しい事だらうと思ふともう藝者も何も有つたものぢやア無い、唯だ美しからう奇麗だらうと思ふ思ひが先に立つて夫れで私は何んだか面白くつて堪らなかつた、私は常に然う思つてる、何が嬉しいと云つて夫れは嬉しい事は澤山有つて數へ切れやしないけれども美しい人が粧をこらして姿見鏡の前に立つて自分ながらあゝ美しいと感じた時ほど心からの喜びは有るまいと私は思ふ。

○

顏なんか如何だつて心さへ美しければ好いと云ふのは唯だ眞の氣休めに慰めて呉れる言葉に過ぎない、那麼お慰めを聞くのは難有かア無いと云つて、美しくもないのに美しいと云はれゝば餘り人を馬鹿にしてると癪に觸る、何と云つても美人は美しい、夫れでなくとも兎角女は美しい事を望むものだ、併し夫れは何も女に限つた譯ぢやアなし男だつて美しいのが嫌いと云ふ事は聞いた事が無いからして、見れば美を好むのは人情だ、だから甚麼人だつて美しく粧へば見よくなるから私はいつでも女は出來るだけ奇麗にしたが良いと思つてる。

○

と云つたら又夫れが虚榮だと云れるかも知れないがそんなら若しも着物なんか欲しくは有りませんよと暑さ寒さを凌ぎさへすれば澤山、簪だつてリボンだつて頸掛時計だつて那麼虚飾は私は望まないねと云はれたら夫れこそ困る、凡べて那麼物以外に女を滿足させて呉れるやうな事が出來るか何うだか第一夫れが心配だ、から、尚且着物でも拵らへて貰つて喜んでる方が始末がよからうと思ふ、なまなか脱俗でもされて坊主臭くなられては堪らない、私はます〳〵浮世氣を出して着物でも欲しがつて彼の方の帶が好いのお襦袢の襟の色が好いの抔と云つて夢のやうに日を送らうと思つた、而して質素に送るも一生なら華美に送るも一生だから何も好んで質素にせずともの事だ。

○

何うせ私なんかのやうな者の考へは此の位な者だと一寸悲観をして見る、けれども學問の有る歴毅とした御令嬢方の御考へだつて尚且此の位なものだらうと高を括つて間違ふかも知れないけれどもまア大した相違も有るまい、何と云つても尚且女は女だから美しいものが好きなのは定つてる、して見ると藝者の晴着だつて密かに目を通して、羨しいと云のは殘念だから人知れず歎息されるかも知れぬ、凡人の私が喜んで讀んだのも強ち無理もなからうと餘り芳しい事でも無けれど自分の事だから一寸提灯を持つて置く。(一月十七日記す)

妻たるの資格に就て

此程女子大學出身者の組織せる櫻楓會家庭部にては現代の社會、状態を研究するの参考として妻に對する夫の要求と題する答案を各地の會員に求めたるが其結果左のごとき具體的の計數を得たり。

▲妻に對する夫の要求

平均年齢　夫三十歳前後　妻二十二三歳位　總數二十の内

一、柔順なるべきこと　十八
一、夫の主義及び職業を解し眞の補佐者たるべきこと　十六
一、常識に富むこと　十
一、容姿に嗜みあること　八
一、夫の慰藉者たるべきこと　六
一、家政に忠實なるべきこと　六
一、社交的智識を有し常に進歩すべきこと　六
一、健康なるべきこと　五
一、經濟に巧みなるべきこと　五
一、確固たる信念を有すべきこと　五
一、裁縫料理等の手工に巧なるべきこと　四
一、夫には絶對に服從すべきこと　三
一、快活なるべきこと　二
一、貞節なるべきこと　二
一、禮を知ること　二
一、子女の教育に意を注ぐべきこと　二
一、社交に意を用ゆべきこと　二
一、品性修養に努むべきこと　一

一、無邪氣なるべきこと　一
一、受けたる教育を活用すべきこと　一
一、來客に快感を與ふべきこと　一
一、夫よりも舅姑に能く仕ふべきこと　一
一、夫に庖厨を語らぬこと　一

以上の統計を解說して曰く、妻に對する要求といふも、畢竟は我妻に缺けたる點を要求するもの多きなり、されど大體其要求のある所は推知するを得べし、而して右の要求の內、夫の職業及び教育の程度によりて自から異る所あるを見出したり、卽ち教育ある男子は妻にも相當の教育識見ありて、己が職務につきても相當の理解力を有し話相手となるべきことを望み、教育程度の低きものは之に反し、妻が能迄柔順にして家務に忠實に、夫の職業に干涉するを好まず、一意己の意に背かざらん事を欲し、又妻の交際の廣からんことを願はず、教育の高きを求めず、普通讀み書きに差支なきを以て足れりとするの傾あり、職業に就ても實業家(會社員技師等をも含む)軍人辯護士等は身嗜みよく、柔順にして家庭の內に業を扱ひ、社交及び會合等には餘り出でず、夫の職業及び行動に關しては兎や角いはれぬことを要求し、教育家、事業家、醫師、宗教家の如きは己が事業職務に對して充分の興味と同情とを有し、共に補佐する程の實力あり、思慮あり、信念を有する、妻を要求せり云々。

次に又同じく主婦に對する舅姑の要求する處を求めたるに大略左のごとし。

▲主婦に對する舅姑の要求

（總數十二ノ內）

一、柔順にして謙遜なること　十二
一、姑舅を尊敬し家事の相談對手となると　十
一、家政に意を注ぎ必要なる手藝の嗜みあること　九
一、家風に從ふこと　五
一、經濟の心懸け深きこと　四
一、能く立働くこと　三
一、智德の勝れたること　三
一、健康なること　二
一、質朴なること　二
一、親切なること　二
一、容姿の嗜みあること、交際を廣くせぬこと、綿密なること、氣轉の利くこと、社交に巧みなること、無邪氣なること、無遠慮ならぬこと、舅姑を慰

めて貰ひたきこと、子女を愛撫し餘り叱らぬこと、里方の噂せぬこと以上各一

以上に依りて男姑の主婦に對する意向の大體を知るを得べく、要するに男姑は長き經驗より推して、舊習慣を守らんとするものにして、經驗なき新主婦は大にそれに學ぶべき處あり、されば主婦は以上の要求に鑑み、其採るべきを採り、盡すべきを盡し以て新舊思想の調和を計るべきなり云々。

鳩山女史の結婚論

此程の二六新報紙上を見れば鳩山春子女史の結婚問題として處女が自から進んで夫を選擇するは僭越の甚だしきものなりとの主旨にて大いに當代の流弊を排斥したるものあり即ち左に、

一體結婚と申すものは女の方から申込むべきものではない、女が自分から進んで夫を選擇するなど〻言ふ事は間違つた話で、幾程女の方で此の男は可しい彼の男は氣に入らぬと選り好みを致した處が、申込手がなかつたら何にもならないので厶います。何一つ完全に出來ない、一向人の振顧いて吳れさうもない女が理想の夫は德うだ彼麼だと獨りで得意になつてゐる程滑稽なとは厶いません。女は只、結婚の申込のあつた塲合に、其相手が甚麼ものであらうかと云ふことを考へて見れば宜しいので、夫も例外の酷いことのない限りは經驗に富みたる兩親なり後見人なりの言葉に從つて差支ないだらうと存じます（中略）夫でなくてさへ、女は喜怒哀樂の感情に强いもので、一寸したことがあつても種々と物を思ふ方の質でございますから、側から結婚は何うだの斯うだのと感情を刺激するやうなことを聞かせますと、夫によつて警戒されるものは少なくて却つて惡鬱性の病氣に陷つたり、身體を損れたりするやうなものが澤山出來るのでございます。西洋のお話でございますが、或娘さんが病氣になつて種々手を盡したけれども癒らない、最後に或名醫に診せますと此病氣を治療するのは阿母樣でなければ不可ませんと申しましたと云ふとが厶います、此は餘り四圍から種々結婚などに就て刺激挑發になるやうなことを聞かされた結果、病氣になりましたので、其を療治するには如何しても阿母樣が適當な良い夫を選擇して結婚させなければならないと云ふので厶います。

西洋では此頃結婚するものが次第に減じて行くと云ふことでございます、日本も追々然うなつて來るかも知れません、何故と申すと、女の方は何時結婚したつて差支もございませんが、男は如何しても獨立で生活して行けるだけの身にならないと結婚する譯にはゆきません、從て男が金のある家の娘を妻にして女の里から貢いで貰はうとか（これは心ある男子の恥る所ならむか）共稼をする女を求めて結婚するとかすれば兎に角、夫でなければ自然結婚の時期も晩くなり又結婚しないで過す人もあるだらうと思はれます。夫故此からは世間の女が皆が結婚するもの

ではありません、何時申込のあるかも知れないことを空頼みにして、男子の選擇に躊躇致してゐるのは誠に詰んお話で、相手の可否は其場に臨んで考へても決して手遅れとはならないと存じます。只女の平常の心掛けは結婚しても、しなくつても可しい。不婚は昔日の如く耻辱ではないたゞ一人前になりだれば依頼心許を起さずに職業に從事しても家政を助けても孰らでも宜しいから、世の中に有用の人間にならうと思つてゐることが必要で、女が自から夫を選擇して結婚しやうなどゝ云ふことを考がへてゐると飛んだ間違を生じたり、大變な目に遭つたりして終には身の破滅を招くやうなことになります。彼女は決して斯る觀念を懐いたり又これが爲めに自ら諸方に交際を求めたりするものではありません。

主婦と下婢のお役目

左の表が果して主婦と下婢との役目を盡したものであるか否かは知りませぬが、私は此表に依つて働かせてゐます御參考迄に御報申します

（某主人公）

△主婦の役割

一、各室掃除	毎朝
一、手洗水換、同手拭換	同
一、火鉢掃除、火入	同
一、洋燈炭入	同
一、鐵瓶水換へ	同
一、食後食器拭き	同
一、家計簿	毎夜
一、戸締	毎夜
一、洗濯便所手拭	毎月曜
一、糊つけ	毎火曜
一、布團干	一週一度
一、各押入便所掃除	毎金曜
一、訪問	第一日曜
一、通信	各土曜夜

△下婢の役割

一、庭掃除	毎朝
一、雑巾掛	同
一、みがき茶碗、皿、箸、香爐	各水曜
一、同バケツ、金盥、鍋	第一木曜
一、灰のけ、七厘、かまど、火鉢	各木曜
一、掃除、下駄箱、同押入、下駄	各金曜
一、同便所、同押入（主婦手傳）	各土曜
一、洋燈掃除	毎朝
一、雨後傘干し　足駄洗ひ	
一、入湯	月水金
一、髪洗	一日、十五日

一、食物の調理に取かゝる前には必ず手を洗ふ事

一、掃除雑巾掛を終りたるときは直に手を洗ふ事

一、髪結ひの後には直ちに石鹸にて手を洗ふ事

ランプ掃除の時も同斷の事

庖廚

洋食道樂

小式部

詩なく、音樂なく、美術なくとも、吾等は生活するを得ん
眞心なく、また愛情なくとも、生命は保つを得ん
友なく、書籍なくとも、暮らすを得べし
されども、文明開化の人は、料理する人なくては一日も長らへる事能ふまじ

とは料理を歌つた西洋の詩で御座ますが、何と面白く言ふてあるではありませんか、實際料理は人間生活の根本でありますもの一日も缺かす譯には行きません。料理と申しますと、いやに六ケ敷計在つて詰らないもの丶樣に思召す方もありますが、決して其樣なものではありません、世の中に樂みと云ふ樂みは隨分數多くあつても、此の御料理の實驗程、變化に富み、趣味に充ち且つ有益なる結果を齎すものは外にありません精神を籠めて之に從事して見ますと、種々の發明の刺激となり、注意力の養成ともなるものであります。

料理法に就て先づ心得置く事は、最初が材料の撰擇でありますが、物品の善惡を識別する爲には、鋭敏なる觀察力と周密なる才能とが大切であります。斯樣にして材料が調へられたなら、之を適當に調和して扨て那麽結果に成るだらうと待つ間が却々樂みなもので御座ます。詰らぬ遊戲などに耽つて娯しむよりも何れ程愉快だか知れません、而して取別け六ケ敷い御料理を試みて其が思ふ樣に理想的に出來た時の心の滿足、心の勝利と云ふものはまた格別のもので、例へばオムレツを料理した時に好結果に行つて多勢の御客樣方に賞味さる丶時などは樂みの極致であります。

　阿父樣が「孃の拵へた油煎肉は素晴しく旨かつたが那麽旨いのは生れて始めてだつた」など丶仰有る時、又は母樣が御病氣で何を召上つても旨しくない時に、何か上手に御料理して差上げ、御機嫌の好い御顔を拜した時などの嬉しさと云ふものは什麽でせう！。

　又た、自分の愛する妻の手で、並の料理とは違ひ、

一風異つた新趣向の料理が調へられた時、之に箸を染むる良人の心は什麼に愉快か知れますまい。

這麼譯で割烹の智識に長けて居るのは女子に取つて勿論必要の事でありますが、別ても病人には如何なる料理が最も適當だらうと云ふ事は、よく〳〵承知して居ねばならぬ事ですからして、先づ此の方面から研究することに致しませう。

西洋粥――是は御存知ない方が多いやうですけれど西洋では虚弱の人の爲めにとて特に調理致します。此の粥を拵らへますには先づ小麥を臼で粉に挽きまして之を何時間もよく煮て後に漉すのです、漉したのを其儘でも宜いのですけれど、之に牛乳、乳酪、又は卵子等を交せ、時によりては之に香味を着けることもあります、斯樣にして出來ました粥は非常に滋養分に富んで居つて澱粉よりも宜しいのです、粥の御料理は只今申したやうに至極簡單なものでありますけれども、愈愈實驗に取掛らうと云ふのには少くとも火と醬鍋と匙とを用意しなくてはなりません、料理の實驗は何によらず、規則立つた仕事でありますから、手足を使はずに安樂に出來ると思ふと方角が違ひます。其れで却々手足の汚れる仕事ですから娯樂に實驗されやうとならば、瓦斯を通はす爲めに管を買つて來て、此の管と瓦斯燈の管とを連結して机上に持て來るのです。而して小さな煖爐を机上に置て瓦斯煖爐を設置するのです。

次には色々の器具を用意せねばなりませんが、第一に必要の物は油煎鍋で之に種々の皿がなくてはなりません、それから釉薬を掛けた鐵の蒸鍋が必要です、而して小さな醬鍋もなくてはなりません、其他線金で作つた籠、錫製の肉汁濾器、木の匙が二本鐵のが二本料理用のナイフと、ホーク卵子を掻き立てる針匙、肉几、絹篩、而して御馳走を料理する料理槌とを用意せねばなりません、此他に未だ皿掛巾、タオル等の物が入用ですが、是は常に少しでも汚れぬ樣に奇麗にして置かねばなりません、而して料理場などに持て行くものではありません、すべて料理の道具は洗つたり磨いたりして、何時も綺麗にして置くのが緊要でして

汚れた時には僅少の曹達と銀砂が有りさへすれば驚く程綺麗にして置くことが出來るものです。勿論手を汚さないやうに注意が大切です、料理に熟練して來れば手を汚す様な事はありませんが、若し誤つて汚した時には、水にアンモニヤ水の二三滴を落して之で洗ひますと、汚穢は直ぐに除れて了ひます、其の後でグリセリンを附けて置けば手は白く成つて立派に見えます。

よく若い人達は料理の實習を爲ると部屋が穢くなると言ひますが、其れは實習を積まぬので未熟だからです、實習に熟練を積みますと卓上は勿論の事疊の上でも絨氈の上でも一點も汚す様な事はありません、私などは立派な部屋で一週間も料理をした事がありますけれども、未だ一回でも一寸でも汚したことはありません、是は私のみならず皆様左様仰有います、料理は人の想像する様に六ケ敷いものではありません。

次に油を引いた布巾を用意する必要がありますが、是は是非無くとも宜しいので、疊が敷いてある時、又は絨氈が古く成て居たりする時には、其上に此の布を敷いて仕事をすると大層氣持の好いものです、衣服は別に料理するからと云ふて着更へる必要はありませんけれども、只だ前垂掛と胸當とを懸けて、後ろに兩端の紐を廻して確乎と結んで置くのです、而して前垂の右側の方には大きいポッケットを附けて置いて、手巾や手帳を入れる都合にして置くと調法である。

扨て斯様に用意萬端整ふて、確乎と武装されましたからには、如何に戰爭すべきかと云ふのが問題であります、先づ第一には材料を撰擇しなければならんのですが、此の撰擇と云ふことが料理には甚だ趣味ある問題でして、例へば卵子を店に買ひに行く場合に、二錢の卵子三個買ふのと、三錢のを二個買ふのとは、價格の上に於て同様であるが、實質は孰方が良いだらう、と周到の觀察を致さなければならんのです此の様な場合は其他にも隨分起る事ですから、家政に於て消費と云ふ事に注意することは極めて必要であります。

それから料理者には何々を拵へるには是々のものを何程要すと云ふ事を細かに敎へてありますけれど、料

理には段々熟練して來ますと、僅少の物を使つて却て上等の御料理を調製することが出來るものです、而して料理書の内には杜撰のものもありますし、又た隨分大袈裟の事計書いてあるものもあります故、初歩の人は先づ書物に依つて材料の撰擇を覺え、實習をなさる時は可成的小規模にして、其の結果を本と對照して研究するのが一番有益で且つ經濟的であります、一寸手輕な料理の仕方を列記しますが、是は極く簡單に出來て又た煖爐なども何んな種類の物でも可いのです。

△スクランブルド、エッグス

胡桃大のバタを煮鍋にて熔かし、卵子を二つ割つて入れ、牛乳、クリーム、肉汁を一匙宛と鹽の一匙及び胡椒の小量を注入するのです。而して卵子の固まるまで黄身を壞さぬ樣にして之を攪拌します、(卵子の全く固まる迄には四分間位要します。そこで固つた物をバタ附の燒麵麭の上に擴げるのです御好みに依ては燒麵麭に塗バタの中に鹽を少し加へても宜しいのです。

△エッグ、カツレツ

心して料理すると此カツレツは誠に旨いものです。三つ四つの卵子を凡そ十分間程煮て後に一二分間之を冷水に浸すのです、すると皮殼は容易に取り去ることが出來ます、そこで卵子の兩端を切つて之を四つに輪切に致し、其の各片を卵子の黄身ばかり溶解したものの中に浸し、扨て之を能く碎いた麵麭屑の中に入れて塗着します、此の時に胡椒と鹽とを混せ、且つ洋芹を混せますと却々高尚の風味になります、其れが出來たら、今度はバタを用意し(四個の卵子に付バタ八匁)之を油煎鍋に入れて熔かし、此の中に前に拵へて置いたカツレツを入れ、一分間程置きますと、片方の色が褐色になりますから、次には引繰返して他の一方を褐色になるまで入れて置くのです、而して兩方褐色に成つた所で止め、鍋から取出して、之を紙を敷した皿の上に置きます、是は鍋から出してから一二分間位の間が食べ頃ですから、出來上たら直ぐに濃い肉汁をカツレツの周圍にかけて食べるのです。

△サアヴオリーオムレツ

小さな油煎鍋に八匁程のバタを入れて能く煮えた時（此時に色が褐色にならぬ樣に氣を附くるとが大事です）、よく打碎いた卵子を二つ許入れ、其にミルク、クリーム、洋芹の截つたのと、それから鹽と胡椒の一撮とを混せて三分間程煮るのです、此時に火を除り强くしますとオムレツが焦げて了つて駄目になりますから初心の人は氣を注けるのが必要です、次に鍋の中に卵子の溶かしたのを注ぎ、鍋を火の上で支へて、卵子が端の方に來る樣にしホークでオムレツを鍋の端の方に轉すのです、そこで今度は鍋を輕く動搖してオムレツを固まらすのですが、是には二分間程要ります、若し二個限の卵子で此の料理を致した時には、鍋の中で出來たオムレツを二つに切つて、之を重ね卵子形の座蒲團の樣に致すのです、斯うして出來たオムレツは金褐色を呈して却々美事なものでありますが、出來上つたら熱めた皿の上に直ぐに直すのです。

△オイスター、フリツタース

麵包料を次の如にするのです。即ち米利堅粉二オンス（十五匁）程を食匙に六杯程の水を交せるか、又は水の代りに牡蠣の肉より搾り取つた水と交せるかして之に油一匙と卵子の黃味とを注し、なほ鹽と胡椒を一撮程加へて、一二時間程放棄つて置くのです、そこで卵子の白味を泡立つまでに攪拌して、小匙に八分目程の麵包料と交せて固まらせるのです、斯うして置いて今度は牡蠣の芒刺や硬い部分は取り去つて、其の中身に前に用意して置いた麵包粉を一食匙程かけ、之を蒸鍋の中に入れるのですが、鍋中の油は牡蠣の半分を充たす丈あれば十分です、而して半面が褐色に縮れた時に他の半面を返して揚るのです、そこで兩面揚つた時に魚の薄片と共に此の牡蠣を取出して、油は紙に吸はせ熱い皿の上に移すのです、前に申した麵包粉の量で七つ八つ位のフライは出來ますが、此の方法で致しますと、蜜柑、林檎其他の果物を甘くフライに上げることが出來ます、而して此のフライを料理する時には、よく汚すものでありますから御注意が大切です、鍋の油などは後でも役立ちますから保存して置くのです。

流行の粧飾品

◎指環――寶石入と彫刻ものの勢力あり殊に金剛石は貴婦人令孃に缺くべからざるものとせらるゝに至り、次で眞珠、ルビー、エメラルド、サファイヤなど貴ばれ、眞珠は天然玲瓏のものを貴び、養殖其他人造眞珠はいたく擯斥せらる、寶石は夫婦形、波形、扇形として細は一般に細きもの流行す、彫刻ものは白金交りものを優美なりとし、花の匂、果實等に眞珠と交ぜて嵌入せしもの又雅致あり。

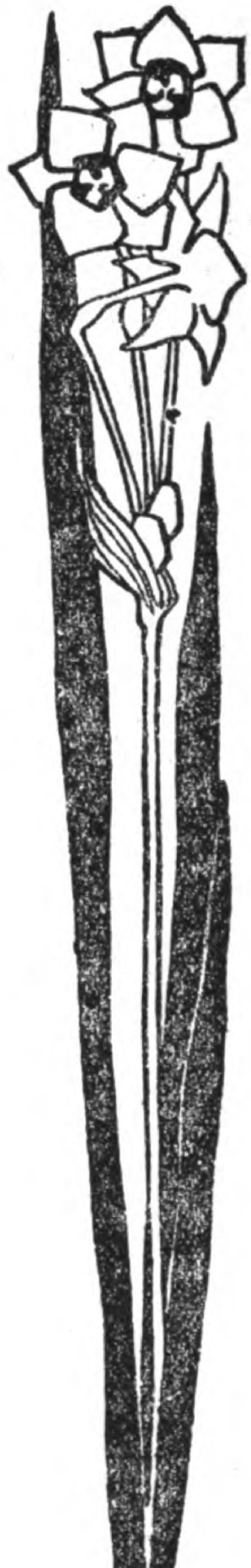
◎帶留――金具は相變らず金、銀、赤銅、燻銀又は七寶入にて、嗜好は已に濃厚時代を去りて單純清楚の時代となれり、何れも金剛石、眞珠を體裁よく嵌入して白金、スアカ、赤銅の色繪を畫きしものなり、紐は厚板、緞錦瀨等最も行はる。

◎櫛笄――これは依然として黑鼈甲全盛を占め、峰にて金蒔繪を施すか、又は芝山入りのものにて、黑甲の齒形に純銀又は廿金の峰を嵌め込みしもの流行の兆あり、形は遠州形にして總じて峰の細きもの賞美さる、笄は黑鼈甲の蝶貝入か蒔繪研出し、又は純銀廿金を嵌め込みしもの流行す。

◎簪――上品向と粹向きとの差別なく平打透し彫のもの大いに流行せり而して光琳風の韻雅を帶べるもの專ら用ゐられ白金、金剛石、眞珠を配色したる高尚なるもの貴婦人社會に勢力を占めて、意匠の斬新を競ひ居れり、最も高雅なるは雪の花崩しとして兩面に金剛石眞珠を鏤めたるもの流行せり。

◎根掛――珊瑚珠の四分五分玉にて、色は薄桃のもの今も昔と異らず、儀式は勿論晴れの場所に缺くべからざるものなり、亦略式の上等ものは一般に寶石入彫刻付金製にて、巾は三分、之に透し彫をなせるもの掛心地可しと持囃さる。

◎束髮簪――時の好みはブローチ兼用にて寶石入のものと限らる、圖案は和洋折衷のもの趣き深く、すべて眞珠ルビーを嵌めて優麗を競へるもの歡迎せらる、即ちハート形に孔雀の羽を取合せるもの、リボン結びに音符を横へたるもの等最も流行の模樣なりと。(下谷池の端玉寶堂調)



思ひ出多き我が生涯

元高輪御殿御用掛　小川直子

正面の床の間の長押に嚴かに懸けられてある額これは、高輪御殿にまします　常宮周宮兩内親王殿下の、端然たる御立姿の寫眞でムいました。床の幅は刀自の恩人の一人と聞く故中村敬宇先生の書。此方に懸けた額は又重野安繹博士の揮毫に係る大字の四字、いかにも美事な筆蹟でした。博士も亦刀自に取りて忘るべからざる恩人の一人であるさうな。然も又これ等の額や幅は、刀自の身の清らなる馨りに薫ぜられて一層匂ひやかに映え渡つてをる心地が致します。刀自は早や七十路近き高齢に見へまするが、氣力猶健やかにして、殊にもその人品の打上りて見ゆるところ、げに内親王殿下の侍講たりし婦人ぞと一目にうち首肯かるゝのでムいます。切髪の被布姿も尋常ながらにさも奥床しく、さりとて心おかれず隔てなく物語られました。次の室には刀自の薫陶を受けんとて望みて寄寓しをれる女生徒さんが、三人四人語り合ふのも樂しげに聞えます。總じて蕭然と物靜かなる一構、此處芝三田なる、刀自が心安らかに老を養はるゝ閑居の一室に、語り出でられしは追懐多き刀自が身の上の變化の數々、聞けるがまゝを筆に致しました。(芙蓉生筆記)

▲苦しくも又樂しき幼時

父は加賀の藩士で河島良左衛門と申しました。中納言樣がお十四父が十八で、お側附を務めて結構な身分で暮してゐましたが、後に病氣の爲お役御免となつた其折に私が生れたので、家も不如意ではあり、それやこれやで祖母の發議で、既に或百姓の家へ呉れられてゆく處でありました或日愈々その百姓夫婦が迎へに參りました。が私は嬰兒で何の心もありません。これは後で聞きましたが、その折兄と姉――これが又私を非常に可愛がつてくれましたので、私を庫の隅へ連れて入つて了つて、どうしても遣らないといつて聽きません。其麼事で自然祖母の我も折れて、貰はれてゆく事も止めにはなりましたが、然し然ういふ不如意の中で育ちました。それ故手習をも自分からさせて下さい爲せて下さいと、強請みに強請んでさせて貰つたので、讀書、算術、何事も皆さうでございました。然し父母を初め兄姉、殊にも兄が大の學問好きでございましたので、敎へても呉れちよい〳〵直してもくれますし、苦しい内にも一家は春風のやうに和合して、實に樂しく暮しました。

▲才藻早く現はる

何でも習ふ事が大好きで、習ひたい〳〵で一生を暮しました。今日でもまだ其心で居ります。これがまあ私の今日ある所以でございませう。好きと熱心との恐ろしさ、九歲の時でございました、敎へられもしないのに恁ういふ歌があつたのをすら〳〵と讀み下しました。「うきながら消えせぬものは身なりけり、うらやましきは水の泡かな」。この泡といふ字を私が知る筈がないのに、と母が驚きまして、「あれ！お前どうしてそれが讀めたのかえ」と申しますから「でもこゝはどうしてもあわで無けりやならん處ですから」と申しますと母が「それは善いこつちや、さういふ方から本を讀んでゆくといゝ」と申した事があります。また九九を知らぬ内に、疊の目を恁う指で突いて數へながら「あれ

妙だなア、二つと二つで……これで四つになるわ、三つが二つで……これで六つ！」など〻獨言を申してをるので母が、「お前さういふ事を習ひたいなら九九といふものがあるから」と申して敎へてくれた樣な譯で、何でも我が身から物を習はう習はうでやつて參りました九歳の時に俳句を一つ。「門あけて見れば向ひの松がすみ」といふのを作りました。實縣で、或日門に出て見ると向の家の松の大木に、霞が風情面白くかゝつてゐたのを詠で見たのです。本が好きで、用事の隙々に假名物を多く——八犬傳、水滸傳といふ樣なもので、雜書は隨分澤山讀み、又歌がごく好きで、澤山習ひ覺えましたが、十三の時に、ひよこつと一つ歌を詠みました。其をまあ大層父が喜びまして、それを清書させて、私を伴れ



て天滿宮へ參詣し、神前に奉納して私の將來を一心に祈願してくれましたのです。それを思ふ毎に「あゝ親は有難いものだ！」と思はず涙を催すので、六十年來幾度これを思ひ出して泣きましたか分りません。（と語りながら刀自は又坐ろに落涙せられた）

▲其頃の空想

さて又その頃はよく這麽事を考へました。「あゝどうぞして京都へ行きたいものだなあ！そしてお公卿樣へ奉公したいなあ！さうすれば歌のお稽古が出來るに」。這麽事はほんに空想で、その昔はなか〳〵叶ふ筈の望でございません。けれど唯歌が習ひたい〳〵の一心で、夢にまで其麽事を見ましたのです。その後藩の道姫樣のお相手の者が御入用といふので、さあそれに上げて下さいと望みましたが、母が不賛成で「一生の御奉公も結構は結構なれど、女といふ者は夫を持つが何より有難い事。どうしても女は男に連れてゆくべきもので、夫ほど有難いものはない。何麽處へでも嫁入したのは女の運が開いたといふもの。女一人で立てゝゆかうなどゝいふは、末の賴みのないものだからいけませぬ」と申すのです。强ひてそれに背くでもありませんから止めて了ひましたが、思へば幼時の空想、京都の公卿へ奉公したいなどいふ夢のやうな望が、叶うたどころではない、却つてそれ以上に過分にも、宮樣へ上れたので、ほんに夢のやうな心地が致します。

▲一生の護符

それで私はよく生徒さん達に申しますが、本を讀んで皆が皆役に立つものではないが、その内一つ二つ何處か深く〳〵胸に當る處があるもの。何處がといふ事は各自で違ふが、人それ〴〵に心の底まで浸みて感ずる處が一つあるもの。それが大變いゝ事で、一句二句が一生の護符になります。さういふ心で本を讀まねばなりませんぞと申しますが、全く左樣で、私は九歲の時「道化百人一首」といふ輸入の本にあつた「樂といふ身になる時は若きよりつとめし種の開く花なれ」と

いふ歌に非常に感じました。そこの繪は美しい百合の花の傍に、良いお婆さんが一人休んで居る處で、子供心にもそれを見てひどく感じ入つたのでございました。何でも老後の安樂は若い時から辛抱しなければと九歳の時に深く感じたのが、一生の護符となつて、其お蔭で是迄辛抱は隨分致して參りました。又十八歳の時に「むさし野集」といふ歌集の中の「物ごとにくやしき今をたらちねのありし昔になすよしもがな」といふ歌に、又感じたも感じた、大變に感動させられて、「あゝ此歌を詠んだ人は幾らくやんでも詮ない事。自分は何うかくやしいと思はぬやうにしたいもの」と、それからと言ふものは何を爲るにも此歌を忘れた事はありません。「河島のお昌さん――私の初めの名は昌――に今に幸福が來まいかや。あのまあ孝行によくする事は」と幸にも風評されたのは其お蔭と思つて居ります。

▲短かき契り

小川幸三へ嫁しましたのは二十三歳の九月廿三日で、翌年の十月廿六日には夫幸三は藩のお咎めを蒙つて處刑されて了ひました。前後一年、まことに本意ない短かい契でございました。處刑と申すは夫が勤王の志を抱いて、いろ／＼國事に奔走したのが仇となつて、却つて藩からお咎めを蒙るやうになつたのでございます。さりながらこれも歎くには及びません。元來私が結婚の望は、どうか兄と話の合ふ樣な、何ぞ一つ――學問なり武藝なり何か一つ出來る樣な、恥しからぬ武士を夫に持ちたい、その代り知行が小さくても舅姑が四人あつても小姑が十人あつても關はないといふ意氣組でございました。ですから婚禮した當座、夫が私の里方へ酒の馳走に呼ばれて參り、父と話して歸つてから私に「お前は敵に後を見せる樣な人は夫に持ちたくないと言つてゐたさうだが眞正かえ」と申しますので、「どうでございましたか」と共々に笑つた事などがありました。

抑、結婚の成立が面白いので、といふは夫は次男で

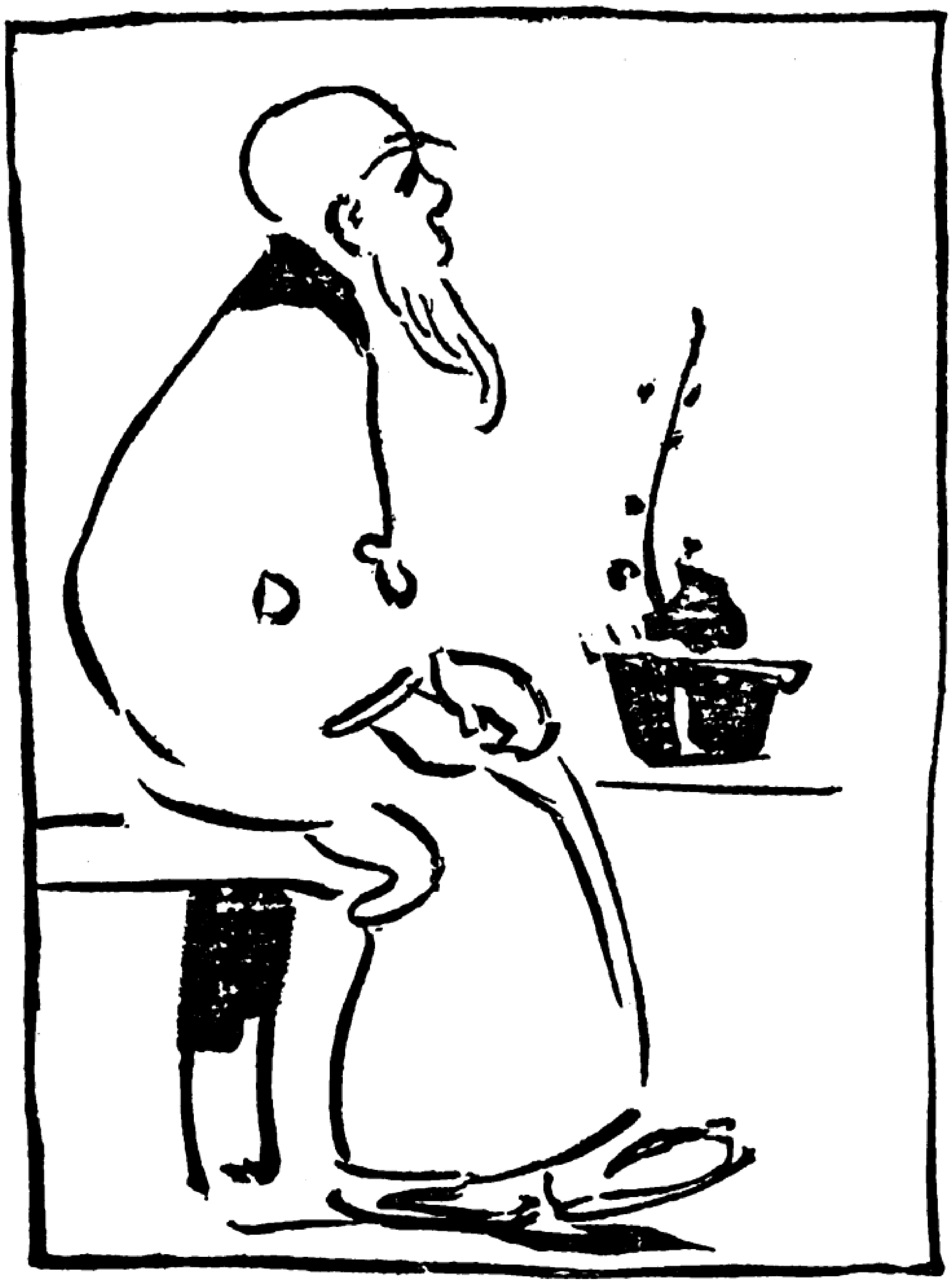
あつたのを、別にお取立に預かつたので、ほんのぽつちりとした小さい士族になつたゞけで、赤貧洗ふが如き有樣でございました。それを又媒介口といふも世にある事だのに、私の媒妁人は恐う申すのです。先方は貧乏です。まあ何にもありません。家も何もありません。唯旦那一人です。まづ河原乞食同樣。蚊帳が無いから袴を吊つて、それで顏を掩てるといふ始末。それでも德利は二十本ございます。といふは大の酒好ゆゑ方々から酒を吳れるので、その德利が溜つたのださうです。けれども人物が善くて文武共に備つてゐると申すのです。元來私の望が望ゆゑ、兄も夫幸三の作つた詩によつて、「この詩が腹から出た人間だから間違ひはない」と申して、全く其詩の句一つによつて私を遣しましたのです。先方へは又媒妁人が私の事を、裁縫でも學問でも何でも出來るが唯々不縹致。縹致は恐うございます。と申したので、「媒介人が如彼いふ位なら定めしひどからう。まあ隻眼か跛足位の覺悟して居れや」と申して居つたさうです。

夫は親切にしてくれまして、夫程有難いものは無いと母の申したのがげにもと思ひ當りました。それ故私は今でも生徒さんに「女はどうしても夫を持たねばなりません」と申して居ります。下田歌子さんなどは、夫が氣に入らぬお方だつたとか申す事で「厭だつたら夫を持たずともよい」と言はるゝさうですが、此處は私と反對なのでございます。此間も或若い御夫婦が互に餘り面白からず暮して居られるを見るにつけ、あゝ私などは仲が善かつた、それに仲の善かつた時期より外なかつたので、それ故私の命のあらん限り仲が善い、連添ふた間は極く短かく、一年といつても夫は國事に東奔西走してをりましたので、正味同棲したは二三ケ月間、ほんに短い事でしたが、然し却つて私の一生涯仲善くて居られるゆゑ、實に幸福な事だと存じてをります。

▲一世一度の嬉し泣

然し夫の刑せられた時は既う死ぬ覺悟でございまし

た。元來縁談がまだ決らぬ頃、流し元で茶碗を拭く思つてゐるには、これで話が決まれば既う我が身の夫は定まつたのだから、もしそれきりで夫が亡くなつても、一生それで通してゆくのだと、這麼覺悟でゐました故、死別れた時は既う自分も死ぬ覺悟、夫は罪人ゆゑ死骸は人捨場といふ處へ捨て置かれてゐます。で、葬式も出せないと申して私が泣き悲しみますので、兄も遂に決心致しまして、「宜しい。拾取つて來て葬らう。若しお咎めがあつたら吾が死ぬ覺悟でゐるのだから」と申して決行しやうと致した處が、「まあ待つて下さい。それ程に言はれるならば」と夫幸三の父一方と申すが、種々に手を廻して、どうやら取收めて來てくれましたので、窃かに野邊の送りをも濟しました。



さて夫の後を追ふ覺悟でございましたが、いろ〳〵に諫められ、又思へば夫の行は公明正大。やがて濡衣の乾く時も必とある筈。又折を得て寃を雪ぐは我が役目と思ひ直して、どうやら生き存へる心になりましたのでございます。後年私が京都に居つた時、靈山で志士の追悼會がありましたので、參つて見ると思ひもよらず、小川幸三の名もちやんと書かれて居る

のでございます。その時の私の涙は溢れて止まりません。ほんとの嬉し泣に大變泣いて了ひました。その後東京へ參つてから、これも亦思ひもよらず夫幸三が招魂社へ合祀されまして、贈位のお達しが不意に屆いたのでございます。私は既う人の見る目も何も忘れて了ひました。泣きながら嬉しさを有り合ふ人に話すのですが一向語が續きません。あゝ有難い、夫もこれで晴天白日の身になつたと、それからは既う全然重荷を下した心地で、心にかゝる雲とてもございません。

▲小學の女教師

寡婦になつてからは里方へ引取られました。無論復籍したのではなく、身體だけ引取られたのでございます。その後御殿へ御奉公に出ないか、大年寄（百石戴ける）に取立てると定めておくからと勸められましたが、もう世に出る氣は致しませんから辭退して了ひました。「かくばかり思ひすてゝし身なりとは知らでや人の世に誘ふらん」。その時の歌でございます。詞は拙くとも赤心を申したのです。實にこの通りの覺悟で、どうぞ草の庵に心を淸潔に持つて終りたいと思ふ心より外はございません。里方に居て仕立物などを致しまして、自分の食べるだけのものは自分で取つて暮して居りました。それで既う世に出る心は無かつたのですが、後に小學校の女教師に出ました。是非にと賴まれ、夫の友達にも勸められ、考へて見れば子供を產むといふ女子の務は既う出來ない身になつたから、せめて人樣の產んだ子を敎育すれば、自分の無駄な命も無駄でなくなる道理と、遂に出たのでございます。無論これは明治になつてからの事で、これが私の再び世に出た初めでございます。

さて出て見れば有難いとも結構とも。從前好きな書物をば、鶴見某といふ藏書家から借受けて讀んではゐましたが、遠慮があつて不便は免れなかつたのに、學校のは氣樂に讀めます。學資金を貰つて本を借りて勉强してゐる樣なものです。休日といへばもう喜んで讀書に耽りました。又餘暇に漢學、和學、理學を三人の

先生に通つて學びました。然う斯うしてゐる内に今度は師範校の教師になりましたが、何方でも私は時間を多く持たせて貰へば大喜びで、少しでも餘計教へる程が楽しみでなりません。缺席者の代りに當ると「まあ嬉しや明日も何時間教へに出られる」「おや、もう一時間經つたのかね」と拍子木や鈴の鳴るのを早い〳〵と思ひました。

▲職を棄てゝ看病

里方へ歸つてから、まづ恩誼深い兄に死なれ、次に又父をなくしました。けれど歸つて居つたので父の看護も十分に致しました。私が父の横の方に付いて居ります。すると父が此方を向きたいなといふ事を、父の言はぬ先に何となく私に分るのです。それゆゑ此方へ向けて上げませうかと申すと、「おう、今さう言はうと思つてゐた處だ」と申します。聲なきに聽き形なきに視るといふは、はゝあこれぢやなと竊かに思ひ當つた事がございます。母はずつと長生しまして明治九年に歿しましたが、その時は既う私は學校へ出てをつたので、職を辭して看病を致しました。前申した通り兄も父も亡くなる、御維新にはなる、宅も難儀して居りましたので、私の月給は半分は幸三の父一方の方へ貢いでをりましたが、一方歿後はそれも母の爲にと存じて、時折絹物でも製へてやりました。母は「まあお前、そんな事をしなくとも宜から、それよりもお前の用心に金でも蓄めて」と申しましたが「なに私は身體さへあれば」と申して、出來るだけは盡しました。母の亡くなつて遺物分けの時、私の致してやつたものが多かつたので、私は心中に「あゝ好い事をした！今金を蓄めてあつたら定めし例の、悔しい事をと歎かねばなるまい。これ以上は金が無いから出來ぬ。力一杯の事はして置いたから悔む事はない。あゝ彼の歌の頭に入つてゐたお蔭だ」と深く喜んだのでございました。嫂も居つてよく看病してくれましたが、その嫂が「まあこのお昌さんといふ人は、どうすれば此樣によく氣が付いて根氣が續くことだらう」と申してくれました。夜

御に來てゐる親類の誰彼なども然う申し合つて居りましたが、これも母が幼少から可愛相なと人がいふ程、私をこき使つて仕込んでくれたからの事でございます。

△郷里を出づ

「私は是非東京へ出ます」と始終母にも申して居りましたが、明治十年に青森の學校へ行く事になりました。その途次東京へ出たので、第一に訪れたのは中村敬宇先生でございます。私が先生の名も知らぬ頃、「母の心得」といふ先生自著の本を、「加賀に小川昌子といふ婦人があるから」といふて人傳に一部下されました。私は深く有難い事に存じて居りましたので、第一番に參上しました處、御病中も厭ひなく親切に御面話下さいました。さて其折お茶の水の女學校を中村先生が遊ばしての事ゆゑ、參觀しますと、豐田芙蓉子、松本荻江さんなどが教へて居らつしやつて、それ等の方々を又中村先生が、時間を設けておいて教へて居らつしやる。それを見た私の羨ましさ！ 羨しくて／＼堪りません、けれども約束は約束ですから、仕方なしに青森へ參りました。其處に三年居つてまだ離さぬのを、無理に／＼東京へ出て參りました。全く學問をしたいばかりの一心でございます。

すぐに中村さんへ伺ふと、舍監にとの仰、處が私は雜務は嫌だと申してつひお茶の水へは出ぬ事になり、知己の許に居つて學問して居る內、重野さんへ、お孃さんのお相手旁置いて頂く事になつて、其處で漢學を勉强することが出來、又和文は本居先生に習ひました。東京へ出て學問したい／＼と永年申し暮した望が達したことですから、一生懸命であつたは申すまでもございません。

けれども然う／＼重野さんに御厄介になつても居られませんから、滿一年で翌十四年三月に京都の女學校へ參りました。重野先生がいゝから安心して居れ。その內には女學校も建つから」とくれ／＼も仰せられたのを、强いて參つたのは愚かな事で、その後東京には

華族女學校が建ちました。京都へ參つたのは一生の失策。もう東京へ來たくて〱、京都に居つた九年間といふもの、ほんとに

▲東京は戀

でございました。されども京都で善い事もありました。上田重子さんといふ詠手――東京の中島歌子さんなどゝ並べて言はれる方――へよく伺ひましたが、重子さんが病中の一日、私の顔を見ると「まあ小川さん」と突然愚痴しなさるのです「昨日は何うとか斯うとかで、高崎(正風)さんは來らつしやるし私はもう……」と大變な愚痴しなさりやう。そこで私が「それは貴方何を仰有るのでせう。有難い事ぢやありませんか。かういふ草の庵へ高崎さん見た樣な方が來らつしやるのは願つても無い事、と喜ぶべき事を貴方は愚痴して居らつしやる。物は思ひ振りをよくしさへすれば何にも苦しい事はない。私此間斯ういふ事がありました。机に向つて書物



を繙いてゐると、ふつと恁う明るくなつたやうな氣持がして、見ると日の光はほんのりと障子に射して、よい心持に晴れ渡つた日和で、何となく嬉しい樂しい氣分になつて、ほんに恁うして靜かに本を讀んでるのは結構な身の上、と思つて最う不足も何も一切忘れて了ひ、極樂に坐つてゐるやうに思ひました。そこで「目の前にある極樂をよそにして今日まで何に迷ひ來つらん」。「世を憂しと思ふもおのが心にて足る事知れば樂しかりけり」。貴方も思ひ振りをもつと善くしなさい」と申しました處、「はあ貴方は其麼事を言ふのかね。それなら紹介して上げる人がある」と言ふて相國寺の獨園和尙に手紙を書いてくれましたから、それから弟子になつて常住參つて、碧巖經の講演を聽聞したり、考案を貰つて工夫したりして、心を練りましたよ。和學の方は近藤由助さんの處へ——本居先生の指圖で——參つて萬葉集を習ひました。その御夫婦が又大變可愛がつて下さつて、日曜毎に田邊わけ子さんと共に伺ふのを待つて居らつして、講義が濟むと毎時晝飯の御馳走をして下さる。それが又樂しみだつて！　それで先日も奥さんに手紙を上げて「あんなもう面白いことはございませんよ」と申したことでムいます。

▲吊臺は極樂

廿二年に再び東京へ、川瀨秀治さんの二人の令孃の家庭教師になつて參りました。實に好い都合で幸福を致しました。處がその後病つて大變惡かつたのです。靑山博士に診て頂くなどゝいふ騷ぎ。それで大學病院へ入院しなければといふので、吊臺で本鄕まで舁かれて行きましたが、それが又少しも苦しくありません。今度は旣う死ぬ事とすつかり定めてをりましたから、心が樂で何の雲霧もかゝりません。爽然した好い氣持でございました。後に「あの吊臺の上の樣な、あんな樂な心持の處はなかつた」と人にも話した程ですよ。さてその折は室が無くて入院が出來ず、夫の友達なる知己の家、それから又重野さんに移つて療養し、駿河臺の佐々木さんに診て頂くと、これは六年程も海岸へ

行つたら宜からう、その内に死ぬとも生きるとも定まるからと申されましたが、別に行く處もございませんので、故郷へ歸りました。幸にも甥が醫者ゆゑ其處に居れば入院も同樣、又姉が眞によく看病をして呉ましたので、そのお蔭か、存外に早く治つて了ひました。さて治つて見れば又出かけてもと存じてゐると、故品川(彌二郎)さんから出京せよといふお勸め。それで二十四年に三たび東京に出ますと、品川さんと高崎さんとの御力によつて、

▲思ひもよらぬ雲の上

に勸める身となり、畏れ多くも兩内親王殿下の御教養の一員となり、十二年間高輪御殿に勤めました。これは既う眞正に望みもかけぬと、眞に過分の幸福でございます。上りました時は　常宮樣がお六つ　周宮樣がお四つで、まだお幼うございましたが、小川々々と仰有つて、まことにお可愛らしうお懷き遊ばしてゞございました。今も始終思ひ出しますが、長い間如彼もお懷き遊ばしましたことゆゑ、御終身お忘れ遊ばしませんなと、愢う思へば身に餘る嬉しさに堪へられません。上りましてた初めには御殿の定めを存じませんので、模樣の羽二重の襟を懸けべきでございますのを、私が地紋のある白襟を懸けてをりますと、宮樣が「小川は立派な襟かけとるな」と御意遊すのです。お遊びのお相手でも何でも固より致しますのでございますから、時には「一寸人形樣抱いておくれ……おしつこをやるのだから……おまるを持つて來ておくれ」などと仰せになります。さて何を差上げてよいか一向分りませんので、高輪御殿の奧樣——と申しますと佐々木伯の令夫人貞子樣でございますが、伺つて見ますと、襷を愢うくる〱と輪にしまして差上げるのだと申すやうな譯。やれ汽車に今乘つたら何うとか、櫻の花がどうとか、種々なことを御意遊ばしてお遊びになりますのが實にお可愛らしいのでございます。私は元來物を絡ることが上手なので、時折綺麗に絡つて献上致しますと、それが又お嬉しうてお嬉しうてならぬのでご

ざいます。何でも美麗なものを御覧遊ばすと、「小川の絡つた鞠見たいだ」と仰せられます。羽根をおつき遊ばして、羽子がお長押の上へ乗つて了ひました時、鳥渡扇子の先で落して差上ますと、「小川何でも上手だ」。ほんとにお可愛らしうございます。或時常宮様――お姉様で入らつしやいます――が、お髪を前へお下げになつて「お化け――」と仰せられますと、周宮様が怖いといつて逃げてお廻り遊ばします。今度は私が眞似を致しましたところ、「小川のは優しいから怖くない」と仰せられるのでございます。「左様でございますか。小川生れてから初めて優しいと仰しやつて戴きました」と申し上げて、其事を奥様、即ち伯夫人に申しまして大笑ひを致した事がございます。上りまして初めは私一人。それで宮様は「小川はえらいものじや」と思召して入られせられるので、又さうないと御信仰が付きませぬから、奥様方もさういふ風におもてなし遊ばしたのでございます。上つた折の覺悟では、分に過ぎた畏多い事ゆゑ、餘り長いこと務めずに、鳥渡旨い處で退かうと思つてをりましたが、どうもお懐かしうございましたものですから、又一年又一年と遂々長くなりました。お稽古衆の皆様が立ちましてからでも、さういふ譯で其儘に居りましたが、然し櫻も散りてこそと存じまして御免を願ひました。さりながら、宮様は何も御存じ遊ばしませんものですから、平常の通りお稽古を致してをりました。然し私は心の中で日々お名殘の近づくを思ひつゞけて居つたのでございます。その内に願が聞屆けになりませぬ前に宮様もお聞き遊ばしましたので、一日例の通り參上致しますと、はゝあこれはお聞き遊ばしたなと直ぐに胸に響きました。それでも例のやうにお稽古を申して、立たうと致しますと、宮様がぽろり／＼とお泣き遊ばすのでございます。もう私も堪らなくなりまして泣くのでございます。さうするとお附きの人も皆泣いて了ひまして、とう／＼一時間ばかり唯泣いて居りました。それでも心を勵まして、「小川は最う年を寄りましたから、麁忽を致すと悪うございます。それゆゑお暇を願ひました。

今お暇を願ひますのは何も落度があつて退くのではございませぬから、どうぞお喜び遊ばして下さい。たとへ小川は退きましても、宮樣の事は一日もお忘れ申上げは致しませぬから」と、猶彼是やを申上げて盡きぬ名殘の涙にくれながら退出致しました。その折の歌

はら／＼と御袖にかゝる白露の
　わが身にしむも畏かりけり

その夜歸つてから、何うにも斯うにも眠られません。宮樣の事ばかり考へて夜を明しました。

かしこくも君思ふとて宵々に
　袖しぼるとは誰れか知るべき

それを書きまして、佐々木さんまで差出して、宮樣に御献上を願ひ上げました。

▲草の庵

つまり草の庵より出でゝ、もとの草の庵に戻りましたので、何にも不足を感じません。身に餘る光榮を思ふて樂しく嬉しく暮して居りますから、お蔭で人樣の御ひいきを受けて、彼方此方へお招ぎに預かり、樂しい事ばかりでございます。あゝ今日も佳い日を送つた、有難い事だと聊かも不足などの起つたことはございません。まづ私の一生を申せば、物の思ひ振りをよくすといふ事、九歳の時に身に浸みて感じた歌、孝の歌、さては我が身から習はう／＼といふ心、この心は今日とても少しも變りはなく、私は一生習はう／＼で暮すのでございます。そして唯今の安樂は偏に　兩宮樣のお蔭だと身にしめて戴いて一生を暮すつもりでございます。

紹介

◎田園都市　内務省地方局有志編纂

歐米諸國に在ては都市改良、農村興新の問題年を逐ふて益々繁を加へ、都市と農村とに就て各々其長を採り短を補ひ、最新の施設を以て自然の美と人工の精とを調和し、健全醇美の樂郷を造らんとして殊に其意を用ゐつゝあり、本書題して田園都市と云へど、事苟も以上都市農村の經營に資すべきものは汎く蒐めて之を收めたれば、都鄙經營の實地に當る者の參考書として、又一般人士の讀物として近來稀に見る好著なり。（定價金四拾錢、博文館發行）

綾錦織の製作法

△綾錦織（一名佐賀錦織）は我が國に於いて創作せられ且つ發達し來りたる固有の美術的工藝品にして天正の末業ころより肥前國にて案出せられ一部上流の人士の間に盛んに愛用せられたるものなりしが之れが製作は高尙優美にして最も興味と實益とを兼ぬるが爲めに娯樂品としても彼の造花や摘み細工の製作と併行すべきものあるに拘はらず、獨り我が綾錦織の微々として振はざるは維新の際公私多端を極め百般の事物が一時に瓦解したりしと其の發達が僅かに九州の一地方に限られたるとに依らんか。此の綾錦織の、

△製作方法――は金紙又は金モールや銀モールなどを緯として色彩ある絹糸を以て織り出すものにして其の範圍とも謂ふべきは甚だ廣く山水、草木、禽鳥より人々の肖像及び紋章等に至るまで此の美麗にして複雜を極めたる織畫に形ち作られざるは無し古昔に於ける、

△應用の範圍――は紳士淑女の紙入れや煙草入れ「はこせこ」等に利用せられたるに過ぎざりしも現時に於ては卓子掛け、袱紗、襟飾り、壁掛け、寫眞挾み、柱掛けより額縁などに應用せば我か國の重要なる輸出品となりて商業發展の一に資すること容易なるべし然して婦人の娯樂の爲めや或は職業の資として研究せんとせば大凡そ、

△四ケ月間――の練習を以て容易に修熟することを得るなり然れども此の綾錦織は造花や摘み細工と異なり多少面倒なることは刺繡と同一なれども始め十四五日程も熱心に研究して呑み込めば左程に困難にはあらずして深き趣味を增すに從がひ傍に（女學生などは）學資の一端を補るに至るなり贅言する迄もなく、

△社會の進步――するに從がひ生存競爭の荒濤は間斷なく打ち寄せて幾多の人類は荊棘の森を渉るかと嘆かれ、また變化のなき日每夜ごとの生涯に希望の花を添ふるものは不斷の實益ある美術技藝の應用の右に出づるなし此の故吾れ等の技藝會にては主として此の綾錦織と造花、編物、刺繡、摘み細工の製作をば婦人諸賢に勸むる所以なり。（大日本婦人技藝會長鍋島晴[illegible]談）

女子大學の寄宿舍

翡翠女

女子大學校と大書した懸札のかゝつた門を這入ると櫻の樹立まばらに新らしきペンキ塗りの洋館の幾棟正面の玄關口で案内を乞ふと小使ひが出て來ました。刺を通じて寮監の方に御目に懸り度いと、申すと取敢へず學校の應接室に通されました、二三十分待つて居ますと軈て扉が開いて這入つて來られたのは三十歳ばかりの女教師、黒紬の紋付羽織に鼠色の袴、髪にもこれと云て目立つ飾なく、襟も白襟で清楚とした、女教師にふさはしい扮裝、平野先生と云ふ御方です。

記者が今日訪問の主意を語ると、

「それでは早速寮の方へ御案内致しませう」

と云て親切に導いて下さる、廊下傳ひに校舍を外に庭へ出ると霜柱ふかき花壇に寒菊の美しく、行き交ふ袴の裾に香移るかとばかり、黄色い花が丈低く咲いて居る、それを見ながらゆくと直ぐ眼の前に大きな二階造の建物がある、先生は指さして、

「あれが内寮と申しまして矢張り寮の一部で御座います」といはれた。

成程校門内にあるから内寮と云ふのだなと記者も合點致し「外寮と云ふのがありますか」と聞きますと、

「否、元は外寮と申て居りましたが、只今は外のは皆名が付けてありまして、豐明、華山、晩香、と別れて居ります、先づ最初に晩香村へ御案内しませう」

と云ひながら、敷石づたひにだら〳〵とした路を下りると校の裏門に出る、門を出ると即ち晩香村の入口です。

先生に從いて晩香の門を入り、上り勾配の路をゆくとこの邊は目白一帶の高臺で接近した家屋もなく、廣廣とした女子大學の所轄地であります。

何々寮、何々と幾棟かの建物が櫻の木の間桐の木の間に聳えて市街の學校などには得られぬ閑靜な地で、空も清み氣も澄み渡れるやうに思はれました。

春思はるゝ櫻木もあれば、夏の朝忍ばるゝ蓮池もあ

り、畑もあれば花園もあつて今恰度大根畑には葉が青青と地を蔽ふて居て、苺畑には霜に僅かな葉が朽葉色に殘つて居る。

木枯しの寒い日ながら、眞晝時の冬の日向に二三十人の女學生が、海老茶袴の裾を朔風に吹かせながら畑にそり立つて何やら土くれ仕事、種子を蒔いて居るのか培ふて居るのか、優しき腕に泥をも厭はず甲斐〲しき姿の見るからに嬉しい。

「何か出來ますかね」

と平野先生が畑をして居る生徒に聲を御懸けになると中の一人がそと微笑んで、

「先日蒔いた種子が霜に埋もれて終ひましたのです」

と云て居た。聞けばこの苺畑も大根畑も園藝係と云ふのがあつて皆寮生の御骨折だと云ふ、然ればこそ見事な出來ばへと感心致しました。

第一　晩香寮

第一「晩香寮」は日本造の二階建である。

「寮は皆一家族のやうにして、一人の主婦を頂き一人の下女を使て居ります」

と先生が說明してその玄關口で、

「御免下さい」

といふと、應ずる聲がして十八ばかりの女學生が出來て慇懃に禮をする。

「御部屋を拜見しても御差支へは御座いませんか?」

と問はれる、

「ハイ今日は寮代へをするので少々取散らして居りますが何卒御覽下さい」

と云ふ、聞けば明後日から冬の休暇で其前に部屋を一掃するのだそうな、玄關の土間へ草履を脫いで上ると四疊ばかりの座敷で其の次が應接室である。

見れば八疊ほどの室で粗末な机と本箱があり、一寸した花瓶などもあつたがさしたる裝飾もない、次は廊下に沿ふて皆生徒の自脩兼寢室である、大概一室に三人位の同居である。

掃除した跡でもあらうか、塵ひとつ落て居ない疊の

上に本は整然と本箱の上に納めてある、こゝも目に立つ裝飾はないが流石に女だけに鏡が柱にかけてあつた。生徒は誰も居なかつたが、讀まぬ机の上には編物の編みかけが置いてあるのもあれば「自然と人生」などの本が置かれて居たのもある、故郷への音信か手蹟美事な手紙のかきかけが置かれたのも見受けられました。

「爰は食堂で御座います」と敎師か障子をあけて下された。

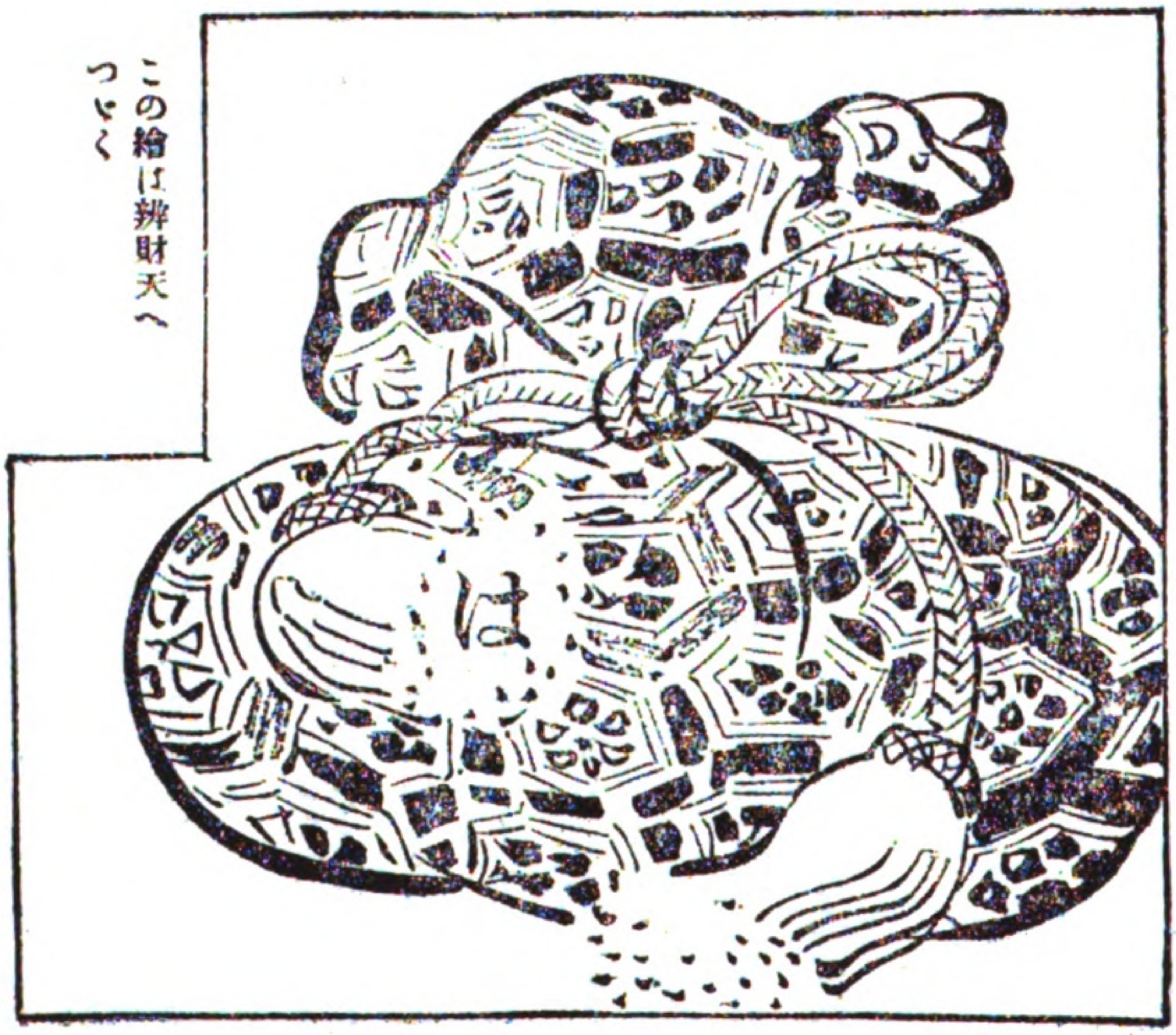
食堂は一寮全體の生徒、三十人位集まり得らるゝ程の廣さで、眞中には大きなテーブルが置かれ、周圍には何脚といふ椅子が並んで居る、今恰度晝食の仕度で下女が皿に御馳走をつけて居るところであつた。

それから階上へと上がつたが矢張り同じ樣の生徒の室である、廊下につき當つた室は十五疊の廣間でたゞ一脚の椅子とテーブルがあるばかりです。

「この廣い部屋は何に使ふのですか？」

「只今は室內遊戲室にして居りますか、春にもなつて生徒が增へますと矢張り自修室に用ゐられます」

この見晴しの良い二階の遊戲室、雨が降ても雪が降ても居ながらに硝子窓から郊外の景色が眺められて如何に面白い遊戲も催されやうかと



▲寶さがしの内（茶巾袋）

其の樂しさの一斑を思ひ窺ひました、「この寮はこれたけで御座いますから外を御覽に入れませう」と云て今度は隣の家へとゆく。

松柏寮

「こちらは和洋折衷になつて居ります」

と平野先生がいはれた。

成程ハイカラ女生徒の住居とも見え玄關には女乘りの自轉車が置かれてあつた、草履を脫ぎ上靴に穿きかへて玄關を通り次の應接室を拜見する。

前の寮よりは餘程立派に、座敷らしく床の間もあつて、山水の掛物が懸つて居た、花は活けてなかつたが、靑銅の花活、鹿の置物なども置かれて居た。

座敷の正面には、西園寺侯の筆の跡、「淸節」の二字が額となつて懸けてある、其の下の机の上には松と竹壽草の鉢が置かれてあつたが上の額の文字と對照しておもしろく感じました。

窓のカーテンの眞白なのも心地よく、障子にひとつの穴さへ見えぬ淸らな室、住む人の操も正からう、「淸節」の文字がよく代表されるのであつた。

其次は矢張り生徒の自修兼寢室であるが和洋折衷だけに建築は日本風でも椅子テーブル寢臺といふ構へである。

書棚には洋本和本が行儀よく立てられて居る、傍に行て見なかつたから委細は判らぬが、二千五百年史などが目立つて居て小說の類などは見かけられなかつた室內の裝飾は以前と同じ立派でもなく、額は印刷物の繪が多いやうである。

次に食堂を見せられたが、爰も椅子テーブルで、テーブルの眞中には南天が活けてあつた、恰度晝の食事最中でした。

「何卒御構ひなく」

と敎師が會釋されたが、それでも流石に極まり惡るそう、持た箸を止めて終たから記者も御邪魔してはと暇て障子をしめた。

「大概あとは同じで御座いますから出ませう」

と云はれるので此處を出て元來た路を辿つて、今度は門の傍にある「寮舍共同購買會」といふのを見る。

寮舍共同購買會

「是は寮生全體の生活料つまり日々の食品一切を購買するところでムいます。」

成程這入つて見ると棚の上には、幾個かの玻璃の器に種々な菓子が滿たされて、小さな菓子舖なども及ばないほどの景氣である、奥の方にはまた乾物類が山をなして積であり、彼方の板間には生魚が並べてある、赤漬の生姜が瓶詰



であれば干瓢がぶら下がつて居る、何の事はない八百萬の雜貨店である。

「此品は家政科の生徒が考案して拵へさした天皿で御座ます」と云て教師は一個の天皿、新案らしいのを示して見せたが、成程、この學校の何事も實際履行主義には感心した。

「是では商人も寮に出入する事は御座いませんね」

「ハイ、もう一切こゝで取扱ひますので、毎日註文書

を前の箱に投入れておけば、ちやんと取揃へて各寮へ配達致します、魚でも青物でも少しも商人の手を經ませんで直接市場へ買出しに出まして、つまり商賣で得ますところの利は積立金として居ります」

と此處の主人が語られた、却々風變りのものである。

「今度は彼方の華山村の方へ御案內致しませう、そして只今御覽になつた全體を一括して晩香村と申して居ります」と說明された。

あゝ晩香村名もゆかしいが、こゝに住む人の心は如何に樂からう、櫻は春を飾り蓮は夏の朝を淸めて、共に孃等が詩材となるのを待つて居るのではなからうか、人家離れた閑寂なこの地、淸らの蒼穹に宵の明星を仰いで冥想に更けたならばいかに崇高な悟が得られやう、築山のあたり春は菫も香り蒲公英も咲こう、土筆嫁菜を摘みて手づから料理して食卓に供へ、共に嗜む同胞の幾人が慈母のやうな寮監の師と、姉のやうな主婦とに哺まれしこの自然の樂園に健全にいそしみ給はんことを禱るのである。

華山寮

華山寮といふのは學校の門の正面にむかつた處である。

「お隣が樺山さんで、こゝの地面も樺山さんから讓つて頂いたので華山といふ名をつけたのです」

と物語れた。

門を這入ると兩側に平家の建物「敷島」「自敬」などの寮舍である。

「是等は大概同じで御座いますが、ひとつ變た純粹の西洋風の方へと御案內致しませう」

純粹の西洋風といふからホワイトハウス位のハイカラの名が付いてるのかと思て居たら「曙寮」などゝ古めかしい名であつた「鵬明」だの「華山」だの「晩香」などゝ名ばかり聞いて想像するといかにも古風な藤原時代の白木造の御殿風の家かと思はれる、實にこの學校の寮の名のあまりに氣取つて居るには驚かれる。「曙寮」と云ふのは二階建のペンキ塗りの洋館で

ある。

入口で鈴を壓すと扉が開く、上靴に穿きかへて廊下をゆくと直ぐが應接室である、椅子テーブルなどの配置よろしく魚類の標本なども置かれて、他に比すれば流石に西洋風の装飾がされて居た。

次に見たのは、幼稚園に通ふ少女の室であつたが今は五人ばかり住で居るといふ。



南東をうけて日當りの良い十疊ほどの廣い部屋で、天井から下がつた瓦斯燈の管に糸もて人形が吊してあり、白壁には花や鳥や天使や、種々のカードが貼り付られて居る、正面には天使の愛を描いた畫の寫眞がゝけてある、テーブルの上にも寢臺の上にも玩具類、小さな火鉢茶道具などのまゝとの道具が並べてあつて誠に趣味の多い室であつた。

主人公は居なかつたが、住む人の性格や趣味が彷彿

と現はれて居た何ともいへぬ懐しさを思はしめた。

『小兒の部屋はこればかりですか？』

『ハイこゝばかりですがもうひとつ普通のを御覽下さい』と云つて先生は隣の室の扉をコツ／＼と叩かれると、御還入りなさいといふ。

成程西洋風である、扉をあけると今迄書見して居たらしい三人の生徒がつと立つて禮をした。

見れば天井も水色のペンキで塗つてあり眞中に暖爐を圍んで椅子もテーブルも並てあつて寢臺つきでもあり萬端西洋室であるが惜しい事には裝飾が缺けて居て前の小兒の部屋から見れば甚だ殺風景である。

一體何の室も女だけに整然と形づいては居るが自分の部屋にしてはあまりに趣味に乏しいかと思はれる。教室ならば兎も角もだが、自分が朝な夕なに馴れ親しむ室だもの、少しは崇拜して居る人の寫眞とか、遺墨とか、嗜好品とかを飾られたなら如何ほど趣味津々なものであろう、然し是にはまた外に理屈のある事と思ふ。

『あとは何れも大差はありません』

といはるゝまゝに外へ出た。

こゝの敷地は前の『晩香』に比すれば狹くもありやや劣つて居るが、眺望が大變に佳い。

見渡せば早稻田の萬頃が一眸の下に瞰下ろされて、紫色の蒼空が悠々と曠く、秩父の連山は城壁のやう地平線上の一方を立ち隱して居る。

『奈何も絶景ですね』と記者がいふと、

『ハーお天氣のいゝ時などには富士が見えるので御座いますよ』

と先生が付加へる。

と見れば田圃の中に幾棟かの洋館の建物、上から見るのだから屋根の瓦が波立つやうである。

『成程彼處が早稻田の學校ですか？』

と聞くと、『左樣で御座いますと答へる』

女ながらも高等教育を受けらるゝ女子大學校の生徒である、五尺の男子が學事に肝膽を砕く所、早稻田大學をこうして足下に見て、彼の崇高なる富士の麗

姿を仰いで胸襟を啓くときには優しい胸にも或る一種の誇の囁が響こうではあるまいかと、記者もこゝに住む學生の感想を想像して、『自重し給へ』と心の中で云て居ると突然。

『あの、早稻田の學校が近いのでどうのこうのと噂は致しますが決してもうそんな事は御座いませんです…と先生の言に妙な所で話が一轉化する。

流石女だけに何もかも神經的なのには驚いたが、墮落々々と喧しい此頃でもこの位女子教育に細心なら間違ひなからうと感心致しました。

平野先生の說明

ハイ寮生は全體で七百人ほど御座いまして、家が二十五に分れて、大概三十人位が一の家に居ります。

その三十人の中には大學のも高等女學校のもあつて區別は御座いません、畢竟年長な生徒は年下の者を慈しむといふ風にして故意と一緒にさせております。また大學でも家政科國文科の區別なく一緒にして居ります、是は畢竟一方に偏しないやうに互に趣味を交換するやうにとの爲で御座います。

そして其三十人の一家族の中から年長な人を選で主婦として居ります、その主婦が萬事を取扱ふのですから經濟の上手な人ならば費用が尠なくとも御馳走も澤山頂けますし、下手の人ですとゝかく左樣な具合にゆかないので御座います。

概べて何事も雛形を止めて實際に致させるやうにして居ります、毎日學校で習た事を實地に寮で行て見るやうにして居ります。

ハイ寮生の樂ですか、まあ紀念會とか、忘年會とか其の折々にふれて隣同士家族を招んで御馳走するとか何とかいふ事が度々ありまして、誠に皆仲好く樂しんで居ります。

文園

鶯と春の雪

翠子

餘寒未だ寒けれども、立春を過ぎて十日あまりも經ちぬれば、流石に雲のたゝずまひ、風のそよぎ春めきて殊に今日の日和の暖さ、池の氷も薄らいで、霜とけの庭には何やら若草の萌え出たる、名もなき、雜草ならんも、綠若やかなる色の哀にも優しくて、漸う世に生れ出たるばかりの初々しさ、あはれ餌拾ふ雀の泥足に踏まれやせんと心許なし。

彼方の庭の隅には已に老いたる福壽草の、今はもう子も孫も花咲き盡して、胡蘿蔔の葉のやうに葉ばかりが鉢一パイに生ひ茂れり、福壽草もかく老い衰へては貧乏草とや、嘗ては正月の床に飾られし鉢なるは今は遣り棄てるやうに置かれたり。

日當りよき南緣には妹二人、雛樣への供物とて今からの手廻し千代紙鶴折りてぞ遊び居けるが、天なる雪の扉ひらけて東風そよ〳〵と吹き渡れば、緣の千代紙の片々ハラ〳〵と風に煽られて舞ひ上がるを、胡蝶の生れて飛ぶかと見し、それも春なれや。

時しもあれホーホケキヨと鶯の聲。

と見れば、垣の梅が枝に小さき口あけて草色の翼震るはし咽喉脹らして唱ふさま、身をあちこちとする每に螺鈿溢るゝやう枝なる梅花雪の如くに散りしきる、また初鳴のむづかしそうなれども春を告ぐるその聲に世は長閑かに風和らぎぬ、妹は珍らしがりてホーホケキヨと口笛して眞似しぬ、待ち人來たるやうに嬉しくて文字知らぬ身も歌心や思ひ出でん。

連翹は獻げ奉らんと黃金屛編むに忙がはしく、柳は絲かけて翠の帳織るにかしこし。

あはれ皆嬉しくも、春の樂堂鶯の御生れを共に祝ひ謳ふかな。

鶯の身を逆さまに初音哉　　其角

春の雪

飛ぶや鵞毛に似て霏々と雪降る六花紛々、いざゝらば野に山に雪見に轉ぶところまで、と鶴裘を着て徘徊すれば實にや見渡す限り變り果てたる銀世界、目も眩きほどなれども、流石に時候は春なれば、梢に葉に積りしと思ふ間なく早やホツ／＼と雫の音して解け初めたる、淡雪の下駄の歯のころぶほどにも得積らず、若駒が蹄にかけられて雪踏み返すあとより青々と草の現はれて、畑には四五寸も麥たけ、小松菜には薹たつほどの長閑さなれば、眞白なればとて銀踏まんといふはあまりに冷かるべし、野も山も春粧はひの薄化粧したる如く、殊に艶やかなる紅梅姫はホンノリと綿帽子被つぎて恥らうさま、誰に見せんの臙脂の色ぞ、王子鶯の囀をまつなるべし、その嬌かしさ云ふばかりなし。いつしか掻き曇りたる灰色の空、明うなれば見る／＼雪解けて、肌あらはるゝ春山の笑まひ顔に殘んの雪ところ／＼に隅とりて、恰ら白粉、斑に剝げたるやう可笑しかりしが、地の濕み風の和らぎに、次第／＼とその雪の白粉溶けて、化粧の水幾筋となく小川に灑ぎ入りぬ。

鶯の笠を出て見ん春の雪　　許六

春のおもかげ

小舟

如月の空は猶ほ未だ雪多く、風もまた寒けれど、氣は彌生に近くなりて、郊外には既に早くも春の面かげを示しつゝあるなり、夫れ駘蕩の春光、一たび野山に遍く來たらば、老も若きも業うち捨てゝ、花見遊山に家を外にすれども、抑もこの駘蕩たる春の景は、たゞ柄の間に來たり、突然として現はるゝものにあらず、雪の裡氷の間、既に其所に希望の光をほのめかしつゝ有るなり、人は寒風を厭ひ、氷雪の中に、其一ひらの若菜を摘むを好まずして、却つて暖き春の野に、百花の郁芳を拾はんと欲す、されど春まだ淺き昨日今日、

日光暖かにして霜新たにとけし南郊の彼方に、春と呼ぶ美しき色彩の蕾を見るも、又一入の風情ならずや。

南枝の清香

日は一日毎に温情を加へて、わが世に臨めり、霜雪は日に／＼其影をかくし去らんとす、されば早くも南枝に花を催し、鶯の香もきこゆるなり、空には春の色立ち罩め、霞める日陰長閑に、水には春の心浮き立ち、游げる魚影勇ましゝ、來よ／＼と啼く鶯に誘はれて、梅の林に來て眺むれば、曾て霜の日には、枯れ果てしやと見しものを、今は其一枝に蕾太うして、春の惠みを樂むなり。

萬木未だ芽を萠さず、いづこを見るも、春の色なきに、獨り梅ありて早くも魁となる、鶯の雪の扉出でゝ、たゞこの花の枝にのみ來て鳴くも、理由なきにあらぬなり。殊に花には清香あり、枝には幽致あり、和漢古今雅人の賞贊する宜ならずや。

されば古くより、人爲淘汰の理を應用して、變り物を造出し、現今にては種類も極めて多く、單瓣のものあり、重瓣のものあり、白きもあれば、紅なるもあり、又單瓣の白花にして嫩芽の青きと紅きとあり、其青なるを青軸と呼び、花は目さむるばかり白く、萼は濁りなき綠を呈し、最も上品なるものとして、人に愛賞せらるゝなり。

菜の花

菜の花の花盛りなるは、彌生の半なり、されど南向の暖地に、霜しらず生ひ立ちしものは、如月半ばより早くもその黃色なる花瓣を綻ばしめ、日に／＼一輪づつ咲きて順次上に及ぼすなり。

菜の花は漢名を蕓薹と呼び、古名をオチと云ふ、古くより我邦に生せしものなるべし、和歌には鈴菜と詠む、ゆきの中に、摘みつくしつと思ひしを、野はこゝかしこ鈴菜咲くなり。うちむれて、摘みはやせども野邊はみな、やがて鈴菜の花にならましなど、何れも菜の花を詠じたるものなり。

菜の花の花瓣は、杓子形をなして、十の字の如くに相列びたれば、これを十字花科植物と呼ぶ、十字花科の植物中、人生に効益あるもの頗る多し、即ち大根、蕪菁、甘藍、芥、山萮菜、薺など皆其同屬にして、何れも無毒なれば、日常食用に供すべし。

我邦に產する十字花科の植物は、其數四十種の上に出で、全世界には千二百種程ありと云ふ、一體に寒溫兩帶に全盛にして、熱帶に生ずるもの比較的少きを見ても、この草の早春既に蕾を破りて、笑める理をも知らるゝなり。

▲寳さがしの內



サア、この珊瑚樹の中にある「の」字は何處へつゞくのだかわかりませんが、本文中の何處にかある筈ですから探してごらんなさい。

蒲公英

仲春の土手を彩るはこの花なり、綠一面たゞ柔かなる草若葉の褥しきたる所、點々として黃金色の蒲公英を綴る、美しき限りなし、睦月如月の雪霜多き日、向陽の暖地に就きて見れば、稀に蒲公英の一輪を見ること有るべし、されど其の花軸は短くして、花は葉と共に地に着かんばかり、なか〳〵に其風情棄てがたきものあり。

花軸の上に着生せる一輪の花は、心なき人の目には、たゞ一つの花の如くに見ゆべきも、仔細に見つくせば、こは只一つの花にはあらで、數限りなき小さき花の、

相集りて成れるもの、かゝる一輪を花叢とは呼なり。

日光と蒲公英とは、眞に深き關係あるものにして、日當りよき土地に生ぜるは、其葉地面に密着し、只花軸のみ眞直に立てど、向北の地若くは常に日當りよからぬ地に生ひ出でしは、其葉直立して且つ弱々しげに見ゆ。

殊に其關係は、獨り葉にのみ止まらで、花にも影響する所多し、即ち蒲公英の花は、日のある中こそ、美しく開きもすれ、雨の日若くは夜に至らば、夥しき花瓣は、皆悉く束ねたらん如くに相集り、哀れにも見る影とては無けれど、しかも一度温き日光の惠みに浴する時は、又元のまゝに開き、かくて晴雨晝夜、或は開き又は閉ぢして、一花輪よく十數日の長きに亘りて凋まざるなり。

つくゞし

空に向つて何事をか記さんとする、形筆に似たれば土筆と呼べど、つくしや元固有の植物にはあらで、問荊と呼べる草の花に外ならず。

長堤未だ一抹の緑をも染めず、たゞ枯れたる茅の叢霜に凋れて、其下には春に咲くべき二三の草の芽を抱けり、土筆も又其草の芽と共に、枯草の中に暖き夢を結べど、これや正しく袴着て、今や頭を擡ぐるなり。

問荊は惡むべき雜草なり、其地下にある莖は深く一二尺の所に、縱橫に走りて、三四丈平方の土地を占領し、作物の養分を吸ひ取りて、農夫を泣かしむる惡むべき雜草なり。

さは云へ土筆は愛しきものなり、惡むべき問荊は、未だ地下に伏匿して、其姿を見せざるに、愛すべき土筆は、春早く冷たき土を擡げて、威勢よく生れ出るなり。

袴と呼べるは節々に輪生せる小葉にして、上部の筆頭狀をなせるは、胞子と云ふ種子を貯ふべき多くの袋の集合せるもの、春半ばに至れば、この袋とけて、緑なる粉を散ず、この粉時を經て問荊となるものなり。

都門の雜響

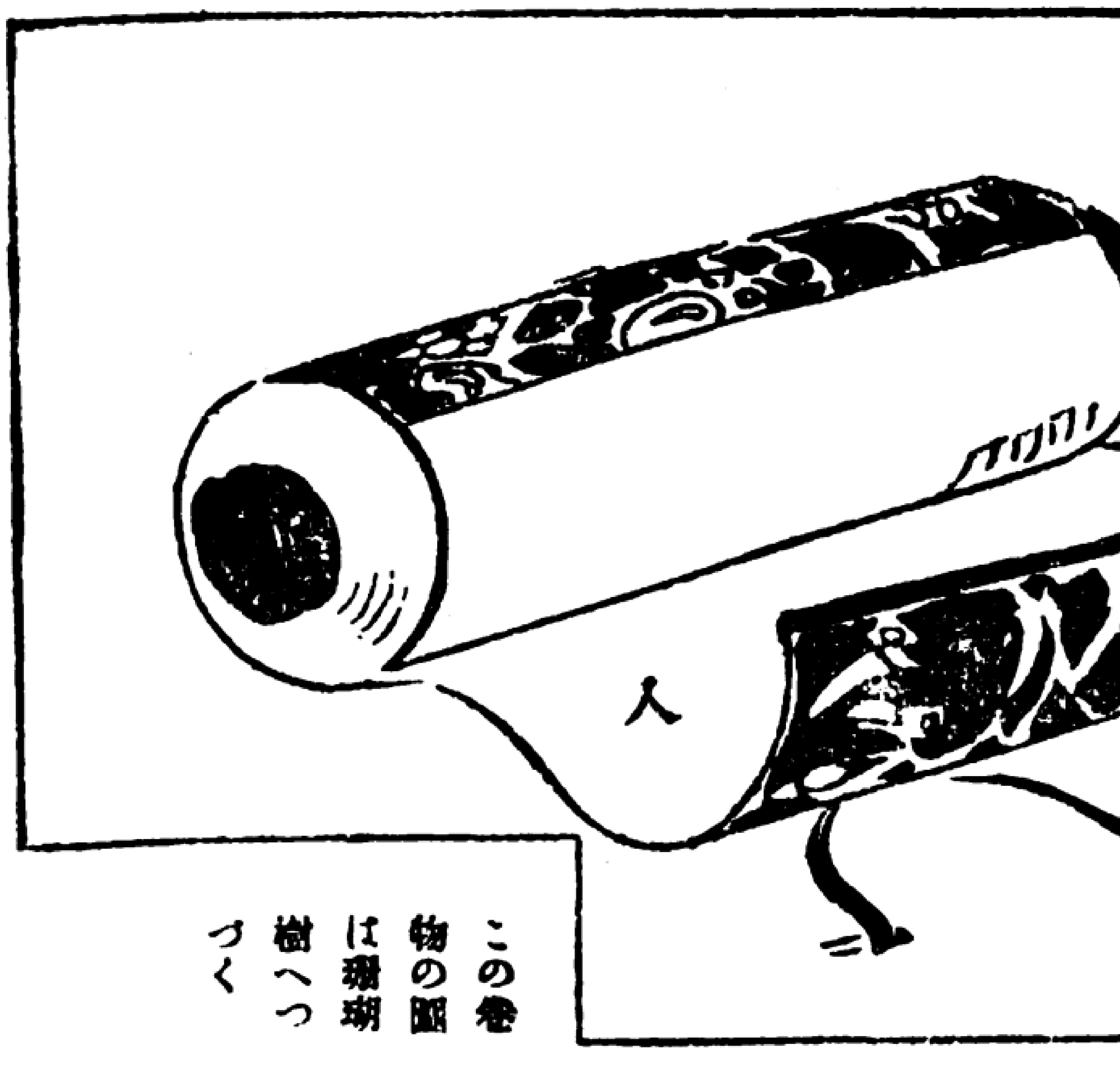
弔　花

一

われは卅六年の夏より秋まで住吉の濱に住みき。海にも馴れたれば、山戀しく、假住居を拂ひて、直に故山なる天王山の麓に移り、住み心地よき儘、三年あまりの春秋を過しき。

卅一年より東京に暮したれど、大久保、澁谷、目黒、王子、あるは大森など、東京の外廓を漁りて、寂しく靜かなる土地を求めたり。されば、われは、寧ろ、都會生活の裳に觸れながら、いつも〳〵、都の水を飲むに緣遠き身なれば、自づから、自然の景色耳目に親しみ、花鳥風月、われ知らずいつも詩題に上り、山寺の鐘の音、蛙の歌、青嵐、時雨空、この外に樂しむべき吾世あるべくも思はざりしに、田舍住居の一日、不圖都戀しく、生々したる人の活動の狀を見元氣饒けき競爭の渦に觸れて見たくなり、何事も自然心の動くまゝに任じて、われ、自から欺かざる習慣の、鄙人の止むるを肯かず、飄然として、都に上りぬ。

▲寶さがしの內



この卷物の圖は珊瑚樹へつく

しばらく見ぬ間に銀座には、鐵道馬車の影だになく空を軋るボールの音凄き電車通じ、須田町は

全く齒形を止めず、地上燦なる電柱の花、われは、山に藏されしリッパーウキンクルとなりぬ。あるは、龍宮に年を重ねし浦島太郎となりぬ。

わが田園の家には梅多く、櫻多く、四季の花饒に匂いたり。机を南軒に移しては臘梅花底に文を草し、牀を東窓にかけては、囀る村雀に旭を呼びき。

今俄かに、この隱者めきし若年寄、激しき大江戸の眞中に立ち、まづ迷ひしは、わが生活なり。職業は俄に新聞記者、きのふまでは栗を燒いて、稔を語り、今日よりは、高帽を被て筆を走らす身なり。きのふまでは、生駒の峯の朝霞、黄金なす栗、種田の春を歌ひ今日は、行李を車に曳かせて、宿を探り。境遇一變、きのふのわれは眞の吾乎。今日の我は僞れる吾乎。思はず、手を抓つて、その痛さを問ひぬ。

二

卅九年九月。これわが新生活に入るの日なり。親戚のかゝり身、世帯道具を移せしは、とある横町の小間物屋の二階、南向きの日和好く、夏涼しく、冬暖かしと亭主が自慢の新建なり。たゞこの一間のみ。八疊。寒楚、些の衒飾なく卵色の壁なほ乾かず、備前表の疊青々としたる快さに、われ等夫婦は廣き邸宅にて惡夢に魘はるゝ人の上を憐みながら第一夕を送りぬ。

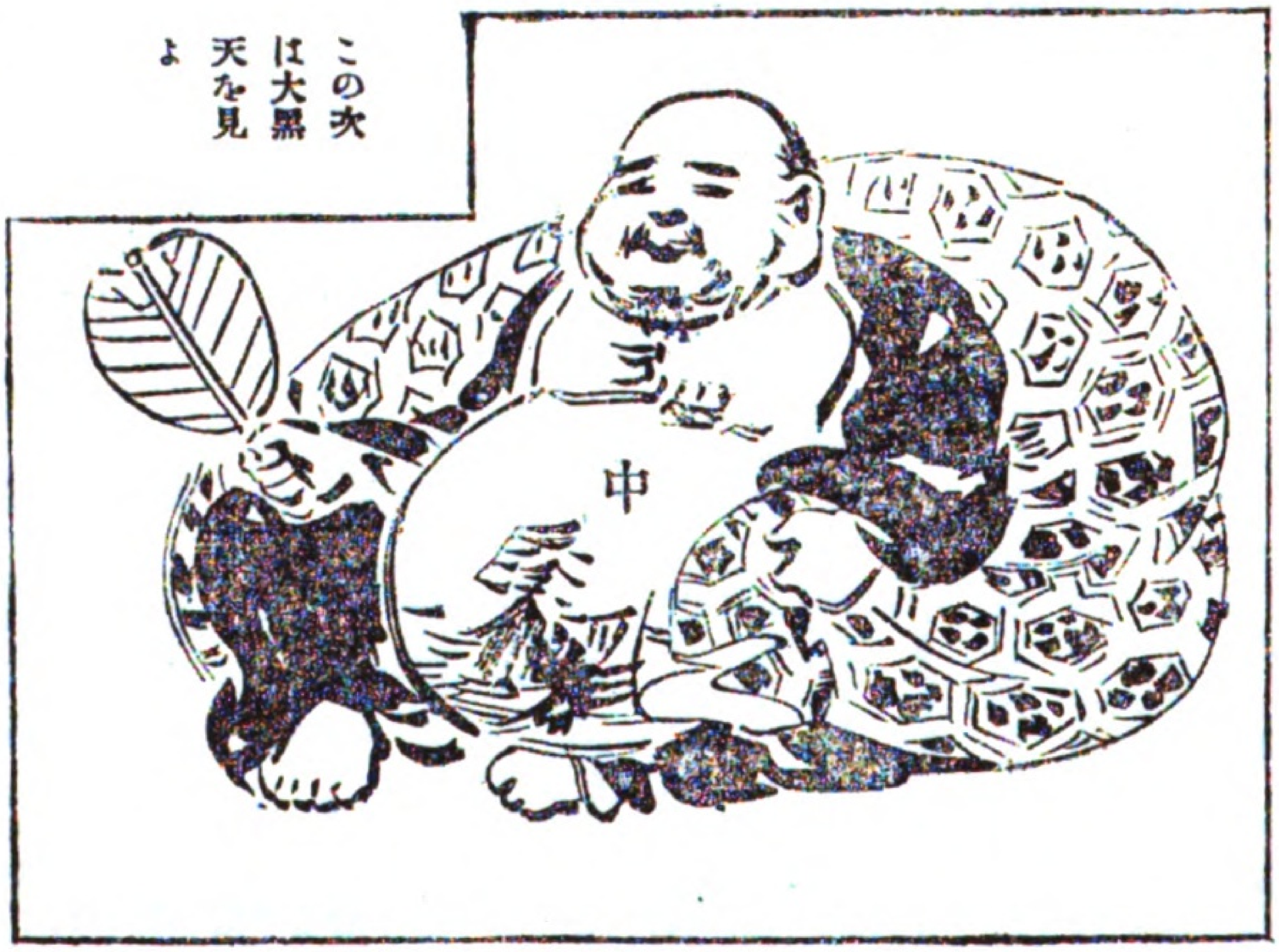
表には時に車聲の轆々を聞く。われ目覺めて、ひそかに疑ふ。誰の來れるにや、否、否、迷へり。こゝは都なり。わが村の旃檀の木邸の角に車の音するを待ちて驅け出でしは、寂しきに人懷かしき田舍住居の昨日なりけり。大路を人の車に乘りて行くは繁し。われ耳を欹てゝ、何をか懷かしまむ。見れば家內も目覺め居たり。問ふに、思ふところ、われと同じ山に入りて、木柴蔭、焚火の煙を目標に、某は訪ひ來れり、とわれのいへば、宮山より車の音を聞きつけて、驅けて迎へしは何某の君なりしなどいふ。今、神田の一隅に、自然兒の曠放の靈自由の魂を縛られつゝあるはわれ等は忘れ居しなり。

三

十日、二十日、少しは馴れぬ。宿の主人夫婦。老姑。皆、上方者なり。道頓堀の話などす。馴れし古寺の鐘を聞くが如く、何となく床し。

やがて秋立ちぬ。秋はわが故國の世界なり。母上が古寺の庵より數株を得來られし紫花今や盛りなるべし。秋海棠も咲けるならむ。紅葉ある庭の風情は優れたるべし。その陰に、渡り鳥、羽を朝日に輝かして啼き交すらむ。此處には環堵蕭然として、我影の外何者もなし、唯鄙にも都にもわが行くところに從ふものこの鏡の如き穹空、今日も一點曇なくして、舊約書にいふ綠の帳を掛けたり。この

▲寳さがしの内



（布袋）

青々したる空と相對すれば、われはすべて渴世の事を忘る。空は大なり。こゝには都も鄙もなし。今も古もなし。この家は低く狹く、もとより價なき屋根裏なれど、われは、この二階より、晝はこの澄める朝空、夜は馴染の北斗星、箕星、月待星、宵の明星。燦爛たる哉。篩ひ落ちんばかりの美觀あらずや、牢舍は嚴しき鐵門を有すれど、この高天を有せず、かの俗兒、玉門朱樓に住むも、常々鬱屈して心を青天に遊ばすを得ず。眼下地上名利の外何物をも有せざるに比してわれ等は何の幸ぞ。市井の裡、この樂天地を有す。更らにく〵わ

れ自から祝す。われ等自然を見るの明ある人は至幸なる哉。泥沙の中に塗るゝも、なほこの高天を見るの心を有す。かくて理屈は、われにすべての不自由と不恰好とを忍ばしめ、客の到るごとに轍ち、わが南窓の障子を開いて、溶くる如き青空を指し、「廣からずや。わが家、高からずや。わが庭、天を庭とす。地上數尺の地に菜を栽ゑる花を栽ゑる又樹を栽ゆると其差幾干ぞや。」とかくてわれはわが八疊の間に滿足して今や一年半を過しぬ。樓に名づけて「浩歌樓」といふ。馬子才が浩浩歌に所謂「耕すの地少しといへども、天を仰いで長嘯すれば、天何ぞ高き。」と云るに意を取りたるなり。

四

一日、繁き用件に逐はれて、身も魂も疲れ果て、われは、この空洞の如き二階に上りぬ。窓は閉られ、洋燈の下、家内は、物を裁ち居り。まづわが眼を射しは一閑張の机上、一紅花の、燈光を受けて、鮮彩燃ゆるが如きあり。青蠟を延べて葉となしたらん如く、碧光流れんとす。

物をも言はず、われ、其前に大坐してしばしは[illegible]りき。これ實に一輪石竹花なり。

曾つて木の間に見し星は、彼方の煙突の間に閃けり。湯屋の煙に紛るゝ銀の川は、さきには楢の葉芝墨堤の上より望みたり。天の懷しさ、慕はしさに、漸くわが記憶の扉を出で、歸らざりし草花は、一たび花園の石影に埋められし聖人の、蘇へりたまひしに似て、翕然として、わが眼底に映發し來りぬ。

一紅花！　これわが園の隅に捨てられても、何時しか根莖土に活きて、魂の搖ぎを見せでは已まぬ美しの力ある撫子の一種。この花はわが義妹の今宵の縁日より求め來りしものなりといふ。鉢小さうして掌握べし。素燒の僅なる粗末なるものなり、然り。まことにわが今の住居に相應し、遠冥、優しとはこの花ならずや。見るは人の戰き、喘ぎ、口角の沫、鼻梁の誇、都は人の鬩ぎなり。摩擦なり。攻奪なり。この花果して何の花作りの手に何處の園にか咲ける。恍然としてわ

れはこの一草花を通じて大なる人生を思ひき。外には人の何事をか聲高に罵り合ふあり。こゝには、この一草花に對して、園の主の上を思ふ人あり。

雪に隱れたる市街

藤井　靜子

雪深しといふことには、その名も高田よ。今は昔の物語とはなりにけれど、町の入口に、此の下に高田ありとの制札建てられしともありとかきけり。火山の灰に埋められたるポンペー市の昔の榮は、唯史上に於てこれを忍ぶに過ざれども、昔雪にかくれたる高田の冬の風俗よ。今にその奇觀をあらためずと雖も、全く雪の下に町ありといふことなきに至れり。

灰の下なる都會は、見るに便とてあらねども、雪の下なる町は、まのあたり見らるゝ嬉しさに、喜びて越路にあこがれし去年の秋。年の内には、幾度かふりては幾度か消え、つもるべき景色も見えざりしが、師走の二十一二日頃には、東京にのみ住馴し目には、うら珍しきまで、二尺あま



りも積れり。木を組みて造りたるものに、荷を載せて、綱つけて引きゆくものあり。何ぞと里人にとへば、橇なりといふ。積れども掻すてゝ道つくらんとする人もなければ、橇のあと縫ひ行きて、行き逢ふ人毎に、傍に避けて通しやる氣永さ。年たちかへりては、常よりも暖かしとかにて、多くも積らず。八九日頃には、一夜に三尺もつもりて、二日三日ばかりにて、六尺あまりとなりぬ。かばかりにては、未だ高田の町も雪の下にはならじと喞てば、或老人のいふ。昔は實に一丈も積りて、軒より高く、且つ屋根の雪おろしをなせば、いやが上にも高くなりて、全く埋もれはつるなり。向側との往復には、町を横ぎりて、隧道をつくるなり。北海道ひらけて、彼地に出稼する人の多くなりてより、こゝの雪は少くなりて、又昔日と同一の觀あることなし、さりとてかばかりにて止むべき雪にもあらずといへば、いな、一夜にて三尺もつもるといふことは、この五六年來見ぬ所なり。この後降らばとて、一丈にあまることはなからんといふ。

△除雪と建築

建築法に至りては、特別の感あり。雪がこひと稱して、家の周圍をかこひて、雪除けをなす。多くは軒に接したる部に、高さ尺餘の窓を造りて、障子を用ひ、或は閾を置きて、障子のみにてかこひをなすもあり。市中は皆二階建にして、店頭に一軒あまり庇さし出し、その下の、石を敷きつめて、往來に便にせり。これを、ガンギドホシといふ。冬は、このガンギドホシの端に、戸をたてゝかこひ、或は、上部を障子にし下部を戸になせるもあり。薄闇くして、晝猶燈火を要する處あり。隧道と稱するは、對側のガンギの端に屋根を渡して造り、その左右をかこひて、周圍は雪のつもるに任せたり。雪降らぬ程は、とありかゝりとて、おのれを驚かしてのみ誰も笑ひ居たれども、いざ降りては、かばかりか少しと喞ち、或は、雪道面白しとて、寓居より十五六丁もあるこの町にまで、日毎に出で行くに、はては反對に驚きてのみありけり。この隧道といふもの、高田郵便局の前にのみ一個所見たるにても、雪の少く

なりしことは知られぬべし。

△雪と道路

道路にありては、東京などは雪降ると直ちに、掻きすつるが例なれど、雪解まではさる事なし。東京でいふ雪掻人足は、こゝにてはやがて雪踏の人足なり。樏といふものを穿きて、萬遍なく雪踏みかたむるなり。

運搬には、橇を用ひ、人を乗せて行く爲には、人力の箱をつけたる橇あり。人力橇といふ。雪降る時、雨天の爲めにする料として、幌のつきたるものあり。普通は、後押一人、挽手一人なれども、雪多き時は、綱曳一人を添ふ。賃金二倍若しくは三倍なり。但し町には、橇を通ずるの道なし。村里に至りては、ガンギドホシなどあるとなし。雪踏みしたる道の巾、最も廣き所にても一尺を超えず。狹き所に至りては、片足に足るのみ。一分にても踏み誤れば、深き雪中に足を埋めて、拔くに苦しむことあり。廣き處といへるも、橇の通ふに便ならしめたるものにて、左右は時として乳よりも高く雪の積れることあり。地上よりこれを計らば、幾尺ならんか。家の入口には、この雪の山に坂をつくりて、下り入るやうになれり。若人に行き會たる時は、傍にたつか、人の家の口の前に立ちて通し



▲寶さがしの内（大黒天）

やる。橇などは、澤山に續きて來ることあり。數十分雪中に立つ辛さ。朝など、學校生徒の通行頻なる時は、一時間位も立ちつくすことありとか。されば數町の道程にも一時間餘を費すあり。短氣なるおのれは、この十八世紀主義の呑氣に倣ふこと疎ましくて、多くは細き岐路をたどるが故に、雪に足を埋めし事もしば〳〵にして、吹雪に面をうたれしことも常なりき。雪降る時は、面白しといふを得ざれど、やみたる後は、道の氷れるが故に、箱下駄にて滑り行く面白さ。裏に金釘打ちてあれども、猶注意せねば、後に倒るゝことあり。紀元節の朝なりき、寒さ常よりも烈しきに、前夜親しき人の家に一泊せしかば、式に列すべく、とく歸宅せねばならず。飛ぶが如くにして行く。後より喘ぎ來るものあり。かへりみれば、土地になれたる生徒なり。おのれの早くて、追ひつき得ずとて苦しがる。時早きよしを語りて、獨り急ぐに、面白きこと限りなし。雪降らぬ時さへ三十分はかゝる道を、二十二分ばかりにてかへりき。

△雪と學校生徒

男女共に學校生徒の多くは、謂ゆるからすを着し、帽子を被れり。足袋なきもの多く、傘をも携へぬがあり。東京風の雨衣を用ふるもの、女學生に多くなれり。お高祖を用ふるもの多し。小供や、老人などは、簑帽子とて、面白き形したるものを用ふ。口繪下圖の子供の被りたるはそれなり。頭上に吊したる輪つけたり。幾度見ても、そのをかしさいふばかりもなし。その子の穿けるは雪草鞋なり。棕櫚にてつくりたるあり。越中帽子といふ。老人の多く用ひ居れり。

總じて、高田冬季の天候は不良にして、三面山を以て圍み、一面直江津によりて、北海に瀕せり。越後富士の名ある妙高山高く聳え、難波山近く立てり。風荒き處にして、山颪雪を誘ひ、常に吹雪がちなれば、天地朦朧として、咫尺を辨せず。氣候は、から風なきためか、東京よりは、稍暖き方なり。雪のつもれる頃は流石に極冷を覺ゆ。

衛生

分娩後の一ケ月

（産婦の攝生と嬰兒の養育法）

糸左近

●赤兒と老人と死亡比例殆んど同等
●何故赤兒が育ち難いか
●母親の乳汁を以て育てねば何うなるか
●マクリは大害物
●母乳は天然のマクリ
●初生兒に乳汁を與ふる法
●乳汁を十分に分泌せしむる方法は如何
●如何なる飲食物が乳汁の分泌を促すか
●産婦の衣服及び夜具
●赤兒の衣服に於る注意
●産婦の清潔法は如何
●産婦を入浴せしめて可なるか
●赤兒の入浴法は如何
●赤兒の髮は剃る可きか
●赤兒を外出せしめて可なるか
●赤兒の泣聲を判斷する法は如何
●赤兒に對しての大注意

▲赤兒と老人と死亡比例殆ど同等

我が國人の死亡數を最近の統計表に據て見れば、一歳未滿の赤兒と六十歳以上の老人と其の比例に於て殆ど同等である。詳しく言へば百人の赤坊が生れたとすれば、一年の中に哀れ五十七人死ぬ割合になり、又六十歳乃至百歳以上の爺さん婆さんが此世を去るは百人中五十八人の比例である。讀者諸姉よ、此表を見て如何なる感が起りますか。六十歳以上の人とても固より大切な國民には相違なけれども老者の次第に減するは已むを得ざるの道にして、是非なき事と諦めねばなり

ますまい。之に反して漸々發育すべき赤兒の死するは、如何にも天理に背いた事柄で、當然ならば百人が百人まで育たねばならぬのである。然らば、

▲何ぜ赤兒が育ち難いか

赤兒の育ち難い理由は、先天的に疾病或は極めて薄弱な體質を受けたにも依るけれど、それは特別の場合として、大抵は次の三つである。曰く赤兒は娑婆の風に何程も逢はず、爲に其の抵抗力の弱き事其一。乳婦（乳汁を以て赤兒を養ふ生母又は乳母を云ふ）の體質弱く、爲に乳汁及び其他に於て赤兒が惡影響を蒙むること其二。養育法の當を得ざること其三である。されど赤兒は娑婆の風に抵抗する力の弱きは普通一般で、誰彼の區別有る譯では無いし、乳婦の體質弱き爲に赤兒の蒙むる惡影響は何うにでも防ぐ道は有る。然れば赤兒の育ち難い理由を煎じ詰めると、養育法が其當を得ぬといふ一事に能ると言つても可いのだ。乃で其の養育法に就て最も注意すべきは赤兒の食物である、赤兒の食物は母親の乳汁である、母親の乳汁はこれぞ天賜の食物で赤兒の爲には三千世界を尋ねても、之に勝る食物は決して無いのだ。然らば、

▲母親の乳汁を以て育てねば何うなるか

これは論より證據を擧げる方が宜い。西洋諸國の文明は、我國よりも早く開け、現在に於ても概して進んで居れど、小兒死亡の數は、我國の多數よりも尙ほ多數である、これ西洋人は母乳に換ふるに、牛乳或は羊乳等を以てし、稀に母乳を以てするも、授乳の期、一般に短い事が一大原因を爲すからだ、故に同じ西洋でも瑞典諸威などの如く、母乳を以て育てる國は小兒の死亡數少く又我國でも、上流社會の母親の中には、我の安逸を計らんが爲に、我が乳を用ひぬ者も有るが爲に赤兒は中流社會以下の、母乳を以てする者に比ぶれば、其の死亡數は固より多い、嗚呼天に順ふ者は育ち、天に逆ふ者は滅ぶ、これ余が曾て本誌にHeavenly

Hygiene（天の衛生）の一篇を物した所以である、故に此の天理に照せば、

▲マクリは大害物

と謂はねばならぬ。

世には赤兒の胎毒を下すとか稱へて、鷓鴣菜といふ海草と大黄及び甘草とを赤い絹片に包んで、温湯に浸したる物を吸はしめ、やがて赤兒が黒い糞便を洩すを見て、其の効が有つたと喜んでる人も有るけれど、此は大なる誤解である。斯樣な物服んだからとて胎毒の下るものではない、少し服ませれば唯幾分か下痢を促す種となるし、多く服ませれば消化器を害するは言ふまでもない。されど、赤兒が生れてから、一定の時間（八時間乃至二三十時間）内に通便の無きは往々面白からぬ結果を來すものである、然らば幾分の害ありとも所謂マクリなる物を用ひねばならぬかと云ふに決してさうでは無い。



▲母乳は天然のマクリ

である。抑々產婦が最初に分泌する乳汁は滋養分を含めるのみならず赤兒の通便を促すやうに天の配劑が出來てるので、故らに害物のマクリを用ゐざるも、必

す黑色の糞便を泄すものである。而して分娩後は大抵八時間位母子共にスヤ〳〵と眠るもので、此の睡眠あるが爲に疲勞を恢復し、精神も淸々となるのだ。斯くて目が覺めたら、始めて母乳を哺ましめるが肝要である。此の時間內には決して哺乳せしむる必要は無い。斯樣に徹頭徹尾母乳を與ふるは小兒の爲に必要なるばかりでなく、產婦は之が爲に生殖器殊に子宮の復故を促し、且つ產後の肥立を佳良ならしむるものである。併し赤兒が始めて哺乳する際產婦の下腹に痛みを覺ゆる所から『それ御覽なさい、マクリも用ゐないで餘り早くから母樣の乳汁をお哺ませになるもんだから』と舊式の產婆は言ふかも知らねど、此は乳房の刺戟の爲に、反射的に子宮の收縮を起すので、取も直さず、子宮の復故を促すことになるのだから、決して恐るゝに足らぬ、何れかといへば喜ぶべき事だ。併しながら茲に大に注意すべきは、

▲初生兒に乳汁を與ふる法

を知らねばならぬ。其法は〔第一〕に乳汁を哺ませる前に、乳房を微溫の硼酸水即ち硼酸一匁を溫湯一合に溶したる物で淸潔に洗ひ、授乳を終るまで不潔なる手若くは衣服等に觸れしめてはならぬ事。〔第二〕は哺乳の際決して坐つてはならぬ。即ち右側或は左側に臥てゐるまゝで、赤兒を近づけ臥かし、それより下になつてる方の乳房を哺ましめ、此際產婦は下になつてる方の肘を以て己の體を支へ、其の前膊に赤兒をかき抱き、上になつてる方の手を以て乳嘴を赤兒の口に入れる事〔第三〕は赤兒が容易に乳嘴に吸ひ附き難き時は指尖にて赤兒の下顎を押し下げ、口を開かしめて乳嘴を哺ませ、乳房を少し搾るやうにして、其の哺乳を促すべき事。〔第四〕哺乳に先つて、小兒の口中も溫湯に浸したる布片を以て洗ひ淸め置く事。〔第五〕最初に與ふる乳房は左右何れでも差支ないが、其後は左右交る〳〵授けて一方に偏せぬやうにする事。若し一方に偏せば、與へぬ方の乳房は遂に乳汁の分泌が止むものである。〔第六〕授乳の時間を豫じめ一定して置かねばならぬ。

即ち出生後間もなき中は晝は三時間毎に夜は四時間毎に一回位の割合で可い。然るに之を不規則にし泣きさへすれば矢鱈に哺乳せしむるが如きは消化器を傷めること一方ならぬものだ。（第七）他人の乳汁を與へざる事。出産を祝ひに來た人の中に乳婦が居ると『まア可愛い坊ちやんだこと』などゝお世辭を振蒔いた揚句に赤兒を抱いて、我が乳汁を與へる者が往々有る。斯る場合に於ては、其の與へんとする刹那に『お氣の毒ながら、それはおよし下さいまし、良人（或は舅姑等）が偏屈で御座いますから』といふやうな按排に先方の好意を謝絶せねばならぬ。この理由は後章なる乳母選擇法の處に至つて善く分るから爰には說明せぬ。以上述べたる七則で略々哺乳法の大體を說いたれど尚其母たる人にして攝生を怠り乳汁の分泌十分ならぬ時は、不測の害を小兒に及ぼすものである。然らば、



▲乳汁を十分に分泌せしむる方法は如何

産婦の病氣に罹る場合は特別として、其他は産婦の不攝生、家人の不注意等からして少からず乳汁の分泌を妨害するものである。されば今産婦攝生法等の心得を列記すれば、〔第一〕精神上の注意である。産婦自身も心を齷齪せず、愉快に樂しく暮すやうに計るべきは勿論なれど家人も亦産婦をして悲哀憤怒等の刺戟に逢はしめざるやうに注意し、縱し不幸なる事柄が出て來ても、可成産婦に知らしめないで、之れを處置するが肝要である。其他家事上の懸念無からしむる樣取り計ふべきは言ふに及ばず、賀客の應對も可成避け、騒がしき音響も耳に入れしめざるなどが精神の安靜を計る上に於て大切である。余の現に目撃した中にも、或人は妻君の出産間際までは頗る妻君を愛してゐたが、妻君の分娩後間もなく家を外にし、産婦や嬰兒の健不健は我不關焉といふ有樣であつたれば産婦は次第に嫉妬の炎を燃し、乳汁の分泌はパッタリ止み、嬰兒は間もなく露と消え、産婦は引續き重症なる歇私的里になつて了つた殘酷な話が有る。されば乳汁を十分に分泌せしめる法は、第一に良人の優しき心なることを良人たる者は心得て居らねばならぬ。〔第二〕身體の安靜である。分娩後少くも十日間は全く臥床の中にゐて、縱ひ食事便通などの時でも決して起き直つたり又は坐つたりしてはならぬ。食物は只臥てゐるまゝで向を換へる位に止め、便通は仰臥のまゝで便器を用ふるが宜い。斯くして十日を過ぎたら、床の上に坐つて、食物を取り甚だ徐かに歩いて便所へ行つても宜からう。二週間を經てば一時間位は臥床を離れて談話などしても差支ない。三週間に至れば床を離れて漸次に平易なる家政を取り始めても健康なる人には何等の影響は無い。四週間を經れば全く臥床を離れて庭園の散歩を試みるも亦樂しいことであらう。右の如くに安靜を守らぬと生殖器の復故を妨げ、或は出血を起し、或は久しく惡露止まず爲に色々の病源を釀すことあるのみならず乳汁の

出様が不足するものである。〔第三〕は飲食物の注意である。飲食物の注意が行屆かぬと直接に乳汁の分泌を妨げ、母子共に種々の病に罹るは言ふまでも無い。然らば、

△如何なる飲食物が乳汁の分泌を促すか

乳汁の分泌を促す爲の特別なる飲食物とては無いが飲食物の攝生法さへ守れば自ら其の分泌が良くなるものである。先づ出産後二日間は固形の食物を嚴禁し牛乳、粥汁、葛湯、肉羹汁の類を用ひ、牛乳葛湯には幾分の砂糖、肉羹汁には少量の食鹽或は醬油を加味しても差支ない。三日目から五日目に至る三日間は前飲食物の外に、薄き粥半熟の鷄卵淡き味噌汁麵麭の小片豆腐、麩、湯葉又は饂飩の類を取るも宜い。六日目に至れば粥は追々濃くし、淡泊としたる魚肉例へば鱚、鰈、比目魚、鯛、鯵、鱵、鮎、白魚、前魚、いさき、せいご、鮟鱇、こち、鯉などの刺身又は味噌汁を用ひ、一週間乃至十日目に至れば軟かき飯に復し鷄肉牛肉の少量、滋養に富める野菜類、例へば百合、胡蘿蔔、馬鈴薯、自然生、嫩弱なるキャベツの類を交へ飲料として麥湯番茶を用ひ、平生酒に嗜む人ならば少量の麥酒を飲んでも差支ない。中には麥酒は乳汁の分泌を促すものであるから、何人も用ひるが宜いと、故らに勸める醫師も有るけれど、余は飲みたくないものを無理に飲まねばならぬ程の効ある物とは斷然信せぬのである二週間を過れば香の物例へば味噌漬奈良漬の少量を試み、追々平生の食物に復しても差支なけれど、鰻、鯖、鰯、豚の如き脂肪の多い肉類乾物鹽物未熟の果物、芥子、唐辛の類、油揚、天麩羅、鮨、烏賊、章魚、蟹、蝦、貝類及び酒、茶、珈琲の類は決して取らぬが宜い。第三週乃至第四週を過れば、全く平生に復しても妨無しとは言ひながら、前者の如き飲食物は大に注意して甚だ少量を交へることが肝要である。余の實驗に依れば飲食物の注意を怠る人は往々脚氣に罹つて哺乳を禁するの止むを得ざるに至ることがあるし、餘り奢式の

攝生法即ち粥に梅干的の滋養物不足は大に乳汁の分泌を少くするものである。飲食物の注意はザッと右の次第であるが次は母子共に衣服の注意をせねばならぬ。先づ、

▲産婦の衣服及び夜具

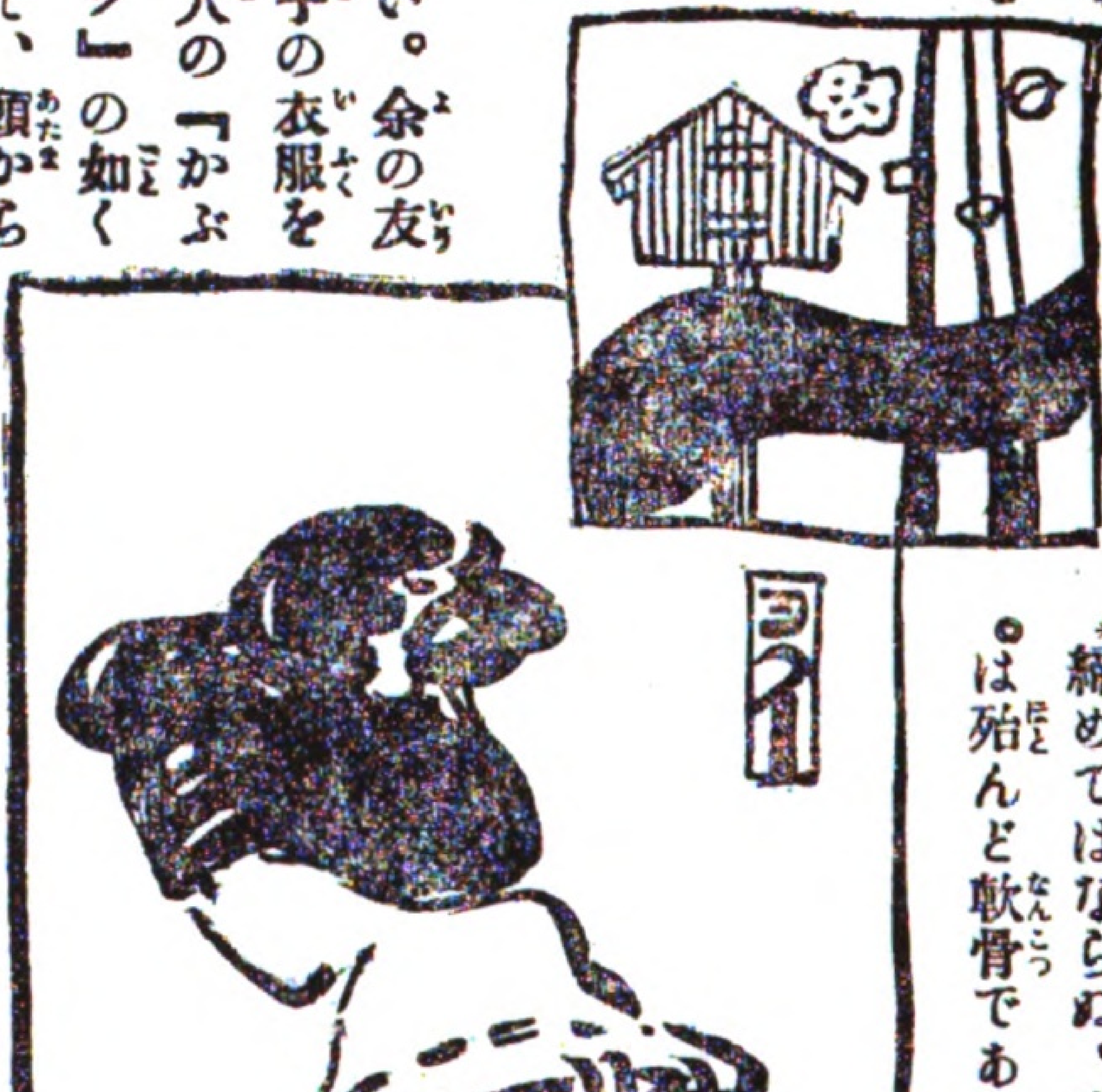
より述べよう。産婦の夜具は下に敷布團二枚ばかりを重ね、之に白い上敷を敷き適當なる夜着乃至掛布團を被ふが宜い。それには可成輕くて暖い毛布の類を撰び、ポク〳〵とした重くて厚い夜具を用ふると、發汗を增し、汗疹が出たり、頭痛を發したりするものである。次に最初一週間ばかりは惡露の下ること多くて敷布團等を汚すことのあるものなれば、其の臀部には分娩時に用ひたやうな藁灰布團又は脫脂綿入の布團を敷いておいて、時々交換せねばならぬ。夜具及び上敷も時々交換するが肝要なれど、産婦の動かぬやう、即ち敷布を取換へる者が有つて別に力ある男が徐かに産婦を抱いて移すといふやうに手際善く行つて貰ひたい。

産婦の衣服は同じく輕暖なるフランネル的を用ひ、矢張時々取換へ、乳房及び腹部は殊に溫包し、而して其の腹部には淸潔なる綿を置き、緩く腹帶を施すが宜い産婦の衣服に關する事柄は先づそれで宜いとして、次に、

▲赤兒の衣服に於ける注意

は如何。俗に赤兒は寢兒洩兒と言つて屢々糞便を洩すものであるから、從つて衣服も汚れ易い道理。されば屢々交換して嚴重なる洗濯を怠つてはならぬ。殊に肌着の如きは最も淸潔で無いと、大人とは違つて直ちに皮膚病に侵され易いものだ。衣服の料は矢張フランネル的の輕暖なる物を撰び感冒に罹るやうな薄着は固より惡いけれど、可成は厚着せしめぬ習慣を、呱々の聲を發した時から養成すると、成長してからも、稍々寒氣に觸るれば直ちに感冒を引くといふやうな薄弱體にはならぬものだ『栴檀は二葉より香ふ』とは云ひながら、一つは二葉より香はせる樣に養育せねばなります

まい。次に古來我國の風習として小兒の衣服には必ず附紐が有る。此は前の開かぬを主とするものなれば、緊しく締めてはならぬ。赤兒の骨は殆んど軟骨であるから、其の發育を害すること一通りで無い。余の友人は我子の衣服を恰も大人の「かぶりシャツ」の如くに仕立て、頸から被ぶせて着せ、胸の方だけは二重に温く、而も被布の如くに搔き合せて鈕留になる工合になつて居る。其故前が開く憂がなく其上何れの部も堅く締る弊が無い。赤兒から四五歳までは斯の如き衣服を用ひた方が發育の上に於て甚だ宜からうと余は贊成する。序に襁褓の事も一寸申しておくが、元來注意して兩便の排泄時を計つて居れば、大抵襁褓を濡すことの無いものなれど若もの爲には襁褓の下に脫脂綿を貼て、其上に軟かき乾いた襁褓を被ひ更に亞麻仁油紙を纏ひ、汚るゝ毎に取換へ、局部は硼酸湯に浸した布片を以て拭ひおく位にして貰ひたい。襁褓を貼てゝあるからとて洩れ放題に洩れさせ、揚句に粗雜に拭いて、而も不潔に洗濯したのと取換へ、日を經るに從ひ、皮膚が赤くなるに至つては、嬰兒の爲に非常な害毒を受けるものである斯樣に不潔からして疾病を招くは啻に赤兒のみならず、產婦も身を不潔



に處すると彼の恐るべき破傷風や産褥熱其他色々の生殖器病に侵さるゝものである。然らば、

▲産婦の清潔法は如何

衣服夜具等の清潔法に就ては前に略々述べたが、それよりも尚一層清潔にすべきは外陰部である。何となれば外陰部は常に惡露の汚す所となるからである。されば新式の熟練なる産婆を十日間も始終雇切にしておいて、之が始末をして貰へば申分無いが、其樣に出來ぬ事情あるときは時々百倍のリゾール水又は五十倍の石炭酸水を温めたる液中に浸せるガーゼを用ひて善く拭ひ清め然る後消毒したるガーゼ又は消毒したる綿を貼ておくが宜い。又小水を洩したる後も右と同じい處置を取らねばならぬ。又陰部の清潔法を行ふに當り、臀下の敷物など汚れてるを認めたるときは、必ず〱取換へることを夢々怠るべからずである。然らば問はん斯く清潔にせねばならぬものならば、

▲産婦を入浴せしめて可なるか

否々、産婦の入浴は少くも三週を經るに非ずんば不可なり。故に分娩後二日を過ぎたら温湯に浸せる手拭を以て、産婦の臥てゐるまゝの身體を拭ひ清めるが上策である。併し之を行ふに當つては、感冒を引かぬやう、室內を暖にしておいて、而も産婦の身體を動搖せしめぬやうに注意して行はぬと、頓でもない失敗を招くことがある。然らば、

▲赤子の入浴法は如何

産浴の仕方に就ては嘗て本誌に述べた事も有るし、且つ此は産婆の取扱ふべき事なれば、茲に之を略し、第二回目からの入浴法を述べよう。乃ち赤兒を兩手に載せて攝氏三十六七度の温湯中に入れ、己の前膊を枕せしめ片手にて支へ頸より上だけを湯より出すやうにし、先づ頭部を洗ひ、次第に軀幹四肢に及ぶべし。若し皮膚に附いてる汚物あらば石鹼又は卵黃をつけて十分に洗ひ清め眼の周圍と口內とは別に他の器に盛りたる所の温湯で洗ひ、他の清潔なる布片で拭ひ清めねば

ならぬ。殊に臍部陰部肛門部股間腋窩などをよく〳〵注意して洗ふが宜い。湯は温度の降るに從ひ差湯をなし、入浴時間は十分以下でなくてはならぬ。斯くして清め終らば乾いたる大きな西洋手拭で善く拭ひ、皮膚の皺多き部分即ち腋窩や股間などには亞鉛華粉若しくは硼酸末を撒布き、それより温めおきたる衣服の中に持ち運ぶのだ。入浴は必ず晝間に於て爲し、氣候冷かならば日當りよき室の四方を密に閉ぢ、感冒を引かし



めぬやうに注意するが何よりの肝要である。浴數は毎日又は隔日に一回位で可なれども、大小便などの爲に餘り不潔となつた場合は、何時にても腰湯せしむるが宜い。温度を計る檢温器が有れば之に赳した事は無いが該器の無い場合には己の頬を湯に當いゝ、温かきを感ずれども熱きを感ぜざる程度が小兒の軟弱なる皮膚に適するのだ。次に、

▲赤兒の髪は剃るべきものか

古來我國では赤兒が生るゝと間もなく髪毛をスッペラポンと剃り落す習慣なれども此は野蠻的の習慣で、頭腦の發達を妨害すること一方で無い。のみならず長ずるに從ひ、腦病を憂へ易く、又瘡毒に罹り易く、强ひて言へば髪毛を剃ると剃らぬとは、賢愚の分るゝ種を蒔くものだ。序に、生れた當時は軟かに輕い帽子を被らせておかねばならぬ。次に、

▲赤兒を外出せしめて可なるか

生れて間もなき赤兒は戸外の空氣に觸れしめてはならぬ。されど三四週を經て而も其時が春夏の候で、天氣清朗一點の風塵無き日ならば、靜かに抱いて、蝶よ花よと、否胡蝶の花間を徘徊する邊を暫時徘徊するも差支ない。俗に『小兒は風の子』と謂ふが、それは五六歳からの事で赤兒に應用することは斷然なりません。次に、

▲赤兒の泣聲を判斷する法は如何

赤兒の泣聲を聞いて色々の判斷を下されるものだと非常に之を神々しく述べ立てる醫師も有るけれど、實際は箇程の價値あるものでは無い。されど一寸其の心得を記せば、赤兒の泣くは空腹を訴ふるばかりで無く物音に驚いた時、衣服の窮屈な時、襁褓の濕つた時などに、オギヤ／＼を行るのだ。然るに之を慰めんとて其兒の身體を甚しく動かしたり、無暗に乳汁を與へたりしてはならぬ。甚しく動がせば、泣きは止むけれど赤兒の手前では決して愉快を感じたのでなくて、發育の不充分な腦に、震動を受けた爲に、精神が一時朦朧となつたのだ。故に精神回復すれば又泣き出す、又振り動かす、斯く反復すれば遂に其兒を遲鈍ならしめ、或は腦病を起さしむる種だ。されば普通に泣いたら左程憂ふるに足らぬとして、唯突然高聲に泣いたり、或は驚けるが如くに泣いたり、或は泣きつゝ顏をしかめたり、或は長く泣き續けたり、或は餘り弱い聲で呻る

が如くに泣いたりしたら、大に注意するが宜い。其他啼聲の嗄れてるは喉頭に病を起した證で、足を腹部に向けて縮ませ、劇しくキー〳〵と泣くは腹痛のある兆、一個所を動かした爲に急に泣くは、其部に異變あることは言ふまでも無い。次に、

▲赤兒に對しての大注意

難產等の爲に生るゝや否や、又は生れて數時間を經てからも赤兒が死んでるかの如くになることがある。之を無知識の兩親は『嗚呼可哀や折角此世に生れながら生れ甲斐も無く……』など、既う死だものと諦めて了ひ、何等の處置も施さずに置く爲に、哀れ赤兒は眞に死んで了ふことがある。斯ういふので、古來何億の赤兒が暗から暗へ葬られてゐるかも知れぬ、されば今大いに之を辯じておかねばならぬ。抑々赤兒が死んでるやうにあつても、其實全く死な無いで醫道の所謂假死なることである。假死に二通ある。一は皮膚に紫色を帶び呼吸甚だ緩慢で、且つ心臟の力大に衰へたる者。一は皮膚蒼白く心臟の力極めて微弱呼吸は全く止み、四肢は弛んでぶらりと垂れてるもので、素人の眼には何うしても眞死である。けれども適當なる處置を施せば蘇生して之より段々發育し、百五十歲以上までも生きるのだ。故に斯る場合には刻一刻も早く急使を醫家に走らせ、一方には家人が赤兒の皮膚に冷水を吹きかけて刺戟し、然る後温浴に入れ、數秒時にして出し、濕布を以て皮膚を摩擦し、これで充分なる呼吸を營まねば、又冷水を吹きかけ、又温湯に入れ又摩擦し之を繰返してる中にオギヤア〳〵、さア占めた、斯る處へ轆々車の音、これぞ醫師の來診。めでたき事言はん方無し。

右にて出產後母子一ヶ月の注意を略々書いたが御大號よりは一ヶ月後の母子の攝生法を順々に申し上げませう。

衞生顧問

雜の部

出臍に就いて　問 二歳の女兒出臍(梅干大)にて甚だ醜く困り居候間其の療法御示し下されゝ。(丹波の鳥子)其他

答 出臍は臍帶の脫落したる跡から生ずる肉芽で之を除くには外科醫に就て切除術を施して貰ふか宜い。

出產後の毛髮と美貌　問 出產後は必ず毛髮の脫けるものか、又美貌の損ふものか、その豫防法あらば敎へ下さい。(北國女)

答 出產後は毛髮の脫落すること多少は免れぬ次第であるが營養の恢復と共に又毛髮も新に生えて舊に復するものである。豫防は身體一般の强壯法を實行してあると同時に、毛髮の衞生も常々怠つてさへなければ幾分の脫落を防がれます。美貌も髮毛と同じく分娩すれば人生の一階級を進めたのであるから新婦の時よりも幾分花々しき顏ばせを失ふ道理でせう。けれど平生に强壯法を講じてある人は分娩後と雖も其の容色の衰へぬものである。佛國の婦人中には斯ういふことを非常に氣にして、避姙法だの墮胎法だの或は出產しても哺乳を止めたりする不埓者が澤山有るさうだが實に歎かはしい次第である。されば貴女も美貌を希はるゝは人情なれど餘り斯る事を氣にして小兒を愛する情を失ふに至るものなることを御注意ありたいものだ。

タカヂアスターゼに就いて　問 タカヂアスターゼは强壯劑として日々の量(日本の目方にて示され)何程づゝ服して差支なきか又之に百布聖を混じて用ふれば其効一層大なりとの事、果して事實に候や其の服用法等をお示し下され。(廣島縣胃腸ヨワイ子)

答 該藥は間接に强壯劑となるかも知られど直接の目的は植物性食物の消化藥である。一日の量は六デシ(一匁の二十五分の四)一回量は二デシ位である。百布聖は動物性食物の消化藥なれば タカヂアスターゼ 二品を混和して用ひられなば一層の効があらう。なれど或學者は タカヂアスターゼは植物性食物を消化する性質は十分有れど 酸類とて鹽酸や硫酸の如き物に逢ふとその効力を失ふて了ふ、所が胃液の中には自然と鹽酸を混じてゐるものだから該藥を服んで胃中に至れば縱し効が有るにしても甚だ些細である、取るに足らぬ藥品だと言つてゐる。余は嘗て百布聖と溫和して或胃病者に與へたれば頗る効を奏したが或は百布聖のみの効であつたかも知れぬ。されば タカヂアスターゼのみを單用して試て他日其の眞價を御紹介致しませう。

生葱の効能　問 生葱を食すれば憂鬱症に大効ありとは果して眞か毎日食して害なきや、白と青と何れが宜きかとをお敎へ下され。(福島縣氣憂師純婦)

答 葱は幾分の興奮劑となる効能あれども大効ありとは思はれず、毎日食したとて害は無し、白青何れにても可なり。斯る一物を過信せん

より は適當なる 治療を專門醫師に受けられよ。

〔鹽酸必魯加兒比涅の効〕問 塩酸必魯加兒比涅を充實丁幾などゝ混和して用ふれば毛髪の發生を促すとの事を地方の醫師に話し候處注射せれば効なし、又注射すると唾液の分泌を促す云々 果して然りや、又効ありとせば幾年月を要されねばなりませぬか(紀伊の夢の浮橋)

答 本藥は發汗劑として多くは注射するけれど毛髪發生を促すためには注射しても何等の効を奏しませぬ。卽ち毛髪發生のためには他藥と混じ且つ數百倍のアルコールを以て稀薄にして附ろより外に仕方は無い。唾液の分液を增すとは內服の注 射 の場合である。之を付け たからとて唾液の分泌を增すもので無い。効力の顯はるゝは少くも半年以上 三年である。但し余が嘗て本誌に示したる調合法に依ろを要す。

〔百日咳の徴候及び手當〕問 百日咳のハジマリハ、ドンナヨースニソーローナ、マダ、コレニカヽリシトキハ、イカヾイタシタテヨロシキヤ。(八王子上野町資格なき女)

百日咳は果して百日間苦しむものに候や、及び最初より 終までの徴候及び治療法を敎へ下さいまし。處方を揭げて下されゝば親類に醫師が有りますから相談の上服ませます。小兒は滿五歲に候(筑波山の麓早く治し度女)

答 時節柄大切な御質問なれば詳しく答へませう。(病の徴候)——熱は急に三十九度乃至四十度に及び氣管內が痒いやうな何とも言へぬ 厭な氣持がして甚明しく鼻の孔が塞がり噴嚏が出でそれより一種異樣な 咳嗽をする、吸氣は長くて呼氣は 短く、そして其の吸氣に笛聲を帶ぶ、卽ちコン〱ヒーを繰返すのである。其のヒーの吸氣時には窒 息するやうに苦しむことが一晝夜に大抵 二 十回多きは五十回にも及ぶ。乳房を離つてゐる撫子のことなれば、今にも散らんかとも 思はれ其の父其の母をして斷腸の感を起さしむるものである。咳嗽に伴うて 略く痰は粘りの稠い少し黃色を帶びたのである。併し痰の出るのは 比較的良いが若し少しも痰が出ぬならば宜しくないのみならず、其の 苦み樣も一通りで無い。何れにしても顏 色 青くなり咳嗽する每に淚を流し、飲んだ乳汁を吐き、其上大小便までも漏す。されど段々快 方に赴けば其の窒 息 樣が次第に減り、痰の色が益々黃色に變り遂に いつの間にか出度々々と喜ぶやうになるのである。併し喜ぶ樣になるには 相當の治療を加へねばならぬ、若し不 養 生で肺炎などの病 氣が合併したらまた嫩 弱 な二葉の身あはれ賽の河原に赴くのである兎に角 その咳嗽をなして苦しむ間が殆んど、百日程を費す所から、此名が附いたのである。

〔療法〕——相當の活 計 を立てゝゐる人ならば我が最愛の子の 爲には何うあつても海邊の暖かい地に移されねばならぬ。若し左樣な 尋常の出來ぬ事情あらば可成寒い風に逢はせぬやうにし室內は何時も同じ 溫度にし、それで新鮮なる空氣を十分に通はしめ、小兒若し 食物を取つてゐる年ならば消化し易い滋食品を擇び 一日に二回位の溫浴を爲さしめ、咳嗽の劇しい時は、

佚的兒　五、〇

程を布片に浸し度入せしむるが宜い。內服藥は、

鹽酸規尼涅　〇、二　但し五歳位な小兒の分量

右六丸に作り一日三回一回二丸づゝ。これに又左の水藥を兼れ用ひれば尚宜い。

臭剝　一、〇　白糖適宜　水三〇、〇

右一日三回に分けて服むべし。

〔でぶ〳〵に太る病に就て〕問四十年十月にお載せになつた「でぶ〳〵病」の療法中に食物の節減殊に脂肪類を節減せよと有りましたがこれだけは迚も實行いたし兼れます。私は三度の食事は普通人以上を要し且つ間食せずには居られませぬ故、食慾の減ずる法を教へ下され。（三重縣鄙の都女）

答元來貴女のでぶ〳〵になられた原因は過食に在るのです。故に之を節減せずして治さうとは實に無理な注文である。次に食慾の減ずる方法とては別に無い、縱しや有つても非常なる害を及ぼします。故に過食したき時及び間食慾の起つた折には眼を閉ぢて「妾は爾來自殺を賭じてゐたり、嗚呼今も自殺を賭せんとしてゐる實に不屆者である」と斯ういふ文句を唱へて見給へ必ず節食したくなること妙である。

〔口中の臭氣を去る法〕問私本當も肺も胃も悉く健全に候へども口中より臭氣出で誠に困居候へば何卒含嗽藥御教へ下され。（新潟縣白雪女史）

答鹽剝といふ藥の方が宜けれども劇藥であるから素人の方には求め難いされば硼酸一匁を温湯一合に溶し之を以て屢々含嗽を試みられよ。

〔療養に就いて〕問二十歳の時頸筋に瘰癧が出來それより段々澤山になりしたが一昨年の十月頃より左の腋下に又生じました如何なる養生法を致して宜しきか何卒二月の誌上に是非ともお答を乞ふ。（備後尾の道玉の浦女）

答本病に於ける眞の養生法は資產ある人に非ずんば到底行はれず要するに從來の衣食住を全然改良し、家は海濱の東西南北悉く日光を受ける的の高燥な地で而も空氣流通のよい所に移り食物は滋養强壯の物即ち魚鳥獸の肉は言ふに及ばず新鮮軟弱なる野菜を交へ精神を暢氣にして野外に出で適宜の運動遊戯を事とし皮膚は極めて清潔になし一日二回の冷水摩擦寢際の鹽湯を怠らず行ひ、寒中はストーブの室に居て温度をいつも四五月程にし、暑中は淨水浴を試み、衣服は輕暖なる物を屢々取換へて垢附かぬを注意し、或は音樂を聽き、或は山水花木を眺め或は舟遊或は登山或は無邪氣な談話或は摘草或は茸狩以て何等の精神を刺戟することなく贅澤三昧否衛生一點張で數年を暮す覺悟でなくば却々根治の出來ぬものである。若し夫れ家は日光の入り方が少く庭園には樹木生ひ茂りて地上青苔を生じてる的に居り、病を苦にして一室に閉ぢ籠り悲哀な小說でも讀んで涙を流し、食物は雀の食ふ程取つて牛乳位を賴りとし冷水浴嗚呼ゾッとする温浴は一週間に一度位斯の如くにして藥を浴びる程服んでも何等の効あるものではない。益々

病を重くする一方でありますぞ。

〔眉毛を濃くする法〕問 私は 熱病でも何でもありませぬが 幼時より眉毛薄く殊に 軟かな鉛筆を塗つてゐます。何卒之を濃くする方法を今度といふ今度は没書にせずにお答を乞ふ(秋田縣の風時女)

答 一度思ひ切つて剃り落し加里石鹸を塗けて善く洗ひ然る後左の毛生藥を塗けて御覽なさい。

サリチル酸三瓦　ペーロバルサム五瓦

アルコール三百瓦　充實丁幾十五瓦

何故に剃り落してかゝる必要があるかといふに中には眉毛間に一種の黴菌の在ることが有るからである。

＊　＊　＊　＊　＊

▲(兵庫縣の沖の石女)(播磨女)(千葉縣松島)(兵庫縣棒花女)(香川縣開眼女)に答ふ——夫々專門の醫師に就いて親しく診察を受けざれば全治せず。

▲(新潟のアーメン女)へ——肋膜炎の病氣に就ては本誌で屢々答へました、されば當分書かぬ積です。故に詳しき事を知らうと思はれたら拙著「通俗治療法」(博文館發行)を讀せられたし。

▲(大阪の小香秋子)へ——吃訥は醫藥にて治らぬもの。東京小石川區第六天町伊澤修二氏に就て矯正法を施して貰はれよ。

▲(大阪む昵女)へ——診察の上ならでは何とも答へ難し。

▲(備中國富士子)(山口縣玖珂郡峯中女)へ——滿一ヶ年間一日も缺かさず每晩寢際に入湯を續けて見給へ。

▲(東京顧尼)へ——大學病院の眼科部に入院せられよ。

▲(大阪府堺市日の出女)へ——鼠賊の腰湯は何日頃お續けになつたのですが今一度明細に記されたし。

▲(京都森の化身女)へ——度每に洗ふには及びませぬ。

▲(韓國の龍野女)へ——痔には幾通りもあれば容態を詳しく書かれよ。

▲(兵庫縣濱枕女)へ——失望し給ふな色白劑は効有るものに非ず、色の黑いは致し方がありませぬ。

▲(麻布のくろばら)へ——唯ボロ〳〵では不得要領です。

〔質問の希望〕問 私は本誌の第二卷第七號から 爾來引續き愛讀し 質問も三四度致しましたが「衞生顧問」は矢張何科々々と分けずに不規則に御掲載の上お答へ下された方が却て便益だと臆で願望と噂をなしてゐます、他雜誌には餘り規則正しく答へたのも見受けますが、果して讀者の問に答へたものかと疑はれてなりませぬ。(神田の卯儀女)

答 果して多くの讀者諸姉が之に贊成せらるゝならば余も亦貴女の說に從ひませう。尙其他に答へ方の名案あらば御遠慮なく申込まれよ。

小兒と寒氣

◎寒氣と呼吸器病　冬から春へかけて大人も小兒も呼吸器病に罹り易い、小兒の氣管支加答兒や肺炎は、毎年十二月中旬から多くなり、小兒科醫師は正月二月が極忙がしい時季である、此事實に徴しても寒氣と小兒病の關係は直ぐ判る。

◎感冒の基　兎角小兒は朝又は夕方に氣むつかしくなるので戸外へ連れ出すのが東京の習慣である、併し夕刻の外出は海邊から吹き及ぼして來る西南風の爲めに空氣が乾燥して居るから健康には極めて有害で、且つ種々の病菌に冒され感冒に罹り易い、總て小兒の面部を寒い戸外の空氣に觸れしめぬやう自分の胸にあてゝ抱くやうにするのが安全だ。

◎浴後の就寢　入浴は日中暖かな時にすれば無事である、夜分入浴させて其儘寢衣を着せ直に寢かす人が多い、是は翌朝になつて急に感冒に罹る虞がある、入浴後三十分間位は元の衣服を着せて只寒い空氣に觸れさせぬやう注意し終る後寢衣を着せて寢かす方が宜しい。

◎煖爐と火鉢　次に煖室法の撰擇である大概は火鉢とか煙突のない室内煖爐とかで簡便に濟ますが是等の器具で炭やコークスを盛んに焚くと酸化炭素が發生する、是を防ぐには煙突のある煖爐を撰ぶの外はない、煙突があると空氣の流通がよくなる、室内が暖まつても逆上せる憂ひはない、煖爐は陶器製が一番宜いが高價であるから鐵製の煙突のあるのにして、之に薄い亞鉛板が鐵板の上蓋をスツポリ被せると火氣が温和になつて一層衞生的である。

◎室内の幕張り　北向きの寒い室など其周圍の障子や窓へ、金巾の幕を蔽ふ事は煖室法として最も良法である、白金巾の幕を鴨居から疊へ四五寸引摺るやうにして垂れ隅々も隙間なく蔽ふのである、斯うすれば火鉢二個を要する室も一個にて濟み、衞生と經濟とを兼れる、寢室には殊に必要である、又嘗て一小兒患者の家にて紙帳を造らせた事がある、二疊敷位の廣さで天井なく、緣のあるもの即ち普通の紙帳を逆さにしたので深さ三尺位に造り出入口にも厚紙を垂れて其中へ病兒を寢かして置いた所能く暖氣を有つて成功した。（小原頼之氏談、東京朝日）



表情を基礎とする美容法

マスターオフアート　尾關數夫

△貌を見て氣分を矯せ

煩悶と不平とは美容上の大禁物で、心の訓練一つで醜婦も美人となり得るのだから、常に此心懸を忘れず、物を言ふたり笑つたりする際には、鏡を前において、唇が左右に曲つたり上下へ歪んだり、齒齦が現はれたりしたならば、自分の手で之を矯正して、筋肉に正しい習慣をつける工夫が肝腎である、また鏡のない所でも猶且これに對すると同じ心持でなければならぬ。尤も人間は何時でも嬉しい事ばかり續くものでないから偶々ムシヤクシヤした時や腹の立つた場合には、先づ鏡を見るが宜しい、其顔の我ながら如何に佛頂面であるかを認むると共に、多少精神が鎭まつて來る、爾うなつた時には強て微笑を浮てみる、すると氣分が自ら轉換して幾干か愉快になる。愉快になれば直ちにその情が貌に現はれるから不思議である。表情界の秘訣は即ち之に外ならぬ。

△美點の一部分を引立てよ

眼眸から口元、髮毛から色艶、其他一切の部分悉く揃つて何處に一つ批の打處もないといふ完全無缺の美人といふものは求めて得られない。けれども僅に顔や姿のどこにか一つの美點がある爲に全體の容貌を補ふ事が出來る、例へば生際が良ければ醜い額を掩ふ事が出來るし、眉が美しければ眼の缺點を補ひ鼻の格構が好ければ周圍の惡いのも左程目立たず、色が白ければ

七難隱すといふやうに、唯だ一ヶ所の美も全面の上には重大なる勢力となるのである。だから少し位のお多福でもお凸でも一概に悲觀せず、眼元であれ口元であれ、一つたりとも美點があつたならば其美點に全力を擧げて、他の部分を補ふ工風をするのが大切である。そこで局部々々に就いて順序を追ふてお話しすると先づ第一の表情機關は眼である。

諺に「眼は心の鏡なり」とある、又「汝の眼瞭かなれば全身も亦明かなるべし、若し汝の眼眊からば全身もまた昏かるべし」と聖書にも說かれてある、又孟子にも、「眸子を見て胸中を推る」といつてある、孰れも皆な眼の勢力の偉大なることを說いたものである、兎に角眼は喜怒哀樂の七情を司る、樞要の部であると共に眼の好惡は直ちに顏面美の死活に關するのである。

△眼を美的にする法は如何

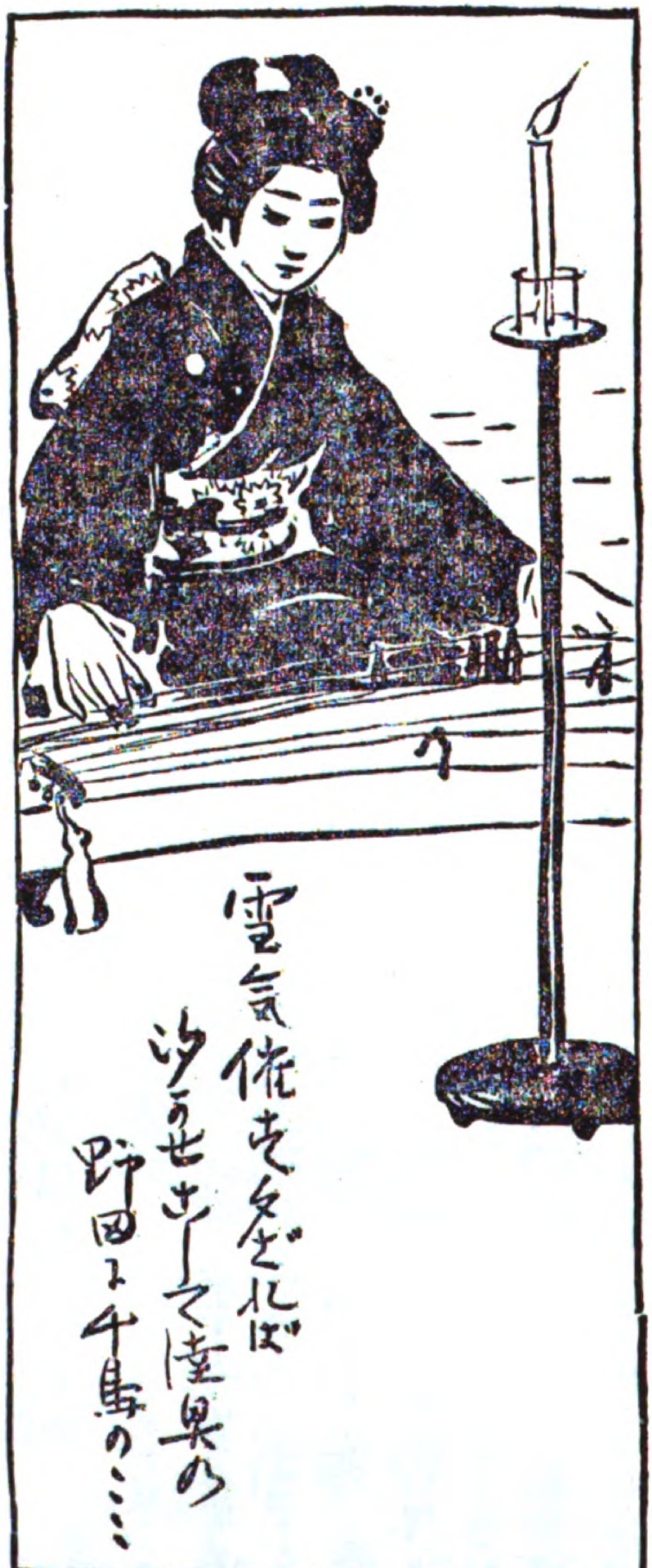
悲しければ淚が湧き、腹が立てば上釣つて鋭い光を帶びる、不安の事があれば瞳子が落着かず、嬉しい時には美しく輝く、斯様に眼と心とは密接な關係がある、殊に婦人は感情が激しいものであるから、精神を極めて優美にもつて愛らしい情を現はさねばならぬ、いかに化粧を巧にしても、元來の心が濁つて居つては直ぐと眼にあらはれるもので、眼ばかりは到底欺く事は出來ない。

巴里の女優や乃至は一部の貴婦人の社會には、自然の表情によつて美しくなるべき瞳子に、アトロピネといふ毒藥を點じ、無理に眼球を開張させて愛嬌を添へやうとするもの又は紅をさして眼の艶を出さうとする極端なる冒險的の虛飾女もあるが、化粧も恁うなつては寧ろ有害で、それこそ命懸の覺悟がなければならぬ、さり乍ら如何に科學が進歩しても、茶色がゝつたのを純黑にする譯にもゆかねば、曇つて居るからとて網巾布で拭ふことも出來ぬ。要するに眼の美は、心の命令には從ふけれど、人工には從はぬものだから、結局は根本的の化粧法、即ち精神の美的感化に由るの外はないのである。

△瞼をうるはしくする法

次には三つの武器、即ち瞼と睫毛と眉とでこれは鼻から上の美を助ける三つの武器であるが、之等は眼と異つて人工的の化粧法が種々ある。先づ瞼を綺麗にするには子供の時から泣かぬやうに氣をつけねばならぬ泣けば涙が出て自然と皮膚が荒るのみならず、遂には其處に細い皺が刻まれて生長の後も拭ふべからざる曇りとなる。されば平素の心得としても、常に小い柔かな刷毛を以て輕く眼縁を摩擦するのである、此習慣をつけるとやがて淡紅い櫻色の光澤を生ずるのである。又瞼が弛んで腫ぼつたくなつた時は、眼を強く見開いて其皮膚を緊張させ、而して晩には化粧水を塗り、朝になつたら微温湯で洗ふのが良法である。

それから睫毛であるが、まつ毛の長く密生したのは表情的からいふと可愛らしく見える、衞生上からいふと埃が這入らないでよろしいから、時々理髪師にでも賴んで毛の端を摘剪つて整へさせるのがよい。又これを密生せしめる特効藥はイリコヂチスといふ一種の香



油であるが、普通の小間物屋にはあるまいから左に調劑法を掲げましやう。

椿油四百八十瓦、橙皮油五瓦、麝香草油六瓦、ベルガモツト油ゲラカム油各五瓦以上を混和して一日二回塗布の事。

△眉毛を美しく粧ふ法

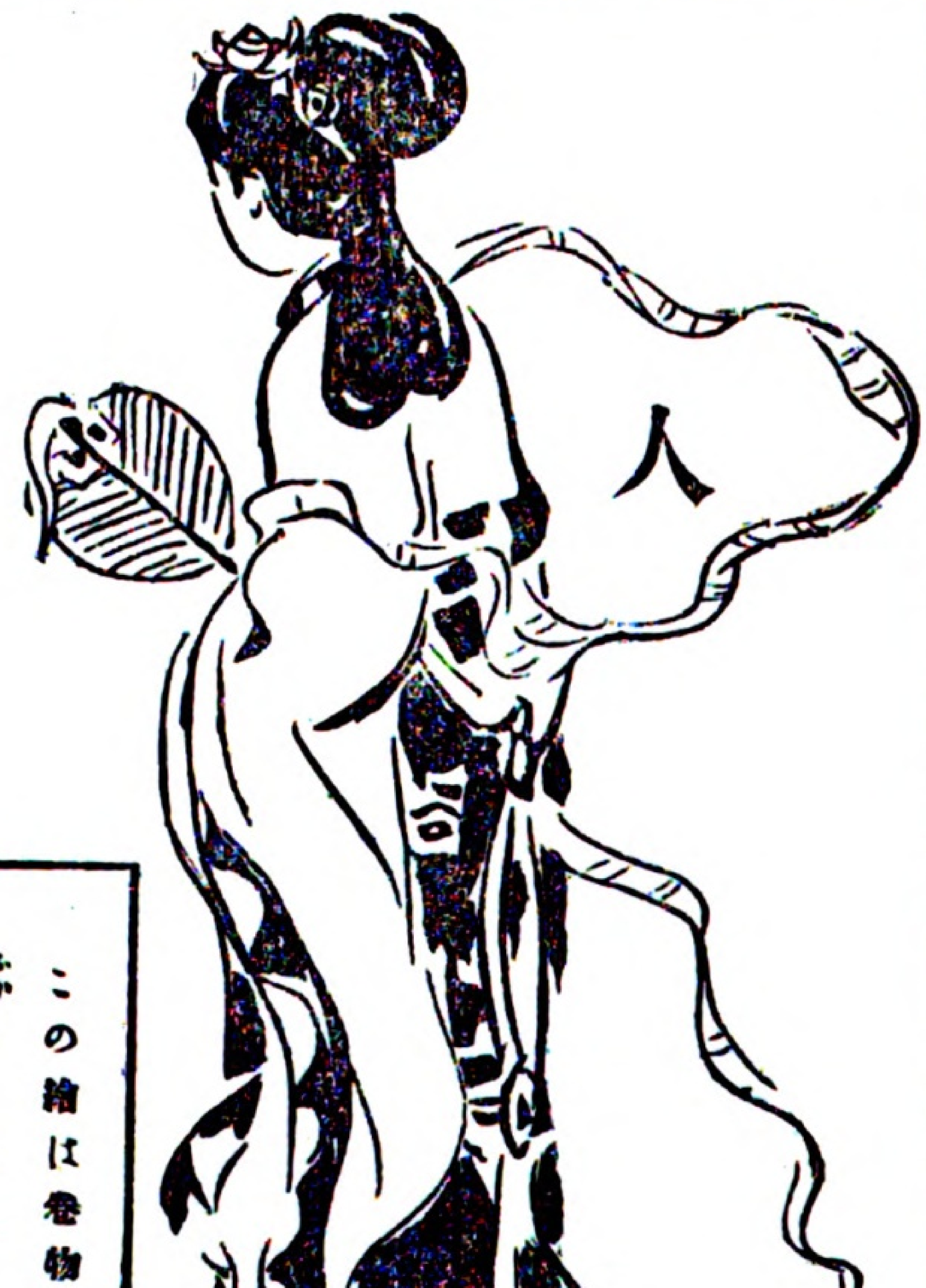
眉毛の美の本意は、左右とも格好よく並んで、眼の開裂に沿ふて弓形に反のあるのが良いのである、遠山の翠黛と云ひ、新月の如しと形容したのは最も適合して居る。けれども備う理想的のものは澤山ない、そこで之を美しく育てるには、硼砂を五十倍の水に溶いて毎朝洗面の後、房楊子のやうな柔かい刷毛を綠茶の中に浸して眉に塗るのですがもう一ッは就床時にグリス(動物の脂肪)或はベースリン(何れも薬舗にあり)を擦りつけて翌朝清水で洗ひ落し少量のペトロリユームを塗けて置けば、漸次と眉毛の濃くなるものです以上は生毛薬の一種です。

西洋の婦人はこういふ事の手入れには却々苦心をするが、大抵は天性の眉の形に從つて黛を用ゐるから自然のまゝのやうに濃く見える。尤も近來ではこれを柔らかい鉛筆で描くのもあるが、此方が墨の様にピカつかずに落着いて見えるので大に流行してゐる。

△鼻の格好は幼時の注意如何にあり

醫學の進歩につれて近頃では鼻を整す方法が發明せられたが、併しこれとて天性の形を根本的に改造する譯には行かぬ、唯だ低いのを幾分か高くする位のものである、それよりも先づ小兒の時から、美育が肝腎である。そこで鼻の格好は顔の形と調和せねばならぬのであるが、まづ誰の眼にも立派に見えるのは、鼻梁の眞直に通つた、小鼻の怒らぬ素直なのを愛らしいとしてある。で之は乳兒の頃から母親の注意の如何によつて、良くもなり、又惡くもなるもので、其格好は未だ充分骨の固まらぬ中に善い癖をつけねばならぬ。又平常顔を洗ふ時にも拭ふ時でも、必ず上から靜かに撫下

すやうにして決して下から逆にしてはならぬ。世間によくある例だが母親が乳房で其子の鼻を押つけて、形を崩すのがあるから、此點は特に氣をつけねばならぬ。又この衛生法は一週間に一二度づゝ、冷水を鼻より吸込み口から出して掃除するのである、之は鼻粘膜を強くして感冒を防ぎ、且つ顏面の充血を去る良法で、初めは少々苦しいけれど馴れて了へば何ともなくなる、今日歐米の衛生家は大抵これを行つて居る。



▲寶さがしの内（辨財天）

この繪は卷物へつゞく

△口元をうるはしくする法

笑凹も習慣で出來る

造物主が人の顏を造るには全く美術的の意匠を凝したもので、眼、鼻、口、耳、その配置方には一も間の拔けたところがない顏面を二分して上部の美を眼が司るものとすれば、口は下部を司る唯一の表情機關である。然るに之を粗末に取扱つて、夜更しなどをしては唇を荒し可惜花の色を褪せしめたり、疳癪を起しては唇を喰ひしばり口元を吊上げて醜くしたりするのは、天與の美術品を自ら害ふものと謂はねばならぬ。で此等の人爲的美化法はどうかとい

ふに、第一に口の周圍にある筋肉の運動を自在ならしめるので、其法は例のマッサーヂが一番よいのだが、尙一層簡便なやり方は、一日に數回時刻を定めて唇の裏を齒で摩擦するのである、此際には上下の唇を内方へ吸込むやうにするが宜い。そして常に口許の締りをよくして、靜穩な心持で居れば習慣によつて自然と愛らしい笑凹が出來るものである。

△女優の美髮法

容色の美は年齡と共に衰へて、頭髮の色は爾う俄に變る事はない、ツマリ婦人一生の飾りであるから、この方法は最も大切である。記者が曾て巴里の女優に『貴女の髮はどうして爾う美麗でせう』と問ふたら、『別に六ケしい手入れは爲ませぬが、常に能く脂皮を浚ひ、一週間に一度づゝ洗つて、梳く櫛は使ふ毎に洗ひ淨め化粧臺には何時でも六つの櫛を備へて代る〴〵に用ゐてゐます、兎に角美髮の秘訣は淸潔の二字に過ぎませぬ』といつた、尙幼時より餘り油を用ゐず、平常毛根を淸いにして櫛は成べく齒の粗い木製を使ひ、又一日に兩三回指頭で頭を揉むのも、毛髮の發育を助けて光澤をよくする効があるものです。

次に最も美しい束髮法は髮を結ひ上げた後に頭の格好を美しく見せることである。日本の婦人は廂髮で額や頭の形の全で判らぬ程に膨らまして居ますが、西洋では恁那のは最早流行ぬ如何に廣い額の人でも、其全部を髮で掩ふのは獸の如しと卑められてゐる。

△頸と胸とはどうして整へるか

顏面のみに限らず頸も亦美容術に必要な一部分で之を好くするには、毎朝微温湯で衿首を温め、更に冷水で洗ひ然る後數回頭を廻轉して筋肉を運動させるのである。

それから胸部は、西洋ではコルセット問題が喧しく起つて居るが、我邦の婦人には此惡習慣がないから殊更言ふの必要はない、唯だ餘り巾廣の帶などで壓迫するのはよろしくない、自然窮屈で姿勢が崩れるから、

美容上にも宜しくない。

△顔の皺はどうして直すか

顔の皺を去るにはマッサーヂが最も良い其方法は額の横皺なら指を當て上下に摩擦するか、又は中央から外方に向つて輪なりに揉むのがよろしい。それから若い女の中には笑ひ皺といつて眼の邊に生ずるのがあるこれも矢張りこめかみの上に指を押し付け、前額の方へ向つて深く揉むので、大抵の皺はこの指頭で治す事が出來る。

△手足はどうして嫋やかにするか



日本の女は能く働くけれどもその代り又手足を粗末にする事が甚だしい。働くのは大に結構だが粗末にするのは婦人美を破るものである。然し足趾の發達の圓滿なる事は、これ亦世界無比で、歐米の女は靴で責められ、支那人は纏足の惡風で、何れも不具な足になつて居るが、日本婦人は天然のまゝに發育せしめるから、其歩調も優美で且つ容姿との調和も好い。

手は顔面と共に最も人目につく部分だから、年中懐手をして居るわけにはゆかないが、之をいたはり使ふのは女子の本分である

西洋の女は手を美化する事に憂身をやつしていろ〳〵な手段を用ひてゐる現にマニキユアーと云つ

て手と爪とを美しくする專門の職人がある。其方法を聞くに、最初半月形になつた象牙の器で指頭の肉を抑へ、その半月形のまゝに巧に爪を剪り去つて、それから藥品入りの溫湯で滑かに白くなるやう、手を充分に洗ふのである。此藥品――と云へば仰山だが其實他愛もない物で、山葵と蘿蔔を摺り卸し、その一匙を熱い牛乳の中へ入れて瓶詰にする、唯これだけの秘傳だから誰にでも出來る、試しに行つてごらんなさい。

△音聲を美くする輕便法

音聲は美の一要素である、如何に美婦人でも、其聲が濁つてゐたり澁つたり下卑たりして居ては、御座が醒める、よしや容貌は二の次でも、朗々玉を轉ばす如く聲の淸しく通つた女は何となく人品が高尙に想はれる、で此美音を養成するには、先づ日常の動作から正さねばならぬ、動作が正しくなつたら今度はラ、リ、ル、レ、ロの五音を中聲で息の續く限り繰返すのである、これで大抵な濁聲は良くなるものである又人と會話をするに訛りがあつたり、鼻にかゝつたり吃つたりするのを矯すには、第一に唇と舌とを充分に働かせる工風する其練習法は、アーオーや、アーイーや、ウーエーや、ウーオーの如き母音を頻りに發するので、此各音を每日十回づゝ繰返し約一ヶ月も續けると、自然唇が能く動くのみならず、顏の下部の筋肉運動を助けて、音聲は勿論口の形狀にも美を增すものである。

凡て音聲を發する器官は恰もオルガンの如きもので呼吸する每に吹庫のやうに動くのであるから、練習の如何によつては、何のやうな美音でも出す事が出來るものである。



花と女

戸川殘花

花が女を感化したのか、女が花を感化したのか、ドチラだか分からぬ。花は不解語の女、女は解語の花。花と云ふとスグ美と解してはいかぬ。美は美でも趣味の美で、アー美艶だ、アー麗艶だと驚倒せねば、美でないと思ッては駄目だ。例の「一ト抱へあれど柳は柳哉」で、この柳をば、柳居の句に「青柳や二筋三筋老木より」と吟ずると、殘る色香が姥櫻じやアないが、大ひに趣味あり。花は皆な美なり、女は盡く艶なり、(異性より見れば)乞食婆の小町も卒塔婆小町となると美化せらる、氣違いでも班女となると美化せらる。嗚呼世は花と女なり。

「詠め暮して花にまた〳〵宿かる草を尋ねん」と、謠曲、項羽の次第をヨワでうたはれると、虞美人草と本物の虞美人が眼の前に現るゝ、漱石さんの虞美人でも三越の友禪の虞美人草を着た、美人ほどには眞美は發揮せられて居ないかも知れぬ。さて、

奈良朝の女は漢人趣味で、隋唐そのまゝで未だ大和式の趣味がない、繪畵の天人の樣で大陸的を喜ぶ眼には適するかも知らぬが、嚙みしめた味のない、大味だ曲眉豐頰、地藏眉毛で、おかめッ面、體格はズングリして居たらしい、其れに衣裳の配色が青黄赤白黑の正色のみで、間色がないから壯麗は感せしめたかも知れぬが、優美とは云はれない。

其の美を唱ふのに、黑髮の美なることや、肌膚の和らかなることなどが重で、其他の形體美を細には敘して居ない。

花も數種のほかは賞美せられて居ない。

かきつばた(今のあやめで可憐な紫色の花をつけ、北海道でも本州の山地にでも昔からある花)

くず(葛)すみれ(菫)今の女學生などが愛するウアイオレットと同種ではあるが、少し時的趣味が違ッて、山野の興味と寂寞の光景がある。なでしこ(瞿麥)野撫子でピンクほどの美はないが可憐ではある。はぎ(萩)、ゆり(百合)、さくら(櫻)、つばき(椿)、つゝじ(躑躅)等

これらの野花山草が萬葉には多く讀れてある、唐からの舶來が段々に增して來てから。

きく(菊)(野生は勿論あれど、黄菊白菊と賞玩せられしは、唐種なり)、うめ(梅)、わすれぐさ(萱草)、などゝ大和式でない、唐様が園藝界の優物となるに至つた。

そこで漢詩を作る漢字をかく、佛經を寫すと云ふ様な婦人が現れて居る、古色蒼然ではないが奈良朝美人は階下の朱桃である。

平安朝の女は舶來の唐色が京紅となりかゝり、終には純粹の大和錦を染織したやうな者である。この時は最早大和式の顔となり、島國的かも知れぬが、唐臭い處は脱けて來た、黒髪の美、色白の頰ふつくりとして口元の小さく愛嬌ある、眼の少し下りきみが美的標本である、なづかしうらうたげと云ッて、姿勢男々しく足の運びのコンパスの廣さ、活動的ではなく、雨に惱める女郎花と評したる處が美の着眼的らしく見ゆ。肺的などゝ妄評してはいけぬ、やさしい所が美で、すなほな所が美で、なにとなく女らしい匂ひのある所が美である、然しこれは昔々の話である。

女の模範は淸少のオキヤンではない、紫女の淑女式である、淑女だからッて男の傍を去る丈餘と云ふ潔癖で、今の古樣式ではない、几帳は隔るとも油斷のならぬ事が多い、其れが可憐な趣味とでも評したものらしい、今では大ひに困る次第。

この頃は女が寫經や漢詩などは餘り作らぬ様になつて、和歌小說(物語)などが盛んになり、宗教も事相のみで迷信ばかりである、迷信、和歌、小說と發達したかゝる時代の花は何々である。

はな(櫻)、ふぢ(藤)、やまぶき(山吹)、なでしこ(瞿麥)、はぎ(萩)、きく(菊)、うめ(梅)等、

などで、舶來の梅花も難波津以來日本化し、菊も天津

星と詠ぜられ角々しき重々しき趣味は少なくなり、恰も櫻や藤の精が女に化した樣である、萬葉には高山植物もある雄偉な常磐木もあるが、古今集には小松引の松位で優美一點張となッた新古今も同樣である、冬季の花は一向に賞翫せられない。平安朝の美人は雨中の海棠。次に鎌倉時代も室町時代と櫻的藤的の美人ではない、袈裟御前でも千手でも靜でも凜然とした氣質である、謠曲にあらはるゝ女を見ても分かる鎌倉室



町の武家時代は女の品性が一變して居る表には男子に壓せられても守る所はキット固守する、舞の女を見ても分る、裳をつけずとも袴をはかずともキリヽと着て居る何分宗教が禪、念佛で畫の具なしの墨畫であるから、筆意と線の力のみである。謠曲中の花を見るに梅、櫻、杜若、藤などの平安式のみではあるが、何れも凄然のある花か、思ひ切て賑やかな花である、例の熊野の、「四條五條の橋の上〳〵老若男女貴

賤都鄙いろめく花衣　袖をつらねて行末の雲かと見えて八重ひとへ咲く九重の花盛」云々の雄麗美艶の光景である。豐公の醍醐芳野の花見的趣味が此の時代の花である、女でもある。しかし太閤樣の御花見趣味は足利氏の中葉以後で、鎌倉はまだ〳〵公家的大宮式が重んぜられて居るが、平安朝から比較ると豪宕雄大である。花の品種は平安朝と大差なければ略すが、女の品位氣質は月前の梨花なり、濃艶の垢はぬけたが江戸時代の覇氣も洒落もないゆゑ、月前の梨花と評しておく。

江戸時代即ち德川氏二百餘年間は、前と同じ武家時代ではあるが、平民の發達、儒學の感化、宋明淸の文學的趣味の影響等で、花も女も大變化を呈して居る。江戸の女は素顏素面と素足、洗ひ髮とまで發展した。脊のスラリとした、色の淺黑い起居動作に小股のきれる、心意氣の竹を破ッたやうなのがある。武家では御殿女中（岩藤も尾上もあらうが長刀の一と手は承知して居る）平民では遊女のハリと藝者のイキに進歩した勿論元祿前後、文化文政前後と小區別はあるが、總體が和歌的でなく俳諧的である、漢詩的である、抹茶よりは煎茶式である、立てば芍藥坐れば牡丹、歩く姿は百合の花は間違であらう、と思ふ。立てば江戸紫の花菖蒲、坐れば水淺黃の紫陽花、歩く姿は寒香一輪の水仙花なり、史實かドウダカ、確證はなしと雖も永代橋畔の三叉にて仙臺侯が高雄を斬りし慘事を吟せし人あり、江戸の女形質を窺ひ得ん。

慣ニ佳人一。佳人嚬。佳人嚬。太守嗔。妾身任ニ君活一。妾身任ニ君殺一。妾有ニ阿郎在一。妾心不レ可レ奪。春髮在レ手亂如レ絲。木蘭舟中斬ニ蛾眉一。

江戸の女は竹外の梅花なりき。花も江戸の末葉には歌人の知らざる花の種類多く、

臘梅。寒牡丹。山茶花。木犀。百日紅。薔薇。辛夷海棠。櫻草。福壽草等。

淸艶の品種あり、江戸褄の趣味なる哉、一中、富本の粹は江戸時代平民の淸趣なり、晉子蕪村は京江戸の詩趣なりと思ふ。最後の東京は未だ混々沌々二神出世の開闢ならん、男が先きに柱をまはッて女に叱られ、女が先きに柱をまはッて男に叱られ鉢合せをするが時代精神ならん、花は紅白のリボンうや〳〵しく結びし卓上の盛り花よ！！



誘惑に對する處女の心理解剖

元祿姉さん

紅梅の狀袋、其れすら既に艶めかしきに、墨色別きて美しう、何樣參ると女文字の仇っぽう書き流して、裏には唯九州にて磯千鳥よりとばかり、即ち日附けは一月元旦としてある。見記えのある樣な扨て無い樣な見事な手跡に、寧つそ何とやら不氣味な心地はしながらも、封押し切つて開いて見ると、先づは以て、

新年御目出度

申し納め候と、例のお定り文句にすらりと筆を起してあつた。

聊か落ち居て、讀み行く程にける程に、無沙汰の詫びやら安否の挨拶、月の夕を花の朝を、其の樂しかりし事可笑しかりし事、思出多き身一つ此處に、今は廬山のかくれ鄕、長汀曲浦に雁鳴き連れて等と、涙の溢れる樣な悲しい文句を延べつ幕列べて、女子は女子丈に如何にも、愚痴つぼく哀れつぼく少々古手な書き風にさん〴〵人を焦らした揚句、私事終々一口物に頰燒き參らせ候と、一旦筆を止めて置いて、

扨て更めて二伸とあつて、

御記憶能き貴女樣の、私斯くと申し上げなば、直ちにはゝあと御手拍ち給ふ事なるべし。角田樣とてお色の白きお眉の淸き、而してお脊の滅法高き、折ふしの時雨に秋は漸う末つ方の黄昏頃にもや候ひつらん。彼の何とか云ふ倶樂部會の歸り路とやらを、

御なつかしさは

御門前無下に素通りなりがたくてと、其處は今時ぜ

ントルマン樣方の御如才も在しまさず、今となつて考へて見れば、眞實の處雨傘の無心兼ねての御越しを、折から歸宅仕度遊ばし給ふとて、四疊の小玄關コート召し給ふ貴女樣に、礑と行き合ひ給ひしが思ひ出で遊ばすべし。さらでもきよと〳〵と狐憑き見た樣な御目付き遊ばして、更に〳〵沈着きの在しまさぬ、男方の樣にも無い頰少し紅う染めて、打ち反け給ふ横顏の何とか見ませし。例のお癖の紅絹裏溢るゝ八ッ振り袖輕う絞り給ひて、暮れなばさこそ母の待ち給はんにとのみ、わざとには在すまじけれど格子戸半ば開けながら何時もの樣には振り返り見も遊ばし給はず、さつさと夕闇の生垣を沿うて、又こそとばかり下駄音低う、實に心憎くき御擧動よ。空は何時しか時雨霽れて、月一つ公孫樹の梢に懸かるも凄じ。更けては火影いよ〳〵淡う淡れて、

母屋には遠き

離れの小座敷、今は全く人の動靜もせず相成り候。

……血に飽くか木枯、外套の衿立てゝ密びやかに裏木戸より歸る男の、思へば盡きぬ怨恨につく〴〵後姿見送りしは其の夜に御座候。

此をや女子の愛とや云ふ戀とや申す。恥かしけれど戀ならぬ戀の徑路、包むに餘る袖袂の、淚あやも無く溢れ候かな。

流石に淡墨痕の之れよりは行少し亂れて、

盲目者は夢にも色を見ず、啞者は夢にも聲を聞かずとか申し候へば、其の頃未だ露人眷戀しとは覺え候はぬ身の、夢にも現にも思ひ泌みて一つ事は繰り返して見まじきものを、彼の頃不思議にも幼かりし學校友達の上ばかりを、毎夜の樣に毎晩の樣に見申し候。時には校長先生のお頭のお禿げなされし處や、六兵衛小使ひの剽輕な面相、女生控へ室の破れかゝりし硝子窓の數、毎年初夏の頃より大きな蜂の巣を作る便所の側の大榎迄あり〳〵と見し事も此れ有り候。もう今となりては能くも記えて居らせらるまじけれど、私共とは僅しか同じ級にて、毬栗頭の、

色白な丸顔

其の頃何時も小ざつぱりとした飛白の筒袖に袴の裾短う、私其の人の名迄能く記憶致し居り候。自體忘れつぽき自分の事とて、此れが普通ならば疾に忘れ返つても居る可き筈を。或る時不圖したる事にて其の名を思ひ出し、其の男を思ひ出し、果ては其の夜幼かりし折の其の男の夢を見たるが抑もの始めに候時も知らず處も朧氣ながら、何でも學校の放課後かとも覺え候。級長の用何くれ



とし終へて、雪の日踏跟く校門を出で候處、御承知の通り、彼處よりは町端の家並ある處迄未だ五六町の餘は候べし。吹き通しにて原中の一筋道、放課てよりは其方此方小一時間も經過居り候事とて、霏霏として降り積む雪に道の程もえ分らず、獨り途方に暮れ居り候處後よりすたくと其の男の駈け來り候て、物も云はず、私の横顔ちらとのぞき見て其の儘先に立つて歩行き吳れ候。妙に唯氣恥かしうて一通りの禮すら述ぶる事もえせず、逃ぐる樣にして其の四ッ角を他に外らしたるのにて候。斯くては夢と申し上げ候はんより、

嘗つては一度

幼かりし折經驗せし古き記憶の、再び新らしき空想ともなりて、秋は夜深う獨居の徒然、寢もせぬ夢の枕に通ひし思ひ出か知れず、我れながら夢とも現とも未だに分きがたく候。

私今更めて其の人の名を申し上げなば、愈よ以て妙とも不思議とも思し給ふ事なるべし。實は彼の折文部省檢定の受驗に參り候ひし第一日に御座候。受驗者名簿に自分の姓名記し終りて、不圖何心なく前の三四行を見遣り候ひしに、走り書ながら美しき筆跡、聞いた樣な名と幾度も〳〵考へ直し候處、成程成程忘られぬも道理、私共と一緒に同じ學校を同じ年に卒業せし其の男の名に候ひしを。「或る時不圖したる事より」と前に申し上げ置きしは、全く此の事にこそ候へ。其の時の校長樣のお談しなれど、其の人も男子卒業生の首席にて、矢張り親無き兄弟無き孤兒に候ひしとか。憐れやと深くも思ひ沁みし思ひの、心の奥の奥にも潜み居り候て、夢は自ら少かき昔に通ひ候ひしやらむ。

翌くる日よりは受驗に參りても、若しや其の人の在する事もやと思へば氣になりて仕方なく、

彼の人か此の人か

と頻りに思ひ惑ひ候ひしかど、俤の似通ひしが更になく、人や違ふ名のみや同じ、我れから女の身のいさゝめに、問ひ試みんも後めたくて、終には心ならずも其の儘に致し候。

其れよりは心地懊ましく悲しく辛く、寢ては夢醒めては幻の人戀しさに、云はれぬ女子の寂しさと恥かしさとを何時しか覺え初め候。角田樣とは決して私のゆかしき名には候はず、戀しき懷かしき其の人の御名にも候はず。されば人に戀する程の弱き自分には、不束や人の切なる戀にも絆されて、果ては其の人にも捨てられたるにて候ものを。斯くても〳〵其の男の憎まれぬが口惜しく存じ候。



美術

漆器

蒔繪

御婚禮道具 ぜん わん 家具 其他 きかく 作品 製造

めづらしきもの陳列場設置有之候間御隨意に御縦覧多少ニ不拘御用向被仰付被下度偏ニ奉希上候敬白

東京市日本橋區室町貳丁目

木屋本店

林九兵衛

電話本局（九百九十七番／千七百十番）

電信略名（キ九）

産科婦人科専門 醫學士 北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である⊙著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり⊙病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して。自宅の療法を會得せよ。當分の內無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ。

目次

婦人病の總論⊙子宮病血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法⊙神經衰弱、貧血、萎黃病とは如何及其療法⊙しらちながちの病理及其根治法⊙月經時の手當月經諸病の療法⊙姙娠の原理、受胎すべき場合、姙婦の攝生、つわりの養生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三千六百一） 笹岡省三

女（かの一）

女(かの二)

婦女必讀の大全書發行

第二編 四季料理

宮中臣民兩流料理師範
大日本割烹學會々長
石井泰次郎君著

◎緒論◎春の巻 みの字盡料理●春の西洋料理◎夏の巻 蠶豆料理●鮎料理●南瓜料理●豆腐と煉みそ●茄子料理●鶏卵料理●神武天皇祭料理献立◎秋の巻 栗料理●近江八景料理●松茸料理●紅葉づくし料理◎冬の巻 天長節料理●この頃の料理●紀念戦争料理献立●新年重詰拵方◎附錄 一月節の取合せ●二月節の取合せ●三月節の取合せ●四月節の取合せ●五月節の取合せ●六月節の取合せ●七月節の取合せ●八月節の取合せ●九月節の取合せ●十月節の取合せ●十一月節の取合せ●十二月節の取合せ●料理の品名●料理の習學法●日本料理を誤解したる事●第一料理を心なしに云ふ人●第二料理教師を選む心得●第三家庭料理を習ふ時の心得

第三編 裁縫指南

女子高等師範學校教授
喜多見佐喜子女史著

◎第一章 裁縫用具の名稱及用法●運針法●針留及糸結び●縫方種類●風呂敷、袱袋、紐、前掛、雑巾刺方等●衣服の名稱◎第二章 一つ身襦袢●三つ身襦袢●四つ身襦袢●大人襦袢●長襦袢◎第三章 女大人物單衣●男大人物單衣●一つ身單衣●三つ身單衣●四つ身單衣●前袷裁單衣◎第四章 袷綿入寸法●袷綿入積り方●袷綿入裁方●袷縫方●綿入縫方●羽織寸法●單羽織●袷羽織●綿入羽織●襠高袴●馬乗袴●小供袴●被布●男帶●女帶●シャツ●ズボン下●布團●夜具●小袖●重帷子●比翼●股引●脚絆●足袋●小供前掛◎附錄 裁縫に就て心得べき事項

第四編 和洋菓子製法

東京治庖會講師
龜井まき子女史著

●日本菓子を拵へるにつきての準備●日本菓子を拵るにつきての道具●日本菓子を拵へるに供すべき原料●日本菓子を拵へるに供すべき原料の保存◎餡類の部○並餡の製法○上等餡の製法○鹽餡の製法○外五項◎干菓子類の部○片栗の打物○落がん○麥らくがん○外卅項◎生菓子類の部●蒸物類○蒸羊羹○栗入むしやうかん○外廿六項◎焼物類の部○中華○三笠山○櫻餅○外十五項◎寄せ物類の部○煉羊羹○水羊羹○小倉羊羹○外十九項◎煉り物類の部○求肥○草求肥○海苔入求肥○外廿二項◎飾菓子類の部○最中○礎最中○利休最中○外八十八項◎西洋菓子の部○西洋菓子を拵へるにつきての心得○西洋菓子製法用の器具◎焼物類の部○ジンジヤケーキ○デセール○スポンジケーキ○外四十二項◎煮物類の部○ストロベリージヤム○オレンジジヤム○ストロベリーシチウ○外十六項◎油揚物類の部○ダウナッツ○パアフケーキ○マープン○外六項◎煠で物類の部○アップルプチング○ユコアプッチング○ボイルドボンジケーキ○外三項◎冷し物類の部○レモンゼリー○ジブローマン○イチゴゼリー○外廿五項◎ソース類の部○カスタソース○ミルクソース○ストロベリーソース○外四十五項◎諸國菓子談○日本菓子の歴史

（續刊）

●茶道と香道……水原翠香女史著

●諸流生花指南……琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著

女（かの三）

本町三丁目　博文館　◀振替貯金口座第二百四十番▶

全國到る處の藥店にあり

慢性皮膚病を即治し肌を艶美ならしむ

◉イーセリン…の他藥に優れる特長はしみず◉いたまず一夜に効あり◉而も内攻の恐れなく能く難治の皮膚病を治するにあり



●田虫●いんきん●がんがさ●ひぜん●水虫●かゆがり●すりきず●かんそ●くさ●しらくも●いとかせ●やけど●しつ●くつずれ●とびひ●にきび其他吹出物●諸毒虫の刺傷等總て皮膚病に用ひて奏効顯著なり

●藥價小十錢中二十錢大六十錢送料二錢

若し無きときは發賣元へ

古今りん病新藥唯一

▲「バロール」は新發見に係る根治的良劑で一回服量僅に二粒而も其効驚くべきで有る

藥價（三日量卅錢▲七日量六十五錢▲二週量一圓二十五錢▲三週量一圓八十錢（郵税不要）

陸軍々醫藥劑官實効証明



用量僅少奏効著大是特色

▲「バロール」は百藥其効なく時々發る漫性淋病消渇に驚くべき偉効を奏し確に此恐るべき難病を根治せしむ

發賣 東京神田鍛冶町 大木合名會社 振替貯金四八〇番

全國到る處の藥店にあり

若し無きときは發賣元へ

（かの四）

女（かの五）

學藝叢書

學藝叢書新たに出でんとす、筆を執るの士は皆當代一流の博士、説く所は深奥の學術を平易明快にして趣味實益兼備のものたらしむ、思ふに科學的思想の幼稚なるは邦人の通弊なり、而して之が普及を圖るに適する書籍の刊行乏しきもの實に其一因たらずや。本館茲に見る所あり、即ち各斯道專門の大家に乞ふて萬有科學の趣味を一般國民に鼓吹せんと欲す、之れ豈聖代の一缺陷を補ふものにあらずや、希くば目次に徵して續々御注文あらんことを

每月一回發行

洋裝美本
紙數二百數十頁
寫眞版五頁及
挿畫數十個挿入
定價各金四十錢
郵税六錢

理學博士坪井正五郎先生著 人類學叢話

要目

▲事物變遷研究に對する人類學的方法▲石器時代遺跡の實踐は人類學上如何なる利益ありや▲如何にせば人類學を自修し得べきか▲ミイラの話▲玉飾の起原▲何をか人種の別と云ふ▲野蠻未開人種の知慧▲土俗品と古器物外十數項

理學博士三好學先生著 植物學叢話

要目

▲植物と美術四項▲天然紀念物保存の必要並に其保存策に就て八項▲園藝と學理▲植物體に於ける氷雪の影響▲植物と降雨▲紅葉の話▲梅の生態

理學博士岡村金太郎先生著 水產叢話

要目

▲本邦養魚沿革事蹟▲海外養魚沿革▲海中に於ける窒素の淵源▲鼈の性質と飼育▲水產學の苗圃▲海苔篊▲篊と日比谷公園▲神馬藻と昆布▲寒天の用途▲寒天の製法▲ところてん寒天の歷史外數項

理學博士石川千代松先生著 動物學叢話

要目

▲進化論▲精蟲の話▲生物の生活は自愛か他愛か▲動物の子守▲動物卵の大小及び數▲遺傳は父から多く來るか母から來るか▲蚕の夫婦▲昆蟲の變態と露國の刺客▲蝙蝠の話▲サルに就ての學問▲魚類と磯巾着▲獅子の話▲目の話外數項

文學博士箕作元八先生著 歷史叢話

要目

▲國民の發展と海事との關係▲歷史上より見たる道德の危機▲西洋に於ける封建制度と武士道との起源沿革▲國民將來の覺悟▲日露戰爭の史的意義と國民將來の理想▲ナポレオン一夕話外數項

理學博士松村任三先生著 植物雜話

要目

▲植物を學術的に調べ▲我國の園藝と公園▲紅雪▲[illegible]▲樺太の植物▲水仙の話▲蠟梅の話▲紅葉▲蕣の話▲百合の種類▲木芙蓉の種類▲秋の野の草▲西洋の植木屋▲日本の園藝▲初めての植物採集▲事大主義を免れざる國語◎附錄▲花菖蒲▲顯微鏡の話▲少年と植物

〔續刊〕

●國語學叢話　文學博士上田萬年先生著

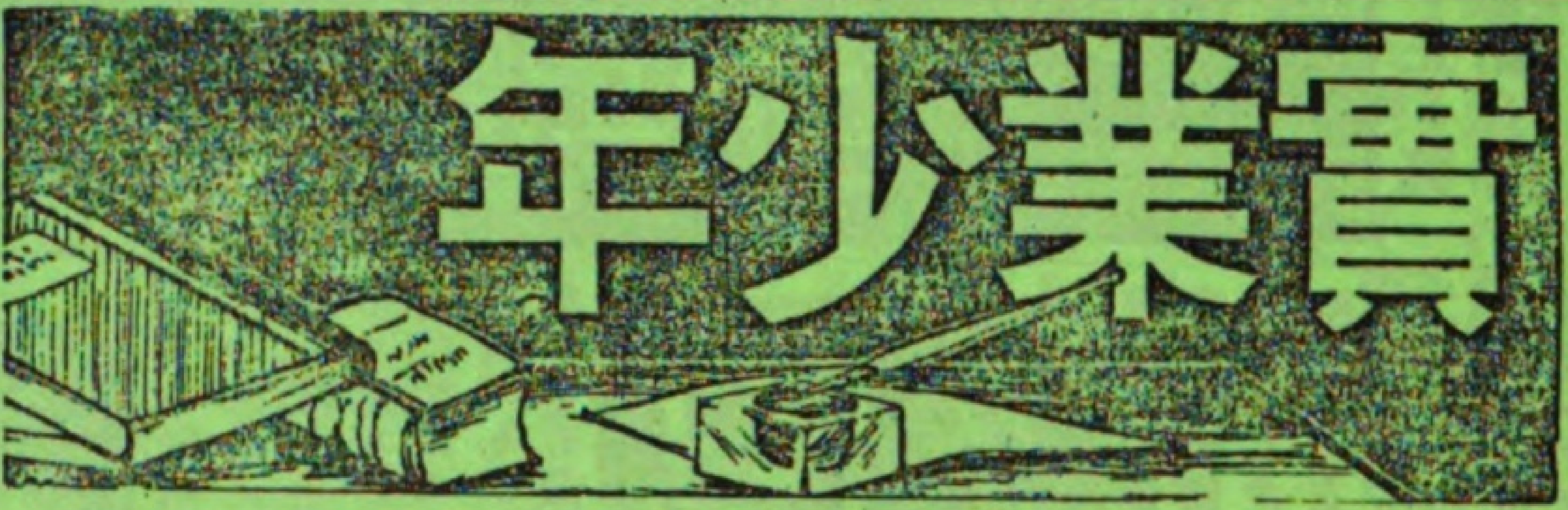
●地理學叢話　理學博士神保小虎先生著

販賣用電話
本局二六二〇番

東京本町　博文館

振替貯金口座
第二百四十番

●第一號は多大の部數を發行せしも好評の爲めに再版を爲せり



實業少年

第一巻第二號　二月一日發行

毎月一回一日發行洋裝大判（四六判二倍大）紙數七十二頁

正價一冊金拾錢　郵税一冊壹錢五厘

記事內容

●大道の水賣より仕上げたる淺野總一郎氏　石井研堂

●天然の法則と人間處生法との關係の實驗　村井銀行頭取　村井吉兵衛

●商界少年成功秘訣　第百銀行取締　池田謙三

●立志小說紀念日　堀内新泉

口繪

▲淺野セメント王馬車上の圖……芝關前の撮影

▲紙幣は斯の如くして製造す

▲紐育府と聖彼得堡最大市場

▲東京郵便局執務實況……（何れも珍書中の珍書）

記事內容

●學校出身者の商店員　三井鑛山會社理事　高橋義雄

●英國職工社會の內況　高等工業學校教授　齋藤俊吉

●龜鑑職工長の自白　法學士　上田一魚

▲其他記事數十件一行もむだなし▲懸賞文募集、懸賞考物募集等、賑なること支那朝鮮臺灣よりの投書續々たるにて知るべし。

●第二號は期を違へず本日發行翹望せる少年諸氏に見えんとす

東京　博文館　本町

（かつせ）

噫今となりては何をか申し上げ候はん。私の半生の哀史は此れにて終りを告げ、生きながらにして冷き墓に追はれたるにて御座候。怒濤巖を嚙む西海の濱一人淋しく荒磯邊に立ちて、幾度灰色に泡立つ果てなき大海原を眺めしか知れ申さず候。或る時は古林青嶂の外にさまよひ出でゝ、人知れず縊ればやとも致し候。或る時は毒を仰がんかとも思ひ候。又或る時は、物を食はず飮まずに饑ゑて凍ゑて死なばやとも考へ候。されど最と易かる可き死も私には餘りに難う候ひしよ。甲斐無き命も斯くて永らへなばと、

今日も終日

雨に暮し候。明日は風にて海や荒れなん。恥かしけれど大河原一郎とは忘られぬ其の男の御名に在し候と漸く筆を擱いてある。

數ふればもはや幾年の昔、睦月は五日の新年會に始めて、更月紀元節の夜のまとゐ、寒月冴ゆる霜夜の夕は、饑ゑと凍ゑとに泣く人の子もあるものを、衣食足つて禮節更に顧られず、夜陰の大路に影二つ小さう消えて、天の悶えか地の私語きか、神秘の幕は此れより開かる。男もすなる女子もすなる、若きは況して男女入り交りの、人間一疋決して正氣の沙汰とは思はれまじき亂戰惡鬪、白粉の香チックの香氣、女子は知らぬ男息の醱くみに、情に脆きは目や廻さん、心弱きは絶えも入りなん。友が憂き身を九州三界、

立つ名浮名

に都會をも住み侘びしと云ふは、抑も此のカルタ會に原因したのだと云ふ事である。

鄕里と學校の同じかつたと云ふ丈で、別に大して深く交つたと云ふ程の女でも無いんだから、墮落したからと云つてせぬからと言つて、無論自分には痛痒を感じる問題じや無い。けれど這麽妙變ちきりんな粋がつた手紙を突然にも舞ひ込んで見ると、誰しも多少厭やな心地はしやう。世間では能く女學生の墮落〳〵と頻りに喧擾しく攻撃する樣だけれど、其れは女學生と云

やゝ妙齢の若い盛りばつかりなんだもの、女學生で無いにしてからが、些つとやそつとは心得違ひする樣な者も稀にはあらうさ、大勢の中だ。御自分の細君を役者風情に寢取れて居るのさへ御氣のつかれない仲氣な先生方からして、女學生が何の墮落が怎うのと、頼まれもせぬ事にせつせと世話を燒いて居られるでは無いか。馬鹿らしいと云つて大人氣無いと云つて、此の位氣の利かぬ間拔けた下らない矛盾顛倒して居る事はあるまいと思ふんで、終見えにも這麼問題には向ふ側の火事視したくもなるのである。煙の上る處元より火なきにあらねど、草も燃えれば木も燃えやう。

化者の正體

見たり枯尾花、隨分造作の如何はしい頬ッぺたの眼れた女でも、自殺を謀れば美人と謳はれ、手もつけられぬ淫婦が貰人無さの苦し紛れ、我れから進むで不具者と結婚すれば、淑女とも賢女とも讃められる世の中だ戀には充分經驗のある處女樣が、桃割れ可愛ゆうお誇着けて學校へも通はるれば敎會へも行かれる、圓々しさは振袖召して御嫁に行つて、大の髯樣まんまと一杯喰はせられる事もある。女學生墮落問題も久しいものだが、此の間の消息には能くも御存じ無い方から、這麼問題に餘り深く立ち入つて頂く事は、先づ以て眞ッ平御免を蒙り度いのである。

或る人は云はれた。

近時女學生に就いて兎や角醜聲の聞かれると云ふは、由來女子敎育當事者が餘りに頑固にかたまつて居たからだよと。

辱くも其の人の說に依ると、數ある女學生の中でも此れ迄甚く浮名の評判てられた連中は、美人よりも寧しろ、

醜婦に多く

都會地に育つた人等よりも、田舍からぽつと出の女學生に却つて多いとある。何故かと問ひ返せば、男方には能くあるお癖の得意のお眉、流石に笑つて外り身に

なつて、夫れや男つて者は随分意地の汚いものだからね、若い綺麗な婦人と見ると、何か知ら兎角其の歡心を買つて見たくなる奴さ。滿員の電車中不體裁なつり皮に振ら下りの、席は皆迄讓つてやらぬ迄も、嚴つい肩は窄めて半座を分けて遣らうつてな親切は我が輩にもあらうからね。可愛い口で禮が云はれたら嬉しいか、時適美しい一瞥も加へられたら恐悦なか、我が輩其處迄は說明し得ぬが、よし男の賤しい好き心からばかりでなくとも、人情つてものは斯うしたものではあるまいだらうか。で無くつても、都會地に育つた婦人は、其



れや此れや種々の境遇に接する機會が比較的多いんで、自然耳も目も肥えてるつて様な譯だから、ちよいとした誘惑が假令男子の方から持ちかゝる様な事があつたとしても、大概な處迄は平氣で澄ましても居られる譯さ。けれど其處へ行くと醜婦や田舍出の人等は何かと其麼經驗には乏しい處へ持つて來て、其の癖年頃の女だもの色氣丈は人並に發達して居る。とまあ云へば或は語弊があるかも知らないけれど、異性から優しい言葉を懸けられて、誰れしも惡い心持のし様筈はなしさ。

だから美人の其れの如く都會地に育つた女の其れの如く、終沈着いては居られなくなつて、我れ知らず墮落の淵に沈淪して仕舞ふのではあるまいか。されば此の理から推して見ても、從來多くの場合に於ける女子敎育方針の樣に、やれ小說も讀むな芝居も見るな寄席へも行くな、用心は臆病にせよ、人と見たら泥棒と思へ男子と見たら色情狂と思へ、路で逢つても挨拶するな言葉も通すな猫一疋にも鳴きつかれるな、前面六尺よし橫合から自轉車が飛び出して衝突り相になるとも、側をも向くな橫をも向くな等と云つた風なのは、却つて我が輩甚だ以て感服し兼ぬる。恰も痘瘡の傳染を防ぐ爲めに、豫め醫師から種痘をして貰つておく樣に、落語よし義太夫よし、浪花節とてさのみは惡しからじ況して近時御繁昌の自然派とやら云ふ小說の露骨甘い處等は、寧つそ道學染みた苦いのよりも、

お口に適つて

藥にはなるべし。總じて意思の鍛錬修養から云つても女學生の行動に就いて餘り多く束縛を與へるのは、甚だ宜しきを得たる策とは云ひ難からうよと。

如何樣一應御道理な樣なお說ながら、飯は食ふべし酒ならば飮むべし。此れでは餘り私共を買ひ被り過ぎて居らつしやる。昔ルーソーとか云ふ敎育學の大家が兒童敎育は總べて自然なれと說かれた。熱いと知つたら火弄りは止め樣、痛いと經驗したら柱には衝突るまい、母親たる者は餘り干涉するな放任せよとある。苟も高等敎育を受けて居らつしやる女學生方を、何も自分は頑是の無い子供と比較する譯では無いが、火弄りや柱に衝突る位ならば、或は火傷か怪我でもすまされやうけれど、婦人一度かりにも男子と握手したら最後血を見ねば決して止むまじき女の本性、恐ろしや〳〵。後で氣がついて悔悟して復活して見た處が、

既に遲し

婦人の生命は疾うに失はれて居るでは無いか。

更めて言ふ。御氣の毒樣ながら婦人は誠に弱きもの

である。幼にして親に從ひ嫁して良人に從ひ老いては子に從ふ。所詮定つた運命ならば、其麼吝臭い嬉しがらせを仰つしやつて頂く迄もなく、三千年來男の勝手に定める束縛の下で、見ん事躍りもしやう跳ねても御目に掛けやう。世は秋なれや秋風冷し、其れよりも御自分等のお足下をと、終負け惜しみにも申し上げて見たくなるのである。

友は墮落した。曾つて東都の諸新聞が女學生の墮落てふ表題の下に、筆を揃へて友の記事を掲げた事もあつたが、其の頃未だうら若い單純な自分の頭には、此れ程紛糾錯雜つて居る事情のあらうとは思ひ及ばれなかつた。が併し狐煮らるゝ時は兎之れを悲しむと云ふ下世話もあるから、美しさは芝蘭芙蓉の花の顏、玉よりも雪よりも淸き處女諸君女學生諸君、自分は這麼奇怪なる手紙を新年早々受け取つたのを機會として、再び斯かる女學生の體面を損ずる人のない樣にと、序に婆心ながら忠告申し上げて置く。



世界漫遊のくさ〲

水彩畫家　吉田ふじを子

水彩畫家吉田ふじを女史は、幼少より父君の薫陶を受け、十一歳にして畫道に志し、小學校卒業の頃は、既に一廉の畫家となられたのです、其れより不同社（畫會）に入りて技を研き、傍ら語學を修めて世界漫遊を思ひ立ち、去る三十六年の春、花の蕾の芳紀十七歳にして令兄、博氏と共に北米に渡り、次で歐洲大陸を歴遊し、邦人の容易に踏み入れぬ亞弗利加をも、探險して歸朝されたる閨秀美術家です

△漁村の茶話會

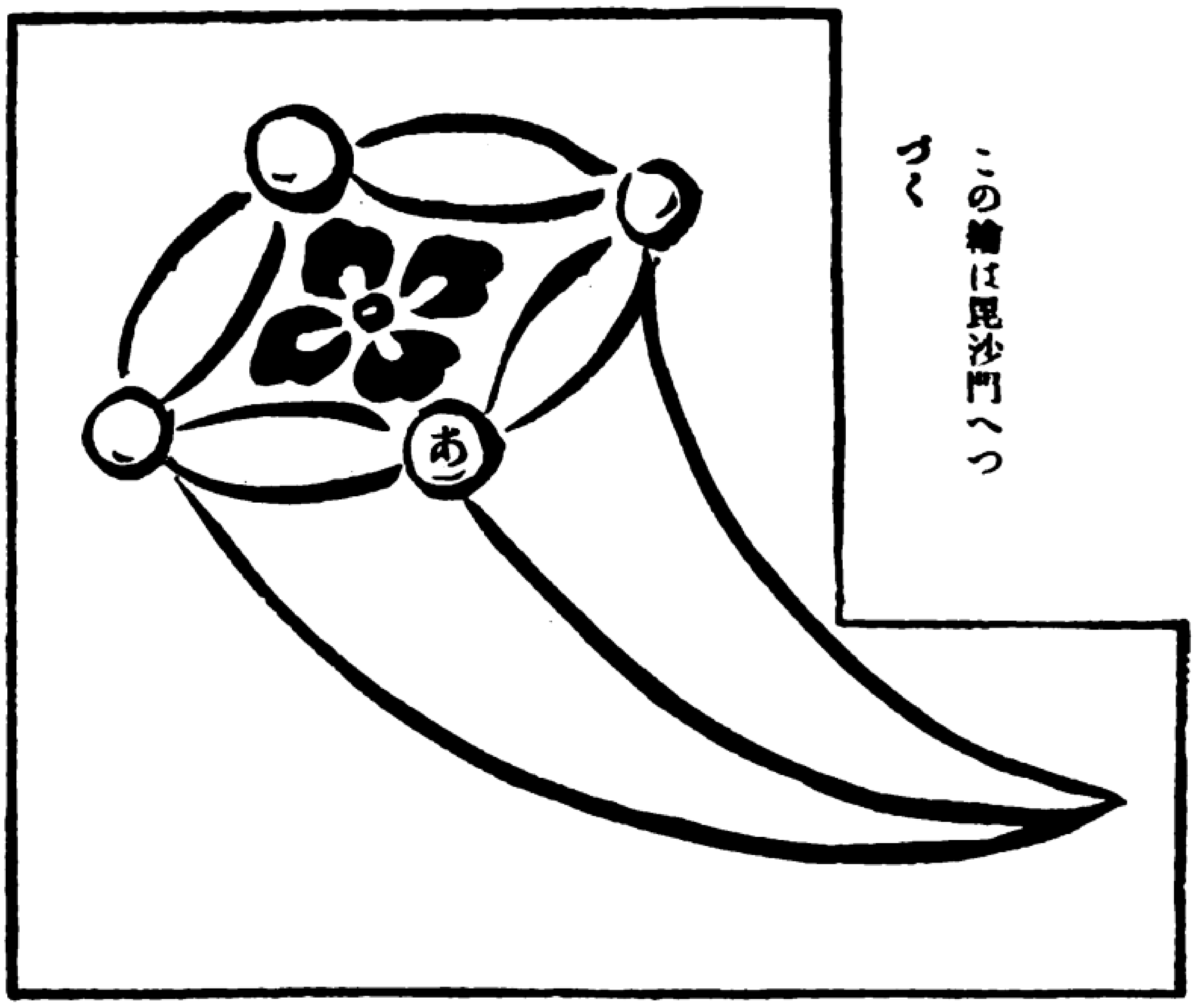
妾は亞米利加に滯在中は、多く東海岸に居ましたので、最初はボストンへ參りました。これは卅七年の春

の事で御座います。初め暫くは樣子が分らないので、色々不便を感じましたが、半年位も經ちますと、何うか斯うか慣れまして、漸く單獨で美術館へ行つて模寫したり、或は寫生に出掛けたりするやうになりました其年の夏、避暑旁々同地から二十里許り距つた漁村のイーストグロスターへ參りました。此處は夏になると美術家が澤山集る處で御座います。妾等の泊つた宿はハーバービユーホテルと云つて大した旅館でもありませんが、此宿丈にでも十幾人と云ふ畫家が居て、毎日寫生談や何かゝあつて大層面白く暮しました。此處に居た間に一度妾が主人になつて、此の人達に日本のお茶を御馳走致しましたが、お客の米國婦人が皆日本服を着て來られたのには驚きました。尤も日本服とは申すものゝ言はゞ日本風の西洋服で迚も格好はして居ませんが、兎も角も大概の人は態う云ふものを有つて居るのです。そして皆が頭髪へ棒をどつさり挿してゐるから、其れは如何した譯かと聞きますと、繪で見ると態んな風だと言ふのです。餘りの事だと思ひまして、繪に畫いたのは極く下等な婦人なので、眞面目な日本婦人は決して其樣な風はしないと申しましたら、初めて氣が附きまして、一座大笑ひで御座いました、此處には彼是四ヶ月も居りました。

△木炭畫の研究

其年の冬ニユーヨークへ參りまして、同地のチエススクール（美術學校）へ暫時入學致しました。彼國の人は不器用ですから、繪を習ふには隨分月日がかゝりますが、其の熱心な事は非常なもので、態う云ふ學校や美術館などへ行つて見ると、六十歳位のお婆さんが、毎日缺さず來て勉強してゐるやうな譯ですから、技術の進歩は幾歳になつても止みません。ハイ妾は此の學校で木炭畫を遣りました。御承知でもありませうが、木炭でモデルや石膏を模寫するのです。西洋畫を習ふには第一番には鉛筆で圖や四角を書き、それから木炭で彫刻などを寫すやうになり、尚ほ進んでは生物や風景などを寫生し、それより漸々と水彩畫、油繪となる

ので、此の順序を正しく踏まぬと何うしても繪が締りませぬから、元へ戻つて又々愁んな事を致しました。初めて繪をお遣りの方は、鉛筆や木炭では面白味が薄いから自然繪具をお急ぎになりますが、矢張り基礎を固めてかゝつた方がどうも好やうで御座います。



▲寶さがしの内　（七寶）

△寫生旅行

其の翌年の春友人を便つてワシントンへ参り、夏になつてヒラデルヒヤへ行き、其の間展覽會があれば其處へ見に行き、其れが無ければ田舍へ出掛けて寫生するなどして暮しました。妾らのやうな風景畫を遣る者は是非とも旅行しなければならないのです。其故亞米利加に居た前後二ケ年間と云ふものは、殆んど旅行で暮したやうなもので御座います。或は畫工は旅行もせずに想像で書くと思召す方があるかも知れませぬが、矢張り自分で實地を踏んで寫生して來た上で之を畫室で大きく書くと云ふやうにしないと迚もしつかりしたものは出來ませぬ。

△歐亞漫遊

歐羅巴へ渡つたのは其次年、(昨年)の五月で御座います。初めに英國へ参り、それから各國に在る美術館や古寺に保存する繪を見たり又旁々寫生もしたいと思ひまして佛蘭西、西班牙、獨乙、墺太利、白耳義、瑞西、伊太利等を巡りました。倫敦には一ケ月位も居りました。ナショナルギャラリンな

どは隨分見事なもので御座います。英國滯在中にスコツトランドに居るミスターディクソンと云ふ六七年前に日本へ來て居た方が是非遊びに來いと申されまして其處へ一週間許り參りました。此人は大變日本好きな方で、參つて見ると、其庭園には神社を造つて鳥居が立つて居り、又飛石もあれば、石燈籠もあり、室内には日本風の生花などを飾つてあるのです。此方も矢張り繪を書きますから一緒になつて時々寫生に出掛けました。英國を離れてからは妾は英語丈しか知りませぬから時々不自由をしましたが、美術館や其他繪のある處には大抵英語の案内書が備へてありましたから、目的丈は何うか斯うか達して來た積りです。で恁うして歩いて見ますと、日本の西洋書は筆使ひが器用ですから兎に角見られるけれ共、其の色の使ひ方は何となくうすべつたくて、何處かひからびて居るやうで、何うも麗はしい深い色が無い樣に思ひました。それ故妾が彼國に居ります内は此の色の工合に最も苦心しましたが、扨て遣て見ますと却々思ふやうには行きませぬ。

歐洲の旅行を終つてから、ジブラルタルを渡つて亞非利加へ參りました。ピラミツトと云ひ、スフインクスと云ひ、沙漠の樣子と云ひ、實に壯大なもので御座います。妾共は沙漠の中へは入りませんでしたが、遠く眺めますと、ナイル河の沿岸一里許りの地がずつと靑々としてゐるのに、其れより內部は廣漠たる沙原になつてゐるので、「死」と「生」とが相竝んで横はつてゐるのを見るやうなとでも申しませうか、實に妙な感を懷きました。先達て美術展覽會へ出した『カーナツク遺跡』は此時のお土產で、亞歷山に在る古寺の廊下を寫したものですが、此の寺院は紀元前三千年位のもので、火の神樣を祭つたものとか申して、倫敦のセントポールなどよりも餘程大きい立派なもので御座います。何うかして其の茶色がゝつた溫かさうな色や建築の壯大な處を其儘現はしたいと思ひましたが、何うも成効しませんでした。亞非利加へ來たからには今少しくナイル河を遡つて面白い景色を探つて見たいと思ひましたが、何分日が足りなかつたものですから、ルクソル迄行つて歸朝る事にいたしました。

室内の配合

◎装飾の器具を程よく見立てゝ使ふたのは、面白味のある事で、譬へば古銅の水次古く水に晒された釣瓶などを 花瓶に用ふるのでこれに朝顔とか、晝顔の様なもの一二輪を無造作に挿し入れて蠟色の薄板位を敷て飾る。床には句入れの文を趣味のある更紗表装 にしたるものか何かを掛けた床の装飾は云ふに云へぬ雅致がある。若しそれに軒先に葦簾でもかけて、釜の沸え音でも聴えたならばこれぞ 誠に塵 外の清境で、調度は 少くとも器物の價は貴からずとも、装 飾の上乘と申しても好かろう。この見立もの即ち道具の應用は茶人が一番上手である、若し器物が一度茶人の手に捕虜と成つた時は、どんな器物でも喜 んで彼の奴僕となつて働て居る、故らに飾つた様な跡は少しも見えない。

◎先年巴里に滞在された某夫人の談に装飾術の上から云ふて彼方の装飾が日本より優るわけではないが装飾の嗜好に於ては 迚ても日本人の及ぶ所では無い、一寸した下宿屋の下婢などでも装飾には大層凝つたもので、毎朝部屋の掃除をしても一々書物や机の 上などを種種に装 飾する、譬へば青色の表紙の書には黒皮の表紙の書物を並べては、配合が悪いから紅皮の表紙を置くとか 机の上に置いてある花瓶などでも白磁焼の花瓶には紅薔薇が取合ふとか申して、種々と置直して考へて装飾をする、それでどんな人の書斎に這入て 見ても種々と意匠が變つて、目新しく、面白くて、先づ 爽 快を感ずる、私も日本に居た時分はこの装 飾などの事は然まで心を留め無かつたが彼方へ来つてから室 内 装 飾 術は割烹や裁縫と同じ様に婦人に必要の嗜であると云ふ事を悟りました云 々と申されました。

◎装飾の美は必ずしも器物の多少や装飾品の價の高下計りでは評せられぬ、高價な器物や美麗な道具で派手に飾つた、丁度紅玉に彫琢を施した様な 装 飾これは勿 論 結構に相違ない、然し又明窓の下に、一基の浄几の上に二三の書册と一個の香爐 位を置たのも一種の趣味のあるもので、時としてはその素朴淡雅の風情は、優に金 銀 珠 玉を以て装飾した貴族飾りを凌駕することもある。

室内の装飾は要するに、程能く居室の體裁を得るか否やにあるので、若し一個の卓子を圍む賓主兩個の椅子と、卓 上 にあるシガーの小箱許りの飾りでも、その室の權衡、時機に相應すれば立派な一廉の装飾と申して差閊へはありませぬ。

暖爐の焚き方

△火を焚く前には暖爐の焚口の扉をあけて火床にある灰殻をとつてそのあとを灰搔か小箒にてよく掃除しそれから風通し口(下の口)の扉をあけて靜に灰をとりなさい。

△火種として燃つた炭を焚口(上の口)から火床の上に入れおき其上に十能で四五杯の石炭をつみなさい、もしおこつた炭がない時にはかんなくづと木片か細き割薪を積みて火をたき其上に石炭を載せても よろしいが石炭に石油をかけて火をつけることは極めて危ないから決してそんなことをしてはいけません、斯うしてから焚口の扉を閉めれば下の口から風がはいり火が石炭に燃えうつります、そこでまた焚口をあけて石炭をいゝかげんにいれ内外の扉を確とゝめ火が燃えだした音が ごうごうと言ふ時分に通風口をかたくしめるのです、もしもあけはなしにしておけば石炭はずん／＼燃えてしまい、そのわりに室はあたゝまらず、誠に損ですからよく／＼御氣をつけなさい。

△石炭をあまり多く入れすぎて十分にたく時は暖爐が赤くなり、いたんだり破裂しますから入れすぎぬやうになさい、といふて餘り少々もいけませんから始めにはバケツ一杯を二度に入れて暖爐をあたゝめ 其後は少しづゝ足すのが宜しいのです。

△もし石炭を入れすぎ暖爐がやけて赤くなつても水など かけてはいけません、通風口をあけたまゝ焚口の扉をあけておけば直に火の勢は弱りますからその上で焚口をしめるのです、此時には悪い瓦斯が出てくる事がありますから窓をあけて新鮮の空氣を入れかへる方がよろしうございます。

△夜中寢てゐる中に火が消へるとよく風を ひきますから寢る前には石炭を入れ燃えだすのをまちて十能で火の上を輕く叩いて 其上に灰をふりかけおき通風口をしつかりしめておけば朝まで火は保ちます。

△暖爐の扉は鑄物で破れ易いから十能や火箸でつかぬやうに なさいあけたてども手荒にしてはいけません、暖爐の上に紙を貼たり釘を打つたりすると危ないからこんなこともやつてはいけません。

△暖爐を焚いてゐる時には燃え易いものを近傍においてはいけません。

△煙筒に通る掃除口の金具に觸つてはいけません あれをいじると室の中へ煙や煤が出たり、暖爐の工合を悪るくして燃え悪くゝなる時もあります。

△室内の空氣は時々變へないと毒ですから ときどき硝子窓の小窓をあけて風をおいれなさい小窓のない處は入口の戸を少し あけて風を入れるがよいのです。

△暖爐を焚くと室内が乾燥き咽喉を傷める事がありますから 湯を沸かして湯氣をたゝせる樣になさい、湯を沸かすことが出來ない時はバケツにでも水を入れて暖爐の側に置いてもよろしい。

△室内で木炭を澤山おいたり、焚火をする時は室内の空氣が悪くなります、別して窓をしめる時は炭酸瓦斯と言ふ毒氣が室に一ぱいになりますから木炭の焚火をする時には殊に度々窓をあけて風をお通しなさい、閉切つた室の中で頭痛がしたり眠くなつたり又は吐き度い氣持がしたりする時は直ぐ窓を あけて新しい風を入れなさい就眠前には取わけ氣をつけて必ず風を一度通さないと 寢て居る中に此悪い瓦斯がふえて中てられて窒息する事があります。



指環の話

上田一魚

△指環は趣味深きもの

紱冕を着して廟堂に立つ高貴の人々を初め、鶏鶩と食を爭ふ匹夫野人に至る迄之を用ひ之を愛翫するものは指環です、人生の最大の慶典である婚姻には玉椿の八千代末懸けて變らぬ誠の印となり、人生悲哀の極である離別にも、倶に在りし昔を忍ぶ形見となる。巴里の花、龍動の月、交際場裡に時めき給ふ貴婦人の纎指に輝くダイヤの指環、筒井筒振分髪の穉な兒の指端を飾る南京玉の指環、何んと需用の多い、趣味の深い物では有りませんか。

指環は伊達を競ふ春の夕の舞踏の羅や、贅を誇る櫛笄の類とは其の性質が少しく違て居ります。恥かしき胸の思ひの温かき情をルビーに匂はせ、退引ならぬ證據は等閑に差した指環に口を利かせ、輕卒家の一寸忘れし印形の代りを勤め、まさかの時には暫し口を糊する糧となる、指環ほど世の中に神聖な、便利な、重寶な、爲になる趣味の深い物は有りますまい。

歐米諸國では此便利なる重寶なる可憐なる指環を老若男女の區別なく使用して居る者が多い、我國でも近頃は結婚指環なぞが大分流行して居りますが未だ歐米諸國程では有りません。殊に男子が嵌て居ると何か白粉か紅でも附けて居る様に思つて邊幅を装ふ氣障な人間だと直に排斥を爲る人がありますが指環の元來の性質を知らぬからです。

△指環の起源

指環の起因に就ては大體に二つの説が有ります、一つは昔未だ教育が普及せず文字を書く術を多く知なんだ時代に於て、署名する必用のある度に特別なる印を署名の代りに書いたもので、其特別なる印を日本の印

形の様に或る金屬物に彫刻して使用をして居つた、其印形の様なものを携帶する方法として或は之を指に嵌め、或は之を腕に嵌めて居た。現にバビロニヤ、アッシリヤでは圓柱體の上部を水晶の結晶の様に削り、下部に姓名を刻し、中央に長き緒を通して之を腕にかけて携帶して居たので、其後幾星霜を經て腕に懸けて携帶するのは不便である故遂に指に嵌める様に成つたものだと謂ふのです。今一ッの説は環は無窮とか神聖とかの意味を有するもので、宗教上大切なる偶意の存する物と成つて居る、特に昔未開の迷信深き人民は環を非常に大切にしたもので、環を所有して居る者には外から惡い物が身體の中へ這入て來ないと深く信じて居つたので、現にカルパサスのグリーク島の百姓には奇妙な習慣が有る、人が死ぬと友人等に急いで其死んだ人の指環を拔てやる、何故かと謂ふと指環を嵌て居る間は外部から其人の身體の中に惡いものが這入て來ぬと同時に、靈魂が何時迄も其身體の中に徘徊て居て天上する事か出來ぬと謂て居る。其他太古の英吉利人が造つた墓の一種で有るストンヘンジを見ても、石を環の形に並べて居る。又印度人が祝事の時に爲す舞踏は圓形を造て踊る、中世の巫女が魔術を行ふ時には自身を中心として地上に圓を描き術を行つて居る間は如何なるものも此神聖なる圓より内に入つて神術を妨ぐる事は出來ぬと謂て居る。斯くの如く環は神聖なる物として居るので有るから或は耳に、手首に、指に、之れを嵌めたもので、耳環、腕環、などゝ同じ起因であると謂ふのです。即ち一説は實用から起つた物であると謂ひ、他の一説は宗教上の迷信から起つた物だと謂ふのですが、私は寧ろ迷信説に贊成します。

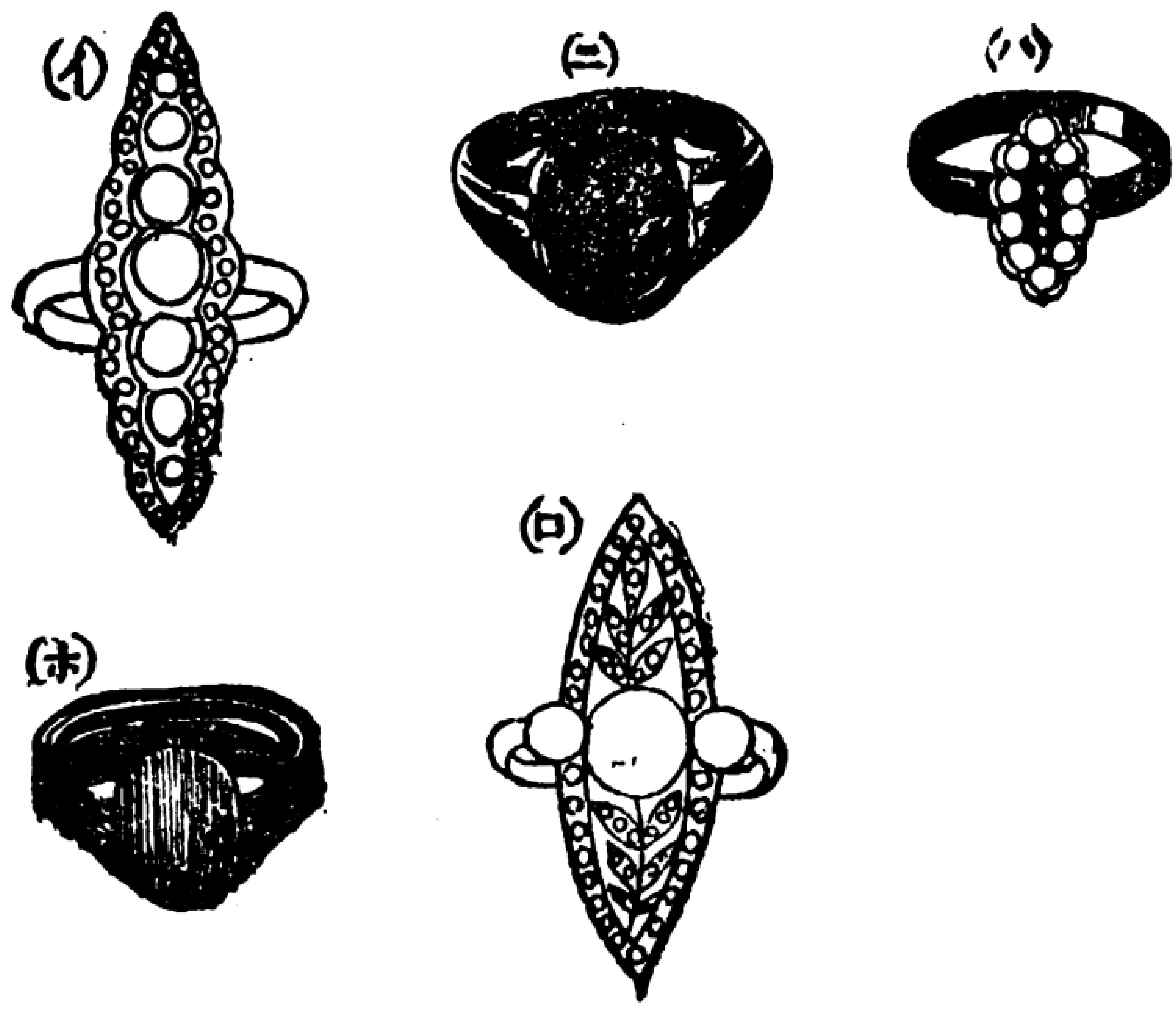
△諸國の習慣

法律に由て指環嵌用者の資格を定め、其品質を制限した例は決して尠くありません。スパルタの有名なるリカルガスは、國民が奢侈に流れ民情が輕薄に成るのを恐れて法律に由て總ての器具裝飾物を鐵以上の高價なる鑛物で製造する事を禁じた結果、銀や金の指環を使用する事は出來なんだのです、又羅馬に於ては共和

政治時代に法律で一般に鐵製以外の指環を嵌める事を禁じました。尤も其後公使は交際官である故に金の指環を嵌める事を許され、後更に執政官、樞密院議員等の顯官丈けは之を使用する事を許されました。チベリユースの時代には非常な財產家で無ければ金の指環を禁じてあつた。セベリユース時代には一般軍人は指環を嵌める權利が無かつたが、一般自由民は金の指環を、普通市民は銀の指環を、奴隷は鐵の指環を使用し得る事を定めました。其他埃及では、法律で定めて無かつたけれ共、金の指環は上等社會の人が用ゐ、銀其他の物は下等社會の者が使用したもので、恰も琉球王族は金、士族は銀、平民は眞鍮の簪を使用して居ると同じやうに整然と區別がありました。

△指環蒐集の趣味

指環を集める事は中世紀頃には歐米諸國に盛んに流行したもので、之を寺院に奉納する慣習が有つた爲め今日でも比較的に古代の指環が澤山殘つて居ります。現に英國南ケンシントン博物館には此種のものが澤山にある。又羅馬に於てはヲウガスタスの甥のマーセリユースが自分の集めた指環をアポローの寺に奉納した物が今も猶殘て居ります、又コンコード寺に奉納されて今でも殘て居る此種の指環の中には非常に珍らしい又高價な物が有るので、昔羅馬の皇帝の使用された物なぞが有ると謂ふ事です。



此種の寺院や博物館に遺て居る指環に就て研究をして見るのに國々に依て指環に種々特色のあるのを發見します。

希臘の指環（リカーガス時代のスパルタの指環を除く）は一般に非常に精巧なる細工をして有ります。指環の一番廣き字を彫つたり寶石を嵌て有る部分（第一圖イロハニホの部分）をベゼルと謂ひ、其他の所謂輪になつて居る部分をフープと謂ひますが、今遺つて居るのを見ると希臘ものは此のフープが二匹の獅子で出來て居て、口に或る寶石をくわへ其獅子の口の部分がベゼルに成て居ります。之はエトラリヤと謂ふ處で掘出したので、英國の博物館に在ります。今一つはエトラスカン人の墓より掘り出した物で、二個の神樣の像がフープに成て居て其頭の部分がベゼルに成て居て其所に寶石を嵌て有ります。總てギリシャの指環は必ず浮き彫りの細工を爲て有ります。

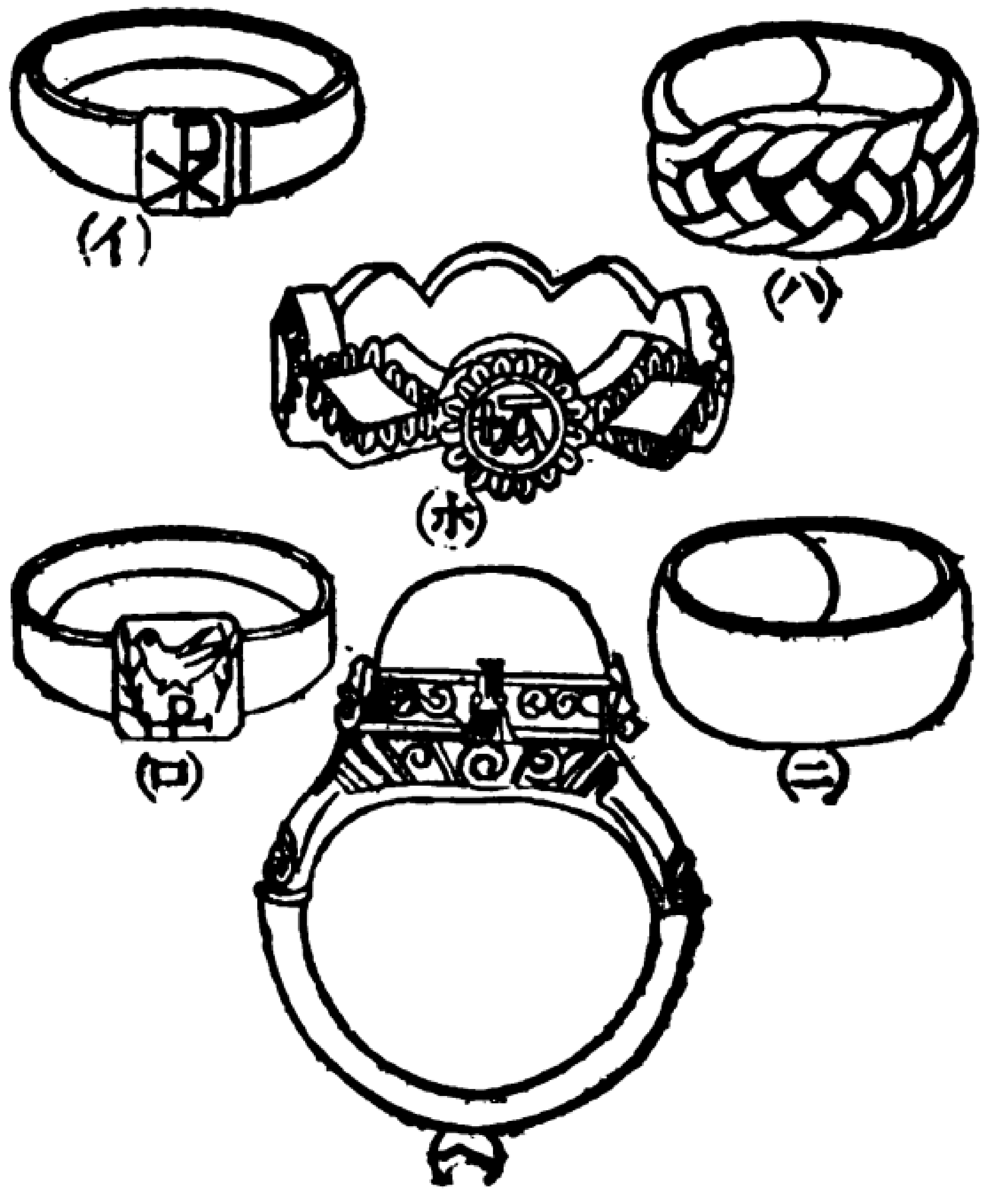
羅馬の指環はベゼルに寶石が嵌入して有るのは少くて、大抵はベゼルに各自の頭文字か或は簡單な畫を描てあります。第二圖いろ、は即ち羅馬の指環で、P字にxを書き、又は横に棒を書いたのは耶蘇の十字架を形取たのであります。佛蘭西人の先祖のセルチック人種の指環はフープが切れて居て、指の大小に由て大きくも成り又は小さくもなる樣に出來て居る。又寶石は嵌てなく大抵は延べの金で出來て居てはにの如く蒲鉾形とか網の形に出來て居ます。斯の如く國々に依て其形狀を異にして居る故に寶石を嵌てあるか或は浮き彫りの細工のある指環を希臘形。延べの蒲鉾形又は網の形に成て居るか、又はフープが切れて居て大きさが多少伸縮出來る指環を佛蘭形ベゼルに印形、代用の名を彫て有る延べの指環を羅馬形と謂つて居ります。

△指環のかず〳〵

指環の種類は澤山あります、即ち宗教上の指環、珠數指環、文句指環、紀念指環、印形指環、毒指環、法王指環、拇指環、結婚指環、等です。以下簡單に此等の指環の流行の時期幷に其構造の大略を述べましよう。

（一）宗教上の指環はビショップ（監督牧師）に任命される時にビショッ

ブが用ゆる職杖と一緒に法王から與へられるので、千百九十四年法王、インノセント三世時代には純金製で彫刻の無い寶石を嵌めよと定められた、が夫は餘り勵行され無んだ様です。慣習上宗教上の指環は所有者が死亡の際に亡骸と一緒に埋葬する事に成て居る故現今でも色々のが遺て居ります。ほ圖は其圖南ケンシントン博物館に有る宗教上の指環で之は八百二十七年より八百六十七年迄セルボーンのビショップで有つたアルスタンの指環であります。ヘ圖は矢張其頃のチチエスターのビショップのセフリッドの柩槨の中から出た指環でありまして、純金製でサフイヤの王冠がベセルに嵌めて有ります。此宗教上の指環は一般に手套の上から嵌める習慣が有た爲皆大きく出來て居ります。



(二)珠數指環。之は十五世紀頃には非常に使用された物です、其樣違はベセルに大抵姓名の頭字を彫刻して有て、フープに十個の節が有る。寺院に參詣して九度讃美の禮を爲し一度祈禱を爲す其數を取て十個の節を着たのです、又此の十個の節はフープには九個有つてベセルを一個に數へる樣に成て居るのもあります。

(三)文句指環。此の指環はは十六世紀以前には無かつた指環で其時代以後に使用されたのです。此指環は種々の文句を彫刻して有る故此の名稱が有るので、例へば有名なる沙翁の脚本ベニスの商人第五幕目の「妾を愛して見捨給ふな」(Love me and leave me not)とか、又は寛衛違ひの想像的の名即ち Caspar とか melchior とか書いたものです。降て十七世紀に成つて、「愛情と從順」(Love and obey)とか、「神を敬し我を愛せよ」(Fear God and love me.)とか書いたものであります。

(四)紀念指環。之は夏人、妻、親、子、其他親身の者が死んだ時に、己れの悲みを慰むる爲めに使用されたもので、十五六世紀頃に流行した指環です。其形は大抵二個の骸骨がフープに成て居て、棺槨を持て居るか其棺槨がベセルに成て居るので有ります。而して大抵洵藥で其艶消しに成つて居ります。

(五)印形指環。之は現今日本でも實業家なぞが盛に用ゐて居る樣ですが、十五六世紀頃から使用されたもので、大抵商人が用ゐたのです。そのベセルには姓名とか商標とかを彫刻して署名の代りに使つてゐま

す。當時商人以外の素封家の使用した印形指環は、其形が大きく、ベセルに自分の姓名の頭文字を彫み、字の周圍に花輪を刻し、フープは又色々の彫刻を施して非常な精巧な物です、之れを一名シエークスピヤー指環とも謂ひます。

(六)毒指環。之は太古に使用された物でベセルに凹んだ穴を造て、其中に毒薬を容れて有るのです、有名なる羅馬の大將ハンニバルは己れの毒指環を噛み碎て自殺を遂た事實は歴史上有名であります、又デモスゼネスも常に此種の指環を使用して居たと謂ふ事です。又羅馬の歴史に左の記事が有ります。

　クラツサス、カピトルジユピターの宮殿の寶藏に忍び入り、種種の寶物を奪ひ去りければ、守衛の者共は必竟己等の落度故如何なる憂目を見る事やらんと、遂に己れの着せる毒指環を噛碎て往生を遂げたりけり。

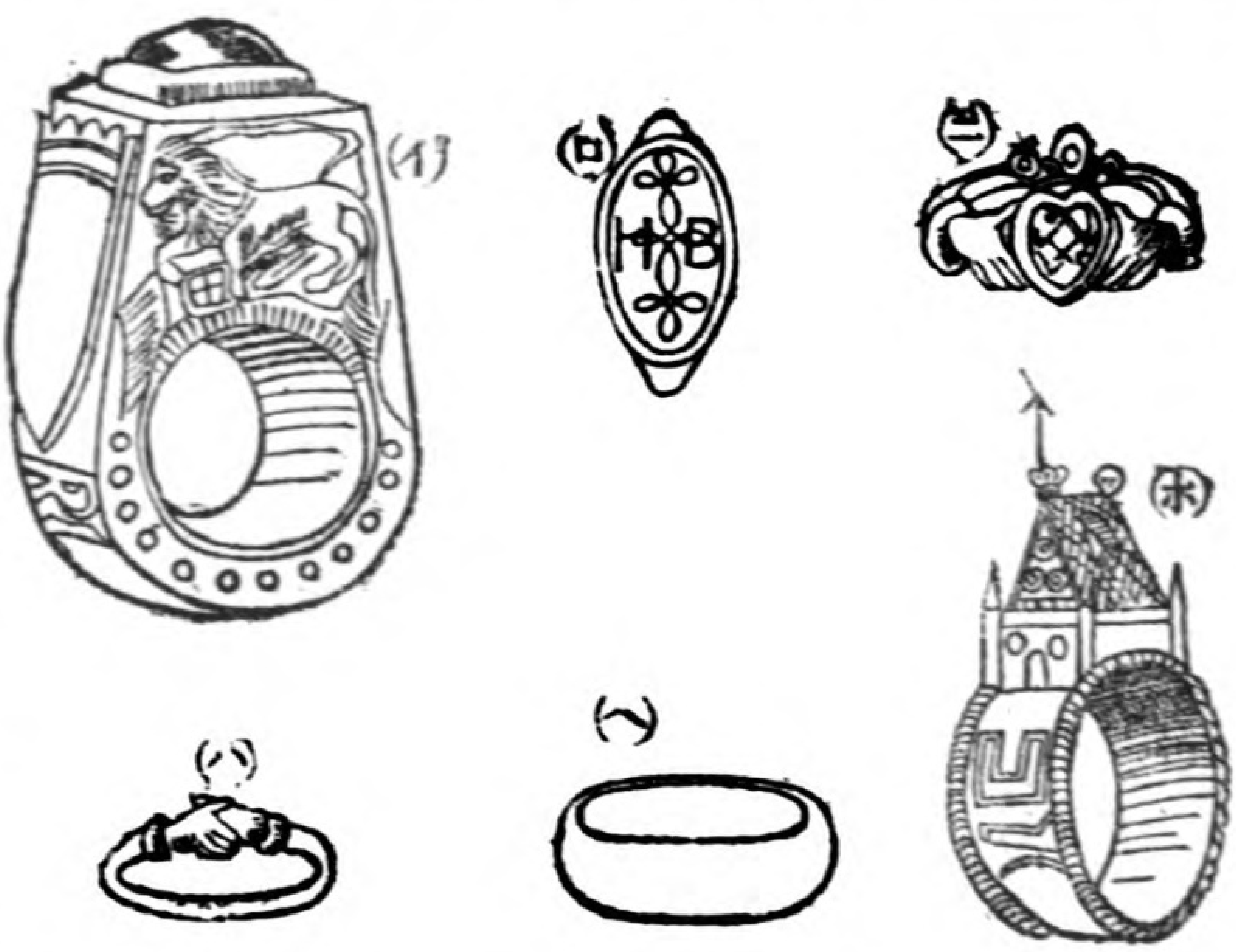
中世毒指環は亦殺人の一便法として用ひられたので、ベセルを深く掘り其中に毒を容れ彈機の作用に依り敵と格闘中敵の口中に其指環を突込むと自然に毒物の排出する樣に出來て居るのです。之は毒蛇が人を噛む時に歯から毒を排出する事から考案されたのだと謂ふ説があります。

(七)法王の指環。之は十五世紀より十七世紀頃迄に用ひられたので、宗敎上の指環の一種です。初めて牧師に任ぜられた時法王から授けるもので、これを拇指に嵌めるのです。之は眞鍮や金の渡金で作て有つて、硝子、水晶等を處々に嵌て裝飾して有ります。フープには法王の名とか其他種々の宗敎上の繪が書て有るが、ベセルには別段の裝飾はありませぬ。第三圖イは即ち其圖で有ります。

(八)拇指の指環。拇指に嵌めるとは甚だ奇妙ですが、前段の牧師か使用する指環は即ち拇指に嵌めます。其他宗敎に關係ない人でも此指環を使用したもので、普通十四世紀頃から十七世紀頃迄に流行したものです。形は普通の指環と變りはない、唯少し大きい丈であります。沙翁の脚本ヘンリー四世の第一部第二場に。「フアルスタツフは瘠て居るのが自慢で、常に己は役人が嵌て居る拇指環を樂に潜れると謂て居る」と謂ふ文句があるのを見ても當時如何に此種の指環が流行したかを想像できます。

(九)結婚の指環。結婚の指環は別に定た形は無い樣です。即ちロハニ圖は皆十四世紀頃より十七八世紀頃迄に流行した結婚指環で有ります。或は男女の姓名の頭字を彫刻するとか、手を相握り合て居るとか、ハートを兩方より持て居るとかの形なので、離れないとか、一心同體とかの偶意を含ませた意味です。ホ圖は少しく其形が異て居ますが、之は頗る立派なもので矢張十六七世紀にヘブリユー人が用ひた結婚指環で、ゼルサレムの寺院を形取つたもので屋上の風見の如きものは動く樣に出來て居ります。露西亞では結婚の儀式には新郎は金製で太陽の印の附いた指環を用ゐ、新婦は銀製の月の印の附いた指環を用ひると謂ふ事です。

現今欧米では指環は結婚には最も必用な品物で、之を交換せねば結婚が成立ぬと言はれる位です。現今結婚指環は大抵一分五厘（日本



曲尺）乃至三分迄の幅の蒲鉾形の無地で十八金乃至純金の指環を（ヘ圖）を用ひて居ります。厳格な事を言へば普通の作り方では充分で無いので、指環の幅丈けの厚さの金板を指の太さに鑿で打抜いて作つた物が一番好いと申します。然し之は極端で大抵はフープが切れて居なければ可いとして居ます。

△寶石の表彰する意味

指環に嵌める寶石にも種々あつて一々特別の意味を有つてゐます。又其所有者の生れ月に依て嵌入する寶石を定むる事も随分流行して居ます。左に寶石の表彰する月の事を擧げて見ましよう。

柘榴石	一月生れ、又は永久の意
紫水晶	二月生れ、又は眞面目の意
血石	三月生れ、又は勇氣の意
金剛石	四月生れ、又は深き信仰の意
緑玉	五月生れ、又は愛の成効の意
瑪瑙	六月生れ、又は長壽の意
眞珠	右同
紅瑪瑙	七月生れ、又は滿足の意
紅寶石	右同
紅縞瑪瑙	八月生れ、又は夫婦間の眞實
橄欖石	九月生れ、又は沈靜の意
靑玉	右同
猫眼石	十月生れ、又は冀望の意
黃玉	十一月生れ、又は忠信の意
藍玉	十二月生れ、又は發達の意

（終）

大日本高等女學會大會參觀記

小夜子

麗らかに晴れたる空の日影花やかに、冬には珍らしき暄さの一月十九日の午前、大日本女學會の大會にと、車を馳せて四谷なる愛住學校に參りました。形の如く大國旗交叉したる門を入つて、受付に刺を通じますと徽章――それは小やかな枝ながらの紅梅の作り花でいと優美の物でした――を渡されました。案内につれて特別來賓席といふに待つて居りますと、追々に來賓が集まつて來らるゝ樣子。會員の方々の晴れやかに裝うて、準備に忙がはしくさゞめかるゝのも賑やかに思はれました。

やがて鈴が階上階下に透つて響き渡ると、一同二階の會場に着席致しました。見渡せばさすがに御婦人方が多く、令夫人令孃お子供衆打雜つて千紫萬紅の美麗しさ。男子方は壇に向つて右の方の側に席を占められました。總じて婦人七分男子三分の割合。合せて百幾十名と見受けられた。私共記者七八名の外は、男女を通じて總て白梅の徽章で、有る限りの人の胸に襟に思ひ〳〵に飾られて高尚く美麗しく眺められた。

やがて靜々と會頭二條公爵夫人洽子、副會頭青木子爵夫人楠枝子の御二方の着席と同時に式は靜肅に開かれました。幹事が御會釋申上げると、二條會頭は下り藤の御紋服の裾さばき淑やかに、壇に登つて開會の辭を述べられたが、極く簡單に淨潔で、そして高尚くて、さすがは高貴の御方と首肯かれました。續いて會頭より卒業證書授與と告辭とがあつて、さて徐ろに一禮して壇を下られました。

次に幹事牧口常三郎氏は立つて會務報告をなされました。「本會は高等女學校の設置なき地方、又は有つても家庭の事情などのため餘儀なく學に就かれぬ有志の婦人の爲に、親切なる通信教授を施すを目的として、去る卅八年に初めて起つたものであります。今日まで色々の波瀾のあつたにも關はらず、屈せずに貫いて來て、今や會員千餘名といふ盛況に達しました。就ては

今後愈々「高等女學講義」と雜誌「大家庭」を善美なものにするやう、互に奮勵努力する心算であります。且つ更に深く必要を感じて、慈善教育部と女藝教習所とを設置致しました。何卒江湖の援助を得て我々の微衷を貫徹出來ます樣、偏に切望致します」といふ趣意でした。牧口氏は登壇はせられず、壇の前に立つて演述されましたが、其の立つてゐる斜めの後には、梅や水仙を大げさに挿けた、花瓶を載せた机があつて、霜雪の苦を凌いで清香を放つといふ白梅が、氏の報告演說の背景を成してゐたのは、折に適つて感深く覺えました。

續いて演說に移つて、第一は高等師範學校教授で、又本會の講師である峰岸米造氏の「帝國發展史の談」といふ演說。「平生の講義錄には鳥渡書けない事で、然も是非お話しゝて置きたいと思ふ事柄を、今日を幸ひとお話し致します」といふ誠に眞面目な熱心な有益な演說でした。この中途から速記者が來て頻りに鉛筆を活動させて居りました。

この演說が濟むと最う一時半でした。で、階下で休憩して午餐になりました。菓子券辨當券の引換で、一少時さわ〳〵して居りましたが、やがて食事もすんで、又響き渡る鈴の音で一同會場に着席。

この愛仕學校の長で、そして本會の理事長である小具貞子刀自の感深い演說がありました。本會で新たに生れたる女藝教習所や慈善教育部を、公衆の同情によつて健やかに生長たせたいといふ意味から、嘗て貞子刀自の處へ新聞配達をして來た苦學生を救ひ上げて仕立てた感話をなされて、砂に埋れたる夜光の玉を是非拾ひ上げねばならぬ事。それを救ふ事のどんなに樂しいものであるかを、心からの泌々とした調子で物語られました。中には涙ぐんで聽き入つてゐる婦人もありました。

次は肝付中將の寶船のお話。否、實は海事思想の必要を說かれたのでした。見上げる樣に背が高くてそして肥大つて、壇の上へ立たれると天井へ支へるやう。然も嫣乎々々しながら無造作な調子でお話しになる。

「怖くない仁王様の如だわ」などと私語く嬢ちやんもありました。で、世界八大强國の兵力の比較や貿易高の比較などを縦横自在に爲されて、つまり日本は兵力は豊かだが富力はまるでだめだ、それには寶船否、貨船——即ち外國貿易の船を自由に使ひ廻すやうでなければならぬと、七福人の面白い譬や、自作の歌二首都々逸一首などを取雜せて、大層分りよくお話しになりました。

演說はこれで濟みましたから、一同庭へ出て記念の撮影をして、段々時刻が後れ勝ちだからといふので直く餘興が初まりました。

第一は薩摩琵琶。まだ青年でしたが鮮やかな聲で上手でした。「北白川宮臺灣薨去」のそれに滿塲の人々皆哀れさに打たれました。次に猶一曲萩原茂子の「櫻狩」がありました。打見た處十三四歳の少女ですのに、節廻しの巧いこと皆々感心して、曲が終ると拍手が急霰のやうでした。次は長唄勸進帳。花の如き某孃の唄に三味線が二挺懸命に力めました。惡からう筈がありません。さて其次こそは聽き物で滿塲恍惚とする位、大拍手でありました。ヴァイオリンと琴との合奏で越後獅子をやつたのでした。後で承れば、二人は姉妹で何れも二十歳前の美人。飾磨氏の御令孃ださうでした。猶上のお姉様は、嘗て皇后陛下から妙手に御感心の餘り御褒美を賜はつたお方ださうです。其お姉様の思召で、是非妹二人を立派な音樂家に仕立てたいとの事で、お二人とも非常に勵んで在つしやるさうです。さればこそ此の技倆と餘所ならず嬉しく思はれました。

猶福引があつて、私は「古池や蛙飛び込む水の音」といふのでどんぶりを一つ戴きました。「小町」といふのを引いて、あの烟草屋で吳れる小さなマッチを唯た一つで大笑ひのお方などもありました。其他いろ〳〵ありました。

二條公爵夫人の閉會の御挨拶で、一同散じたのは、もう黃昏でございました。公爵夫人が最終まで務められた御熱心の程と、演說が皆お儀式でなくて、眞正に意味のある有益なものだつたのが、殊に優れた事だつ

たと思ひました。さう思ふ心の端から、餘興の音樂の好かつた事や福引の可笑さが湧いて來て、覺えず笑が浮びます。

猶同會事務所は牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十三番地にあり

書齋に於ける 棚橋絢子刀自

松　廼　門

△夜寒燒の贈物

或日本郷丸山新町の棚橋文學士邸に、母堂絢子刀自を訪問致しました。幸ひ御在宅で、取次の女中が此方へ、と案内する儘、庭石傳ひに南向の座敷の東側から、三尺の扉を開けて入ると、其處が刀自の居室なので、刀自は被布を着て、机を横に爐を前にして居られました。先づ御挨拶を申上げると、刀自は傍らにある十數個の煎茶々碗を指して、マア御覧下さい、斯んな戯らをして居ります。之れは岐阜縣の夜寒燒で、去年の年晩に岐阜へ往つた時に誂へて置いたのです。御覽の通り、富士に魚に蘭、と斯んな畫を描いて、夫れ〳〵和歌を記して燒かせました。私も今年は丁度七十になりますから、それで七十媼と書いて、豫て御懇意にする方に贈物にしやうと思つて居るのですが、四十個ばかりも書いて燒かせたのですのに、未だ之れだけしかまゐりません。――と申され、それから種々と女子敎育の話がありました。

△相應の身裝

私は豫て生徒にも能く言ふのです。人は各々其分限を守らねばならぬ。何でも身分相應と云ふ事があるもので、身裝を飾るにも、身分相應と云ふことを忘れてはなりませぬ。身上の困しい者が、何も無理算段までして、立派な着物を拵へるには及ばない。と云つて汚苦しい形をして居てはならぬから、絹物を着る資力のない者ならば、木綿物でも少ざつぱりとしたものを纒つて居れば、それで好いでせう、出來もせぬことを望むと、夫れが爲めに遂には汚ない心も出て來る樣になります。何ば立派な裝ひを爲て居ても、心が汚くては仕樣がありません。處が世間には、然う云ふ人は隨分

尠なくないやうです。けれど人は身裝を飾つて見得を張るよりも、先づ心を清くせねばなりません。それで私は常々精神敎育と云ふ事に最も注意する樣にと、敎員の方々にもそれを頼りと申して居るのです。

△黑紋付のおこり

此頃彼處此處の女學校で、黑に染めたキャラコの紋附を、生徒に着せることになつて居りますが、あれは愛知の女學校で用ゐたのが始まりです。私から申上げるのはおかしいけれども、之を生徒に着せたのは、私の思附で、確か明治三十年で御座いました。如何して私が恁んな事を思附いたかと申せば、愛知と云ふ處は、一體に綺羅を飾る風が盛んだと豫て聞いて居りました處へ、丁度私が其處の學校へ行くことになりましたので、學校の生徒までが、着物の競爭をするやうではならぬ、之れは是非矯正しやうと思つて、乃で生徒の禮服を黑の木綿紋附と定めたので御座います。

さて恁樣に定めましたものゝ、何も新らしく調へよとは申しません。浴衣の着古しでも何でも宜しい。古着を染直して、紋は切附けにすれば、それで結構。如何な色でも縞柄でも黑に染めることは出來るからと云ふ考へで、生徒に夫々言聞かせたのであります。處が何分にも子供達のことですから、只だ黑の紋附を着るやうにと先生から言附かつたなどゝ、親に咄した生徒もあつたやうで、親が態々私を訪ねて來て、紋附の事を聞くと云ふ樣な次第でしたが、今もお咄し申した通りに、古着を染めて切附紋で澤山だと言つて聞かせますと、それなら何でもないことですと、承知して歸りました。また中には新らしく拵へた處で、幾らもかかるものでないと言ふ者もあつて、忽ち揃ひの黑紋附が出來ました、で恁うして見ると、案外立派で御座いますから、父兄達も大層滿足致しました。木綿の黑紋附が、諸方の女學校に採用されたのは其れからの事で、之れは私が嚆矢であらうと思つて居ります。

で三田の學校でも、生徒の禮裝を猶且黑紋附に仕樣かと思つたのですが、田舍とは異つて、東京の娘達には銘仙ぐらゐは着せても可からう、と云ふ說が敎員達

の側から出ましたから、之れは止めにして居ります。併し常々質素を守るやうと申して、贅澤な風を戒めて居ります。現に此新年の拜賀式にも、餘り際立つて贅澤に身裝を飾つて居る生徒は、特に後ろの方に立たせました。

△行儀の躾方

禮儀作法と云ふことは、少さい時分から親が能く敎へて置かねばなりませぬ。朝起きれば、兩親なり祖父母なり總て目上の人に對して、お早うと挨拶をすることゝ夜寢る時には、お休みなさいと云ふことゝまた食事の時には、頂きますと言つて喰べること、斯う云ふことでも、豫て躾けて置かぬと云ふと、子供は他所へ往つても、何だか極りが惡いやうな氣がして、急にはそれが出來ないで、兎角無作法をするもので、大きくなつても容易に直りません。

朝はお早うと言つて、祖父母や父母に挨拶をしたり夜はお休みなさいと云つて禮儀を盡すことを、ほんの形式であるかの樣に考へて、詰らぬことだと云ふやうな人も、世間にはあるかも知れませぬが、それは大きな心得ちがひで御座います。今更申すまでもなく人間は生身を以て居ますから、何時病氣が起るか、また頓死する樣なことがあるか知れませぬ。況して年を取つた人は、假令元氣なやうでも、何時死ぬか分りませぬ。それゆゑ子や孫としては、朝夕其の起居をたづねて、萬一の事がありはせぬかと、豫々注意するのは當然の勤でありませう。つい近頃も親の死んで居たのを少しも知らないで居たと云ふ事が新聞に出て居りました。誠に人に聞かれて面目のない次第ではありませんか。

△言文一致の手紙

また手紙に就きましても、當節は言文一致とか云ふ文體で認めて、それを何處にでも贈ると云ふ樣な人がありますが、あれは甚だよろしくないことです。それで私は常々言文一致の手紙を書くことを戒めて居ります。いつかも學校の生徒に、貴女さんの中にはまだ上つ方とお交際のない方もあらうし、また手紙の贈答も

餘りなさつた事がないからでせうが、目上の人に贈る手紙は、それ相當の敬語を使はねばならず、又同等の人に贈るには、それ相當の認め方のあるものですからそれらの事を能く辨へて書かねばなりませぬ。言文一致の文體は、同輩にはそれでも濟まうけれど、目上の人に贈るには決しそんなもので、認めてはなりませぬと言つて聞かせました。私は此の新年から生徒に教職員へ一々年始狀を送らせることに致しましたが、其年始狀を見ると、生意氣な文體が二三本ありましたから、それには一寸覺えの印を附け、また手蹟の見事なのにも、文章の好いのにも、夫れ〴〵印を附けて置きましたが、追てそれ〴〵受持の教師に就いて、其生徒の平生の學科や成績等を調べて見る考へで御座います。

△女は氣樂なもの

柔順は女の美德です。婦人は何處までも柔順でなくてはなりませぬ。然るに世間には、緣附くと舅姑や夫に服從しなければならぬから、結婚するのは否だとか、男でも女でも同等だから、服從するのは否だとかと、生意氣な了簡違ひのことを、言ふ者がないでもありません、男子でも女子でも、此世に處して行くには、皆な實は服從ではありませんか。斯んな事を申しては甚だ恐れ多い話ですが、此世で服從しないで濟む事は天子樣より外にはありますまい。其の天子樣でも、御先祖に對しては服從してあらせられるではありませんか。男子は外へ出れば實際は皆な服從です。然るに婦人は家に居て、舅姑や夫に服從し家事を治めて行くかはりに、男子の樣に外に出て服從しないで濟むではありませんか、舅姑に仕へ、夫に服從して、其の心を慰さめるのは、素より妻たる者の務めで御座いますそして子供を始め女中であらうが、其他の雇人であらうが、皆な主婦に服從して居るのです。それを思ふと、常に外に出て居る男子よりも、妻たる者の方が餘程氣樂なものではありませんか。


あみもの

家庭心得草

糠味噌に就ての研究

糠味噌は人の知る如く糠と食鹽と水との混合されたもので、これに大根などを漬けると一種の味及び香氣が出て來ます。これに關して、澤村農學博士の研究されたる成績の槪略をここに記す。

糠味噌の中には葡萄糖と乳酸が含まれて居る、今大根などをこれに漬けると、先づ乳酸の爲に大根の細胞が死ぬる、細胞が活力を失へば食鹽は直に其中に入込み大根に鹽味を與へ、同時にまた葡萄糖も細胞に入りて風味をよくする。併し乳酸も漸々浸入するが故に永く置けば乳酸の味が强くなつて漬物が酸ばくなる。

糠味噌をなして居る米糠の中には澤山の澱粉がある。この澱粉は細菌の作用によりて葡萄糖となり葡萄糖は更にまた乳酸と變ずる。今糠味噌の一滴をとり顯微鏡下で之を窺へば種々の細菌の存するを認むるであらう、其中馬鈴薯菌と言ふのと、乳酸菌と言ふのが、糠味噌の生成に最も肝要な細菌であつて、馬鈴薯菌は澱粉を葡萄糖に變じ乳酸菌は葡萄糖を乳酸に變ぜしむる働を有して居る、彼の糠味噌の表面に一種の膜を造るのは馬鈴薯菌の塊である、多くの細菌は食鹽の濃厚液中にてよく繁殖することが出來ないけれども、右の細菌は大槪の濃度迄は繁殖し得る特性を持つて居るまた糠味噌に存する一種の香氣は何によりて來るかと、言ふに蓋し右の馬鈴薯によりて出來るものらしい。

馬鈴薯菌及乳酸菌は酸素を好む細菌で、若し糠味噌を永く其まゝにしておく時は、內部に酸素の欠乏を來し、酪酸菌と稱して酪酸を生ずる細菌之に代りて繁殖する、此酪酸は乳酸と異りて一種の惡臭を有して居る、通常糠味噌をよく攪拌して其內部を空氣に曝すのは、畢竟酸素の供給を豐富にして酪酸菌の繁殖を防がん爲めに外ならぬのです。

食物のとり合せに就て

こは米國のローラー夫人が、多年の經驗より得たる食物の取合の實驗談です。

食物のとり合せにつきては、素より一定の規則を設くる事能はざるも然かもまた或る種の規則なきにあらず。即ち第一眼を喜ばしむる樣第二味を善くする樣、第三消化を助くる樣夫れ〴〵配合をなす事肝要なり。

例へば窒素成分に富みたる二つの食物を配合する事は消化器を勞する事多く、決してとり合せよき食物といひ能はざるなり。

●とり合せのくさ〴〵

△魚類は筋肉を組織する重要なる成分を含めども、これを馬鈴薯、胡瓜、或は胡瓜のサラドソースと共に用ふる時は、更らによき配合となるなり。即ち魚類は純粋の筋肉を作り、薯或は油は體温を發生するために必要にして、酢は酸を與ふるもの、胡瓜、薯の中には鑛物性の鹽類を有す。これ皆、人の身體にとりてすて難き要素なり。

△果物と胡桃とはまた極めてよき配合なり。胡桃の中には筋肉を作るに必要の成分と油氣とを含み、果物はこれ等を溶かすに必要なる成分を含む。のみならず、果物は體中の不必要なる成分を運び去るの用をなす。

胡桃は殆ど滋養分の塊といふもよろしく、果物は天然の解剤の如きものなり。されば同時に食する時は最も消化を助くるものとなるなり。

△牛肉と馬鈴薯、羊肉或は鷄肉と米、豚肉と豆は非常によく調和したる配合なり。

△酸味を帶びたる野菜のサラド、即ち赤茄子の如きもの、酸味及サラドソースをかけたる食物は、フライにしたる食物と合する時は、消化を助くる効あり。

△西洋山葵の如き刺戟性を含みたるものを入れたるソースは、たとへば煮たる鹽肉と一緒につけ合す時は消化を助く。

△加里は、植物性食物中に、多く含有さるゝ鑛物にして、主として血球の原素となり、又筋肉を組織するに、必要のものなるも、供給多きに過ぐるは亦害ある故に、之を制する爲に食鹽を用ゆるを可とす、其の外、食鹽は、食物消化を助けて食素を早く吸收する効能あり。

△鑛物性鹽は骨或は肉に固き性質を與ふるものなりこは多く綠色の野菜、果物、穀類に含むゆゑ、綠色の野菜とゝもに肉類其他窒素成分に富める食物と共に食する時は、よき配合となる。

△小麥はほゞ完全の食物なれども、脂肪やゝ不足なるを以て、パンなどを食する時にはバタをつくればこの欠點を補ふを得べし。

△米は殆ど純粋の澱粉質より成る故に米のみを食する時はたゞ熱を作るに過ぎざるものなり。これを完全の食物とするには牛乳と共に用ふべし。これは滋養を供して消化を助くるに効あり。

△果物は其のまゝ食するが、最も効多きものなれど、苺の如きものは濃きクリームを用ふるがよし。决してミルクなどを用ふべからず。

△青き新らしき野菜は、クリームソース、或は卵を含めるソースと共に食するが最も滋養あり。米、甘藷マカロニ、南瓜の如きは孰れも澱粉に富みたる食物なり、之れ等は皆、同成分の滋養あれば、甘藷の代りにマカロニ、米の代りに南瓜等を用ふるも可なれども、これを新き野菜の代りに用ふるは、目的に適はず。

△蕪菁、人參、葱、トマトー、胡瓜、莢豆、若き豌豆キヤーベーヂ、チサ等は、互に代用するを得れども、滋養ある食物、たとへば米、馬鈴薯等の代りに用ふべからず。

△人は、その生活を支ふる爲に、調理したる食物を一年間に少なくも牛噸を食せざるべからず、而してもし調理よろしきを得ば、たとへ此の牛噸の食物なりとも凡てを滋養分としてとるをうべし。

毛皮の保存法

毛皮に就て最も注意しなければならぬことは、其保存法です經濟上から申すと上等の品を買う方が却て宜しいが、如何程上等の毛皮でも、一度疵を生ずれば、直に其所の毛は抜け去りますから、保存法が大切なので御座います。されば如何に注意したら宜しいかと申しますと、毛皮を用ゐない様になりましたら、即ち三四月頃のよい天氣の節に干して裏よりたゝき、よく塵を拂ひ、蟲の死き様にてとき、ブラシをかけ、午後の二時から三時の間、暖かきうちにトタンの箱のよくハンダのつきて間隙のなき物を掃除してよく乾し置き、下にナフタリンを厚く敷き、其の上に新聞紙を敷き、其のまた上に布をしきて、毛皮を入れ、壓搾した樟腦を紙につゝみて、四隅に入れては毛皮を入れ終りに又ナフタリン布、及新聞紙を敷きたる上に厚く入れて、同じくとたんの蓋をして、又上より何にか重しになるものを置き、密閉するのです。そして其の傍へ行けば、香ひがぷんぷんする様にして置くのです。トタンの箱は外國より洋服地等輸入の節入れて來る故に 洋服地賣店に行けば手に入れる事が出來ます。

もし此箱のなき時は、桐の箪笥にてもよいのです。其の際もやはりナフタリン及び樟腦を多く入れ置き、傍へ行けば香ひが烈しく感ぜらるゝ位にして置くのです。

又小さき蝶來りて卵を毛皮に生みつけ爲めに 染みとなりて毛のぬける事がありますから、蝶を見れば之れを殺し、又來ざる様注意をせねばなりません。

序ながら申しますが、絨氈等もやはり夏期には表面にナフタリンを多く散布して置き、それを巻いて置けば、染は出來ませぬ。

西洋禮式＝客間の作法

△假令、かりそめの訪問なりとて、外套、または雨靴のまゝにてあるはよろしからず。また、暫時の訪問ならば、帽とステッキとは携へゆくべしといへども洋傘は持たぬをよしとす。

△集まれる凡ての人には握手せんとするを勿れ。主婦主人より手を出さばこれに挨拶すべしといへども他は辭儀にて足れり。

△如何なる場合といへども 決して男子より婦人に握手を與ふること勿れ、握手は常に先づ婦人よりなすべきものなり、なほ凡て年長者または高位高官の人には、かなたより手を伸ぶる迄はわれより決してさし出づべきものにあらず。

△もし主人が婦人ならば、客の帽、ステッキ等には氣を配らずともよしそれらは男子自ら處置するを正しとすればなり。

△あわてゝ椅子につくはよろしからず、優美に、閑雅に、普通につくべし。されば談話にも便利の姿勢を保つことを得べし。

△額、器物其の他何にても凝視すること勿れ、勿論對面の人をも凝視するは無禮なり。

△婦人が室に入り來りたる時は起ちて迎ふべし。

△絶へず足をうごかし、手にて種々のものを弄すること勿れ。

麵麭とバタ

近頃よく御飯の代はりに麵麭にバタを付けて持つて行くものがあるが、之は衞生上の智識の無いものゝすることである。何故なれば、バタは牛乳から採るから滋養力はあるが、極めて不消化なもので、子供には宜くない。最も消化の良いものは麵麭にジャミを附けるが一番で、又挽肉を麵麭の間に挾んでも宜い。

△食卓上の滑稽　日本ではバタは必ず麵麭に附けて喰べるものと思つて居る。洋食屋に於ても大抵食卓にはバタが配置されてある。客はスープの前、お定りの様に之を麵麭に附けて喰べる。之は洋食の喰べ方を知らぬ人のすることで、一體バタは割烹所で味を付けるに必要なもので食卓に於て麵麭と共に喰ふべきものでない。故に歐洲では如何なる場合の食卓にも決してバタは無い。

△バタは口直し　然らば絶對にバタは喰はぬかといふに、無論食ふことは食ふが、それは食後口を嗽ぐ前に、チースと共に之を麵麭に附けてほんの口直しに喰べるに過ぎない。然るに日本では最初からバタを食ふから、いくらあつても足りない。從て粗末なものを用ふることになる。

△身體の温め方　次に世間の母親の無智の實例を擧ぐれば例へば玆に肺炎に罹つて居る子供がある、醫師が之に對して寒くないやうになさいと注意すれば、無暗に厚いものを着せたり被せたりして益々其子の血液の循環を妨げる。又氣管支加答兒の子供に外出を禁じて置けば、身體を温かくさへして行けば可いと思つて、少しも外部の寒氣を慮からない。如何に身體だけ温かくしても、外部の空氣が冷たければ何にもならぬ。故に體を暖かくする前に先づ其室内を温めればならぬ。

△室内の温め方　最も簡便な室内の温め方は、他の室で起した炭火を火鉢に入れて、其上に水を入れた金盥を掛けて盛んに蒸發せしむるが一番である。但し此室で黒い炭をつぎ足すと炭酸を起して害を及ぼすから是非とも赤い炭をつがればならぬ。

過温の害

冷水は人體に對し啻に衞生的効果の著しいのみならず治療の偉功があるといふ一般の說で、此說の著々事實の上に證明されるにつれ延いて體温問題を惹起し、特に米國には暖室問題が八釜しくなつて居る、歐米を歷遊した人は皆米國の室内温度の年一年高くなりつゝあることをいふ、そして一方米國に年一年勢を加へつゝある肺病がこれに關係しては居るまいかと論じて居る醫師が多い、曰く日本人が「紙製の家屋」(障子を指すならん)に僅かの炭火を擁して嚴寒を平氣で送りながら、身體の健全なるは其昔歐洲支那等が北方寒地の人種に征服された事實と併せ熟考すべき事で、暖爐を盛に焚いて室内空氣を過度に温める、其の温度が人體に適になると他人には頗心地よい春風の中に出ても寒つて堪へられない、つまり皮膚が病的に弱つて了ふので、此の如き皮膚は自然病氣に抗する力が弱く、病菌にも侵入され易いと論じて居る、至極尤もの話と思ふ、然るに青年男女の眞盛りを以てして、獺毛皮や獸毛鳥羽の襟卷にくるまつて、綿入の重著をして居る者も見受けられる、これは健康妨害の種を蒔く愚の事といはねばならぬ。

寶さがしの內

さがし始め



この次は茶巾袋



和歌

三宅花圃女史選

（天）　社頭松　　越後　坂野くら子

おはします神のみ聲と仰ぐかな
　　雲井に高き松風の音

評、預選の歌と同じ趣向なるもおもしろくて。

（地）　若草　　周防　小鯖龜代子

春雨のしつくぬるみてかきろひの
　　たてるあたりにもゆる若くさ

評、めづらしげはなけれどなほ春のおもかげすてがたし。

（地）　老翁　　岩手　小保内衣子

手にもてるものをたつねて幼子に
　　わらはるゝまて身は老にけり

評、よくあるままをとなかしさ。

（人）　時雨　　伊勢　水谷靜子

山の端をいさよふ雪のひとむらに
　　けしきのこしてゆく時雨かな

評、たくみによみなされたり。

（人）　社頭松　　筑前　木村こま

萬代もなほさかゆらむ神垣に
　　天そゝりたつ松のひともと

評、下の句何にとなく調大きやかなり。

（人）　菊の咲きけるをり　　山形　椿村よし

千代ませと菊のきせ綿露なから
　　母の衣にぬひこめにけり

評、やさしき心はえなり。

佳調

社頭松　　宇都宮　松元のぶ

みしめなはかけてそいのるすみよしの松のみどりのときはかきはに

社頭松　　岩代　菅野和子

軍人の魂まつる宮の松風はとはにいさをゝうたふなりけり

社頭松　　日高　高橋いさ

千はやふる神の社の玉垣に萬代しめて立てる松かな

社頭松　　大阪　前澤初孝

みたらしにうつる影さへ神さひてあふぐも高しみやしろの松

社頭松　　常陸　田中たけ子

神代より根さしかはらぬみ社の松のみとりそかきりしられぬ

社頭松　麹町　羽田豊子

ときはなる松より松にしめはえて神々しくもみゆる杜かな

社頭松　大阪　正岡ふで子

千代八千代變らぬ神がみめぐみのためしなるらん神垣の松

○　神奈川　きみ子

常盤なる松もみとりの色ましぬ千代田の城の春のあけぼの

社頭松　京都　波多野ひろ子

幾千年ふりにし宮の松が枝に神代のことも忍ばれにけり

同　大阪　山鳥春枝

空高き琴の響きは風早の神もめでます十かゝへの松

同　新潟　三田つよし子

萬代もかはらぬ色を末かけて神の御前に契る老松

同　福井　島ます子

千早振神代ながらのものならむ糺の森の松のみとりは

同　本所　とら子

神さびし社の庭のみたらしにみとりのかげをうつす松が枝

同　岐阜　櫻井育子

氏神のまします庭に花嫁子小松を植えて千歳を契る

同　名古屋　加藤嘉代子

年の波よることしらぬ住吉の松は神代のものにやあるらむ

新年富士山　京都　紫

樂の音の高根にひゞくこゝちして初日たふとしふしの神山

社頭松　青山　神代えと子

明らけき初日の光にたふとくも神さひ見ゆるみやしろの松

新年風　長崎　谷口かつら

年立ちて競ふ軒端の旗の手に靜に渡る御代の初かせ

新年　京都　四辻清子

いくそたひくり返してもうれしきは年立けふの心なりけり

社頭松　大阪　日垣きぬ

うふすなのもりゆかしくも仰ぐかな千歳の松のおほひしげりて

同　河内　田中八須子

小簾まきてれきことかゝる朝霞に千代の影そふ神垣の松

同　埼玉　大塚明壽子

ゆたかなる年のしるしは神がきの千代をことほく松風のこゑ

寒夜　芝　高木きん子

おもふどち火桶かこみて語る夜はすきもる風も寒からずして

歸雁　越後　石山はる子

今はとて越路にかへる雁見ればとしふる里の春やこひしき

梅　山口　佐々木逸子

かるた會紅そめし我がほゝにつめたき風の梅の香送る

新年　埼玉　宮倉仙子

見なれつゝかはらぬ窓の吳竹も年たつけさは珍しきかな

立春　埼玉　宮倉歌子

梓弓春たつけさの窓の戸をおくれはかをるそのゝ梅かえ

○　愛知　山鳥女史

落葉かく里の童の入日うけて家路をいそぐ秋の夕くれ

○　米澤　村山千枝子

おもふこと未すしほどもとはらぬに又たちかへる年のをだまき

○　遠江　内山清子

雲がたく漁火消えて須磨の浦ふけ行く月に千鳥鳴くなり　名古屋　清水みさを

橋上霜

ぬきすてし紅緒のざうり色あせておく霜しろし里のいたはし　滋賀　藤野久子

○

冬寒

朝日さす冬のみ池の中島に群たるをしの美くしきかな　信濃　成澤野の花

岩鼻に鵜がもの食む影見えて木末に寒し片われの月　豐後　加納豐子

旅宿夢

見る夢は故郷をのみたどるなり夜な／＼かはる宿りなれども　福井　高木文子

鶯

しつかやは春とも来た白雲の消えぬさきより鶯のなく　新潟　寶川幸子

雪中竹

降りたはむ業末は枝の重りて雪まばらなる竹の下影　兵庫　福田さく子

○

暮る年のはじめの心してまたいそしまん後の月日も　備前　萩露子

荒涼

矛杉の備に霊のかゞなきてつきかげくらし大藪がはら　横濱　新島晶子

千鳥

雲晴れや濱に月てりしろかれの舞子松原なく千鳥かな　尾張　竹谷秋子

○

父は逝き母は病みて吾一人泣きて明しぬ雁わたる夜を　備前　堀美子

[illegible]

ふれこゆきふれ／＼雪とうたふ子のかざしのたまは霰なりけり　備前　堀美子

埋火

さくらずみにほふ火桶にさしよれば胡蝶のしらぬはるもありけり

爐

逝きし子の年をかぞへてまたさらにかへらぬぐちをいふ爐かな　伊勢　佐々木らく子

初春

ほゝゑめる梅も蕾りてうれしきは春のはしめのこゝろなりけり　京都　前川琴

晩景

丸窓に墨絵の竹をうつしたる月影うすれ夜はあけむとす　羽前　朝尾加江子

春曙

わたつみの沖は白みて濱松の木かけ小暗き春のあけぼの　尾張　白萩子

○

しめやかに鈴を鳴らして谷あひの霧を縫ひ行く追分のうた　神田　伊藤梅楓

水仙

冬枯れの垣根を見れば水仙の花寒むげにも咲き匂ひけり　山口　小野扇子

○

つとめなばかたきわざとて何かあらむしつくのうがつ石もありけり　伯耆　草野雲枝

冬の月

さひしさは秋の色にも勝りけり枯野をてらす冬の夜の月　土佐　横山まさ

始めて大井川鐵橋を渡りて

かち渡る流れに今は橋かけて君のめぐみの大井川かな　奈良　菅田靜子

大連灣に入港しけるふし

嬉しさのなにはあれとも大連のみなとにあふく日の御旗はも　滿州　奥村くに

○

夕月に浜霧やめば群する梅の七村よきかをり哉　信濃　松井澄子

失題

衆かりて歸る紫をおくるらむ嵐山にほそき三日月のかげ　岐阜　度會清香

紙鳶　　　香川　三村早子

天の海野へるいかも一筋の糸をたよりの命なりけり

社頭松　　　京都　成田みさを

朝日さす社の松になく鶴は聲もすがたものどけかりけり

○　　　靜岡　杉山はぎ枝

明日は誰が蘇籠の夢かてらすらん眠られぬ夜半の螢火のかげ

吹笛　　　山梨　古谷喜代

吹きならす笛の音高く月すみて浮世の外の心こそすれ

新年を祝ひて　　　名古屋　清水みさを

もろともにいや榮えませ高きこの尾の上の小まつかけなひくまで

○　　　下谷　中村春江子

温泉の宿の梅咲き初めし今朝の春初湯あみつゝ歌をこそ思へ

春野　　　東京　米　女

春の日の淺しと思ふに野で見ればなへて緑に草そもえぬる

谷鶯　　　大塚　上野かく子

風折の松の古木をそのまゝに橋とかけたる谷の通ひ路

木枯　　　下總　岡中のぶ

兄君は無事にいますむしかはあれど物思はする木枯の音

枯野　　　小石川　千野ふく子

いなゝきは夕空さむう消え行きて枯野にのこる馬子が一節

風　　　美作　松尾まき

錦着てかへれよいひし母君のおくつき寒し風のこゑ

早春　　　越後　石山とら子

さきがけの花のうらにもさきかけて匂ふや梅の心なるらん

亡夫を憶ふ　　　東京　貝塚一葉子

我がせこの世でにし花は咲きしかと送り置けん道知らすして

雪中竹　　　越後　中野　野

ふりつもる雪にもをれぬくれ竹の心や人のをしへなるらむ

歸雁　　　越後　諏訪きち子

故郷の空やいかにとながむれば月を殘して歸る雁が音

○　　　牛込　平塚露子

鷹一羽ふゝきにそれてあともなし那須野十里はたゝ風の音

梅始開　　　京都　正　久女

二つ三つ垣根の梅のさくみれば春はこゝにも近よりにけり

氷雨　　　麹町　野崎明子

むさしのゝ雜木林に暴雲のおほひかゝりぬ氷雨すらしも

冬月　　　秋田　佐藤ちさ

友二人語りて歸るさむ空に更け行く月の影さえ渡る

○　　　長門　熊谷たま子

たゆたひの柴戸を洩るゝ琴の音にまた見ぬ人の面ゑかき見る

臺灣農民　　　臺北　宮崎孝子

鍬もとくる暑さに克く堪へて勤み耕やす御代の新民

薔薇　　　名古屋　瀬戸高嘉

驕ひたる薔薇の花束枯れぬるに何とは知らすうき思あり

○　　　長門　熊谷たま子

風たれて樹の間にかゝる夕月をかすむる影や落葉なるらん

梅　　　山口　岩佐幸子

遠ければ風もかひなしいかにして梅の香りを母に送らむ

冬の歌の中に　　　下總　杉山靜波

木枯のたえまを叫ふ狐の聲もの凄く月落かゝる

題知らず　千葉　金子操子

少女子か窓の手摺りたれこものなかのむくろを指さして泣く

折にふれて　岡山　石原花綾

花と散り紅葉とあする世の中に操をかへぬあひおひの松

失題　大阪　和田芳子

亡き母の膝に眠りし夢さめて吹雪身にしむ草の宿かな

社頭松　京都　三輪加代子

ときはなる加茂のみかきのまつか枝に限りなき世の初日祝はん

遺花　京都　新　綾子

むこめて遣りし花の一枝に歌二つそへて友におくらむ

○　長崎　一瀬みどり

思はずも鶯の音に歌止めて仰ぎ見る額に梅の花ちる

初鶯　兵庫　正林喜代子

降れよふれよしや見る間に消るともしはしなかめん今朝の初雪

春立水　伊豆　井村たい子

いつしかに春や来ぬらむ谷川のゆき解の水に音をたちつゝ

冬の朝　下野　粂谷雛子

刈り果てし小田の案山子に霜みえて朝戸出寒し鶏の聲

失題　伊勢　山路くに子

案山子のみ傾きのこる荒小田に雪むら消えて小鳥さゝめく

折にふれて　山梨　齋藤　貞

空たかく大蛇形なる雲二つあらそふ玉は月にそありける

霧中竹　備前　島　春子

ふつくえのあたりあかるくなるまてに雪こそつもれ窓の矢竹

梅　大阪　大村信子

世をすれて母のすみます下賀茂の森のほとりに咲く梅の花

久々にて懐しき友に逢ひて　本郷　藤岡豊子

嬉しさのむねにせまりて　しはしわかおもふこゝろをいはせさりけり

○　大阪　人見やすを

ふけぬめりま植にしろく霜さえて赤星うたふくもの上ひと

鶯のケキョ〳〵と俗に谷渡りとなん云ふめる　ふし面白ふ
歌ひいてたるに針の手とゞめ　顔をあぐれば障子にうつる
庭の梅の枝に鶯のかけあり〳〵と見えければ　山梨　井島まさじ

鶯の木つとふかけもあり〳〵と障子にゑかく庭の梅か枝

冬の景色　陸奥　黒澤さわ

にほとりの足跡見えてぬかるみの背戸のほし菜に夕日さすなり

春海　河内　田中八須子

いつれ水いつれ空ともわかぬまていよ〳〵なきぬ春の海原

折にふれて　河内　田中八須子

母まさはいかに嬉しく思ふらんけふ嫁き行く妹の門出を

夢　東京　中村千代子

亡き母にめくり逢ひしとよろこへはさめてはかなき夢のあとかな

落葉　神戸　古山文子

冬の来てもみちなさそふ木枯に山の下道うつもれにけり

都の友に　飛騨　白　つゆ

思ひやれつむ白雪に霜おきて木枯こほる月の夕を

失題　常陸　菊地峰子

あら玉の晴の衣の装ひこそ罪なき子等が願ひなるらめ

○　姫路　柳田白百合

梅月夜にほへる園の高殿に灯の影うつる琵琶法師哉

霞　　本郷　西岡古代子

ひとしきり馬子唄高く聞えきて並木松原霞たはしる

題しらず　　上總　岩瀬不二野

こゝひと日ぶらずあれかし春雨にまた見ぬ梅の花やちるらむ

曉埋火　　大連　上野かく子

曉のしらむも知らで埋火の赤き心を友とかたらふ

題しらず　　熊本　中村つれ子

氣たかさをなにゝたとへん千代田なるみや居にたかき老松の陰

歲暮　　山梨　小野みとり

はかなくもゆめと過にし年月の身のおこたりそ思ひ知らるゝ

落葉　　岡山　佐竹眞子

苔の下にいかなる夢やむすふらん落葉にうつむおくつきのぬし

晩秋　　大分　松本れん

下枝に秋のかたみとゝめてしもみぢも今は散果にけり

冬の月　　大阪　幸堂ふく

藻鹽たく海人か苫家の屋根の上にかゝりて寒し冬の夜の月

一月一日によめる　　京都　流水女史

ゆたかなる初日むかへていさましくいざ一とせの事はじめせん

雪中梅　　澁谷　中村千代子

降つもる雪の中にもうつもれす操たゝしき梅は咲けり

○　　富山　金森かのゑ

風さゆるねやの板とを打たゝき夢おとろかす玉あられかな

社頭松　　越後　坪井わか子

ほの〲と松よりあけてみやしろの朱の鳥居に初日さすなり

寄國祝　　同　同人

大やしま北に南にひろこりてからもろこしもなびく御代かな

早梅　　山梨　田邊きみ

降りつもる雪のかきれにめつらしく三つ四つ梅の匂ひそめけり

松上遊鶴　　下總　小堤はる子

千代にまた八千代の姿そへて舞田鶴の遊へる庭の松か枝

折にふれて　　名古屋　鈴木むれ子

新玉の年の流の堤今潰ゆと告くろ除夜の鐘哉

初冬　　信濃　小林たか子

みちのへに捨てし草鞋に霜みえて人目さひしき冬はきにけり

○　　姫路　尾田四鶴子

紅椿音なく散りし朝[illegible]に鳴く鶯の聲美しき

春の歌の中に　　下總　かげ山靜波

憂さしらぬ若きうぐひすしのひ音に梅を戀ひよる春のあけほの

砧　　備中　目黑幸子

小夜きぬた松ふく風にかよひきてうちもねられぬ旅枕かな

心　　信濃　小林たか子

おのか身のものなりなからおのか身にまかせぬものは心なるらん

社頭松　　大阪　深溪

君が代の盡きぬためしともろともにいよゝ榮ゆる住の江の松

新年鶯　　備後　立神峯子

鳥開るにのとけさそへて新玉の年立つ今朝を鶯のなく

木枯　　廣島　田上濱子

紅葉ははら〱ちりてこゝかしこ松にふきよる木枯の風

短文

甲賞

春の一夜

越中 大森納繪

春雨名殘なう晴れたる夕つ方十六夜月のいとあざやかにさし出でたるけはい云ひ知らずなかしきに堪えがたくて、こゝかしこさまよひありくうち、とある青柴の垣のもとに立ちよりて垣間見ければ、植ゑこみし群木立を縫ふて流るゝ遣水の音のさやかに聞え、庭石のたゞずまへも覺えゆかしく、家主のみやびの程も思ひ量られて暫時ためらひけるに年の頃十二三と思ぼしき女の子の、いと清らなるが端近うたどり出でゝ、玉琴をしのびやかに掻きならすにぞ、君がひく玉の小琴の音をきかば空行く月もやすらひやせん。

乙賞

家寶の一刀

駿河 泉とし子

初日影が一ぱいに指込んだ座敷に、今年六十を數へた祖父が端然と坐り、家に傳つた一刀の鞘を拂つて、其中身をあらためて居られる、膝をも嘗めやうとする層々した白刄が、すごい刄の色に映つて、自ら寒くなるやうである、じつと据つた瞳其の裡には幾度四十年の昔が映じて居るのであらう。微に見える新月形の刀痕を左手に撫でゝ莞爾して居られると、鶯がさゝ鳴きをなして、緣先の南天を去つた。

乙賞

落葉

磐城 小野朝子

異國の空寒からむ、今日は母上の御容子好ければ少しも早く健樣に冬衣送らむと針運ばせつゝ、さるにも此三四ヶ月更に御便りのないのはいかに、もしや御病氣にもやと思ふ折、紀さんと母上の召し給ふに、枕邊によりて御痛みなさるかと問へば、無言にて只つむり動かし給ふのみ、くぼみし御目に露宿し給ひて、紀さん私はとてもだめですよ、夫で今迄御前さんの失望するのを見るのが忍びないのでとゝぎり、これまで兩のふる樣に有つた緣談を斷つて健さまならばと御前にも不自由な思ひをさせて今日まで待たせたのに、人の心は知れぬ物、此間歸つた三澤さんの話しには、健さんはあちら（米國）で妻を迎へ……と後はかすかなる息に消えぬ、こは如何にと打驚き母上の病める身なるをも打忘れて御面にホロ〳〵と熱き涙落せしが、やう〳〵氣づきて、母樣決して……と御顔覗けば、はや御脣も閉き給はず、庭の桐葉はら〳〵と落ちぬ、あゝ明日よりはそもたれをたよりの身ぞ。

丙賞

ふところ鏡

京都 三宅幹子

十八九の田舍娘が坂の中途で彳むかと見ると、右手をそと懷へ入れて鏡

圓形の鏡を取り出した、そして口を閉ぢて上唇を引き下げてゐたが、やがて目の間を小指で撫でた、ほつれ髪を締ふた、大きな口を開けた。仰いで咽喉と襟元との検閲が初まつた、と鏡を懐にして、素知らぬ顔で歩き出した、其足元にシナがあつた。

丙賞

我が生活

岩代　きく子

楽しい家を慕ふて歸へつて來ると、母の情けに着がへの着物は暖ためられてある、好きなお菓子、心盡しの晩餐、終日の疲勞は全く慰められて、其心の長閑さ愉快さは實にえも言はれない、あゝ名譽も富貴も此の樂みには代えられぬ、明日の教授は親孝行の話、自分はたしかに成功する事を自信してゐる。

丙賞

春の夜

名古屋　志村まさ子

笛の音は遠く蛙の鳴聲は近く、水車はごとん〳〵といと眠さうな音をして居る。風はふわ〳〵と花の香を漂はせ、月はほんのりとうす絹を被つたやうだ、あゝ東京の春子さんに、此美しい夜のさまを見せて上げたい。

失望

山形　梅村よし

一度ならず二度までも沒書になりながら、それでも今度こそはとヘリコンで出した彼の一文きつと載つてゐるに違ひない、天だろうか地だろうか、よもや人とは下るまいと待に待つたる甲斐もなく、天はおろか、地はおろか、秀逸にさへ我が名の見えないとは、てもさても。

家庭日記

牛込　平塚白百合

一月二十日　木曜日　晴

ゆふべ月がさえて居たから、さぞつよい霜だらうと水くみに出て見ると、初雪のやうにしろくなつて居た。妹等はさぞ霜やけにさわるであらう。

夕ぐれ花山さんの奥様が入らして、割烹の歸だと言つてしきりと料理の話しをされた。

夜、川越のおぢから送つたお芋をやいて皆でたべた。

海濱の夕暮

安房　和田きん子

花やかな春の夕陽は、今伊豆の中島に沈まんとして、其の名殘りの光りはこゝ鏡ヶ浦の一帶を照らし、金泥肶きばかりに濱の眞砂を一つ一つに彩とつたが、それも少時、うすき靄は夜のみ神の使ひか、うつすりと海面を覆ふは夢の如き靈の島、沖の島、そこには暮色に追はるゝ白帆が二つ三つ。

元旦

伊勢　小野高子

昨晩遅くまで起きて居たので、八幡様へ詣る人の足音で漸く目が覚めた今日は御元日だと思ふと嬉くて寢て居れぬので早速起きて　御勝手へ行

く、と、もう御母様はしきりに朝の用意をなして居られる。表へ出ると朝日は向ふの山から出様として居る、空を射ておる黄金色の美しい輝きはいと尊く感ぜられ、東から吹き來る風は薫る様に思はれる井戸に張つた七五三繩の先がかぜに揺れて棚へ置いたお三寶の上の鏡餅をなでゝ居る。顔を洗つて中の間へ來ると、御父様が神棚へ御明しを上て居られる、拍手して拜んで奥へ行くと、栗や豆やお米を盛つて小松を切炭で圍んで立てた御三寶が床の間に飾られて日の出鶴の軸が目出度く掛つて居る、敷いた赤い氈せんの上の火鉢に手をあぶり乍ら、起きて來た弟を對手に笑つて居ると、御飯が出來ましたと菊が告て來たので弟を促して立つ、是れから私等一家五人は團欒して賑しう、和氣靄々の中に楽しい新年のお雑煮を食べるのです。

雪の朝

愛媛　越智美惠

今朝はいつにない早起きをして裏戸をあけて見ると、田といはず山といはず見渡す限り眞白く初雪が降つて居る、おさんはもう起きたと見えて小屋へつゞいて二の字なりの下駄あとが黒くはつきりとかゝれて居る、しばらくすると東の山横が赤くなつて金色の太陽が半身をあらはした、雪に光つた其美はえもいはれない、あちこちにある枯木には雪が小高くかゝつて時々の風にばら／＼と散つて居る、遙か向ふの森には餌をあさるにや烏のなく聲いとさむく聞える、いつの間に見付けたかポチは白い息をふきながらとんできて尾をふり／＼廣いお庭をとびまはつてしきりに梅の花を咲せて居る、そのうちどうしたはづみか、雪のため頭を地につけて居た寒竹が、雪をはらつてピユーン、ポチは不意の音に驚いてキヤン／＼／＼／＼、裏の方には豆腐賣りの聲しきりに聞える。

冬の朝

越後　松永繁子

軒に雀が鳴き出した、冬の朝は寒いから起きたくない、けれ共起きた、朝日は東の竹やぶの上に昇り、犬はワン／＼鳴き、豆腐屋の鈴の音はガラン／＼勢よく響いて居る、暫く爐邊でぬくんで居ると、朝めしが出來た、煮たての汁や御飯は何より好いしい、辨當を揃へて仕度をすますと、門で「静枝さん！」、學校友達が早や誘ひに來る、「ハイ……」と返事して出て行く、お花さんは「お早う」と笑ひながらあひさつ、帽子を被つては居るものゝ角田嵐が非常につめたい、樹の枝の雪がはら／＼散つて花のやうである、雪の細道を二人して行くと、黒犬を連れた獵師が一人勢よく沼の方へかけて行つた。

團欒

東京　秋野月枝

「僕のすきなものは、父ちやんに、母ちやんに、日曜に、お正月に、動物園の象と熊に、おしるこに、お團子に、活動寫眞に……、きらひなものは……、きらひなものは、お藥に、唐辛子に、お灸に、おばけに、父ちやんのおせなたゝく事に、それから姉ちやんに……」、「まあ」と姉が言へば、「贊成」と十二なる兄が和し、「これ芳雄」と母君が制し給ふ、父君は聲高に笑はれる、炬燵の上には蜜柑五つ六つ、雪の夜。

夕暮

丹波　紫水子

ひよろ長い桐が五六本、夕日をうけて小寺の壁に細い影を引いてゐる。

たゞ荒れはてた野に寒風は遠慮もなく吹きまくる、尾花のそよぎに寂しさが弥々とせまるやう、夕栄の空は燃えるやうな金箭をパッとなげた、鍬を肩にした農夫が歸つて行く、もうあたりは灰色の暮に包まれたと思ふと耳元で鐘がなりだした。

冬の夜

牛込　深野光子

すれ違つたのは裏長屋の春チヤンのやうである。冷たさうな素足に、大人の下駄をはき、徳利を大事さうに抱て居るが、今夜も亦酒屋への使であらう、嗚呼。彼の娘の父が酒の味さへ忘れゝば、羽織も着やうに、足袋もはかうに、といたいけな後姿を見送つた。

冬の夕ぐれ

麻布　吉田かつ

風が一しきり、それが日の暮れるにつれて止む、軒燈がポンヤリ光つてゐる。豆腐屋が二人門の前に話し合つてゐる、どこかの工場で汽笛が鳴り出す。「さよなら」と豆腐屋が西と東へ別れる、と増上寺の晩鐘がゴーンと響いた。

姉妹

岡山　河村政子

「ねー美いちやん、姉さんと二人前の孝行を盡して下さいよ、人通りの少ない病院の裏手の板塀の中から聞える、美いちやんと呼ばれたは闇でしかとは知れないが十二三の女の子塀に沿ふてしよんぼりと立つて居る、只「はいと一言答へた、お前寒かなくつて?、風でも引くといけないから早く御歸りよ、と今度は姉の聲。けれど美ちやんは無言である、姉は内、妹は外、何うやら妹が會ひに來たものらしい、「私用かあるから之で別れますよ、歸つたら母さんに宜しう、寒いから身體を大切になさいつてね、」妹の影も闇に動いた。

かるた會

千葉　木内秀子

「花の色は……」「はい、失敬」、「あら妾の所には無い筈よ」、と耳のあたりをテカテカと赤くして、可愛らしい目を恐ろしく光らせて見上げ、今抜かれた札を改めようとすると、また次の札を讀む、「心にも……」、はい、又失敬」、「あらッ！知らないわ妾の所ばかりねらつて」。顔の色は三室の山の紅葉のやうになつた。

姉様のお顔

近江　上村よし

姉様のお嫁入は次の土曜日なので、お部屋には叔母様が此間から御手傳に來て居られる、部屋の隅には白無垢綿の襠、繻珍の帶など、チャンと疊まれてある、早く赤さんを見たいと、叔母様の笑はせ給へば、姉様のお顔が、今仕立てゝ居る友禪の紅葉よりも赤くなつた。

啼鳥

伊勢　松原たま子

午後、鄰の御母様が遊びにみえた、離れて氣の合つた年寄同士が爲さる御話しは、妾が居る茶の間へも、切々れ乍ら聞える、「操が嫁きます時に丁度あれは（妾の事）六歳で、姉様の美しい着物を着やうと申して聞き

ませんで縣りましてれ」、と郷の御母樣の聲、妾等の幼かつた折の話しが出て居るらしい、「いゝエ敏郎（夫の名）なぞも着物を何程叱つて着せ直しても、三日經たぬ中に綻裂を出來しましてれ、「高いのは御母樣の聲、折から莞爾々々這入つて來た夫の顏を見て思はず笑ふと、離れからも賑やかな笑聲が聞えた、庭の梅の木に鶯が頻りに啼いた。

お正月

京都　藤田静枝

もー七ツ、もー五ツと、子供らが指折りかぞへて待ちに待たるお正月がよう〳〵其日となりて、世間はまだ黑白もわかぬ闇の中を、神棚にはそれ〳〵お燈明をさゝげ、お座敷にはランプ煌々と輝きて隅から隅まで照り渡りたる、八十何となく春めげるに、主人始め皆健やかに打揃ひて雜煮を祝ひ終る頃、夜は全く明けはなれて、初日影さへ麗らかに拜まるゝにぞ、此の間より忙しき中をよう〳〵に仕立上たる新調の晴衣を子供らに着せて遣れば、盈れんばかりの笑傾けつゝ凧や、鞠や羽子板や己々が打興ずべく外に出て行くさま、見るにつけ自分の斯くありし昔の事共思ひ出でゝ思はずほゝ笑まれぬ　さるにてもまだ子を持ち給はぬ人達には解せられぬ樂しみになん。

やさしき文

安東　竹本園

東京に居りました時よ、花子と云ふ可愛らしい十四歳になります、小娘を、小間使として、置きました、田舍者には珍らしく却々よく氣が付く者でしたから、私も自分の妹の樣に思つて愛して居りました、海外へ參りましてからも、忘れずによく手紙をよこして呉れます、先達も、母親と一緒に面白い手紙をよこしまして、其文中に奥樣の御歸朝を樂しみに待ち居ります、そしてどうぞお歸りの時にはお兒樣を大勢お連れなされてと、やさしく書いてありました、けれどあゝ私は一人もいまだ愛兒のない所謂世界第一の貧乏人なので御座います。

梅

紀伊　松島双葉

えならぬ香に誘はれて、庭になりたてば、あづまや近う植ゑたる梅の一もと今を眞盛と咲きそろひたるに、三日月の影さへ淡く霞のうちよりひかりもらしたる、えもいはれずあはれなり、筆あらばうつして都なる姉君が許へ送らましを、ふと目を驚ろかしたる小枝の短册一ひら、ものせしまろうどはすでにさりて無し。

海濱の朝

本郷　村澤とし子

舟は今纜を解いて波のまに〳〵潮を縫ふてかすんで行く。紅く彩られた東の空はるかに淡橙色の雲が浮び、白い鴎は波にたはむれ、海燕の啼くのも聞える。櫓の音は風に送られ、時として沖から舟歌さへも傳つて來る。

家庭日誌

越後　杉山節子

昨夜背の君の援助を得たけれ共甸散々に敗北した、ぬられた白粉が氣がかりになつて、鏡に向つて見るとまだ其のあとがある、この顏を見られたらさぞおかしかろうとさつそくに洗ひ落して朝飯の仕度にとりかゝ

る、今日は祖母様の御出なさる言葉がないて居る。

新年

青森　阪本八重子

明治四十年もくれ、明けて、今日四十一年一月一日、朝日うら〳〵と、門の松飾りを照し、吹く〳〵初風は國旗をひるがへし、心も共に改りたる心地して、道行く人皆たのしそーなり、やがて、妹等と羽子かるたなどに笑ひさゞめくも面白し。目出度は新年なりけり。

新玉

福島　引地もと子

雀の鳴き聲して夜は明けたり、若水に口そゝぎして新玉を祝はふ、空うら〳〵と晴れ渡りて、門松に通ふ風心地よし、「年の始めのためしとて」とやさしき聲は何處よりか聞ゆ　今日の式場の復習にやあらん。門に郵便の聲あり、見ればなつかしや舊友よりの年賀狀。

從妹

四谷　八重子

「どうしてもお泊り出來ないの？」目のパッチリしたお河童の和ちやんは絲の様な髪の毛を妾の膝に摺付けてタンともスゥともお返事がない。「和ちやんお耳がないの」「あつてよ」と鈴しい聲に靨深くよせてパアッと顔をあげる、「姉さん驚いて」「いゝえ、和ちやんやはりお母さんのおパイ飲みたいんでせう、餘りおパイ計り飲むと齒が腐れて落ちてしまいますよ」「アラ嘘ばッかり、お母さんに告てあげるわ」、折から和ちやんの大好なお叔父さんが歸られた、「お叔父さん、お歸なさい」、紅葉の様な手を揃へて、

日はたつぷり暮れた、和ちやんは靜にをぶさつて、とう〳〵歸ることになつた。

友の許に

深津　松浦あや子

朝より武夫は乳母に抱かれ遊び居り申候、先日の御手紙によれば御姙娠遊され候との御事、千萬目出度お祝ひ申上候、當方武夫事も日々にふとり參り早や此頃はニコ〳〵笑ひ申候、祖母のよろこびは申までもなく武骨者の正雄まで此上もなうめでいつくしみ居り候、まして御子様好みのあなた様の御事故、此頃のおよろこびはいかばかりかと御察し申候、一同うれしくぞんし居り候、いづれ近々に參上いたし私初産の時のけいけん申上度と存じ候かしこ、

春の宵

福岡　吉川まさゑ

裏の木の下に据風呂をたいて夫のかへりを待つてゐると、十五夜の月は桃の林からぬつと昇つた、すると小屋の牛もやをら首を出した、春の夜のもの靜かな此の筑紫野の大景に見惚れてゐたので、夫がすでにかへつて夕飼を終えて居られたのにも氣がつかなかつた。

冬の夕暮

羽前　谷山たに子

野も山も一面に白銀を布くたそがれ時、向ふの峰は水色の雪脚忙がしく、塒に急ぐ鳥は卵色の空低う飛び渡り、鎮守の杜の老い松は森立つて

蒼く見え、古寺の塔の高く天を衝く氣配、二つ三つの鈴の音を先立てゝ土橋の彼方に馬諸斷れぎれに消え行くなど、孰れかこれ活畫中のものにあらざらむ。

穩な湖べ

加賀 中西かねゑ

湖の畔に佇んで南を眺めると、屏風を立て廻したやうな山續きの其中に、屹然と衆峰をぬいて雲間に聳えてゐるは、云はずとも知れる越の靈の白山である、それが、碧瑠璃の水面に白妙の氣高い姿をいとも鮮かに映じて、見るからに壯快な感にうたれる、夕日が濱の松が枝に沈むと、遙か煙霞の中から、ゲーゲーとうなりを傳へる櫓の音がして漁船が入りくるなど得も言はれぬ趣がある。

鄙の初春

大分 田中素子

都に遠き鄙にても、年明くればさすが春の氣はさして、賤が伏家に注連新らしく飾られたるも嬉しく、年頭廻りの人々が珍らしくも袴などつけたる慣れぬ姿もおかし、裏山に餌掘る荒し男も里に下りしか、今日一日は歌も絶え、雞も鳴かず、孤村の春は靜かなり。

辻占賣

大阪 坂田桝子

かるたの友の歸りし後、母上と火鉢を中にして、田中樣の敏き、野島樣の沈重の態度等今夜の友のうはさの折柄、「辻うら」トいと悲しき聲聞ゆ、あゝ憐れ、今夜の如き身を切るばかりの寒さに唯一人辻占ら召せと門毎に訪れる心は如何ならん我身は溫き家に居て何不足なく新しき春を迎ふなるに、同じ女と生れ來て何故に彼の子は左なるぞと、絶え難く哀れに思ひしまゝ後追ひ行きて一枚求め、父樣ありや母樣はと問くに、彼の子は妾の顏をうち眺め死に給ひて殘るは妾と弟とのみ、何卒先き問ひ給ふなと、亦も悲しき其聲を張り上げて、戸毎々々に訪ぬる樣、憐れ共赤氣の毒の限りなりき。

吹雪の朝

越中 栗山勢能子

夫の出勤を玄關に見送りて、マア恐ろしい吹雪で御座いますれと、申せば、何に、北國男子は、是れ位なことは恐るゝに足らんと、雪ふみ分けて出で往き給ふ、吹き荒ぶ風は六花を亂して姿は間も無く見えずなりぬ。

園の白梅

岐阜 度會清香

私の家に初梅と名づくる鶯が一羽ゐました、姉が上京前に友人からもらつて來られたのです。姉は在京中に春が來て梅が咲いて初梅もさぞ得意だらうと、常に手紙をよこされたが、姉の死なれた後は、初梅はとんとなかなくなつて、遂に死んでしまひました。私は悲むくろを、裔齋の前の園の片隅に葬りましたが、翌朝不思議にも園の白梅が二ひら三ひら咲きました。其梅は姉が手づから植ゑられたものであります。

謎々　◎印入賞

▲羽子とかけて

▲寒暖計と解く……心は上つたり下つたり　長野　田中りん

▲交際家ととく……心はつき合をする　敦賀　大橋元子

▲空想家と解く……心は上ばかり見て足許知らず　長野　塚田かつ子

◎三保の松原の天女と解く……心は羽子より外に心なし　伯耆　長田ふみ子

▲内助とかけて

◎渡邊の綱と解く……心は隠した腕を見せる　牛込　深野みつ子

▲病氣回復と解く……心は良剤(良妻)の力　長野　足立照子

▲年賀廻りとかけて

▲太陽と解く……心は一年一度廻る　山口　竹内いし

▲遣外使臣と解く……心は名刺(名士)を出す　横濱　宇佐美文子

◎水雷艇と解く……心は魚形(御慶)をはなす　越後　坪井わか子

▲御抱え車と解く心は紋付が多い　舞鶴　S女

▲酒屋の小僧と解く心は銘酒(名刺)を持廻る　住の江　しげ子

一口噺　◎印入賞

◎　常陸　荒木靜子

ひようきんな教師試験問題を出す、言葉に角が立つと云ふ事あり其形を示せ、夫婦喧嘩は犬も喰はぬと云ふ誰が之を喰ふて見たりや。

◎　横濱市　馬場せい子

親父「お前は怠けて計り居るが、チト苦學生を見倣つたがよい」

伜「でも親父さんが貧乏しなくちや迚も苦學は出來ませんよ」

◎　上村美惠子

妹「私姉さんになつて寶さがしがしたいわ、」

姉「なぜお前ではいけないの」、妹「でも愛讀諸姉乞ふ二月一日發行を待たれよとあるもの」

△　下谷　若林久滿子

下女「奥様、之は何處の景色で御座いますか」

細君「ア、それは社頭の松だよ」

下女「ヘエ、社頭つて處は何處に御座いますの」

△　但馬　足立直枝

客「御免下さい」

書生「ヘイ何方ですか、御姓名は」

客「背は五尺一寸、目は近眼」

△　新潟　荒木つき子

下女「一雄さんはおいくつ?」一雄「新宅の次郎さんと同じだ、」下女「そう! 次郎さんはおいくつ?」一雄「僕と同じだよ」

△　千葉　小林よれ子

母「きよちやんや御醫者様がね、舌を御見せと御有つたらこーするのだよ」と「舌」を出して見せる

清子「それぢや母ちやん上を御見せといふたときはどーするの」

△　茨城　坂本露子

芝居の歸りに

妹「兄さん芝居の馬はちつとも嘶ないのね」

兄「うむあれでも家へ歸ればひん／＼(貧々)いつてるよ」

△　愛知　今泉興志美

甲「そこは障子ではいけないよ」

乙「夫れじや格子でおきませう」

△　駿河　天野ふじ子

女「妾は昨夜夢を見て居てちつとも眠られなかつてよ」

△　千葉　さわ女

娘「おかあさん今日の歴史はほんとに面白うございましたよ」

母「マアあきれたね、お前はやさしい子だと思つたのに、ほんとに慘酷だね、人の難死が面白いなぞ言つて」

△　千葉　白井とみ子

母「坊や今日は御正月ですから、よいおめしを着たら御父さんにお目出たうとおいひよ、」

子「お父さんお目出たう」

母「それから奥のおばさんにも申しておいで」

子「おばちやん障子あけましてお目出たう」



乳母

岡田八千代

今朝の雨にも猶、散り殘る花もあつたらう、潦咲かき春の夜である。通夜に籠つたものは、亡き人の叔母に當る某、乳母に當る人、遠い身内に當る私、以上三人、餘の人も宵の口は大勢守つても居たが、久しき間の看病疲れに、何れも今頃は夢に亡き人を見てるのであらう。乳母と云ふのは五十四五のきしや立の丈のすらりとした人柄な女で、髮も小さな束髮にして細かい紬の紋付に黑繻子の丸帶を角を出して結んで居た。報を受けて最初に駈け付けた時、第一に哀を引いたのは此乳母であつた、夫は母にもあれ、兄にもあれ、亡き人に近ければ近き丈、又遠ければ遠い丈、誰一人此佛に對して悲しまぬものもなかつたが、此乳母は當時神奈川に家を持つて居たので、幸子(亡き人の名)が病氣篤しと聞いてから、家を捨てゝ看病に勤めて居たのを悲しき日の前日、餘りに隔てた我が子を見に歸つた後に此不幸に逢つたのだから、夫と聞いて人目も厭はず泣きくづれたのであつた。

「私は奥樣、お許しさへなければあんなにお慕ひ遊ばす御病人にお別れ申して歸るんぢや無かつたのでございます。ほんとに皆樣さへお暇を下さらなければ。」

と幸子の母をとらへて無理な恨を言ひました。夫に

又女中などの口さがなき者共が、世辭か親切か口を揃へて、

「ほんとに乳母やさん、奥様はどんなにか貴女の事をお聞き遊ばしたか知れませんよ。まだか／＼つてねえ。」

此處に奥様と言つたのは幸子の母の事では無い、幸子其人を指したのであつた。幸子は今年廿三、十八の時に嫁いて廿の夏、黒々と落ちたる日露の戰雲は海軍士官であつた其良人を、哀れ大砲の音の響きの消ゆると共に連れ去られたのであつた。

夫からと言ふもの、實家に同居して淋しく幽かに、あるか無きかの神の如く其日其日の物憂さを、母兄に慰められつも送つたのである。「不如歸」を好んで讀み出したのは其頃からだつたと言ふ。

一體雪のやうな、纖弱い美しい人が病氣を得てからと言ふもの、いよ／＼細く、いよ／＼淡く、恰で霞か霧か、あるは又天使の袖であつたかも知れぬ、兎にも角にも何か斯う近より難い威があるやうで、その癖離れて居ると其懐へでも、這入り度い程懐しい人であつた。

「お幼さい時からお美しいお方でございました。」

とつい此頃の事をば知らぬ私に、説き明すものゝやうに乳母は靜かに言つて夢を追ふやうに目を閉づる。

「死ぬならば春が好いつて言ひ／＼してお出でだつたが、望みが通つたのだから、さぞ嬉しいと思つて居やう。」

叔母なる君も傷しやかに涙を拭つて云ふ。

「けれ共貴女、春は今年ばかりでもございませんものを、乳母は考へれば考へる程口惜しうございます。」

十疊の間の軸を外した床の間には、經机を一脚置いて上には線香しきみ、違ひ棚には亡き人が好んで愛した草花を挿した花瓶が置いてあつた。

座敷の眞中に、紫綸子の薄蒲團に丈長く横たはつたのは幸子で、上には白を重ねた黒の紋付を倒さに掛けてあつた。白布を溢れた黒髪は、艶々と三つに編んで丸く卷いてある。乳母はそつと其胸のあたりを撫でた

が、溢るゝ涙を忙しく押へて、
「ほんにもう私は口惜しうございますよ。皆様お仲間の奥様方が、夫ぢや派手だ〱とお斥しなさるもんでございますから、こんな貴女だん〱地味に遊ばして、恰でお模様なんか何處にあるか知れないやうなお召物に遊ばしたのでございますよ。」
と重ねのフキを取つておつと見詰め、
「御自分方は貴女、お三十にもおなり遊ばし居らつしやり乍ら、八寸もあるやうなお模様をお付けになりましてね、澄してお出で遊ばすぢやございませんか、此方様は貴女、幾ら旦那様がお出で遊ばさないからと言つて、まだお廿三やそこらで



此様なお模様に遊ばして、何事にも控え目〱に遊ばすのに、夫でも、何の彼のと御仰られたと御仰いましてね、何時でも乳母やを捉へては、ほんとに如何したら好いのだらうつて、之がほんとの泣きより笑ひでね、能くお淋しくお笑ひでございましたよ、夫と言ふのも兎角御容貌がお美しいもんですから、皆様がお嫉み遊ばして、稀に音樂でも聞きにお出ましになりましても貴女、恰で見張を付けてあるやうに御存じでね、未亡人と言ふものは成丈人込へは行かぬものだの何のつて、夫となしにお當付になるんださうでございますよけれ共もうお幼さい時からお大人しい嬢様で居らつ

しやいましたから、決してもう人樣にお逆ひ遊ばすやうな事はございませんでね、近頃ではもうとんとお外出は遊ばさず、御本ばかり讀んで居らつしやいましたさうでございますから、夫で御病氣にもおなり遊ばしたのでございます。言はゞ貴女、まだ御壽命ぢやなかつたのでございますよ。ほんにお可愛さうな事を致しました。乳母やはもう何にも樂しみはございませんよ。」

乳母は靜かに吐息を吐いたが、

「夫にまだ此方樣にお妹子樣がお出で遊ばしまして、只今、御遠方へお嫁きでございますが、其お方の乳母と申すのが貴女、誠に頑固な丈夫な人でございましてね、例も私に向つちや、貴女のお孃樣はどうもお弱いやうですね、お前さんがちつと養生しなくちや先で心配でせうよつて、いつも貴女此方樣のお弱いのを私の故のやうに言ひましてね、此方樣の旦那樣が御戰死の折も、私に向ひましてね、貴女のお孃樣の旦那樣はお亡りですつてねつて、さも私のお見立でも惡かつたやうに申すぢやございませんか、けれども、之ばかりはどうも是非がございませんから、私も默つて居りましたが、今度だつて此方にをりましたら何を申しましたでございませう、丁度お妹子樣のお產で其方へ伺つてるさうでございますがね、此方樣に引替えて彼方樣はお目出度で、ほんにお羨ましい事でございます。」

乳母は又亡き人の胸を撫でゝ顏を反向けた。何處やらに鐘が鳴る、燈火は瞬き〳〵、線香の煙も濃く昇つて、袖も褄も薫ずらむやうに室の中に立ち籠る。

△小說鷄頭　高濱虛子著

俳文士中の驍將高濱虛子の短篇七種を集めたるものなり、虛子の小說の眞價は夏目漱石が序文によつて始めて知るものにあらずと雖も、漱石氏の序文はこの小說の特質を十二分に紹介して世に問ふたるものなり其の餘裕ある筆趣致ある文味は自然派の作物以外に於て別種の面目ありといふべし定價七十錢、春陽堂刊。



母子草

濱千鳥

（上）

『乳母や。』

と、利江子は小兒の時代に復つて、上框から覗いて呼んだ。

此處は入口の四坪ばかりの土間で、兩方の壁際に夥しく小麥の俵が積みかさねられ、毛並の良いポインター種の洋犬が、細い鐵の鎖で入口の柱に繋がれて居る。市場へ送る西洋苺の箱が、堆高く積まれてあるので、臺所の方は見えないけれど、右手の座敷は平素の通り奇麗に清められて、今方、客でも歸つたのか、茶道具と煙草盆がその儘に、養鷄雜誌の石版書の表紙が、ハタ〳〵と風に翻られて、床には例の唐畫の山水、落葉松の盆栽が飾つてあつた。

臺所の方から、忙しげに出て來た乳母が、

『まアお孃さま、よくまア……さ、何卒そちらの緣側の方へ、お廻り下さいまし。』

年紀は五十の坂を越したのであらうが、肥りに肥ッて若々しく、しかも嬉しさうに眼を細くして、襷を脫しながら、

『よくまアお出下さいましたね。今日は又めつきりお暑くなりまして、旣う乳母やなんかは、御覽遊ばせ單物を着て居りますんでございます。』

利江子は微笑みながら、

『本統に暑くなつたわね。おや、又鷄小舍が出來たの？』

庭の若葉の茂りを越して、二棟の養鷄小舍、餌を呼ぶ聲、羽ばたきの音、數百羽の鷄の氣勢、鵞鳥も居ると見えて、太い濁つた叫びに連れて、雛の纖細い聲も聞える。

『何んで御座いますか、唯だ殖えますばかりなんで御

座います……貴女、さアどうぞお上り下さいまし。取散らして居りますけれど……。』

『いゝのよ。今日は少し急ぐから、最う上らないで。』

『まア、さう仰有らずに貴女、久々でお出で下すつたのですもの、第一そんな縁側なんぞへ……さア何卒お上り下さいまし。』

『いゝえ、最う此處で澤山なの。』

と無理に坐布團を貰つて、

『乳母や、お前御用がおありなんだらう、妾に關はずしてお呉よ。』

『なアに貴女、何も用事は御座いませんのですが、唯最う、朝から晩まで、まご〳〵致して居ましてね。』

『隨分手がかゝるわね。』

『蒼蠅う御座いますよ。がア〳〵騒々しくつて、逆上せてしまひます……それはさうとお孃さま、貴女、既う御病氣は全快なさいましたて？』

『乳母やは可厭！　妾もうお孃さまぢやないよ。』

と笑つたが、急に俛げてあらぬ方を眺めた。絹セルの單衣に、病後の用心にと、燻んだ葡萄色の縮緬の被布を着て、折から今日は頓かに、夏めいたので、少しく上氣する位、色艶はさのみではないが、何處と無く窶れた姿、僅か二年が程であつたが、世の荒波に揉まれた利江子は、二十四の年齢より老けて見らるゝのである。

併し、その情に潤んだやうな眼と、愛らしい口元、艶氣は無いが大きく採り上げた束髪の後毛が、匂ひ深るゝやうな襟元に散つて、肩の肉つきは未だ淋しいけれど、懐かしい乳母に會つた嬉しさは、あり〳〵と顔に現れて。

『あの今日妾ね、健さんに鳥渡用があるんだけれど。』

『おや、左樣で御座いますか、唯今鶏に餌を與つて居りますから、少時お待あそばせ、私呼んで參りませう。』

『いゝのよ、そんなら妾往つて見てくるから、何處の方？』

『あの向ふの小舍で御座いませう。』

「さう、ぢや往つて見て來るわ。序に鷄も觀せて貰ひ度いから。」

「はゝゝ、汚う御座いますから、お召物をお氣をつけ遊ばせよ。」

利江子は、案内知つたる折戸を啓けて、養鷄場へと這入つた。

此處は廣く柵をとつて、雜種が五六十羽、若いのもゐれば、年老つたのもゐて、今、頻りと餌箱を漁つて居たが、利江子の姿を見るや、右往左往に遁げてゆくのを見送つて、次の柵へ這入ると、此處には蜜柑箱の巣の中に、寶玉のやうな卵子が一個、艶のよい黒い濡羽の色の一番、クックッと仲よく、夕の餌を啄いてゐた。

次も同じ種類の二番、其蹲りは獰猛の鷄冠を戴いて眼光の鋭い、胸毛の擦り切れた鬪鷄で、利江子の姿を見るや、屹と身を構へて睨みつけた。

利江子は急いで此處を出ると、間口の狹い奥行の深い、兩側を一間ばかりづゝに仕切つた養鷄小舍で、その中程に、尋ぬる人の影があつた。

「や、怎うも御無沙汰ばかり致しまして。」

と、彼方から聲をかけて、小舍から出て來た男、古い洋服の上着を脱いで、チョッキ姿の三十一二、色の淺黒いキリッとした顔立ちで、輕い鳥打帽をとつて、小脇に餌籠を抱へ、

「御病氣のお見舞にも上りませんで……實は餌を與る者が、脚氣で國へ歸りましたものですから……人手が無いので、つい伺ひも致しませんでした。」

「どう致しまして……大層御精が出ますことね、いくら實地の御研究でも。」

「はゝゝ、此樣なことして一日駈け廻つてゐるんです。」

此の男は農學士松尾健二と云ふ此養鷄場の主人で、乳母の悴である。

「今直き仕舞ますから、失禮ですが少時お待下さい。」

「どうぞ、御緩り……。」

帽を阿彌陀に被つて、再び小舍の内に取つて返す。利

江子も續いて這入つた。

『健さん、此鷄も矢張西洋のなんですか？』

『それですか、それは雜種です、名古屋コーチンと云ふ奴です、コーチンの雜種で、名古屋地方で作つた鷄なんです。産卵鳥……卵子をよく産むのが特長ですが、それよりか此の白色ブラマと云ふのを御覽下さい、大きなものでせう。』

洵や、純白の羽毛の、足の爪先まで生へて、丸々と肥えたる雌雄、雄は殊更大きく、然ればとて、憎さげもなく、人懷こく寄つて來た。健二はこれへ餌を與へて次へと移る。

利江子は小さな塗札の懸つてゐるのを、口の內で讀んでゐたが、

『アンダルシヤン、これが名前なんですか。』

『はゝゝ、さうです。變な名でせう。』

プリモース。ロック。ワイアンドット。其他單冠薔薇冠の幾種類、分けても、ラ、フレッシュと云ふ佛蘭西產の鷄の、何處となく巴里的の形體で、黑色コーチンの支那臭い擧動、孔雀を見ない七面鳥が、天晴我が羽衣の色を誇つて、尾羽を開きながら、喉を鳴らしてゐるのも可笑く、岩戸神樂の其時の、長鳴き鳥とか、美しい尾長の鳥の、神代を偲ぶ鳴聲をそのまゝ『東天紅』と命名た事など、健二は一々その特長や性格を說明するのである。

『此奴が一番輕快な奴です。白色レグソオン次も同じ鷄です。』

雪と白い羽毛の、一點他の色を雜へず、眞紅の鷄冠大きく垂れて、宛然若人の、戀にでも醉つたやうな眼差し、身輕く彼方此方を駈け廻つてゐた。

『まア奇麗ね、眞白なのね。』

『これで一番亂暴者なんです。その向ひにミノルカと云ふのがゐませう、黑色の……それなんか體格が些と似てゐますけれど、性質が異つてゐるんです。さア お待遠う樣でした、最う向ふの孵化室でお仕舞です。此方からお出で下さい。』

利江子は種々な鷄の種類、種々な鷄の體格、而して種

種な擧動を見物しながら小舍を出ると、

『健さん。』と呼びかけて、

『こんな事絕えずなすつて、嘸ぞお疲れでせうね。』

『私ですか、否、少しも苦になりません。これが商賣ですもの。』

『でも、隨分骨が折るでせうね。』

『それや、今もお話した通り、何にしろ生きものですから、一通りならぬ世話が燒けますが、又それに對する趣味もあります。私は自分の有らゆる快樂を此業務に注いでゐますから、他人が見る程の苦痛はないのです、はゝゝゝ。』

と笑つたが、それは眞面目の後を殊更に濁らせやうとした苦しい笑であつた。

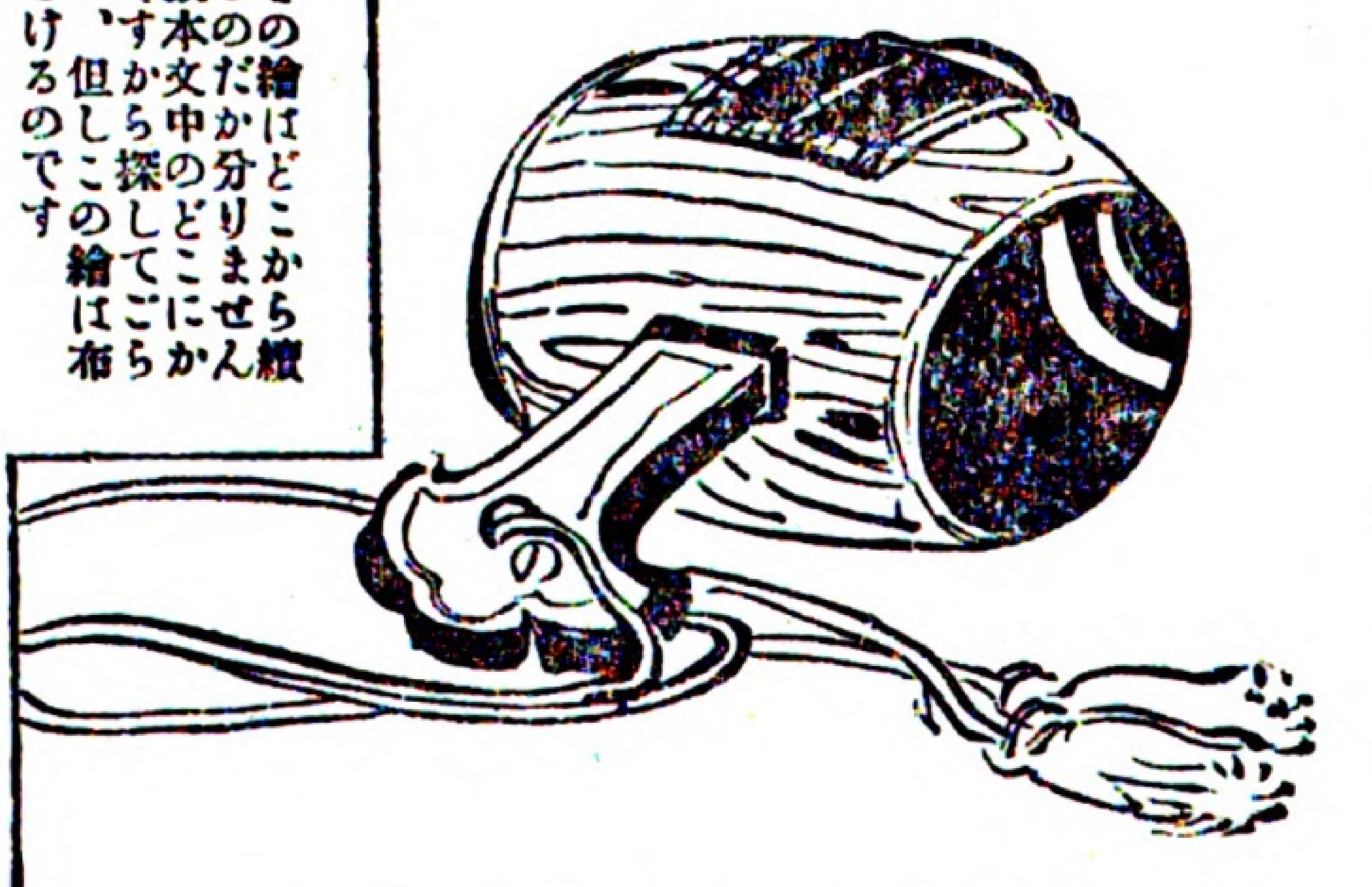
『然し、かう云ふ樂しい職業を得たのも、全く貴女のお父樣の御蔭なんで、母も絕えずそれを申しては喜んで居ます。それに去年から研究を初めた苺の栽培法が、少しく結果が現れて來ましてな、今年は餘程の收穫があるだらうと思ふんです。これを尙は充分研究したら、あの寶玉のやうな果實が、乞食の口へも這入る事が出來やうと考へられるので、旣う外の樂は一切覔めない覺悟なんです。』

利江子は首を俛れて聞てゐたが、

『健さん、貴郞は本統にお幸福ですのね。』

少時して、利江子が言つた言葉はこれであつた。

奧の方で、鵞鳥が消魂しく鳴き立てた。その叫びに驚かされて、敵の姿も見えないのにそれからそれへと、鷄が高く鳴き連れる。



▲寶さがしの內（小槌）

サア、この繪はどこから續いて居るのだか分りませんが、矢張本文中のどこにかある筈ですから探してごらんなさい、但しこの繪は布袋へつゞけるのです

（中）

健二は澄み渡つた蒼空の長閑な雲の動くのを凝乎と眺め入つたが、氣を變へて、

『今お話した苺畠を御案内しませう。』

生垣を廻つて、孵化室の横手から畠へ出ると健二は籠を地に置いて、額の汗を拭ひながら、

『今もお話した通り、快樂を捨てゝ見たら、苦痛の中から又快樂が出て來ました。貴女の仰有る通り、現在の私は實に幸福です、私が駒場の大學を卒業した當時は、私は何たる不幸者かと思つてゐましたが。』

利江子は、思はず識らず。

『本統にねえ、妾、あの頃の事を考へ出すと……妾はよく〳〵の因果者ですわ……、貴郞と異つて、まだ苦しんでゐるんですもの。彼れから以後、一日だつて、唯の一時間だつて氣の落着いた、樂しい思ひをしたことが無いんですもの。』

そよ〳〵と、風が若葉の香を送つて、前面は四五百坪の苺畠、露の滴るやうな眞紅の果實が今を盛りで、綠のその葉の上に、暖かい日光を浴びて、黃色い胡蝶がひらり〳〵と、舞の袖を翻してゐる。

利江子は、過ぎ來し方を思ひ廻らすのであつた。横濱の豪商菅沼家へ嫁入つた時の心持を繰返すのであつた。

健二は乳母の伜であつたが、利江子の父が我が兒のやうに愛してゐて——自分の子は女兒ばかりで、男子は珍らしさもあつたが——學費まで出して勉强させたので、恰度健二が大學を卒業した年の秋利江子は緣談が調つたのである。當時利江子は此緣談について、何となく氣が進まなかつたのであつたが、父が非常の熱心で、母さへ親戚さへ皆賛成して了つた。一度ならず、二度ならず、利江子はさま〳〵に斷つて見たが、さて何故に拒むのかと問詰められては、それを明白に答へる程の勇氣もなかつたのである……此の如くして利江子と健二とは別れたので。

『どうして妾は、こんな不幸者なんでせう。嫁つた先

方は、兎も角豪商とか云はれる處でしたから、不自由は少しもなかつたのですけれど……健さん！　妾は二年間、少しも樂しいと思つた事ア無かつたのよ乳母も知つて居る通り、公然外妾を家へ引き入れてね。」

「さうださうですな。その妾に小兒が出來てゐたんださうですな。」

「多分、妾が參らない前から關係して居たのでせう、それもいゝんですけれど。」

と、利江子は涙ぐんで、

「その女が、妾を何うかして、逐ひ出さうと思つてね健さん、本統に妾は辛かつたのよ、そんな女に逐出されるまで、噛りついてゐられるものですか、餘りな事ですから戻つて來ますと、父はあゝ云ふ古風な人ですから、それや外妾を引入れたのは、菅沼が惡いが、出て來ると云ふなア利江お前が惡いと、仰有てね。菅沼に對しては充分談じても見やうが、兎も角お前は穩かに歸つてゐて呉れ、と仰有るんですけれど……それに、その女が、まア何うしたんですか急性の何とか云ふ病氣で、不意に死んだんでせう。それを聞いたら、猶更妾氣味が惡くつてね。」

利江子は急に口を噤んで、餘り仂ない——乳母の伜で、幼馴染の健二に向つてとはいへ——自分の談話を愧る樣に、顏を紅くしたが、健二は此の談話を聞ながらも、苺の朽葉病葉を、摘んでは捨て、摘んでは捨ててゐた。

「それで……。」

と、健二は猶も談話を促すので利江子は重い口調で、

「此頃では、菅沼は菅沼で、全く自分が惡かつたから、是非戻つて貰ひ度ひと言つてゐるんですけれど………。」

「それぢや、又横濱へお歸りになるんですな。」

「それに就いて、貴郎に御相談しやうと思つてね。」

健二は吃驚したやうに、

「え、私にですか？」

「さうなの、後生ですから貴郎、何うしたら可いか敎

へて戴き度いの。」

「駄目でさア、貴女の事に就いて、私が何うかう云ふなんて……お姉様にでも御相談なすつたらいゝでせう。と言ふと何だか私が甚だ冷淡のやうで濟みませんですが、全く私なんか御相談相手になれんのですから。」

「何故！　健さん、貴郎既う昔の健さんぢやないんですね。」

「否、さうお怒りになつては困るんです。私は貴女のお宅の親類でもなければ、縁者でもない……貴女の乳母の倅で、赤の他人の養鷄場の主人に過ぎないのですから………。」

「乳母の倅と仰有つてね。さうすると乳兄妹ですわね。妾は妹ぢやありませんか。」

「勿體ない。」

と、健二は眞面目に言つて、

「然し後刻、何んなお話であるか、詳しく伺つた上で、單に意見でもありましたら申しあげませう。」

芋畠の境の、杉の生垣を漏れて、親鳥を呼ぶ雛の聲、健二はその方へと歩み出した。

「それで菅沼さんの、その妾の子は何うしたでせう。」

「多分、乳母でも附けてあるんでせう。」

と、利江子は力の無い返事をして、深い太息をついた。

孵化室の戸を啓けた健二は、利江子を振むいて、急に元氣のいゝ聲で、

「貴女、此處へ來て、鳥渡御覽なさい。」

はツとして、利江子は我れに返ると。

「これは家鴨の雛です。然し鷄に抱かせて孵化させたんですが、此親鳥の愛情が、洵に感ずべきものなんです。我が子でもない、こんな醜い家鴨の雛を、全くの我が子と思つて育てゝゐるんですからなア。人間でも一寸此の眞似は出來ないだらうと思ふんです。」

健二は斯く言ひつゝ、頻りと彼方此方と、餌を配つてゐる。

利江子は無言の儘、親鳥の雛に對する擧動を見戍つて

ゐたが、脚と云ひ嘴といひ、且つその鳴聲と云ひ、醜惡極まる家鴨の雛を、親鳥は、八方に眼を配りながら、クックックッと餌壺を啄いて見せて、餌を漁る仕方を教へて慈しみ育てる有樣。それを見入つてゐた利江子の頰に、次第〳〵に、温かい和かな色が現れて、微笑が浮んだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「それでは、御機嫌よう。」

利江子は暇を告げて、養鷄場の門を出やうとしたが、二歩三歩取つて返して、送つて出た健二の傍近く衝と寄つて、何か小聲で二言三言私語くと、

「はゝゝ、妻を迎へろと仰有るんですか、はゝゝゝ。」

と、健二は高く笑つた。

利江子も笑ひながら門を出て、待たせて置いた俥へ乘ると、初夏の夕風が、眼に見ゆるやうに清々しく流れて、二三丁距たつた製糸工場の、苦しい勞働を忘れやうとする女工の唄の、節かなしく唄ひ連れるのが、微かに聞えて、又一トしきり、裏手の鵞鳥が氣立ましく鳴き立てた。

（下）

田舍道の石高路、俥の震動が烈しいので、利江子は、思ふやうに思案も出來なかつたが、唯だ切れ〴〵に恁うと決心して、横濱へ歸つてから、さて、何う云ふ風にして、一家の平和を保つて行かうかと……。

突如、利江子の思案を破つた叫び！

同時に俥の下で、悲鳴が起つた。

氣が顚倒した車夫の、不意に轅棒を地に突いたので、利江子は前へ踣る處を、膝懸に足を捉られて、殆んど荷物のやうに轉げ墜ちた。事は全く突然で、今俥が片側藪の、片側畠のだら〳〵坂を下りて、淋しい町へ曲らうとした途端、横合から駈出した小兒、五歳か六歳か、いづれ此處邊の貧民の兒であらう。身なりの賤しい男の子、出會頭に俥をかはす暇もなく、その小兒の體が地に仆れたのである。利江子の驚愕は云ふも更なり。車夫は汗の手を拭ふ暇もなく、主人を抱起さうと

したが、倖ひ怪我も無かつたと見えて、利江子は自ら起上がつて、塵を拂ひながら、仆れた小兒を介抱すべく命じた。

小兒にも運よく怪我はなかつた。唯だ洗洒した紺絣の衣服が處々破綻びて、砂に塗みれたばかり、然し餘りの愕きに、啜嗚上げて、尙ほ泣いて居たが、自分の前に美しい人が立つたのを見るや、不思議さうに、眼を擦つてゐた手を下げて、凝乎と見上げる。

「堪忍してお呉れよ、痛かつたらうね。」

美しい人が、優しい聲で尋ねると、嘘然として男の兒は、自分の身の廻りを見廻したが、砂に塗れ、衣は裂け、しかも穿いた草履の片方は見當らなかつた。

再び悲しくなつて、泣き出さうとする肩へ手をかけて、

「何處も怪我しなかつたらう、ね、泣かなくつてもいいよ、衣服が大變汚れたやうだから、小母さんが一緒に行つて、お母さんに謝罪るからね。叱責れやしないから、泣なくつてもいゝよ。」

「おッおッ母ア居ねえんだい。」

「さう、ぢやアお父さんに謝罪るからね。お家は何處なの、え、此の先？」

「父だッて、父だッて居ねえんだい。ま、まだ歸つて來ねえんだい。」

「それぢア困つたわね。まだ歸つて來ないつて何處へ行つたの。」

「父かい。」

「あゝ。」

「市場へ行つた。」

「さう、おッ母さんは何處へ行つたの。」

利江子の問は、飽くまで優しかつた。その優しい言葉が、小兒の耳に何と響いたのであらう、急にわッと泣出したのである。

「ど、何うしたの。何處か痛いの、え、何處か痛いの。手、足、え、何處？」

小兒は唯だ頭を左右に振るのみであつた。

「ぢや何うしたの。」

「おッおッ母ア、お寺へ行つちやつたい。」

「お寺へ、まア。」

と利江子は小兒の顏を覗いたが、泣出した原因の、それであつたかと合點した。

「其れぢや、お家に誰も居ないのね。お祖母様も？」

「誰れも居ねえ……お隣りのお小母さんが來て居て呉れるんだけれど今日小母さんも居ねえんだ。」

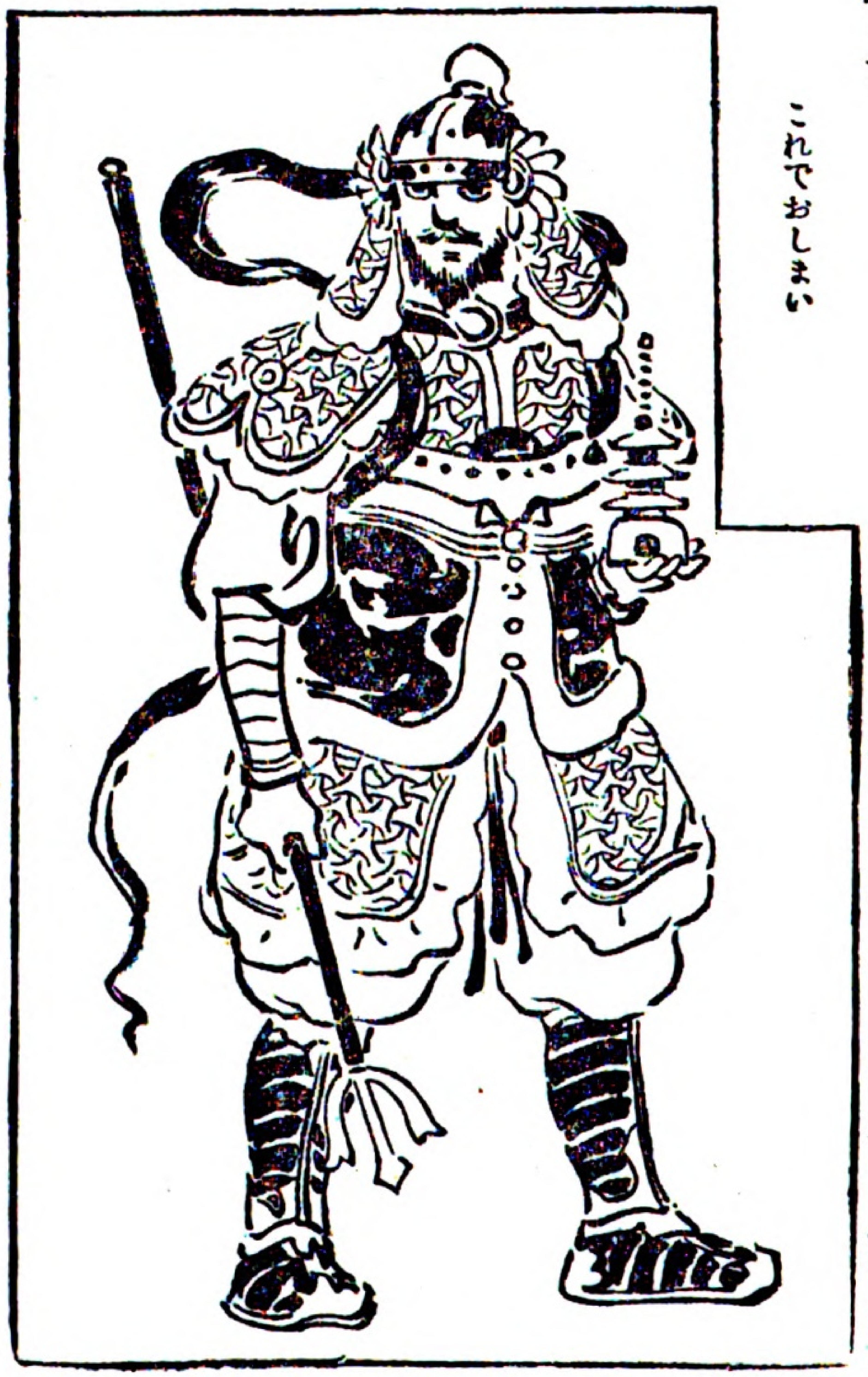
「さう、ぢや淋しいのね。」

「だから、だから……おらアおツ母ア探して、お寺へ行くんだ。」

「お寺つて、何處？」

「知らねえや、なアおツ母ア居ねえと、淋しくつて、おらア……。」

▲賓さがしの内



利江子は、何か言はうとしたが、小さな者の涙の種を蒔くのはと、

「おツ母さんはね、お前さが、大人しくお家に待つて居ると必定歸つてお出になるわ。」

「さうかなア、おツ母ア歸つて來るかなア。」

と、露置く瞼を瞬いて、しみ〴〵と利江子の顏を見

入つた。

利江子も、我れにもあらず、小兒の肩を撫でながら、

「最う泣かなくつてもいゝのよ、妾が善い物を上げるからね。」

帶の間から紙入を拔いて、

「さアこれ上げるから、お前の好きなもの、お父さんに買つてお貰ひよ。」

一圓の紙幣一枚、小兒の手に確と握らせて、車夫を顧みた。

最前からの有樣を眺めて、土偶の如くに突立つてゐた車夫は、やつと我れに返つて、

「怎うも飛んでもねえ粗忽致しやして、何ともはや…………。」

頻りに謝る車夫の言葉を輕く受けて、

「兎も角、この兒の家まで行く事にしやう。」

「さアお家へ行かうね、何方なの、向ふへ行くのかい。」

小兒の手を取つて歩み出す後方に、カタコトと荷車の來る音がして、

「清坊でねえか。」

呼ばれて小兒はくるりと振り向いたが、

「あ、父だ。」

と叫んで、利江子の手を振り拂つて、驅け戻る。

繼接の印半纏を着て、日に燒けた顏色の悴れ、終日の勞働の疲れを、草鞋の足に現して、空車の勢なく、輓いて來た三十五六の男。

「清坊、何うしたい。」

利江子が一歩進むのを、車夫が横合から聲をかけて、

「この兒アお前さんのかね。實はね……。」

と、ありし事の一伍始終を告げると、

「はアさうでがしたか、何アに怪我がねえでがすから……それや返つてお氣の毒でがした。」

と言ひつゝ、我兒の頭を撫でゝ、

「清坊、お前あれ程言つて置いたに、どうして外へ出るんだ。」

「うゝむ、うゝむ、おらア淋しくつて……おッ母ア探

しに……。」
男は聞くと等しく、頽然したが、
「止せ！ 駄目だから止せ、おッ母ア就うお寺にも居ねえだよ。さア大人しく歸るんだ。」
利江子は、靜かに男の方へ進んで、
「あの、つい車夫が粗匆したものですから……。」
「何アに、ようがす、貴女こそお暇アつぶして、お氣の毒樣でがした。」
睨も立てず、
「それでは、最うお分れ致しますべえ。」
「まア可哀想に、お母さんが居ないのですつてねえ。」
「はア、怎うも弱りますだア、から云ふ商賣でがすから、一緒に連れて歩く譯にも行かねえでな。や、これはまア。」
小兒の差出す紙幣を手に取つて、今更のやうに利江子を見た。
「なアに、それは少しだけれど、何かお菓子でも買つてお呉れ。衣服も大變破れたやうだけれど……。」
「何うもはア、却つて濟みません。實はな貴女、恥をお話するだけど、嬶奴は死んだでねえでがす。これが戀しがるで、死んでお寺へ行つたゝと欺瞞してゐるでがすがな、私とこれとを置去りにして、何處へか突走つたのでがすて、太え奴でな。」
あゝ、世には斯う云ふ無情の母もあるのである。男は稍々憤慨の色を現したが、旋て自ら蔑視むやうに、
「自體、私が意氣地なしですからなア。」
と言つて、微笑したが、其れは宛然薄い冬の日影のやうに、淋しいものであつた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

利江子は、期する所があつて、横濱の菅沼家へ戻つた。死んだ外妾の忘れ形見なる、哀れな小兒も、利江子と云ふ溫かな母の情を得て、家鴨の雛よりも幸福に育てられた。
貧しき、市場通ひの荷車輓の倅は、其後何うしたか………恐らく彼れの母は、歸らなかつたであらう。」



戀に囚はれし女詩人

香翠

むかし〳〵希臘の國オリムピヤにては四年毎に擧行はれる有名な國民祭があつた、これはオリムピヤの祭りと云ふのである。其の祭りの時は種々の競技があつて而も其れが體育上の力の競爭許りではなく、音樂、文藝に關しても美を競ひ崇麗を爭ふたものである、そこで勝を制したものは月桂冠を得る事になつて居る其れを得た者は無上の榮譽として世に持て囃されるのである。

此のオリムピヤ祭に於て詩歌の競技で新に月桂冠を得た女詩人サッフォーは婉なる雙肩に背負ひ切れぬ程の榮譽を擔ふて意氣揚々として、紫色の外套を身に纏ひ靑毛の馬に曳かせた美しい馬車に乘つて、萬歳〳〵の歡聲に送迎せられ、目出度くも故鄕レスボスに着いたのである。されば彼女は此の上もなき身の光榮に心の滿逸限りも無かるべき筈であるのに、此の時よりしてこの女詩人の心胸に怪しくも一朶の雲がかゝり居て、詩の神にも等しき彼女はいたく煩悶してゐるのであつた。それは何故であるか、曩きの日オリムピヤで神に入る樣な彼女の歌に心醉ひつゝ恍惚として足下に跪いた群集の中にファオンと云ふ一個の靑年があつた。彼は夙にサッフォーの名聲とその歌とに憧憬れて其の容姿を見んものをと遠きを厭はず彼の祭禮に馳せ參じたのであッた。物事に感じ易い女詩人は一目靑年の姿を見るや不思議にも怪しき焰が胸の内に燃え初めたのである。靑年は又彼女の技術を尊敬するの餘り、いつしか戀の奴隷となつたのである。さればキウピットに射拔かれたサッフォーは故鄕に歸る時もファオンを召し連れ、ファオンも亦電光の眩きに目も昏みたる樣に女神の後につき添ふて共々レスボスの住ひに歸り着いたのである

茲に又サッフォーの家に數ある婢僕の中に一人の少女が居る。其の美はしい容姿はあやしく憂鬱の假面に蔽はれて一種人を魅する樣な而も無邪氣な少女であつた其名をメリッターと云ふ、彼女は幼少の折り不幸にも盜賊の爲めに拐帶されたが惠み深いサッフォーの手に買はれて以來不幸の憂目を免がれて今はサッフォーを母とも敬ひ姉とも親しみ仕へて居るのである。然るに何故か此の少女も又美麗なる青年ファオンを見ていとゞ慕はしきものと思ひそめたのであつた。

こゝに又青年ファオンは兩親のなき不幸な孤子であるが心胸の苦痛は却々に激しく、且つ我れを慕へるメリッターのいとゞ無邪氣な眼付擧動に一層心をなやまして彼女との香ばしき交はりに依りて味氣なき胸の蟠を癒さんと試みつゝあり。人なき薔薇の下にメリッターの只打ち沈みゐる姿を見て其傍に近づき事情を語り給へと問ひければ少女は只顔を打赤らめちらと靑年の面を見上げしのみ其の儘行かんとするに、ファオンは押し止めて色々と優く慰めたれば、やう／＼にして語り出た、その時に少女の目には露が宿つて居るのであつた。

「あゝ私の生れた故郷は何處で厶いませう」

「え？　お前は其れを知らないの？」

「私は幼い時分に故郷を離れたのでございますから只色々のうつくしい花が谷の底にさいて居るのを見たばかりですが故郷の名なんぞはちつとも存じませんの、そしてあの確か此島よりもお日さんは明るかつた樣に覺えて居りますわ」

「そんなに遠い國？」

「それは本當に遠い／＼所ですの、草や木なども此の島のとは違つて花の香も別の樣でしたわ、そして夜なんか星はきら／＼と明瞭して四邊の人達もそれは／＼親切な人許りでしたの、さうして私を眞心から可愛がつて呉れました髮の白い他のお爺さんが一人居まして私はその方にお父さん／＼となづいて居ましたの、其の他にも一人奇麗な男の方、髮の毛も眼付も丁度……貴郎の樣な……」

「私の樣な？　其の人はどうしたんかなア？」
「ほんとにどうなすつたんでせうね」
「さぞ貴孃を可愛がつたんだらうね」
メリッターはファオンの手を握りつ聞えぬ程徐かに、
「私は小供でしたわ」
「私の小さい時も可愛い實に愛くるしい女の兒が一人居つた――それからどうしましたか？」
「其れから、私が或晩偶然眼を覺して見ると屋外がいや〳〵騷々しいんでせう、何だか知らないんだけれど恐はかつたわ、さうして居る内に乳母が來て私を無理〳〵暗黑なところへ引張つて行きましたの、すると四邊の家が燃え上るのが見えて、多勢男の人達が戰つたり逐ふたり、逃げたり倒れたりして今思ひ出しても慄とする程でしたわ、さうする内に突然一人の荒くれ男が來て私をとつ掴んだのですよ、何ですかもう恐ろしくて泣いたり、叫だりして居ましたが其中鬨の聲が聞こえまして私が氣が付いて見た時には船の中に居たのです、眞暗な波を蹴つて船は矢の樣に早く走つて行くのでございます、尤も船の中に擒はれたのは私許りでなく他の子供もございまして皆泣いて居ました、けれど故鄕を遠く離れるにつれて憐れな子供等はだん〳〵少くなりました、而して終ひには私一人ぼつちになつて此のレスボスの海岸に着いたのですよ、そして此のお邸の奥さんが私を見てお金を出して私を買つて下すつたのですよ。」
と語るを聞けば誰しも憐憫の情抑えがたきものであるが、ファオンは略似通つてる自分の境遇に引き較べて一層憐れさを増し、彼の同情は玆にいとしさとなり崇麗なる女詩人サッフォーよりも此の無邪氣なる一少女はより多く彼の心を動かしたのである、二人は今しも樂園を逍遙よう心地で邸内よりおのが名を呼ばるゝ聲さへも聞えなかつた。そこでお互に熱誠の標として薔薇の花を交換したのである、少女は、
「手の届く所には花がありませんわね、あら彼處に一つ大きいのがありますよ、だけど高くつて屆かないし……」

「私がとつて上げやうか」

「はあ、だけども……」

「なぜ？　私は是非採つて上げやう」

と青年は芝椅子に上つた。

「そんなら、あの、私がこう貴郎の方に曲げて上げるから採つて頂戴な」

「あ承知」

少女は枝を撓め樣としても女の力で餘り曲がらない。

「屆いて？」

青年は美はしき少女の姿に氣を奪られて花を見ずに

「これでもいけなくつて？　あゝそんなに私、強くつて滑り落ちさうですわ」

「大丈夫、私が抑えて居る」

纎弱きメリッターの手を滑つて枝はぽんと上がる、彼女はよろめきつゝファオンの腕に倒れる。

「あら離して頂戴……」

此の時平常着のまゝにて女詩人サッフォーは右手の方より出で此の態を見て内心頗る穏ならず、嫉妬の情むら／＼と燃え上り抑へんにも抑え兼ねつ只出て行けよとばかり睨まへぬ。

嫉妬は女の身に取りて恐ろしきものなり、此の忌はしき嫉妬の爲にサッフォーは妙えなる女詩人の影見るべくも無く愛婢メリッターは先に惠まれし衣服纒ふて只管主人に媚びんとせしが無碍に斥けられて、憐なる少女は身の置き所もなく、朧げなる故鄕を戀しとばかり泣きに泣く或夜の事なりファオンは寢言にメリッターを呼びたるにサッフォーは益々怒り恨みの心を起し戀の敵手メリッターを亡き者にせではやと決心したるもあり、これ畢竟少女が側に居るからの事なり、此の上は遠ざくるに如かずと思ひ、從者に命じてメリッターを追ひやらせぬ、此の計畫も又ファオンの看破る所となり戀の青年は或る夜窃にメリッターを誘ふてふたり船に乘り、跡白波と消えて亡せたり。

女詩人サッフォーは兩人の姿の見えざるにいたく驚き村人の手を藉りて跡を追ひかけたり、波遠き青海原に櫓の音幽かに逃げ行く青年男女が愛の神の妬みにより

てや不幸にも追手に捕はれて再びサッフォーが家に連れ戻されける。

流石詩の神ともいはれし女詩人なり、熱情の燃えん許りなる青年少女の戀は斷つべきものならじとおもひあきらめ、我れは詩の福音を傳へんが爲にこの世に生れ來りたるもの、神の御罰も恐ろしとおもひあきらめしはさすがなり。

かくて、一時の戀に心昏りし一匹婦は忽ち元の女詩人に立かへり、青年少女の罪を赦し、身に紫色のマントを纏ひ、頭に月桂冠を戴き、黄金の七絃琴を持ち、多くの詩女に取り圍まれ、崇嚴な犧牲の火燈せる神机の前に立ちて徐に歌へり。

崇き奇しき天つ神々よ
爾等豐なる恩惠もて
飾り給へき我れをしも
手には歌絃、詩の箙
感ずる心情思想を
織り出す精神皆共に
爾等が賜物、謝しまつる。
纖弱き頭に勝利の冠
飾り賜ひき我れをしも
永却の世までも香ばしき
譽の種子は殘らなん
黄金尊き我が詩は
此の世界の極限斷えざらん
爾等の恩惠謝しまつる。
花もて繞れる此の世の酒盞
只嘗めんこと、つゆ飲まで
惠み給へり爾はしも
おゝ見そなはせ我れは今
爾等が高きみ麾ぎに
花輪めぐれる歡樂の
その酒盞を棄てたるを。

爾等の祭婢今茲に
爾等の敵の蔑視の
的ともなりて賢こしと
思へる輩の嘲弄とも
なりなん我れを許さゝれ。
あゝ神々よ、なれは我が
栄花も散らしぬ此の身幹も
打ち枯らし給へとこしへに。
我が始まりし其れのごと
臨終の際も安らかに
神の御前に連れよかし
此の世の煩悶苦しみを
え耐えざらん繊弱き身は。

（ト彼女の情昂り）

臨終の希望神々は
聴容かれ給へり、見そなはせ
犧牲の火輝き黎明の
焔の色に茜さす
天つ神々、謝しまつる
汝ファオンよメリッタよ
共々来れ後の世に。

（ファオンが額に接吻して）

天つ御空の彼方より
接吻すなり汝が友。

（メリッタを抱き寄せて）

君をし懐ふ亡き母が
形見の接吻ぞいざ去らば
愛の御神の神机に
捧げまつれる我が犧牲の
冥府の運命果せたり。

と歌ひつゝ神机に急ぎ寄れるサッフォーの姿は天女の如く、身邊神の光もて覆はれたらん様に嚴おごそかなるに、従者共恍然としてある内にロエカデヤの岩よりヒラリと飛んでファオンの叫びし待て暫しの一と言もうたかたの泡、波間、巖間にたゞよい〳〵、此の時微風そよと吹き薫り、海のあなたに明けはれて稍にうたふ鶬の囀調。

▲人事活斷▼

石龍子

▲京都の狂者へ――石龍子は聖殺にして飽くまでも貞女兩夫に見えざるの古風を保存したき精神なり。然れども卜筮を取つて御身の運勢を占へば良緣を求めて再び正當なる結婚せらるゝ方が上吉なるの卦見ゆ。嗚呼。

▲桐生親の身の上何女へ――物に譬ふれば父上は紙にして母上は障子御身は糊なり。されば父母をして親密に結ばしむるの責任は御身に在つて、而も眞實の父上よりも義の母上に先づ親しみ、然る後父上を寄むる順序が最も肝要なり。

▲眞岐の村夫子へ――人に依れば凶、人に依らざれば吉なるの卦見ゆ、されば御身が思はるゝ如く英語を學びて何處までも奮進せらるべし、人背更に聞き入れず飽くまで我意を通せば後に幸運續々來るや必せり、挑むべからず、屈すべからず。

▲横濱白樂女へ――貴女の身の上は秋の野に鹿の聲を聞き居るが如し。悲しき聲なりとして聞けば悲しき聲に聞え、聞く者も共に悲しく なれど嬉しき聲なりとして聞けば嬉しく聞え聞く者も亦嬉しくなるものなり、故に今居らるゝ所を無上に樂しき所なりと觀念し、目出度安產し、赤心を傾注せられよ今秋須より瑞氣靄々たるべし。

▲東部二十歳想夫女へ――某職工東京より郷里に歸り、我は立派な官吏になりたりと、吹聽し、由緒ある人の娘を妻とし、新夫婦手を携へ上京したれば、豈圖らんや夫は職工にして某華族の下男部屋に蹲まる身、妻大いに落膽し、快々として樂しまず、折しも某華族は之を機として其妻を挑み、遂に禽獸の行を敢てし、後に夫の知る所となり、互に法廷に爭ひ合ひ、今や落着つかぬ事何れの新聞にも書かざるなきを知り給はずや。若し此の妻にして欺がれしは己の不明と諦め「良人よく／＼和殿の妾を欺かれし罪は深けれど、妾如き者を妻にせん爲の策なりと思へば却つて嬉し、何うぞ之より僅かの賃銀にても貯へお互に誠心を盡し合ひ、眞に紳士と言はるゝ身になり郷里に歸つても嘘で無かつたやうに思はれませうれィ和殿」と淚を流して諫むれば人は木石に非ず「さうぢや／＼許してくれ」と奮發一番、手鍋提げても樂しき家庭を作らんものを、快々として樂しまざりし爲に、遂に奈落の底に沈みたり。御身も今や欺かれて樂しからざる身となられたれども、更に怨む所なく赤誠を籠めて正道の人とならるゝやう、婉曲に諫めらるべし、良人は御身を惡しと思ひ居らるゝに非ざれば、必ず聞き入れて今より春の如き家庭となるや必せり、嗚呼誠の一字尊き哉。

▲臺灣れんが子へ――御身の性質は美しき玉なり、何處へ轉しても、又は碎いても、叩いても、美しき質を失はず、されば御身の爲さんと思はるゝこと何等の躊躇なく爲さるべし、一旦成功せざるも末々の運拙からず嗚呼美しき珠玉よ。

▲山口縣美須子へ‖御身の心は感情に鋭く爲に涙脆き所あれども、精神を引き立て、意志を強固にせられたら、身體も亦從つて强健にならるゝことは鏡にかけて見るが如し、故に之を恐れずして早々結婚せらるゝ方吉なり、美術會の手傳をせらるゝこと、名は甚だ美なれども、御身の爲に餘儀なき係累の來る兆なり。

▲長崎縣一少女へ‖原野に出でゝ仕事せんとする者を、家に歸れと袂引かれつゝある卦なり。されば御身も如何に父母の命令なりとは言へ、徐ろに其の理由を述べて實業家の方を斷り、原野に出でゝ仕事、否師範卒業の人と正式を以て婚を結ばるゝ方吉なり。

▲加賀東西南北皆不幸女へ‖求むれば來らず、求めざれば來るの兆なり、故に御身は德を養ひ華を勵み婚姻の事は一切念頭を去らるべし、妹御に降る程の縁あるも容貌等を慕ふ方多分を占め、眞實の申込甚だ少し、若し御身に求むる者あらば眞實の申込にして、末甚だ樂し。急ぐべからず、怨むべからず、又羨むべからず。

▲德島市なにがし女へ‖良人は今や金拾ふ夢を見始めたる所にて、之を醒まさんとするも容易に醒めず、されど時を經れば自ら眼醒めて嗚呼夢なりしか夢の資金は僥倖なりと雖も空なり、目覺めての金錢は一厘なりとも實なり、實を取らん〳〵と悔いらるゝに相違なし、故に御身は其時まで德を守つて煩悶せられざるを吉とす。末必ず和樂の時至るや明なり。

▲上毛新菊女へ‖石龍子は卜筮を手に觸れずして唯我が良心に訴へて考ふれば、小學教員程貴き職は無し、然れども拙なき利欲の眼鏡を掛けて見れば小學教員程低き職は無し、貴女よく〳〵、貴女の眞心は必ず余と同じからん、然るに貴女は良人が小學教員の職に居らるゝを陰に陽に不平の心を抱き、或は中等教員の檢定を受けよとか、或は高等の學校へ入學せよなどゝ、勧むるが如きは、良人をして、不快の感念を懐かしむるの基なり、斯くして良人は不幸にして不合格とならんか、貴女は益々不平の心募り、良人は益々貴女に對して恥かしとの念起らん、事玆に至りて貴女は離別を請求せらるべき權利ありや、若し假に權利ありとするも、社會は必ず貴女に同情を表せざるのみならず、天必ず幸せざるなり、故に良人が、此職に生涯滿足せらるゝも或は中等教員若くは進んで大學教授とならるゝも、貴女の之に對する貞操はつゆ變る所なく、滿腔の熱誠を以て事へらるべし、其の心になられば幾人の出産ありても、天は貴家の幸福を増進し、樂しき生活を得らるゝや必せり、利發なる貴女と占ひたるが故に、斯くは長々と申したるなり、ゆめ惡くな思ひ給ひそ。

▲麻布の伺女へ‖貴女の心は一天澄み渡る蒼空の如し。さればお尋ねの如く何處までも其の御志を變じ給ふ勿れ。末に至れば至る程樂しきなり。

▲釜山の雲水女史へ‖大海に漂ふ鯨魚の卦なり。十分に花々しく活動せらるべし。

▲三笠山麓の處女へ‖旱魃に逢へる稻の卦なり。之を他の水田に移し

植えたりとて育つものに非ず。故に御身夫婦方は其職其位置を變ぜずして水を引く工夫、否試實を確めて將來の好運を求めらるべきなり。

▲東京櫻田春子へ――積雪丈餘の下に埋れる麥の如し。時來つて雪の消ゆるに非ずんば到底榮ゆるを得ず。御身等も亦此と同じく今や如何んとも難けれども精神を愉快にして三四年を待たれなば婚期も至り 今を昔しに語る時來るや必せり。

▲淺草一案女へ――松に蔦の纏へる卦なり。之に依て案ずるに御身等夫婦は、情緒濃やかなれども性合はずして子無し。活花抹茶の志望は至極宜し愈々學んで愈々深きを究めらるゝを吉とす。

▲遠江十九歳迷女へ――蟲の玻璃窓を出でんとするが如き卦なり。如何に出でんとするも到底不可能なれども身を退いて後出處を求むれば必ず虚空に舞はるべきなり。御身も之と同じく學問を以て進まんとするは不可にして其よりも職業に甘んじて職業の人を養子に迎へられよ。婚期近きに熟し幸運續々たり。

▲尾張瀨戸修子へ――其人は女性にして貴女は男性なるの姿。故に其心を互に變換すれば男は男女は女、實に目出度かるべし。然れども其人をして男性たらしめんこと甚だ困難なれば先づ御身より女性たるの氣性を養成し、婉曲に柔和に『三千世界は廣くとも貴郎より外に何條心を遷はせませう』と心にも言葉にも表はして仕へられよ、其人は遂に男性の人となりて末に至れば至る程雌雄の閑々和樂するが如し。

▲茨城の世捨人へ――御身の戀は蜃氣樓を實物なりと思ひ迷ふが如し。早く其の虚なることを知りて正氣に立ち歸らるべし、然らずんば不測の害あり。

▲丹波のSH女へ――御身及び令妹共に今や朝顏の蔓を延せるが如き趣あり。されば一刻も早く纏ふべき物に纏ひ決して獨立生活など思ひ給ふべからず。

▲黄蘗獅辛女へ――貴女他に嫁して弟を飽くまで勉强せしめ家名を繼がしむべきは天の道にして敢て筮竹を取りて卜ふの必要なし。天の道に從へば縱令父母の心に違ふとも末必ず雙方共に幸福なり。

▲福岡縣神無月菊野女へ――父上の運は上々吉といふ程 には行かざれども先吉の方なり。御身の病氣は日を經ふるに從ひ快くなり、月を累ぬるに從ひ健康となるべければ精神を愉快にして婚期を待たれよ、婚期二十五歳の暮最も吉なり。

▲大阪南濱のかなる子へ――先方は疑心多き性質なれども一は御身が疑心を起さしめたる冷遇無しとせず。されば御身は從來に反して温かに情を先方に注がれよ先方は其情に泣いて琴瑟調和するや必せり。

▲愛知A女へ――貴女の運勢は從ふは凶、從はざるは吉なり、されば貴女の思はるゝ通り商業家に嫁がれよ、最初の一念は天の命ずる所と覺悟せらるべし。

▲福島縣二心迷女へ――果實今や圓熟するの卦なり。一刻も早く父上の言に從ひ結婚せらるゝを吉とす。

▲京都十八歳の加賀女へ――後方に櫻花の爛漫と咲き匂ふも知らずし

て前方なる野花を眺め此花より外に美しき花は天下に無し、一枝折りて瓶中に挿さんと思ふ折柄他人來つて之に先んじたれば嗚呼と失望落膽するが如き趣あり。貴女よ貴女他に折られしは勿怪の幸なり。後に數倍の良緣あることを知り給はざるか。

▲土佐南幸子へ║二十一歳の人吉なり、即ち米屋と農とは梅と櫻何れを折らんも君の隨意なり。

▲盛塲の柳女へ║姉君は滔々と低きに流るゝ水の如し。高きに溯らんとするは到底不可能なり、故に今後身分高からざる人と婚を結ばるべし此心を以て求められなば今年中に良緣まとまるなり。

▲兵庫縣下S女へ║金銀銅鐵鉛錫の六鑛物を五人來つて各一鑛物づつ持ち去り最後に金鑛の殘れるが如し。之を拾ふ者は誰ぞ、即ち御身ならずや、亦樂しからずや。

▲靜岡縣白濱靜子へ║我國の民法は縱令幼なりと雖も男子有る以上は女子家を嗣ぐを得ず、これ我國の美風にして臣民たる者守らざるべからざる事なり。されば卜ふまでも無く御身は渡米中の人に嫁せらるべし。これ却つて孝道に合し又友愛の道にも悖らぬことゝ謂はざるべからず。

▲伊豫松山心配女へ║名譽の戰死を遂げたる武夫の恩給手當と片身の一男兒ありて不自由なく暮さるゝ御身、然るに再嫁を勸むる人ありとは……嗚呼其の人は恐らく日本人ならざるべし。活斷は正義の外に一物あるに非ざるなり。

紹介

△主婦日記　羽仁もと子編

一家の主婦にして家政を整理するに必要なる、机上の備として新式の日記帳を求めんと欲する方は　羽仁女史の編せるこの書によりて益するところ少からざるべし、當代の月給生活を標準とした理想的の日記なり三十五錢。

△粗食養生論　山崎今朝彌著

世を擧つて美食論に雷同する當世にこれは　又珍らしき實驗學說を唱へたるものかな、一種粗食は長命に益ありと唱へしむかしの衞生論ありしが、二十世紀の今日にも又歐米大家の唱道するものあり、要するに是れ半面の眞理を道破したるものならんか、定價二十五錢、隆文館發行。

△明治事物起源　石井研堂著

これは明治の世になりて諸事舊物廢りて新物の起りしもろ〳〵の起源を搜索してこの由來を記したるものなり、メトエパ新聞紙の始め人力車の始め、ランプの始め、馬車、電信、演說、新聲、博覽會、洋行、舞蹈、其他官邊公邊のいろ〳〵の事柄、俗間の珍事、市井のあらゆる事實日用器物の輸入等數百千種のものに就て悉くこの由來起源を穿鑿して一々出所を記したるは明治年間諸物の活字引なり、著者は博覽多趣味なる石井研堂氏、定價壹圓廿錢、橋南堂發行。

△女子大學　文學士　深江種朋譯述

本書は女權擴張を諷刺したるテニソン氏の「ゼ、プリンセス」を譯したるものなり、原文に忠實なりし丈けそれ丈け行文の流暢を缺けども、英文を讀まざる人も尙ほ此の書に依りて英文學の趣味の一端を解するを得べく、且つ原書中に引用せられたる古事には一々註釋を附したれば英語研究者は本書と原文とを對照して讀むことゝせば、得る所蓋し尠少にあらざるべし、定價金六拾錢、神田神保町東西社發行。

△少年書談　日本武將傳　木村小舟　武田櫻桃　合著

少年諸君とお馴染みなる兩氏が平易なる言文一致體を用ゐて護良親王、楠正成、兒島高德、名和長年、さては伊賀の局、辨内侍等南朝の忠臣烈女二十餘名の功勳を筆面白く書きたるものなれば、少年諸君の家庭の讀物として最も適當のものならん、定價金貳拾八錢、博文館發行。

△三叉文集　竹越與三郎著

新進の政客にして新聞記者にして又當代達文家として雷名ある竹越氏の文中の最も新らしくして時の問題に觸れたるもの十餘種を集めたるものなり光焰あり、覇氣あり青年文の參考としてよし、定價四十五錢隆文館發行。

每月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢	郵税	一册 二錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢		
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢		
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢		
内（定刊數……十二册　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）		

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十三圓	四十五圓
一等	……	十九圓五十錢	三十八圓
二等	五十五錢	十六圓五十錢	三十二圓
三等	四十七錢	十三圓五十錢	二十六圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

㊀本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
㊁御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
㊂郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
㊃總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十一年二月一日發行　第八卷第參號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

女(發付の一)

藤村島崎春樹君序
理學博士齋田功太郎君閱
農學博士稻垣乙丙君閱
田中貢一君著



洋裝菊判總クロース美本
紙數約五百頁
着色石版、繪、十數葉
挿圖九十四個

近日發行

著者は、植物學者にして、當時農科大學に其が專攻の學を修めつゝありと雖も、兼ねて文學に對する趣味深く、其造詣の深き、往々世人の意表に出づるものあり。著者は、世の所謂科學者の思想の餘りに乾燥にして、一に組織的事實の歴史家に過ぎざるを慨せられ、花界百般の事項を、一般家庭はいふに及ばず、其道にあらざる諸學生、或は文學者、神學者、哲學者等と雖も、無量の趣味と、絶大の興味とを以て、覺えず卷を解かしめ、自然の美妙、壯嚴を味ひ得しむる樣、特に小説として發表せられたり、本書は、五月に於ける、金鳳華孃の講話に始まり、翌四月の春蘭伯の、物語を以て終る、書中、愛らしき花子、勝の兄弟と、美はしき此等由花との間に縷々として演出さるゝ光景の、如何に優しく、將た興味深きかをみよ！而して之が副たる幾千の由花の如何に書中に活躍たるかを見よ！書中の花は、悉くこれ活ける少女活ける紳士なり。花の聲は、悉くこれ活ける天の聲なり、其内容の豐富、該博にして記事の痛快、切實なる、此種の書類中未だ曾て見ざるところにして、優に、現時の自然科學界に於ける、破天荒の作物として推重するに憚らず。世の所謂文學と科學との調和を云々するの士は、先づ一度本書を繙かざるべからず、信仰なく、生命なき世の科學者は、先づ本書によりて活きざるべからず、世の哲學者、神學者、夢想家は、先づ本書によりて自然の美妙に關れざるべからず、而して一般家庭の自然科學界に於ける好讀物としては、實に本書を措いて他に求むべきなし、著者の豫言に曰く『我邦の科學界は、早晩此種の書類によりて、其蒙を啓くに至らん』と然り、而して花物語は實に之が魁をなせるもの、思ふに、本書が、やがては滿天下の人士の極愛者ともなるに至らんは、豫め期待するところなり、

販賣用電話 本局二六二〇

發兌元 東京日本橋 本町三丁目 博文館

振替貯金口座 第二百四十番

女（後付の三）

(後付の四)

醫學士 石原喜久太郎君著

新編家庭衛生

近日發行

全一册

洋裝菊判美本

紙數五百五十頁

石原醫學士醫科大學衛生學教室に在りて斯學の研究に從事すること玆に多年、傍ら或は演壇に或は諸雜誌に、衛生思想の鼓吹普及に努力せらるゝは人の知る所、近者揭題の一書を完成して之を本館に授く、著者本書の目的として記する所を見るに、『一國の衛生を進めんと欲せば先づ一家の衛生を進むべし、一家の衛生を進めんには、家事の實行者たる主婦に衛生思想を鼓吹普及するに如くはなし』と、是れ本書の生れたる所以なるべし。

本書の前篇『諸論之部』は衛生に關する汎論にして、後篇『各論之部』は○住居之衛生○衣服と飮食物○季候と衛生○旅行と轉地○小供○姙娠と産蓐○病氣の七章よりなり、衛生上の諸題目を、凡て是等各項内に網羅して細大漏さず、殊に行文は平易通俗、論者は實地應用を主とし、叙事明晰、說明懇到、高尚なる學理をも難澁なく說示する底の面目は、確かに多年の薀蓄深きを窮るに足る、之を家庭に備ふれば一家衛生の良指針たり加ふるに又、醫師、醫學生の良友、諸學校衛生敎科の參考書たるに適すべし

販賣用電話本局
二千六百廿番

發兌元 東京本町 博文館

樂書刊行協會編

日本唱歌集

全一册

洋裝總クロース紙數六拾頁
正價貳拾錢　郵稅貳錢

文部省檢定濟

◎目次概要◎

東京本町　博文館

發兌元

算術難問解義

理學士　松村定次郎君著

全一册　洋裝四六判　紙數百八十二頁
正價金三拾八錢　郵稅金四錢

本書は四則應用より分數比例開平方諸等數に至る迄の普通算術中最も難問に屬する者二百五十三題を撰拔し叮嚀明瞭に解答を付したるものなれば苟も數學を研鑽する者は本書の問題のみを採て自己の力を試驗することを得べく不解なる者に逢はゞ解義に依て發明する所あるべく實に數學の受驗者には無比の資料たるべし

東京日本橋本町　博文館

女(後付の五)

（後付の六）

（後付の七）

統計學專攻伊東祐穀君著

大勲位公爵 伊藤博文君題辭
陸軍大將元帥公爵 山縣有朋君題辭
內閣總理大臣侯爵 西園寺公望君題辭
男爵 後藤新平君題辭
伯爵 大隈重信君序文
子爵 渡邊國武君序文
大藏大臣男爵 阪谷芳郎君序文
鐵道總裁 平井晴二郎君序文
日本郵船會社社長 近藤廉平君序文

(挾付の入)

明治四十一年

世界年鑑

全壹册

洋裝大判美本

縱八寸五分横六寸 總クロース金文字 入函入紙數千四百七十餘頁

正價金五圓 小包送料參拾錢

豫約 二月廿日までの御註文に限る特價金四圓(外に要送料)

既成發行

卷頭挿入諸圖廿五枚

▲石版彩色地圖七枚 亞細亞洲、歐羅巴洲、阿弗利加洲、北亞米利加洲、濠洲及大洋洲(右六圖は銅版彩色刷にて縱七寸横九寸の最新地圖なり)東洋地圖(縱一尺六寸横一尺三寸の銅版彩色刷)

▲繪圖七枚 各國貨幣(金銀銅貨)亞細亞、歐羅巴、阿弗利加亞米利加

▲描畫圖拾壹枚 最近二十年間日本の發展
土地人口及宗敎。敎育の一。敎育の二。裁判、犯罪及衛生等。財政及國防。產業。外國貿易及內國商業。水運及交通。交通、銀行及金融。銀行及金融。

本文

●日本之部……自一頁 至三九二頁
△皇室△國體△政治△土地△人口△宗敎△敎育△裁判及犯罪△衛生△救恤△財政△國防△產業△外國貿易△商業會社預金及保險等△船舶及水運交通△銀行及金融△外交△北海道△臺灣△樺太△貨幣及度量衡對照

●各國之部……自三九三頁 至一〇八八頁
△亞細亞洲之部△歐洲之部△阿弗利加洲之部△亞米加利洲之部△濠洲之部△大洋洲之部(上記六大洲內各國の形勢を細錄する事日本の部に於けるが如し)

●世界之部……自一〇八九頁 至一一二八頁
△各國主權者△土地△人口△宗敎及敎育△財政△國防△產業△商業△船舶及水運△交通△銀行及金融等の比較統計

●實用之部……自一一九九頁 至一二〇五頁
△年號紀元及天皇御歷代對照△日本、西洋、支那及朝鮮年代對照△日本、支那及西洋年代記事對照△露國侵略年代記事△日本地質系統△風の名稱△符合△物體の膨脹△音響光線△風力△海波△元素の符號及原子量△利子の積算△年利日步等の換算△米價公債株式利回換算△貨幣度量衡沿革及對照△メートル制△諸稅納期及屆出期△地租條例△相續、所得、營業、登錄、印紙諸稅法徵兵諸則等外數十項

●附錄△世界地名稱呼對照△臺灣各地土音△鐵道乘車賃金算出表△本邦統計界記事△大に統計の發達を促す△前年鑑に對する內外の批評△索引等

本篇改良 日本之部の解說を增し特に海軍の沿革記事を試み。各國之部の清韓等東洋諸國に精細なる。世界之部に各國鐵道の現況及其發達を加へたる。其他實用、附錄各部の記錄亦た皆な新にして卷頭の日本發展統計圖表其他光彩陸離

販賣用電話本局二六二〇 發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館 振替貯金口座第二百四十番



世界一のかぜつね薬
蛇印アンチピリン丸
はやりかぜ・りうまちす・ねつ一切に特効あり
本舗 大阪東京
丹平商會薬房
賣捌は全國の各藥店
藥價 五戔 十戔 十五戔 廿五戔
タンセキ改良劑
登録商標
咳嗽をとゞめ痰を祛り
かぜの「たんせき」
大人の「たんせき」
小兒の「百日ぜき」
喘息の「たんせき」
肺病の「たんせき」
老人の「たんせき」
呼吸器散
「むね」の息苦しく
又むねいたむ人を
せきいで夜分ねられぬ人を
たんに血の混るせき
呼吸器丸
こゑかれ又こゑいでず
咽喉はれ痛み「たんせき」の
きれがたき人
恐るべき肺病を豫防す
藥價表
二日半拾錢
半週分拾五錢
一週分三十錢
二週分五十五錢
四週分金壹円
全國無送料
發賣本舗
丹平商會本店 大阪市心齋橋筋二丁目
丹平商會分店 大阪平野町堺筋北
丹平商會支店
賣捌は日本全國各藥店
及海外諸島に取次せり

明治四十一年二月一日發行（毎月一回一日發行）
第八巻第參號
明治卅三年十二月廿五日（第三種郵便物認可）

（定價金貳拾錢●郵税貳錢）